
遊戯王GX シンクロ使うな？無理言うな！

金魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX シンクロ使うな？無理言うな！

【Nコード】

N30440

【作者名】

金魚

【あらすじ】

目が覚めたら違う場所に居た。というか、これって未知の技術ばかりじゃねえか！？何はともあれこの世界で生きていくため頼むぞ俺のデッキ！えっ、違うって？

第1話 あれ？ベンチは？（前書き）

はじめまして、初投稿するコタツといいます。シンクロは止めて人を見ないほうがいいです。あまり上手でない文章ですが励ましてくれととても嬉しいです。それではどうぞ

第1話 あれ？ベンチは？

目が覚める。

「……はっ？」

気が付いたら不可解な光景が目の前に広がっていた。
屋内なのにそびえたつ魔天楼、そしてその頂点に立つ右手が竜の顎になっている人影。

「いっけー！フレイム・ウイングマン！！」

何やら聞き覚えのある少年の声が響き渡る。
その声を受けて人影が魔天楼から降り立つ。地面に立っている機械の巨人へと目がけて。

「古代の機械巨人に攻撃！スカイスクレパーシュート！！」
アンティーク・ギア・ゴーレム

そして炎を纏った竜の顎を叩きつけられ、機械の巨人が引き裂かれた。

「マンマミーヤ！我が古代の機械巨人がーっ！？」
アンティーク・ギア・ゴーレム

何やら聞き覚えのある叫びが聞こえる。

「フレイム・ウィングマンは戦闘で破壊したモンスターの、攻撃力のダメージを相手プレイヤーに与える！」

引き裂かれた巨人の残骸が下に居た人間を押しつぶした。

「ノオオオーッ!？」

「ガッチャ! 楽しいデュエルだったぜ! 先生」

少しして魔天楼が消滅した。
ほんの少し呆然とする。

「えっ、これ遊戯王?」

目の前で繰り広げられていた光景はまさしく遊戯王GX第一話のクライマックスだった。

今しがた壮絶な戦いを繰り広げていたのはE・HEROフレイム・ウィングマンと古代の機械巨人^{アンティーク・ギア・ゴーレム}。割とポピュラーなモンスターである。

「ははは……」

力ない笑いを零しながらイヤイヤと首を振る。

（だって、有り得ないだろ）

とか、そんなことを思いながら。だって、さっきまで近所にある公園のベンチで眠いなあとか思いながらウトウトしていたのだから。それが目を覚ましたらこれである、否定したくもなる。だが頭では否定していても心のどこかでこの事態を受け止めつつあった。

服装がまったく見覚えのない学ランになっている、左手には重厚感のあるデュエルディスクがはまっておりデッキも納まっていた。

記憶が正しければデュエルディスクなんてプラスチックである。

ソリッドビジョン、いま目の前で見た……もはや未知の技術である。こんな感じで若干だが納得していた。

（何でこんなことになってる？）

そんな疑問が頭に浮かぶ。だが、すぐに考えるのをやめた。それよりもまず身近な問題が浮かび上がったからである。

何故いきなりこんな観客席みたいなどころに座っているのかという疑問よりも先に確認しなければならぬこと。

（この世界で生きていく？）

^{デュエル}決闘至上主義のこの世界で？

そうなる最大生命線はデッキということになる。

（一体、何のデッキだ？）

そう思いディスクに納まっているデッキを確認しようとする。

『受験番号116番、2番のデュエル場へ』

確認しようとする直前でアナウンスが流れた。

「へっ？」

思わず手が止まる。

116番？そんな奴いるの？

(まさか……)

そう思い、学ランのポケットをあさってみる。案の定、受験票には116と書いてあった。

「えっ、マジで？」

100番代は先にやったんじゃないのか？

そんな疑問が浮かぶ。

(とうか……)

周りを見渡す。

会場に居る受験生は興奮が冷めやまらないという感じである。試験用のデッキではないクロノス自身のデッキに伝説のレアカード(アンティーク・ギア・ゴレムらしい)古代の機械巨人を相手に勝利を納めたのだから当然といえば当然だが

(この空気の中でやるのか……?)

注目度抜群でかなり気まずい。

一体、何をしたんだ俺、何で先にやっとなんだよ『俺』！？
そんなことを言いたくなった。

「くそっ、仕方ない。行くか」

とりあえず立ちあがってデュエル場へと向かう。場所もわからない

いが、不戦敗で受験落ちなんぞしたらどうすればいいのか全くわからなくなる。

まあ、何とかなるだろう。

「なんくーないさゝ、てな」

そんなことを呟きながらデュエル場へと向かう。
途中、十代と思わしき少年に励まされた。

「おっ。お前もこれからか？ 頑張れよ」

嬉しいけど、この気まずい感じは君のせいでもあるんだけどね…

…

第1話 あれ？ベンチは？（後書き）

第一話にありがちなデュエルなしな内容。本当は一緒に上げたかったのですがデュエルの構成が難航してまして、これだけになりました。誤字脱字などは遠慮なく指摘してください。

第2話 えっ?やばいよ、これ!?(前書き)

デュエルの構成が意外に難しくて何回も考え直しました。意外とつらいもんですね。この話ではクロノスがかなり強く感じます。アニメでクロノスが使っていないカードを使いますが出来ればご容赦ください。それではどうぞ。

第2話 えっ？やばいよ、これ！？

デュエル場へと辿り着く。途中、わからない道は通路を歩いていたグラサン先生に聞いた。中々いいタイミングで通路を徘徊しているものである。

問題は辿り着いたデュエル場に当たり前のようにクロノスが立っていることであつた。

（おいコラ、相手はグラサン先生じゃないのかよ）
心の中で突っ込む。

正直、アンティークとなんかやりたくない。攻撃反応型トラップが紙になるじゃないか、例えばミラー・フォースとか。

それにまだデッキも確認していない、ここに来るまで必死だったのでそんな暇はなかった。

（これは、やばいかもしれん……）

背中に冷汗がつたう。

俺のデッキなら勝てるだろうが、この世界の『俺』のデッキならどうなるかわからない。

本当、頼むぞ俺のデッキもしくは『俺』のデッキ。もしもシンクロが入っているならなるべく使わない方向で行こう。

「アナタが受験番号116番ーノ、柳 ヒノキなノーネ？」

名前が呼ばれる。

「はい、その通りです。よろしく願いします」

あまり角の立たない無難な物言いでは返答をする。昔この名前のせいで樹木だのなんだのと呼ばれることがあったのは苦い経験である、関係ないことだが。

「では、入学試験デュエルを始めるノーネ」

やっぱりクロノスが相手なのか。

デュエルディスクの使用に少しばかり不安が残るが、何とかなるだろう。ボタンみたいなものの近くに小さくDUELとか書いてあるから。うん、きつと。

そんな事を思いながらディスクを構える。

「まったく、遅刻してくるドロップアウトボーイなんて、私が今度こそ弾き出してやるノーネ」

そう言いながらデュエルコートをONにするクロノス。

(いかん。物言いがストレートだぞ)

腹いせなのか、これは。十代にやられた腹いせなのか!?

そう思ってちらりと周りを見ると案内してくれたグラサン先生がやれやれという感じで苦笑していた。

勘弁してくれ……:というか『俺』遅刻したのか。まったく溜息しか出てこない。

「デュエルなノーネ!」

「デュエル……」

そんなこんなでデュエルが始まり、デッキからカードを5枚引く。その瞬間、クロノスが気持ちの悪い笑みを浮かべた。

（何だ？）

疑問に思いつつ手札を見る。その瞬間、冷汗が更に出そうになった。

「何だ、コレは」

自分が入れた覚えのあるカードと入れた覚えのないカードが混在している。

手札

ジャンク・シンクロン

くず鉄のかかし

レベル・ウォリアー

マッシブ・ウォリアー

ダブル・サイクロン

ウォリアーなんて入れた覚えが無い。多分デッキとしてはダンディ・ライオンを投入した、とにかくシューティング・スターを出して隙があればスカーレット・ノヴァを召喚するためのデッキが元のはずなのだろうか

（どうということだ？）

自分のデッキではないが、チューナーが入っていることから『俺のデッキでもないだろう。』

というか、このデッキでなるべくシンクロしないでいく？

（絶対に無理だ！）

打点が低すぎる。シンクロしなきゃ絶対に勝てない気がする。

「やばいかもしれない……」

心底、危機感を覚えた。

「何をやってるノーネ？手札を見て百面相なんかしーて」

余裕しゃくしゃくのやけ面をしたクロノスが口を開く。

いかん、先攻は早いもん勝ちルールなのか？

「先攻はアナタに譲るノーネ」

「む、そうですか？」

先攻をとれたのにわざわざ譲ってくることを怪訝に思う。ほとんどの場合が先攻有利なのに、それを譲る。開始前の台詞からして善意とは考えられない。

（嫌な予感がする……）

だが、例えそうだとしても

「なら、お言葉に甘えて、俺のターン！ドロー！」

もらえるものはもらっておく。

LP4000

いつもの半分しかないLPなので心細く感じる。少しでも油断したら簡単に1キルされてしまうだろう。ドローしたカードはファイティング・スピリッツ入れた覚えのないカードだった。

「モンスターを一枚セット、カードを一枚セットしてターンエンド」

とりあえず堅実な手を打っておく。これ以上ないってくらい凡百な1ターン目。

（さて、どうなるかな？）

クロノスのターンになる。

「私のターン。ドローニョ」

ドローした瞬間、クロノスにはやけ面を更ににやけさせた。

「このデュエルは最高の始まり方なノーネ」

一体、何だろうか？こちらとしては嫌な予感しかしてこない……

「まず手札から、強欲な壺を発動！2枚ドロ」

出た！禁止カード。1ターン目からそれかよ、確かこの世界では天使の施しも使えるはず。

（俺のデッキにも入ってるかな？）

のんびりとそんなことを考える。入れた覚えはないが、もしかしたら入っている可能性もある。入れた覚えのないカードが入っているのだから。しかし、のんびりしている暇はなかった。

「そして、手札からフィールド魔法 ギア・タウン 歯車街を発動！そしてカードを2枚セットして大嵐を発動！」

「って、何!？」

フィールドを暴風が突き抜け、セットしておいたくず鉄のかかしが破壊される。しかし、そんなことは問題ではないアンティーク相手ならあまり役に立たない。

「まずい！これは」

問題は歯車街ギア・タウンが破壊されたこと。

「その様子だとカードの効果を知っているようなノーネ。歯車街ギア・タウンの効果！破壊されたとき手札、デッキ、墓地から古代の機械アンティーク・ギアと名のつ

いたモンスターを特殊召喚するノーネ！そして更に破壊された2枚の黄金の邪神像の効果で邪神トークン2体が特殊召喚されるノーネ！」

やばいぞ、これは……ギア・タウン歯車街で呼ぶモンスターなんてあれしかない。

「出るノーネ！アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン古代の機械巨竜！邪神トークン！」

暴風が納まった先には古代の機械巨竜ATK3000と邪神トークンが2体。しかも、まだ通常召喚を行っていない。

「そして2体の邪神トークンを生け贄に捧げ古代の機械巨人アンティーク・ギア・ゴーレムを召喚！」

2体の邪神トークンが粒子となって消滅し、古代の機械巨人ATK3000が姿をあらわす。

（マジかよ。初っ端なのにクライマックスすぎるだろ！？）
状況的にはかなりやばい。それに加えて、かなり手札を消費したにも関わらず強欲な壺のせいでクロノスはまだ手札を2枚残している。

後攻1ターン目からATK3000のモンスター2体が現れたことに会場内は騒然とした。

『すっげえ！さっきの110番よりもとんでもない状況だぞ！』

『おお！これから！どうなるんだ！？わくわくしてきたぜ！』

『ふんっ！終わったな』

そんな声が聞こえてくる。

（いや、まだ終わってねえよ！）

最後の奴にだけ突っ込みを入れる。

傍から見ていたら俺も多分そう思うんだろうけど……

ATK3000のモンスターが2体、加えて片方は貫通効果を持っている。それに対して俺は裏守備モンスターが1体のみ、この世界ならば1キルされてもおかしくない状況であった。

「いくノーネ！アンティーク・ギア・ゴーレム古代の機械巨人でモンスターを攻撃するノーネ！アルティメット・パウンド！」

やはりそうくるか。

クロノスの中では貫通持ちで守備モンスターを破壊、その後もう一体のモンスターでダイレクトアタックという構図が出来上がっていることだろう。

「だが、そうはさせない！受け止めるマッシュ・ウォリアー！」

呼びかけに応じるように攻撃された裏守備モンスター マッシュ・

ウォリアーが現れ迫りくる剛腕を手につへりポートで受け止めた。

「マッシブ・ウォリアーの効果！1ターンに1度だけ戦闘では破壊されずダメージ計算も適用しない！」

「何デースト！？こざかしいモンスターを伏せているノーネ。なら、アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン古代の機械巨竜でもう一度その雑魚モンスターに攻撃するノーネ！」

再び攻撃されマッシブ・ウォリアーが爆散した。

「くうっ！」

衝撃波が体に響いてくる。

正直、マッシブ・ウォリアーじゃなければ危ないところだった。

「ふん、その雑魚モンスターのおかげで1ターン生き延びられたよ
うなノーネ。ターンエンドなノーネ」

雑魚だとはかり言うクロノス。レベルの低いモンスターは侮られる傾向にあるようだ。

「雑魚じゃないさ！俺を助けてくれた、大切なモンスターだ！繋いでくれたこのチャンスを無駄にするわけにはいかない！」

「ふっふーん、随分と大きく出たようなノーネ。だったら見せてみるノーネ。井戸の中ーのフログーがゲロゲーロ」

「見せてやるさ！俺のターン！ドロー！」

そして、証明してみせる！雑魚なんかじゃないことを！……まあ、俺はこのカードをデッキに入れてないはずなんだけどね。

ドローしたカードを確認する。

（って、このデッキにはスピード・ウォリアーも入ってんのかよ）
また入れた覚えのないカード。引いたカードはリミッター・ブレイクだった。

（この手札じゃ、やること一つしかないじゃないか）
シンクロするしかない。

「俺は手札からレベル・ウォリアーを特殊召喚！このカードは相手フィールドにのみモンスターが存在し自分のフィールドにモンスターがいないときレベル4として特殊召喚できる」

レベル・ウォリアー LV3↓LV4

「また、新しい雑魚モンスターなノーネ。そんなものを出してーモ、私のモンスターは倒せないノーネ」

自分が圧倒的に有利な状況のせいかクロノスは余裕しゃくしゃく

の表情で安心しきっていた。

「お楽しみはこれからってね、チューナーモンスター ジャンク・シンクロンを召喚！そして、ジャンク・シンクロンの効果で墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効化して守備表示で特殊召喚。出ろ！マッシュ・ウォリアー！」

フィールドに3体のモンスターが現れる。

「チューナー？聞いたことのないモンスターなノーネ」

クロノスが若干いぶかしげな表情をする。会場もどよめいていた。まあ、予想出来た反応である。あえて無視するが、色々と質問をされる気がしてならない。

「いくぞ、俺のモンスター達！レベル4になっているレベル・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが3つの光の輪と化し、その中にレベル・ウォリアーが飛び込み幻想的な光景を展開させる。

「チューニング？一体、何なノーネ？何が起きているノーネ！？」

「チューナーモンスターを含む素材となるモンスターの星の合計と同じ星を持つモンスターを特殊召喚する」

説明くさい台詞を言う。漫画の遊星が言っていた台詞だがこんなときに便利である。今のこの状況で出すモンスターはほぼ一択しかない。デッキは確認していないが投入されているシンクロモンスターは変わっていないはずだから。

「シンクロ召喚！光来せよライトニング・ウォリアー！」

ライトニング・ウォリアーATK2400が姿を現す。このデッキにはブラック・ローズ・ドラゴンが入っていないのである。遊星っぽいデッキにしたいと思ったのでこちらを優先してしまった。他にはジャンク・アーチャーが出せるのだがこの状況では殴り殺されるだけである。

「少しし、驚いたカード攻撃力2400なら私のモンスターには遠く及ばないノーネ」

「もちろんこれだけじゃないさ。先生」

「何でスート？」

「装備魔法ファイティング・スピリッツをライトニング・ウォリアーに装備！効果により相手フィールド場のモンスター一体につき攻撃力が300ポイントアップする！」

ライトニング・ウォリアー ATK 2400 ↓ ATK 3000

「それでーモ、攻撃力が並んだだけなノーネ」

「それはどうかな。バトル！ライトニング・ウォリアーで古代の機械巨人を攻撃！ライトニング・パニッシャー！」
アンティーク・ギア・ゴーレム

ライトニング・ウォリアーが雷を纏った右腕で攻撃を仕掛ける。

「くっ、相打ち狙いというわけでスーカ！迎え撃つノーネ！古代の機械巨人！アルティメット・パウンド！」
アンティーク・ギア・ゴーレム

クロノスが少しばかり苦い顔をして命令を下す。

そして、ライトニング・ウォリアーの右手と古代の機械巨人の剛腕が激突した。その後、古代の機械巨人が爆散してライトニング・ウォリアーだけが残った。

「どういふことなノーネ！？」

「装備魔法ファイティング・スピリッツの効果！このカードを破壊することで戦闘破壊を免れる！」

ファイティング・スピリッツを墓地へ送る。

「そして、ライトニング・ウォリアーの効果発動！戦闘でモンスターを破壊し墓地へ送ったとき、相手の手札の枚数×300ポイントのダメージを与える！ライトニング・レイ！」

ライトニング・ウォリアーの胸から放たれる閃光がクロノスを直撃した。

「アガガガッ」

クロノスLP3400

「ターンエンド！」

ライフを削ることが出来たが、状況は好ましくない。

アンティーク・ギア・ゴレム

古代の機械巨人を破壊することに成功したがフィールドには未だ

アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン

にATK3000の古代の機械巨竜が残っている。それに加え、こ

ちらはライトニング・ウォリアーの攻撃力が低下してしまっている。次のターンまでもたないだろう。

（まずいな）

デュエルがどうなるか、ドローするカード次第だった。

「中々やるノーネ。私のターン、ドロー！」

ふふん、と気分よさげな鼻息をもらしてクロノスはカードを手札にくわえる。おそらく良いカードでも引いたのだろう。

「私は古代の機械騎士を召喚！そしてバトルなノーネ！古代の機械巨竜でライティング・ウォリアーを攻撃！」
アンティーク・ギア・ナイト
エルドラゴン
アンティーク・ギア・ガジエルドラゴン

「くっ……」

「そのよくわからないモンスターには退場してもらおうノーネ」

ライティング・ウォリアーが古代の機械巨竜に噛みつかれ爆発した。
アンティーク・ギア・ガジエルドラゴン

LP3400

「ライティング・ウォリアー！」

予想していた結果とはいえ少々つらいものである。

「そして、古代の機械騎士で雑魚モンスターを粉碎するノーネ！」
アンティーク・ギア・ナイト

マッシュ・ウォリアーが古代の機械騎士アンティーク・ギア・ナイトの持つ槍に貫かれた。効果は無効化されているため耐性はない。

「カードを一枚セットして、ターンエンドなノーネ！」

クロノスがエンド宣言をして自分にターンが回ってくる。

このターンでクロノスの手札が一枚にまで減少した。しかし、フィールドはがら空きでボードアドバンテージは圧倒的に不利。いま現在、手札はクロノスより多く2枚あるがハンドアドバンテージも微々たるものだった。

引きが悪ければ負けてもおかしくはない。

「くっ、俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードはまた入れた覚えのないカードだった。しかし、今の状況ならありがたいカードであった。

「手札から強欲な壺を発動！」

デッキからカードを2枚ドローする。

（このデッキにも入っていたんだな）

入れた覚えのないカードだがこれにだけは感謝した。

しかし、

(くっ、また覚えのないカードか)

引いたカードはまた入れた覚えのないカードだった。一体、どうなってるんだ！？とか何の意味もないことを叫びたくなってくる。

「それでも、まだ何とかなる！手札から戦士の生還を発動！墓地の戦士族モンスター、ジャンク・シンクロンを手札に加える！」

手札に加えたときクロノスの顔が少しばかりゆがんだ。

「また、チューニングとやらをやる気デースカ」

どうやらこのカードから高レベルのモンスターを特殊召喚できることを理解しているようである。だが、それでもどこか安心していう表情をしていた。

「更に手札のカードをセットして、ダブル・サイクロンを発動！このカードは自分フィールド場のカード一枚と相手フィールド場のカード一枚を対象にする。俺は先生のリバースカードと今セットしたカードを破壊する！」

ダブル・サイクロンが発動し、竜巻が2枚のカードを破壊する。そのときに見えた、めくれて破壊されたクロノスのリバースカードは聖なるバリア・ミラー・フォースだった。

（つて、あぶねえな。おい！）

こちらが攻撃反応型トラップを使えないと思って、これみよがしに危ないものをセットしているものである。

「自分のカードも破壊するなんーテ、よくわからないことをするノーネ」

未だに余裕しゃくしゃくな顔でそう言うクロノス。トラップ一枚が破壊された程度ではあまり痛くはないようである。

しかし、クロノスならばいま伏せたばかりのカードを破壊した意味がわかりそうなものなのだが。自分がさっきやったことなのだから。

「破壊することで発動するトラップもある、黄金の邪神像みたいに。破壊されたリミッター・ブレイクの効果でスピード・ウォリアーを手札・デッキ・墓地から特殊召喚する！出る、スピード・ウォリアー！」

デッキからスピード・ウォリアーATK900が守備表示で特殊召喚される。

それを見てクロノスが納得をしたような表情をした。

「成るほど、そういうことなノーネ。この後、ジャンク・シンクロンを召喚し墓地のモンスターを蘇生。そしてチューニングとやらをやるつもりなノーネ。しかし、それで先ほどのライトニング・ウォ

リアーとかいうモンスターを出しテーモ古代の機械巨竜には及ばないノーネ」
アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン

クロノスがしたり顔で言ってくる。

こちらがやろうとすることをよく理解していた。しかし、

「それが少し違うんだな、先生。このターンで古代の機械巨竜は倒される！」
アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン

「ホワッツ!？」

「手札からジャンク・シンクロンを召喚!効果でマッシブ・ウォリアーを蘇生!」

フィールドに三体のモンスターが並ぶ。ここまではクロノスの言った通りだが、ここからが違った。

「レベル2マッシブ・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング!」

「さっきとレベルが違うノーネ!？」

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ!シンクロ召喚!切り開けジャンク・ウォリアー!」

ジャンク・ウォリアー ATK 2300 がフィールドへと舞い降りる。

（これで事態は好転するはずだ）

このまま押し切る！

「ジャンク・ウォリアーの効果！シンクロ召喚されたとき自分フィールド場に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分、攻撃力がアップする！パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウォリアー ATK 2300 ↓ ATK 3200

「何でスート！？アンティーク・ギア・ガリエルドラゴン古代の機械巨竜の攻撃力を上回ったノーネ！？」

「更に装備魔法ジャンク・アタックをジャンク・ウォリアーに装備して、バトル！アンティーク・ギア・ガリエルドラゴン古代の機械巨竜に攻撃！スクラップ・フィスト！」

背中ofバーニアで急加速、ジャンク・ウォリアーの右拳に装着されたナツクル・ダスターがアンティーク・ギア・ガリエルドラゴン古代の機械巨竜を貫いた。

アンティーク・ギア・ガリエルドラゴン古代の機械巨竜が爆散し衝撃波がクロノスを襲う。

「アウチッ！」

LP 3200

「更にジャンク・アタックの効果！戦闘で破壊したモンスターの攻撃力、その半分の数値のダメージを与える」

ジャンク・ウォリアーの拳から放たれた閃光がクロノスを包み込んだ。

LP1700

「これで、ターンエンド！」

エンド宣言をする。手札が0になりこのターンではもはや何も出来なかった。何とかボード・アドバンテージでは優位に立つことが出来たので、本音を言えばこのまま押し切りたい。しかし、ハンド・アドバンテージではこちらが不利なのでどうなるかわからない。

「ぐう、中々やるノーネ……私のターン！ドロー！」

この瞬間、クロノスの手札は二枚になった。

（出来れば、何もするなよ）

祈るような気持ちで情けないことを思いながら見守る。相当なチキン野郎だった。

「カードを一枚セットして、ターンエンドなノーネ」

リバースカード一枚でターンを終了。
そのことに少しばかりほっとする。全体除去魔法でも使われたら危ないところだった。

「俺のターン！ドロー！」

カードを手札に加える引いたカードは禁止カード第2弾。

「手札から天使の施しを発動！三枚ドローし、二枚を墓地へ送る」

引いたカードは3枚とも入れた覚えのあるカードだった。その中の二枚を墓地へと送る。

（ようやくとか）

そんなことを思うが特に何もしない。

クロノスのリバースカードが気になるが、ミラー・フォースは前のターンで破壊した。もし激流葬だったとしても新しくモンスターを召喚しなければいいだけである。モンスターを守備表示にしなければのはプレイングミスだろう、きつと。

だから、たぶん大丈夫だろう。そんなことを思ってしまった。

「ジャンク・ウォリアーで古代の機械騎士を攻撃！スクラップ・フ
イスト！」
アンティーク・ギア・ナイト

ジャンク・ウォリアーの拳が古代の機械騎士へと迫る。

「これで、勝ちだ！」

勝利宣言をした瞬間、クロノスがにやりと笑った。

「ところが、そうはいかないノーネ！リバーズカード、オープン！リミッター解除！」

「つて、なにーっ!？」

アンティーク・ギア・ナイト
古代の機械騎士 ATK1800↓ATK3600

攻撃力が2倍になった古代の機械騎士にジャンク・ウォリアーがそのまま突き進み、拳を当てる前に古代の機械騎士の持つ槍に刺し貫かれた。

Lp3000

「くうっ……やっぱいな、これは」

ジャンク・ウォリアーが破壊され、フィールドにはスピード・ウォリアーのみになってしまう。

（さっき攻撃もせず、表示形式も変更しなかったのは……）

プレイングミスをしたと思わせて油断させるためだったのか……確かに大嵐やサイクロンといったリバーズ除去カードは投入枚数に

制限がかかっていてドロースる確率はあまり高くないがこんなギャンブル的なことをやってくるとは何て恐ろしいことをやってくるんだ。そんなことを考える。

ちなみに大嵐をデッキに投入した覚えはない（禁止カードになってしまったから）、しかし入れた覚えのないカードとして入っているかもしれないが。

とはいえ、ジャンク・ウォリアーを失い状況はかなり不利。しかし、スピード・ウォリアーは健在、古代の機械騎士はエンドフェイズに自壊する。まだ完全に不利になったわけではない。

（大丈夫な、はずだ。きっと）

そう思い、エンド宣言をした。

「ターンエンド」

内心、冷汗だらだらだったが。

「ふん、私のターン！ドロニョ！……ウジャジャジャッ」

ドロしたカードを見た瞬間、クロノスが変な声で笑い出す。

（って、またか！またなのか！？）

逆転の手が来たのか！？勘弁してくれ、本当に。

「このデュエルはよくよく最高のカードが舞い込むノーネ」

クロノスはもはや勝利を確信した顔をしていた。

「手札カラゝ古代の機械工場を発動！手札の古代の機械巨人のレベルの倍になるように墓地の古代の機械と名のついたカードを除外し召喚するノーネ！」

アンティーク・ギア・ファクトリー アンティーク・ギア・ガジェルドラゴン
墓地から古代の機械巨人と古代の機械巨竜が除外される。

アンティーク・ギア・ゴーレム
「出るノーネ！古代の機械巨人！」

アンティーク・ギア・ゴーレム
フィールドに再び古代の機械巨人が姿を現した。

アンティーク・ギア・ゴーレム
「くっ、この局面で古代の機械巨人だと！？」

かなりまずい。これでまた圧倒的不利に陥る、フィールドには守備表示のスピード・ウォリアーのみ。

「ふふん、バトルなノー……」

アンティーク・ギア・ゴーレム
「ちよつと待った！手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動！古代の機械巨人の効果をエンドフェイズまで無効にする！」

一瞬だけエフェクト・ヴェーラーが現れそのまま消えていった。

「これで貫通ダメージは受けない！」

「ふふん、しょせん悪あがきなノーネ。アンティーク・ギア・ゴーレム古代の機械巨人でスピード・ウォリアーを攻撃！アルティメット・パウンド！」

スピード・ウォリアーがアンティーク・ギア・ゴーレム古代の機械巨人に殴り潰され爆散する。
しかし、ダメージはない。

「ターンエンドなノーネ」

クロノスがエンド宣言をして、ターンが移行する。

手札が0、フィールドもがら空きの絶望的な状況。LP3000
アンティーク・ギア・ゴーレムで古代の機械巨人にダイレクトアタックされたら一撃で終わり。正
真正銘このドローに全てがかかっていた。

「俺のターン！ド……！」

ドローする直前、プレイングミスに気が付いた。思わず手が止ま
ってしまう。

アンティーク・ギア・ゴーレム前のターン、古代の機械巨人の攻撃でスピード・ウォリアーDE
F400が破壊され貫通ダメージを受けてもライフは守備力と同じ
400残る。エフェクト・ヴェーラーを使わず手札は温存しておく

べきだったのである。

「どうしたノーネ？サレンダーでもするなら今のうちなノーネ」

ドローしないまま動かないことを訝しがったクロノスが声を掛けてくる。

確かに手札尽き、モンスター尽き、魔法・罠尽き、今の状況はサレンダーしてもおかしくはない状況だった。しかし、

「サレンダーはしない！」

諦めるのはカードを引いてからでも遅くはない！

「っ、ドロー!!」

全てを賭けたドロー。引いたカードは……クイック・シンクロンだった。

「くっ」

どうすればいいんだ？そんな言葉で頭がいっぱいになった。
クイック・シンクロンには特殊召喚することが出来るルール効果

がある。しかし、それには手札にモンスターカードが必要。前のターンでエフェクト・ヴェーラーを使ってしまった自分には他に手札がない。天使の施しを使ったとき墓地にボルト・ヘッジホッグを捨てたため召喚さえ出来ればシンクロ出来る。

(しかし、どうやって出せば……)

クイック・シンクロンはレベル5、通常召喚しようにもすることが出来ない。

(もし、召喚するとしたら一体のリリースもとい、生け贄が必要になる。とはいえ……)

フィールドはがら空き、何も出来ない。

(これは……詰んだか?)

敗北の2文字が頭の中にちらつく。

(くっ、クイック・シンクロンを召喚してボルト・ヘッジホッグさえ墓地から蘇生できれば何とかなるのに……)

悔し紛れにそんなことを考えてしまう。しかし、その途中ではったとした。

「そうだ！墓地！」

これなら勝てる！気が付いた瞬間、焦りが一気に払拭されて光明が差ししてくるのを感じた。

「墓地のグローアップ・バルブの効果！」

「！そんなカードいつの間に墓地へ送ったノーネ！？」

「天使の施しの時さ、先生」

そう、天使の施しの効果で墓地へ送るときボルト・ヘッジホッグのほかにこのカードを墓地に送っていたのである。

「デッキの一番上のカードを墓地へ送り特殊召喚することが出来る！出る、グローアップ・バルブ！」

デッキトップを墓地へと送り、グローアップ・バルブが特殊召喚される。墓地へといったカードはくノ一ウォリアーだった。
(何で、これが入ってるんだよ！？引いちまったら扱いに困ってたところだぞ！)

そんなことを思うが、もはやどんなカードが墓地へいこうと何の問題もない。

「そして、グローアップ・バルブをリリ……もとい生け贄にしてチューナーモンスター、クイック・シンクロンを召喚！そして墓地のボルト・ヘッジホッグの効果、フィールドにチューナーが居るとき特殊召喚できる！来い、ボルト・ヘッジホッグ！」

「そのカードも天使の施しの時というわけでスーカ」

「その通りさ！先生！」

フィールドにチューナーとそれ以外のモンスターが並んだ。

「よし、頼むぞ！レベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが拳銃を引き抜き、前方で回っている数枚のカードの中からジャンク・シンクロンを打ち抜く。

「集いし叫びが、こだまの矢となり空を裂く！光差す道となれ！シンクロ召喚！貫け、ジャンク・アーチャー！！！」

ジャンク・アーチャー ATK2300

「くう、またシンクロ召喚というやつでスーカ……しかし、そのモンスターでは古代の機械巨人には及ばないノーネ！」

叫ぶクロノス。確かにその通りであるのだが、攻撃力が及ばなくてもこの状況なら何ひとつ問題はない。

「倒す必要はないさ！ジャンク・アーチャーの効果！ディメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーが弓を引き絞り矢を放つ。そして矢が直撃した古代の機械巨人はフィールドから消失した。

「なあっ!? ということなノーネ!?」

「ジャンク・アーチャーは効果対象にしたモンスターを除外する効果を持つ! そのモンスターはエンドフェイズにフィールドに戻るが……」

このターンだけあれば十分、勝利することが出来る。

「頼むぞ! ジャンク・アーチャー! これでエンドマークだ! プレイヤーにダイレクトアタック、貫けスクラップ・アロー!!」

ジャンク・アーチャーがクロノスに向けて弓を引き絞り、そして弓の弦を抑えていた手を放した。

「そんなバカななノーネエエーッ!!」

LP0

矢はクロノスに直撃して、デュエルは終了した。

「あ、有り得ないノーネ。私が負けるなソーテ、パルメザンチーズ」

クロノスがよくわからないことを言いながらその場で打ちひしがれていた。

気持ちはわからないでもないがパルメザンチーズとは何のことだろうか、一体？

そんなことを思うがあえて気にしないことにした。

「ありがとうございますました、先生。すごいデュエルでしたよ、今までやったことないってくらいに」

とりあえず、これ以上ないってくらいの本音を言ってデュエル場から去ることにした。本当に色々な意味ですごいデュエルだった。会場からは大歓声が上がっている。

『すっげえ！あの116番、勝ちやがったぞ！』

『くうー、あいつとデュエルしてえ！なんてわくわくするデュエルなんだ！』

『まさか！あの状況で勝つだど！？』

そんな声が聞こえる、十代が勝ったとき以上の大歓声である。

（まさか、クイック・シンクロンを通常召喚するときがくるとはな）大歓声の中、そんなことを考えながらデュエル場から降りていった。

デュエル場と観客席を繋ぐ通路にて。
足がガクガクに震えていた。

「か、勝った……」

非常に危うい勝利。壁に手をつきながら歩いていく。

（ギリギリだったな……）

苦肉の策を使わなければ勝てなかったデュエル。絶対にあとでデ
ッキ調整をする心を決めた。

「ふうー」

安堵の息を洩らす。不意にポケットに入っている携帯が震えだし
た。

『限界バトルたたきつけて〜♪♪』

「限界過ぎんだろうがっ!？」

思わず着うたに突っ込みを入れてしまうのであった。

第2話 えっ?やばいよ、これ!?(後書き)

どうしてもエフェクト・ヴェーラーを使わせたくて主人公にプレイングミスさせてしまいました。リミッター解除の場面で深読みするシーン、正直プレイングミスだと僕は思います。ごめんなさい。

第3話 サー！イエス！サー！……えっ、サーじゃなくてママだって？（前書き）

今回はデュエルがありません。それとオリキャラが登場します。そういうのがあまり好きではない方はご遠慮ください。あと一部、カードの設定については独自の解釈というよりほとんどオリジナルになってしまっているかもしれません。あと、内容的にはちよつと薄いかもしれません。ごめんなさい。それではどうぞ

第3話 サー！イエス！サー！……えっ、サーじゃなくてママだって？

自分の次に行われたデュエルを見て、十代は興奮が抑えきれなかった。

「すっげえ、すっげえよ！なんてワクワクするデュエルなんだ！」

興奮にうち震えながら目を輝かせた十代が叫ぶ。

知らない召喚方法、知らないモンスター、二転三転する戦況、どちらかが有利になったと思ったら次のターンで覆される。そして最後にはフィールドはがら空きで手札が0枚の状態から、最後のドロ―で劇的な逆転勝利を納めた。

（おもしれえ、おもしれえよ！）

とても見ごたえのあるデュエルだった。自分もあんなデュエルをする奴と戦ってみたい、十代は心の中でそう思う。

「くうー、俺もあいつとデュエルしてえ！」

勝ち負けはどうなるかわからないけど、きっとものすごく楽しいデュエルが出来る！十代は内から湧き上がる興奮に身を任せてデュエル場の方へと向かった。

（今あいつがどこに居るかはわかんねえけど、デュエル場の方へ行けば会えるはずだ！）

そう思いながら。

携帯が鳴り続けている。

ヒノキは携帯を手を持ったまま通路の途中で歩きながら考え込んでいた。

（これ、俺の携帯じゃん）

携帯からは着うた『限界バトル』が流れ続けている。この歌は遊戯王GX最初のEDであり正直この世界に歌として存在するとは思えない。

そうなるとこの携帯は自分が着うたを設定した自分の携帯以外に無かった。

怪訝に思いながら、携帯を開きディスプレイの表示を見る。

『裁^{たち}司^{つかさ}』

携帯のディスプレイにはそう表示されていた。

（ん？ 兄貴からか……）

表示されている名前を見て、そう思う。

裁^{たち}司^{つかさ}は近所に住む歳が1つ上の幼馴染で、伸ばしている長い髪の毛のことを

『なんでロングヘアーなの？ 切った方がいいよ、むさ苦しい』

とか言う

『なにいつてやがる！ これはロングって言うんだよ！ もっと羨望を込めてな！』

とかそんな時代錯誤な返答をしてくる男だった。
通話ボタンを押して電話にでる。

「兄貴か？」

『おっそーい！いつまで待たせるの！？』

「……あれ？」

電話から聞こえてきたのは女の声だった。

『兄貴？あんた、なに言ってるの？あたしは女！失礼な奴だね、ま
ったく』

少しの間、動きが固まる。

（は？どういうこと？）

事態が全く飲み込めなかった。

「えーと、どちら様でしょうか？」

とりあえず聞いてみる。

『なに？今度は知らないふり？とことん失礼な奴だね。あたしよ、
あたし』

「……一昔前に流行した詐欺か？」

『ちっがう！あたしよ、あ・た・し！あんたが小さなときからず
つと一緒に居る裁たち司！』

携帯から大音量が響き渡る。どうやら人違いという線はないようであった。

（ふむ、この世界の兄貴は女ということか？）
納得は出来ないがそんな考えに行き着く。正直なところ疑問は尽きないが、それらはあえて無視して会話を進めていく。

「……んー、姉貴、か？」

女ということを考慮に入れて呼び方を変更してみた。

『ちっがう！何度いわせれば気がすむの！？』

違うのかよ！そんな突っ込みを心の中に入れる。

『あたしのことは敬意と！親愛の念を込めて！お・ね・え・ちゃ・
んと呼びなさい！』

「……」

ああ……女になっても兄貴は兄貴だな。呆然としながらそう思っ
て、どこか安心した。

兄貴もこれとまったく同じようなことを言っていたのである、全
然変わっていない。

（真性のバカだ……）
そう確信した。

……………

甦る子供のころの記憶。

『おい、ちょっとこれ持ってくれよ』

遠くから来た兄貴が袋を差し出してくる。

『うん、いいよ。お兄ちゃん』

兄貴から差し出された袋をこころよく受け取る、小さな頃は『お
兄ちゃん』と呼んでいた。

しばらくの間、兄貴に渡された袋を持ちながら2人で並んで歩く。

『この袋ずいぶん重いね、お兄ちゃん』

兄貴から渡された袋は子供にはつらいほど重たかった。

『何が入ってるの？』

この頃は無邪気だったな。今にしてみればそう思う。

『ん？石だよ』

と、兄貴が答えた。

『……へ？』

『いや、形のいい石をいっぱい見つけちゃってさ、重くて重くて』

そう言って兄貴が笑う。

一体、何をやってるの？そう思ってキレそうになった俺を誰も責められまい。それでも兄貴の家の前まではしっかりと運んだ。

家に着いて、石を置いた俺に向かって兄貴が口を開く。

『うむ、ご苦労だった。これは謝礼だ、とっておけ』

にっこりと満面の笑顔で一枚の硬貨を渡してくる兄貴。
太陽の光を反射するその硬貨は……1円玉だった。
これでキレた俺を誰が責められようか？

『ど、どうしたんだ？』

いきなりキレた俺を見て兄貴がうろたえる。

『何をすねてるんだ？1円玉じゃ不満だったのか？だったら、ほら5円玉や10円玉もあるから、な？』

そう言って、なだめてくる兄貴。根本的な部分で何かが間違っている。とても必死そうではあったが……

この次の日あたりから兄貴を兄貴と呼ぶようになった。

………

兄貴、裁^{たち}司^{つかさ}はバカだったのである。

いっそすがすがしいほど滅茶苦茶でヒノキはいつも振り回されていた。もっとも退屈だけはしなかったが。

例え女になっても根っこの部分は変わっていない、姉貴になっても性格は兄貴のままだった。きっと兄貴が姉貴だったとしても大部分の思い出に変わりは無いことだろう。何故ならどちらも同じ存在なのだから。

(きっと、俺が想像も出来ないような変なことを言うんだろうな……)

そう思いながら、まだ続いている電話にしっかりと耳を傾けた。

『それで、あんたアカデミアの試験はもう落ちた？』

「いや、何て事を言うんだよ。失礼な」

会話を再開して早々に突っ込みを入れてしまう。普通に失礼な物言いである。

どうやら兄貴、もとい姉貴の中ではヒノキの試験失敗は決定事項のようであった。

『だって、あんたウォリアーとかいう変なカードとよくわからない装備カードを入れた変なデッキであたしに1回も勝てなかったじゃない。受かるわけないでしょ？どうせ負けたに決まってるって』

姉貴が自分の中の確信を語る。

これもやはり失礼な言い分であったが、姉貴の言葉で分かったことがあった。

この世界の自分が使っていたデッキ。

どうやら、ウォリアーと名のついたカード（シンクロはもちろん）をとにかくデッキに入れて装備魔法を使い強化して相手を殴り殺すビートダウンデッキだったようである。

正直、微妙なデッキだった。

『だから、あんた落ちたんでしょ？毎日あたしと一緒に居たせいで

勉強もしてないだろうから、筆記も悪かったんでしょ？あたしが存分に慰めてあげるから早く帰ってきなさいよ、せいぜい笑ってあげるからさ。あははは』

姉貴が勘違いをしたまま会話を進めていく。

（きっと電話の向こうで腹を抱え込んで大笑いしているんだろうな）
ヒノキにはその姿が容易に想像できた。

（確かに筆記も悪かったし、もし『俺』のデッキだったら勝てなかっただろうな……）

しみじみとそんなことを思う。

姉貴は未だにバカ笑いをしていた。

『あはははは、は、うつ、げほっごほっ』

咽るほどの大笑いをする姉貴。

「勝ったよ」

『げほっ、ごほっ、……は？なに？聞こえなかった？』

「だから、実技には勝ったって」

『え？』

真実を告げた瞬間、姉貴の声が途切れた。

『……エイプリルフル?』

「カレンダー見たら?」

『えっと……えっと、えっと、頭を打って事実をちゃんと認識してない、とか?』

「よくそんなことを思いつくな。流石にそれは有り得ない」

『じゃあ……えっと、むう……ええ……い!嘘をつくなあ!』

最終的に叫びだす姉貴。

どうあっても勝ったことを信じたくないようであった。

『だってあのデッキでしょ!?勝てるわけないじゃない!?!』

「それでも勝ったもんは勝ったんだよ」

『えっ、じゃあ試験に、受かった、の?』

「ん?ん、よくわからないけど多分受かってるんじゃないかな」

物凄く自信なさげな小声で聞いてくる姉貴に、思わずそう答えてしまう。

(筆記は低いけど、デュエルで勝ったんだから大丈夫だよな?)

頭の中でそんなことを考えながら。

『それ、じゃあ……あんたはあたしと同じ高校には行か、ないの?』

まるで絶望しきったような弱々しい口調で姉貴が聞いてくる。

「まあ、そうなるよね」

「じゃあ、それじゃあ……」

姉貴がまるで女の子みたいな声を出している、そのことをヒノキは不気味に思った。

（やめてくれよ、気持ち悪い。姉貴になっているのは頭では理解してるけど、俺の中では姉貴は兄貴なんだから）

そう思って携帯を耳から離す。兄貴だったら、途中で言葉を切るのは次の台詞を大声で叫ぶときの溜めだったからである。

『あんたをこき使って存分に楽しんで樂をする!! そんなあたしの幸せ一色な高校生活は一体どうなるっていうの!!?』

「って、俺にとっちゃ灰色の高校生活じゃねえか!？」

大声で突っ込みを入れてからヒノキは電話を切った。ついでに携帯もマナーモードへと変更してポケットに突っこむ。

「はあ、なんか精神的に疲れたな……」

フラフラと壁によりかかる。

（まったく、兄貴はやっぱ兄貴だったな）

そんなことを思いながら。

発言が突拍子もない、会話からその先に何を言ってくるのか先読みできない、そしてデフォルトでヒノキに対して少し失礼。そんな兄貴と何も変わっていない姉貴でヒノキは少しばかり辟易とする。でも、そんな兄貴と何1つ変わっていない姉貴に安心感を持った。

「さて、と……そろそろ行きますか」

壁によりかかっている体を起して歩き出す。腕や手首を回して軽く柔軟体操、キョロキョロと辺りを見回しながらヒノキは思ったことをそのまま言葉にする。

「あれ？ここどこ？」

電話に應對しながら適当に歩き続けていたヒノキは完全に迷子になっていた。

『ちつくしゅ！あいつ、一体どこにいるんだよ！？』

通路では後ろの方で十代の叫びがこだましていた。

第3話 サー！イエス！サー！……えっ、サーじゃなくてママだって？（後書き

今回はほぼ主人公とオリキャラの会話のみ、申し訳ないです。今回は少し感想の意見を参考にして文章について試行錯誤してみました。次回はデュエル、までいくかはまだ未定。もしデュエルを書くところまでいくなら、なるべく頑張って限界バトルをさせていきたいと思います。

第4話 よし、入学だ！へっ、退学かもしれないって？（前書き）

場面の変更が多くテンポが良くないかもしれません。原作で言及されていないことに対して適当なことを言っています。あと、前回の話を見て十代とデュエルすると思った人が居たらごめんなさい。

第4話 よし、入学だ！へっ、退学かもしれないって？

試験に無事合格することが出来たヒノキは現在デュエルアカデミアの入試合格者を乗せて島へと移送するヘリの中に居た。

ヒノキはヘリの中で揺られながら考えていた。

（あのあとグラサン先生に会えなかったら危ないところだったなあ）と、窓の外に流れる景色を眺めながら。

ヒノキは試験会場で迷子になって困っていた時、通路を歩いていたグラサン先生に再び助けを求めることで事なきを得ていた。よくよくグラサン先生と奇妙な縁があるものである。ヒノキとしては感謝してもしきれない。

（あの人が居なければ試験すら受けられなかったかもしれないからな）

そう思っで心の中で感謝した。正直なところ同じような格好をした人が大勢居て見分けはつかないのだが。

しばらくして、アカデミアのある孤島が見えてくる。同じヘリに乗っている合格者達はこれから3年間暮らすことになる島を見て胸の内に夢と希望を秘めて感嘆の声を上げていた。

それをどこか遠いことに感じるヒノキ。

（よくわからないんだよなあ。この世界には兄貴がいるし……姉貴になってるけど）

周りにいる合格者達とは違い、胸の内は疑問でいっぱいだった。

「でも、まあ楽しみながら頑張るかね」

ポツリと呟く。

疑問は多いがそれはそれ。とりあえず遊戯王GXの世界に来たの

だから、それを楽しみながら退学にならないよう頑張っていこうと決意した。

胸の内ですぶる疑問はおいおい解決していけばいい、今はアカデミアで頑張らなければいけない。何せアカデミアを退学にでもなったら姉貴のパシリにされてコキ使われる灰色の学園生活が待っているのだから。

（十代と仲良くなれたらいいなあ）

そんなことを思いながら、呆然と窓の外を眺め続けた。そんな懸念は杞憂だったが

「やっと見つけたぜ！俺とデュエルしようぜ！！」

十代とのファーストコンタクト。やたらと瞳が輝いている。

アカデミアに着いてから制服を貰い（色は赤）解散となった後に駆け寄ってきた十代の台詞がこれだった。

「試験で見てからずっとお前のことを探してたんだ！デュエルしようぜ！」

「いや、俺もお前とデュエルしたいけどな」

ヒノキにとっては願ってもない申し出だったのだが、思わず口ご

もってしまおう。

「まあ、待て十代。その前に116番君に聞きたいことがあるんだ」

「ええ、そんな俺がコイツとデュエルした後聞けよ」

後ろから黄色の制服を着た男がやってくる。いきなりやってきたその男に十代が不満の声を上げた。

「おっ、幻のデュエリストじゃないか！」

三沢を見て、思わずそんなことを言ってしまう。

「へっ？ 幻のデュエリスト？」

「何のことだ？」

十代と三沢が怪訝な表情をする。完璧な失言だった。

「いや、何でもない」

君にはほとんど出番がなかった上に背景と一体化していたことも

あつたんだよ、なんてことは言えない。

「そうか。そんなことより君がやっていたシンクロ召喚とチューナーモンスターについて聞きたいんだ。116番君」

「やっぱりか……」

シンクロ召喚について聞かれる。大体予想がつくことではあつたが少しばかり面倒くさいとヒノキは思った。

「どちらも今まで聞いたことがない。一体、どういうものなんだ？」

真剣な顔で聞いてくる三沢。知能派デュエリストらしいから自分の知らないことは見過ごせないであろう。

（適当に答えよう）

そんなことを思いながらヒノキは

「シンクロ召喚はチューナーとそれ以外のモンスターを墓地に送ってエクスト……もとい融合デッキからモンスターを特殊召喚するものだ。チューナーはそれに必要なもの」

と、簡潔な説明をした。

色々とぼかしてあるが何1つ嘘は言っていない。融合を必要としない融合モンスターと勘違いしそうな説明であつたが。

「成る程。特定のモンスターとそれ以外をフィールドにさえ出せれば召喚出来る融合か」

うんうんと頷く三沢。案の定、勘違いをしていた。
三沢が続けて質問をしてくる。

「しかし、チューナーなんてカードは聞いたことがないぞ？」

「えーと……トウーンやスピリットみたいな感じかなあー」

今度は本当に適當なことを言って返答するヒノキ。嘘は言っていなかった、本当でもないが。

「成る程。市販には出回っていない限定カードということか」

勘違いが増大されていく。三沢は勝手に納得しながら『要注意だな』とか呟いていた。

「へえー面白いな。くうー早くデュエルしてえ！」

十代は面白ければ何でもいいようであった。

「ありがとう、116番君。よくわかったよ」

「そうか。あと、俺は柳　ヒノキね」

「む、それはすまないな。俺は三沢　大地だ。そろそろ俺は寮へ行ってくるよ、じゃあな」

「おう。さらばだ」

三沢を見送る。

（よく、あんな説明で理解できたな）

そんなことを考えながら。

三沢とのやりとりを横で見ていた十代がハッとしていた。

「そーいやあ自己紹介してなかったな。俺、遊城　十代っていうんだ。よろしくな」

「ああ、柳　ヒノキだ。よろしく」

「じゃあ、早速デュエルしようぜ！ヒノキ」

「……」

結局そこにいくんだな、お前は。そんなことを思いながら、キラキラとしている瞳を見つめるヒノキ。

「あつ、僕は丸藤 翔ッス」

今まで黙っていた翔は完全に空気と化していた。

オシリス・レッド寮。

しきりにデュエル、デュエル言ってくる十代を「デッキ調整がしたいから」と言ってやんわりと受け流しながら、十代と翔と3人で連れだって寮の部屋に入ったヒノキ達は1つの問題に直面していた。

「この部屋に4人は狭いだろ」

「そうッスよね」

「そうなんだな」

「ん？　そうか？　俺はデュエルが出来れば気にしないけどな」

部屋は十代達と何故か同じ部屋だった。既に前田 隼人がこの部屋に居るため1部屋に4人、かなり狭く感じる。

十代達と同じ部屋なのは少しばかり嬉しかったのだが、それとこれとは話が別だった。部屋の隅にはベッドの他に布団が一組だけ置

いてあった。

（これは、俺のせいかな？）

ヒノキはそんなことを思う。おそらくイレギュラーのせいでオシリス・レッドの合格者が1人増えてしまったのであろう。デュエル・アカデミアはオーナーが海馬コーポレーションであるからおそらく私立、合格者を多くとったとしてもおかしくはない。本当のところどうかはわからないのだが。

コンコンとドアがノックされる。

「失礼するのニャー。寮長の大徳寺だニャー」

扉から大徳寺先生が入ってくる。猫を抱えて。

（どうやってノックしたんだ？）

ヒノキはどうでもいいことを考えた。

「申し訳ないのニャー。今年は合格者が多くて、この部屋だけ4人部屋になってしまったのニャー」

「えっ、そうなんスか？」

「困ったんだな」

「ふーん」

「そうなのニャー、申し訳ないのニャ。では皆さん失礼するのニャ」

用件だけを告げて大徳寺先生が出ていく。

翔と隼人は困った顔、十代はどうしてもよさそうな顔をしていた。ヒノキは予想していたことだったので何とも思わなかった。

「で、どうするッスか？誰が布団で寝るッスか？アニキ、ヒノキくん」

「うーん、俺はどこでもかまわないけどな」

翔の問いにそう答える十代。本当に気にしていないようである。隼人は自分には関係ないのでそそくさと自分のベッドに戻っていた。

「十代、翔、俺が布団を使うから2人はベッドを使ってくれ」

「おっ、そうか」

「何か悪い気がするッス」

「気にするな」

「そうッスか？じゃあ、お言葉に甘えるッス」

布団で寝る人が決まって十代と翔は自分が使うベッドを話し合います。

（俺がベッドを使ったら悪い気がするからな）

自分のせいでこの部屋が4人部屋になってしまったのに自分がベッドを使ってしまったら、何かいけない感じがした。

(くだらない感性なのかもしれないな)

そんなことを思いながら心の中で苦笑する。

十代と翔の使うベッドはすぐに決まった。

「なあ、散歩しに行かないか？」

暇になったせいか十代がそんなことを言い出す。

「いいッスね」

「おし、行こうぜ翔。ヒノキはどうする？」

「俺はデッキ調整がしたいから残ってるよ」

「ん？俺とのデュエルのためにか？……くう、早くデュエルしてえ」

「じゃあ、僕たちは行ってくるッス」

「おう、行ってこい」

「ヒノキ！デッキの調整が終わったら絶対にデュエルしような！！」

十代達が扉から出ていった。

（今日は入学初日だから万丈目とのデュエルだったな）

万丈目は最初とにかくヘルと名のついたカードばかりを投入したデッキのはずだから見なくてもいいか、そんなことを思いながらデッキケースを手取る。

未だにデッキの中身をよく確認していなかった。姉貴は『俺』のデッキをウォリアーと装備魔法の入った変なデッキと言っていたから、おそらく入れた覚えのない『俺』のデッキに入っているカードと俺のデッキが混ざり合ったデッキなのだろう、とヒノキは予測する。

（さーて、どうなってるかなあ）

まるでビックリ箱でも開けるような気持ちでデッキを確認した。

「あはは、は、は……マジですか？これ？」

デッキを確認し終わったヒノキには渴いた笑いしか出てこなかった。

（というか、これどういうこと！？）

そんな叫びを心の中で上げてしまう。

デッキの中には入れた覚えのないカードが入っていた。おそらく『俺』のカードだろう。それは予測していたことだったので割とどうでもいい。デッキバランス的には良くないが。

問題は自分自身が作ったデッキのキーカードがほとんど抜けていることであった。

（ダンディ・ライオンとシューティング・スターが無い……）

意気消沈とするヒノキ。

他にはレッド・デーモンズ・ドラゴンとスカーレット・ノヴァ・ドラゴンが消えていたが、一番大きな問題はこれであった。

シューティング・スター・ドラゴンを出すためのデッキだったは

ずなのにシューティング・スター・ドラゴンが無い。意気消沈とするのも仕方がない。

「はあ、これでどうしろと」

そんなことを言いつつもデッキ調整を進めていくヒノキ。
幸いデッキケースの中にはデッキの他にも何枚かカードが入っていたため、それとにらめっこしながらカードを差し替えていく。

「まず、こいつは抜かねえとな」

とりあえずくノ一ウォリアーはデッキから抜くヒノキであった。

寮の歓迎会が終わり、十代と翔が万丈目にPDAで呼び出され部屋から出ていった。

「ヒノキは十代に着いて行かなくていいのか？」

「いいの、いいの。別に俺は呼び出されてないしな」

ヒノキは隼人とまったり話をしていた。

万丈目とのデュエルが気にならないわけではないが、そんなに興味もないし退学になるかもしれない危険を犯したくなかったからである。

「ふーん。まあ、何にせよ十代の元気もこれまでなんだな」

そう言って、隼人はベッドの上で本格的に睡眠を始めた。

「そうはならないと思うけどなあ」

やることもなく、ボーとしながら呟く。隼人は既に言葉を聞いていなかったが。

十代と万丈目のデュエルがどのような結末を迎えるか知っているので、十代が元気を無くすことなんて有り得ないことを確信していた。

「しかし、まあ見事にやることが無くなったなあ」

デッキ調整は終わっていたため、何もやることが無かった。ちらりと隼人の方を見る。

「ZZZZ」

しっかりと熟睡している。話し相手すら居なかった。

「はぁ、暇だ」

思わず溜息が出てしまう。

仕方なく考え事に没頭するヒノキ。

（ウォリアーってこの時代にもあったんだなぁ……）

と、そんなことを。

ウォリアーと名のつくカードは大体が遊星の使っていたカード。

それが『俺』のデッキに入っていたということはこの時代にはあることになる。

（遊星も第1話でカードは拾ったって言ってたし、案外あったのかもしれないな）

そう思い疑問は自己完結した。

しばらく部屋に隼人のいびき声だけが響く状況のまま時間が流れる。

本当にやることが無かった。

「十代はそろそろデュエルしてるころかなあ」

あまりに暇なので独り言を言ってしまう。

デュエルの顛末は知っていた。

最後、死者蘇生をドローした十代がそれを使う前に中断する。

（この時期のフレイム・ウィングマンって実は特殊召喚出来たのか

な?)

実際に効果の違うカードはアニメだと一杯あるし案外出来たのかもしれない、呆然とそう思う。そんなことを考えている途中に何か引っ掛かった。

(ん? フレイム・ウィングマン?)

何かを忘れている気がする。

「つて、そうだ! 今日って確か……」

忘れていることに気が付き、急いで立ち上がった。

(何が特に興味ないだよ! すぐく見たいもんがあったじゃないか!)
寮を飛び出して焦って走り出す。

「くそっ、間に合うか!？」

ペース配分も考えずに全力疾走するヒノキ。

今日は1度しか使われないフレイム・ウィングマン幻の左手が使われる日だった。

アカデミアへと急いでやってきたヒノキは自分の迂闊さを呪っていた。

「しまった……」

「何でこんな時間に出歩いてるんだ？校則違反だぞ」

ヒノキは1人のガードマンに捕まっていた。「ああ、面倒くせえ」とか言いながら1人で見回りをしているガードマンにばったり出くわしてしまったのである。やたらと不真面目な勤務態度のガードマンであつたが。

面倒くさそうな顔をしながらガードマンが口を開いた。

「それで、何をやってるんだ？まったく校則違反をするにしても俺達に見つからないようにやれよな、坊主」

仕事が増えるじゃないか、とかぶつくさ文句を言ってくる。とてつもなく不真面目なガードマンだった。

「じゃあ、見逃してください」

素直に本音を頼み込む。

（退学なんかしたくない）

そんな想いを込めながら。何せ退学になんかなったら灰色な学園生活へと一直線なので必死であつた。

「そういうわけにはいかないだろ。そうしたいのはやまやまだが、それでも仕事だからな。ったく、本当に勘弁してくれよ面倒くさい」

「ですよねえ」

ほとんど予想が出来ていた答えとはいえ少し落胆する。

どんなに不真面目な勤務態度でも仕事は仕事、それだけは譲ってくれそうになかった。

(まずい、非常にまずいぞ)

冷汗が流れでてくる。

(入学初日で退学か?……これはいかん)

そんな考えが頭をよぎる。全くシヤレになって無かった。

ガードマンは未だに面倒くさいとか、ぶつくさ文句を言いながらがりがりと頭を掻いている。

(何か、何でもいいから打開策は無いのか!?)

そんなことを思いながら焦るヒノキ。

ガードマンをよく見たら一つだけ打開策が浮かんた。

「おい」

「うん?、何だ?」

「デュエルしろよ」

テンパって思わず遊星の台詞を言ってしまう。

このガードマンは左手にデュエルディスクを付けていた。決闘至上主義のこの世界ならおそらく何とかなるだろう、と思つての打開

策だった。

「は？ いや何でだよ、面倒くさい」

「この学園では全ての事はデュエルで決める。ここで働いているガードマンなら例外じゃないはずだ」

怪訝な表情のガードマンにそんなことを言う。むしろ例外だったら困る、言葉の裏にそんな想いを込めて。

「俺が勝ったら見逃せ！ あんたが勝ったら校長に俺を突き出せ！ だから、まずデュエルをしろ！」

とてつもなく情けない台詞をガードマンへと叩きつける。これ以外に方法が無いので必死だった。

「デュエルねえ、今からデュエルをするよりもさっさとお前を突き出したほうが面倒くさくないと思わないか？」

「そりゃ、そうだろうけどさあ……」

「というわけで、お前を突き出して終わりだ」

「勘弁してください。頼むからデュエルしてください」

最終的に下手に出て頼み込むヒノキ。

もはや、なりふり構っていられなかった。傍から見てもあまりに哀れな姿であった。

「ちっ、しょうがねえなあ……まあ、大枚はたいて作ったデッキも試してみたいし、その誘いに乗ってやるよ」

あまりに情けない姿のヒノキに、面倒くさがりやなガードマンは舌打ちをしながらもデュエルを引き受けてくれる。

（よし、何とか助かった）

そう思いデュエルの準備をするヒノキ。

あとはデュエルに勝てさえすればどうにかなる、何としても勝たなければいけない。何せ退学がかかっているのだから。

（頼むぞ。俺のデッキ！）

心の中で声をかけてからディスクを構える。

「デュエル！」

そしてデュエルが始まった。

「俺のターン！ドロー！」

素早く手札を確認して先攻を取る。

（そういえば表側守備表示で出せるんだよな）

そんなことを思いながらモンスターをセットするのを止めるヒノキ。いつもは永続トラップ聖なる輝きでも使われないかぎりやることが出来ないので少しやってみたかった。

「シールド・ウィングを守備表示で召喚してターンエンド！」

守備モンスターを1体だけで相手にターンを渡す。

（まあ、大丈夫だろ）

と樂觀的なことを考えながら。

「ふむ、こちらのターンだな。ドロー」

ガードマンがカードを引く。

「まず神獣王バルバロスを召喚」

神獣王バルバロス ATK1900

「むっ、バルバロスか」

「おうよ。攻撃力は1900になっちゃってるが十分強力なモンスターだ。守備力900なんて一撃で蹴散らしてやるぜ。攻撃だ！ト

ルネード・シェイパー！」

デュエルになったせいでテンションが上がってきたのか攻撃名を叫ぶガードマン。

神獣王バルバロスの槍がシールド・ウイングに向かっていく。

「だが、シールド・ウイングは1ターンに2度まで戦闘破壊はされない！」

シールド・ウイングは翼をクロスさせて向かってくる槍を防いだ。それを見てガードマンが舌打ちをする。

「戦闘破壊耐性かよ、面倒くせえな。じゃあ、カードを2枚セットしてターンエンドっと」

「よし、俺のターン！ドロー！」

カードを引いてからフィールドをじっと見つめる。

（バルバロスの攻撃力は1900か）

ちらりと手札を見て、

（こいつなら倒せるな）

そう思い、攻めることにした。

「俺はマックス・ウォリアーを召喚！そしてバトル！神獣王バルバ

ロスに攻撃だ！スイフト・ラッシュュ！」

指示を受けたマックス・ウォリアーATK1800が神獣王バルバロスに突撃していく。

「はっ？攻撃力が低いモンスターで攻撃するのか？」

「いや、マックス・ウォリアーはモンスターと戦闘をするとき攻撃力が400ポイントアップする！」

マックス・ウォリアーATK2200

怪訝な表情をしていたガードマンが攻撃力の上だったマックス・ウォリアーを見て納得したような表情をした。

マックス・ウォリアーの攻撃が神獣王バルバロスへと迫る。

「そういうことならバースカードオープン！スキルドレイン！」

LP3000

「げっ」

「フィールド場に存在する全てのモンスター効果を無効にする！」

効果が無効化され攻撃力が変動する。

マックス・ウォリアー ATK1800

神獣王バルバロス ATK3000

攻撃を仕掛けたマックス・ウォリアーは槍に迎撃され爆散した。

「くっ」

LP2800

この状況にヒノキは冷汗を流す。

(まずいな……)

マックス・ウォリアーがやられたことよりも問題なのはスキルドレインの方だった。

フィールドはシールド・ウィングのみ、効果は無効化されているので一撃で殴り殺されてしまうだろう。それどころかデッキの中にはシンクロモンスターを含めて全て効果持ち、効果が無効化されるのはかなりきつい。

それに加えて相手フィールドにはATK3000の神獣王バルバロス。

(よくよく攻撃力3000のモンスターと縁があるな)

入試デュエルを思い出し、ヒノキはそんなことを思う。

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

状況はまずいがクロノスの時よりはまだ余裕があった。

「うし、こっちだな。ドロ」

ガードマンのターンになる。

「神獣王バルバロスをもう一体召喚だ！」

神獣王バルバロスATK3000が新たに現れ、フィールドに2体並び立った。

「うっ、2体目か……」

少しばかり苦い表情で呻いてしまう。

（完全なパワーデッキだな、これは）

そんなことを思いながら、2体のバルバロスを見つめた。こんなんばかりかよ、とか突っ込みを入れたくなった。

「さあて神獣王バルバロスで、効果のなくなったシールド・ウィングを攻撃！トルネード・シェイパー！」

「くそっ、シールド・ウィングが」

シールド・ウィングが神獣王バルバロスの持つ槍に貫かれる。効果が無効化されているシールド・ウィングは成す術もなく消滅

した。

「ようし、2体目のバルバロスでダイレクトアタックだ。トルネード・シェイパー！」

「させるか！リバースカードオープン！くず鉄のかかし！」

くず鉄のかかしが2体目のバルバロスを弾き返す。

「攻撃を一度だけ無効にし、もう一度セットする！」

「ちっ、面倒くさいカードだなあ。まあ、次で2回攻撃すりゃ俺の勝ちだな。ターンエンド」

エンド宣言をするガードマン。

面倒くさいとか言っておきながら勝利を確信しているようであった。

おそらく2体もATK3000のモンスターを従えている上にスキルドレインがあるので負けはないと思っているのであろう。

状況はヒノキにとって確かにつらかった。精神的な事情も含めて。モンスターの効果は無効化される、負けたら退学、退学したらパシリにされる灰色の学園生活、そんなとりとめのないものが頭に漂う。負けるわけにはいかなかった。

「俺のターン！ドロー！」

ヒノキはカードをドロースる。

（このターンで勝利する！）

そう意気込んで。

「いくぞ！手札からレベル・ステイラーを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！そして更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げてレベル・ステイラーを墓地から特殊召喚！」

フィールドに2体のモンスターが並ぶ。

「ちっ、両方ともスキル・ドレインの効果範囲外からか。くそっ面倒くせえ」

「そういうことさ」

ガードマンが苦り切った表情をしている。スキル・ドレインの効果範囲はフィールド、手札と墓地からの効果では止めようがなかった。

「ちい、モンスターを増やして時間を稼ぐつもりかよ」

ガードマンが面倒くさそうな顔でそんなことを呟く。しかし、ヒ

ノキとしてはそんなことをするつもりなど毛頭なかった。

「いや、このターンで勝負を決めるさ」

「何？」

いきなりの勝利宣言にガードマンが怪訝な声を上げる。まあ、当然の反応である。

「まずは、リバーズカードオープン！ギブ&テイク！これにより俺の墓地に居るシールド・ウィングをお前のフィールドに特殊召喚する！」

「は？」

ますます怪訝な声を上げるガードマン。どんなメリットがあるのか全くわからないようであった。

「守備表示でお前のフィールドに召喚！そして、俺のフィールド場に存在するモンスター一体のレベルを特殊召喚したモンスターのレベル分上昇させる！」

レベル・ステイラーLV1↓LV3

一連の動作を見ているガードマンはやはり怪訝な表情をしてい

た。

「何がしたいんだ？お前はモンスターのレベルを上げて？それにこっちの場にモンスターを特殊召喚しても守備表示じゃダメージも通らないぞ？一体、何がしたいんだ？」

「いや、これでいいのさ。これで俺が勝利するためのコンボが成立するのさ」

まるで、こちらを心配してくるような目でガードマンが見てくるがヒノキとしては何1つ間違ったことをやっていない。

阻害さえされなければ勝利の方程式は確立していた。しかし、

（あはは、悪いなシールド・ウイングよ）

ガードマンのフィールドで守備表示になっているシールド・ウイングには悪い気がした。

「まあ、仕方ないな。このまま行くぞ！レベル3になっているレベル・ステイラーにレベル4になっているクイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが拳銃を引き抜き回転している数枚のカードからニトロ・シンクロンを撃ち抜く。

「集いし想いがここに新たな力となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！！」

クイック・シンクロンとレベル・ステイラーが1つとなりニトロ・ウォリアーATK2800がフィールドに降り立った。

その成り行きをガードマンはひたすら怪訝な表情で眺めていたが、召喚されたニトロ・ウォリアーを見て安堵の息をもらす。

「ふうー、驚かせやがって。よくわからないことをするが攻撃力2800じゃねえか……バルバロスには勝てないだろうが」

ガードマンは安心した表情でそう呟いた。確かにこのままでは勝てない。

「だったら、勝てるようにするだけさ！手札からダブル・サイクロンを発動！俺の場にあるリバーカードくず鉄のかかしとお前の場にあるスキル・ドレインを破壊する！」

「自分のカードも破壊？何やってるんだ？だったら、こっちは非常食を発動！スキル・ドレインを墓地に送る」

LP4000

ガードマンのライフが回復する。

「残念だったな。これで、そのカードは無駄に終わったわけだ。それにあの面倒くさいかかしも自分で破壊したし、次のターンでこっ

ちの勝ちだ!」

次のターンでの勝利宣言をするガードマン。

ダブル・サイクロンの効果は非常食で回避され、自分のカードだけを破壊する結果になってしまったが何ら問題はなかった。

(どちらにしろスキル・ドレインさえ消えればどうにでもなる)

そんなことを思う。

厄介なスキル・ドレインが消えて、自分が魔法カードを使ったという結果さえあれば十分だった。

「まずニトロ・ウォリアーのレベルを1つ下げて墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚する。来いレベル・ステイラー!」

レベル・ステイラー ATK600が攻撃表示でフィールドに現れる。

「何!?! 攻撃表示だって?」

「ああ、その通りさ! 行くぜ、バトルだ! ニトロ・ウォリアーで神獣王バルバロスを攻撃! 砕け、ダイナマイト・ナックル!」

「はあ!?! 攻撃力はバルバロスの方が上だぞ!?!」

ニトロ・ウォリアーが跳躍し、神獣王バルバロスへと拳を放つ。

「へっ。ニトロ・ウォリアーは魔法カードを使ったターン、一度だけ攻撃力が1000ポイントアップする！」

ニトロ・ウォリアー ATK 3800

「っ、そういうことか！くそっ、面倒くせえ」

ニトロ・ウォリアーの放った強大な拳が神獣王バルバロスを打ち砕いた。

「くそっ」

LP 3200

「更にニトロ・ウォリアーの効果！モンスターを戦闘で破壊した時、相手フィールドの表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更！ダイナマイト・インパクト！」

シールド・ウィングにニトロ・ウォリアーの放つ衝撃波が当たり、シールド・ウィングは守備態勢を解いてクロスさせていた翼を下す。攻撃表示になったシールド・ウィングの攻撃力は0。ダイレクト・アタックと何ら変わりがなかった。

「よし、もう一度バトルだ！ニトロ・ウォリアー！ダイナマイト・ナックル！」

「ちいつ、守備表示だったのはこれが狙いかよ！？」

「その通りさ！行け！」

ニトロ・ウォリアーの拳をシールド・ウィングが無防備のまま受ける。

「くそっ、面倒くせえ」

LP400

「シールド・ウィングには戦闘耐性がある。ゆえに再び無防備な姿をさらす。これでトドメだ！レベル・ステイラーでシールド・ウィングを攻撃！」

無防備な状態のままにいるシールド・ウィングへとレベル・ステイラーが突撃していった。

「ラストがこんなテントウムシかよおー！」

LP0

デュエルが終了し、ソリッド・ビジョンが消えていく。

（はあ、よくよく見たら意外と危なかったな）

そんなことを思うヒノキ。

手札は残り1枚だった。

（エフェクト・ヴェーラーか……何か嬉しいな）

そう思い、にやにやしながらカードをデッキへと納める。少しばかり危険人物のような笑みだった。

「くっそー、負けるとはな……結構自信のあるデッキだったのによ」

そう言ってガードマンが近づいてくる。

「いやあ、かなり危なかったですよ」

「そうか？ そう言ってくれるのはありがたいが、またデッキを強化しないとな。今度はお前に勝って叩きだしてやるさ」

「いや、勘弁してください」

「それにしてもこれからを考えると面倒くせえなあ。まあ約束は約束だからな。見逃してやるよ」

ガードマンはそう言ってから、夜闇の暗がりに消えていった。

おそらく面倒くさがりながらも勤務に戻ったのであろう。

（何とか、退学にならずに済んだな）

そう思ってから、ヒノキは走ってオシリス・レッド寮へと戻ることにした。これ以上ガードマンに見つかったら見逃してくれないだろうから。

「はあ、もう幻の左手は終わっちゃったんだろうな」

それだけが心残りだった。

（今度からなるべく十代達と一緒に居よう）

ヒノキはそんな決意をする。十代と一緒にいれば十代の主人公補正的なものでとりあえず自分が退学になるようなことはないだろう、そんなちっぽけな打算も含まれていたが。

何はともあれ、この世界はもうヒノキにとってアニメではないのだ。退学なんてシャレにならない。

不意にポケットに入っている携帯が震えだした。

『アニメじゃない、〜♪♪』

「知ってるっての」

そう突っ込みを入れながら、ヒノキは寮へと帰って行った。

第4話 よし、入学だ！へっ、退学かもしれないって？（後書き）

ガードマンとのデュエル。本編では余裕がありそうなのき君でしたが意外と限界ギリギリでした。デュエルの状況を頭の中でよく確認したあとに思い至りました。

次回の話は少し悩んでいます。オリキャラを出すかどうか……ガードマンだってほとんどオリキャラじゃん今さら、とか思う人もいるかもしれませんが悩んでいます。では次回に会いましょう。

第5話《前編》そいつを過労死させるのはちょっと……（前書き）

遅くなりました。第5話です。今回もデュエル構成が難航して時間をくいました。それにしてもデュエルを書くとき長いなあ……

前回、言っていたオリキャラは登場させることにしました。といっても今回はそんなに出てきませんが。

あと、デュエルの描写で至らない部分があるかもしれませんがご容赦ください。それではどうぞ

第5話《前編》そいつを過労死させるのはちょっと……

デュエルアカデミアに入学して数日が経過した。

（一体、姉貴は何をするつもりなんだろうなあ……）

クロノスの授業を適当に聞き流しながらヒノキは考える。

ガードマンとの色々な意味で危なかったデュエルの後に届いたメールは姉貴からだった。

『あんたを絶対に幸せ高校生活のために連れ戻してやるから首を洗って待ってなさい』

とのこと。一体、何をするつもりなのか知らないが一波乱あるだろうとヒノキはにらんでいる。おそらくとんでもないことを仕掛けてくるのだろうと。

「はあ、憂鬱だ……」

思わず溜息を吐いてしまう。

（勘弁してくれよ）

ヒノキは心底そう思った。

別に姉貴が何をしようがどうでもいい。きっと自分はすぐくうんざりとするだろうが、それでも姉貴と一緒に過ごす時間はきつと楽しいのだから。だが、退学の危険性がある出来事……それもイレギュラーでのことを増やすのは止めてほしかった。退学になったら灰色学園生活に直行なのだから。

（まあ、いま考えてもしょうがないな）

なるようになるだろ、と心の中で決着をつけてヒノキは前を向く。決着というよりは保留に近い形ではあったが。

前の方では翔がクロノスにフィールド魔法について聞かれていた。

「えーと、その……」

口ごもるばかりで答えられない翔。

（典型的なあがり症って感じだなあ）

翔を見ていてそんなことを思う。実際、翔は答えをわかっているはずなのである。冷静になれば簡単に答えられるだろう。しかし

（助けてやりたいのはやまやまなんだけどなあ）

席が若干離れているので助けるのは不可能だった。

まあ、十代がフォロー（？）をこの後に入れるはずだし問題ないだろう。ヒノキはそんなことを思い

（まあ、頑張れよ）

無責任なエールを心の中で送った。

「よろしい、引っ込みなさいーネ」

「はい……」

意気消沈とした様子で翔が座る。

（まあ、原作通りだな）

そう思って眺めるヒノキ。この後の顛末も知っていた。

生徒を揶揄するクロノスもどうかと思うが、十代だって翔を助けるにしてはちよつとどうかな。とか思いながら。

「流石はオシリス・レッド。こんなこともわからないなんーテ」

教室に居る人間が笑いだす。特にオベリスク・ブルーのあたりから。

翔を庇うようにすかさず十代が口を開く。

「でも先生。知識と実戦は違いますよね。俺、先生に勝っちゃったしー」

「ぬぐぐぐ、マンマミーヤ」

ハンカチを噛んで歯ぎしりをするクロノス。教室内の人間が笑いだす。

あんまり先生を刺激するのは良くないぞ、ヒノキはそんなことを思いながら他人事のようにその光景を眺めていた。

翔を助けるためとはいえ、やっぱり褒められたものではない。と、そんな風に第三者的な視点で傍観をする。

不意に十代がこっちの方を振り向いてきた。

「なっ！お前もそう思うだろ？ヒノキ」

って、おいそこで俺に渡してくるのか！？心の中で突っ込みを入れる。

とんでもないキラークラスだった。

（勘弁してくれよ……）

心の中で泣き言をいう。

クロノスが歯ぎしりをしながらこっちを見ていた。

「あゝ、その……」

「ぬぐぐぐ」

「デュエルは最後の最後までカード達を信じることだと思えますよ？」

「ぬぐぐぐ、マンマミーヤ」

主人公がよく言いそうな台詞を言っでごまかそうとするが無駄だった。

（ああ、これでクロノスに目をつけられちまうのかなあ）

そう思い溜息を吐く。もっとも入試の時点で既に目をつけられていたのだが。

体育の時間、更衣室内。

「ウジャジャジャジャジャ、これでドロップアウトボーイは終わるなノーネ」

気持ち悪い笑い声を上げながらクロノスは十代の靴が入っているロッカーに自らが作成したラブレター（偽装）を入れていた。

傍から見ていたら正直なところ不審者に間違われていることだろう。

更に懐からもう一通のラブレター（偽装）を取り出すクロノス。

「ついでに、もう一人のドロップアウトボーイも終わらせてやるノ―ネ」

そう呟いて今度はヒノキのロッカーにラブレター（偽装）を入れる。

「ウジャジャジャジャ、差出人の名前はおなじ。ドロップアウトボーイどもを仲違いさせた上―に、退学にさせてやるノ―ネ」

ロッカーを閉めた後、クロノスは上機嫌で更衣室を出ていった。案の定ヒノキは自身の懸念通りクロノスにドロップアウトボーイと認識されていた。

クロノスが出ていった後、入れ替わるように1人の女生徒が入ってくる。

「ふむ、やはり今なら誰も居ないな」

あたりを見て確認し、そう呟いてからロッカーを見ながら歩き始

める。

「むっ、これだな」

そしてヒノキのロッカーをためらわずに開け放った。

そこで女生徒は既に中へと入っている一通の手紙に気付く。再び
まったくためらわずに手紙の封を勝手に開けて文章を読みだす。

「これは……恋文というやつか？」

首を傾げながらその手紙を制服のポケットへとしまふ。それにしても古風な言い回しをするものである。

「悪いが私の想いを先に彼へとぶつけさせてもらう。差出人には後で返しておくか」

そして代わりに自分が持ってきた手紙を中に入れて、女生徒は更衣室から出ていった。

放課後。

ヒノキはオシリス・レッド寮の近くにある崖の下で考え込んでいた。

（体育の後、何だか翔の落ち着きがなかったな）

おそらく今日はラブレター事件の日なのだろう、とヒノキは思う。正直、時系列的にどんな出来事が起こるのかは把握していたのだが、具体的に何日に起こるのかはヒノキにはわからなかった。

（うゝむ、じゃあこれは一体何なんだろうか？）

ちらりと手に持つ手紙を見る。

飾り気のないシンプルな手紙である。封は両面テープでキチンとされており、手紙の外側に差出人が書かれていなかった。おそらく中の方に書いてあるのだろう。

見つけた当初はクロノスからの偽装ラブレターかとヒノキは思ったのだが、その偽装ラブレターが渡されるのは翔であり、現在うかれた翔が懷で大切に保管しているはず。それに偽装ラブレターにはクロノスのキスマークがついているはずなのである。

これにはキスマークがついていない、だから違うだろうとヒノキは断定していた。ちなみに、まだ手紙の封は解いていない。何というか意外と両面テープが頑丈で開けられなかったのである。

「まあ、果し状ってところかな。多分」

そう呟いてヒノキは手紙をポケットへとしまった。

（あとで開けて読めばいいか）

そう思い、手紙のことは後回しにするヒノキ。正直、部屋に戻って刃物でも使わなければ開けられないので仕方がない。

細かいことは気にしない。何せこれから入学したてで忙しくて延ばしに延ばしまくっていた十代とのデュエルなのだから。

デッキをディスクから外して一通りカードを眺める。

「頼むぞ、俺のデッキ」

一言だけ呟いて、再びディスクに納める。

相手は十代、一回のドローで全てを覆してくるようなことを普通にやる奴。きつとんでもないデュエルになるはずであった。やる前からでは決して予想出来ないといんでもないデュエルに。しばらくして十代がやってくる。

「よう、待ったか？ヒノキ」

「いや、そうでもないさ」

「そうか？じゃあ早速やろうぜ！楽しいデュエルを！」

（まったく、十代らしいな）

そう思いながらディスクを構える。

「「デュエル！！」」

「先攻、貰った！一気にいくぜ！ドロー！」

十代がやる気満々にドローをする。流石にヒノキは先攻を取れなかった。

「おし、魔法カード融合！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！来いマイフェイバリットヒーロー、E・HERO フレイム・ウィングマン！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ATK2100がいきなりフィールドに姿を現す。

（十代の奴、かなり本気だな）

ヒノキはフレイム・ウィングマンを見ながらそう思った。

「更にカードを二枚セットしてターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！」

自分のターンになりヒノキはカードをドローする。

（1ターン目からフレイム・ウィングマンか）

十代のフィールドを見ながらヒノキは考える。

フレイム・ウィングマンはLP4000の世界ではかなり強力な存在である、攻撃力は上級モンスターとしては頼りないが戦闘でモンスターを倒せれば初期LPの半分以上を奪い取ることが出来る。早めに潰した方が良いモンスターだった。

手札をちらりと見て確認する。

（よし、いける）

何とかかなりそうな手札だった。

「こつちも速攻で行かせてもらおうぞ！十代！」

「おう！来い！ヒノキ！」

「手札のレベル・ステイラーを墓地に送りクイック・シンクロンを特殊召喚！更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げること
で墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚！」

「お！そのモンスターってことはシンクロ召喚ってやつだな！」

クイック・シンクロンを見てそう言う十代。

「ああ！その通りさ！レベル1のレベル・ステイラーにレベル4
になっているクイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが拳銃で回っているカードの中からジャンク・シンクロンを撃ち抜き、光る4つの輪と化してその中にレベル・ステイラーが入っていく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす、光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよジャンク・ウォリアー！」

「おお、かっけえ」

ジャンク・ウォリアーATK2300がフィールドに舞い降りE・

HEROフレイム・ウィングマンと相対する。

十代はジャンク・ウォリアーが召喚されるところを目をキラキラさせながら見ていた。

そんな十代を見て少し苦笑してから、状況を真面目に考える。

（これでフレイム・ウィングマンの攻撃力は上回ったが……）

十代のフィールドにはリバースカードが2枚。

（正直、気になるな）

ミラーフォースとかだったら目も当てられない。だが、手札に対処できる手段もなかった。

（仕方ない……）

攻めるしかないな、とそう思う。

「いくぞ！バトルだ！ジャンク・ウォリアーで攻撃！スクラップ・フィスト！」

指示を受けたジャンク・ウォリアーが右拳を腰だめに構え攻撃態勢に入る。そして背中の中のアーマーを点火し急加速、ナックル・ダスターをつけた右拳をフレイム・ウィングマンへと突き出す。

「させるか！トラップ発動！ヒーロー・バリア！」

しかし、拳はフレイム・ウィングマンの前に現れた透明な障壁に遮られた。

「1度だけ戦闘を無効にする！」

「くっ、倒しきれなかったか」

「へへっ、そう簡単に俺のヒーローはやらせないぜ」

ヒーロー・バリアに遮られたジャンク・ウォリアーが戻ってくる。
(まずいな)

現状、ジャンク・ウォリアーの攻撃力はフレイム・ウィングマンよりも上回っているが魔天楼・スカイ・スクレイパーでも使われて強化されたら大部分のライフを持っていかれてしまう。倒せなかったのは正直つらいところだった。

(ライフが8000だったら正直大したことないんだけどなあ)

そんなしょうもないことを考えながら手札を見る。

(まあ、何とかなる……よな?)

今のところジャンク・ウォリアーに頑張ってもらうしかなかった。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

フレイム・ウィングマンを残したまま十代にターンを渡す。

十代の手札は1枚。

(そうそう突破は出来、ないよなあ?)

そんなことを思いながら。

「よっしゃ、行くぜ!俺のターン!ドロー!」

十代がドロ―したカードを見て「おっ」と呟いた。何か引いたようである。

「手札からH―ヒートハートを発動！フレイム・ウィングマンの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップする！」

E・HEROフレイム・ウィングマンATK2600

（おいおい、いま引いたのがそれかよ）

そんなことを思うヒノキ。

簡単にジャンク・ウォリアーの攻撃力を超えてくる。とんでもない引きだった。

「行くぜ！フレイム・ウィングマンでジャンク・ウォリアーを攻撃！フレイム・シュート！」

フレイム・ウィングマンが炎を纏い竜の顎を突き出してジャンク・ウォリアーに突進してくる。

（やっぱり、幻の左手は使ってくれないよな……）

ヒノキはちよつとがっかりしながら場違いなことを思っていた。

（でも、まあ……）

そう簡単にやらせるわけにはいかない。

「リバースカードオープン！くず鉄のかかし！一度だけバトルを無効にする！」

「何!?!」

フレイム・ウィングマンの攻撃を現れたかかしが遮った。

「そしてくず鉄のかかしは再びセット状態に戻る」

「つて、何!?!それじゃあ」

「このカードを破壊しない限り必ず1回は戦闘を無効にされるってことさ」

「毎ターン使えるヒーロー・バリアみたいなもんかよ。へっ、流石だなヒノキ」

「ハハハ……」

本当にこのカードにはよくよくお世話になるな、ヒノキはそんなことを思いながら笑った。

「俺はこれでターンエンドだ!」

十代が何もせずターンを終了する。

「よし、ドロー!」

フィールドを見る。

ヒートハートの効果は切れ、フレイム・ウィングマンの攻撃力は元に戻っていた。

「バトルだ！ジャンク・ウォリアーでフレイム・ウィングマンを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーが再びフレイム・ウィングマンに拳を突き立てる。

「うおっ、フレイム・ウィングマン！」

LP3800

今度はジャンク・ウォリアーの拳がしっかりとフレイム・ウィングマンを打ち倒した。

「だけど、フレイム・ウィングマンの意志は引き継がれるぜ！トラップ発動！ヒーロー・シグナル！デッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚するぜ！」

「むう、繋いでくるか」

「俺はバブルマンを守備表示で特殊召喚！」

そしてフィールドにE・HEROバブルマンが現れる。
(まさか……)

ヒノキはそれを見て嫌な予感がした。十代のフィールドにはバブルマンの他にカードがない。

「バブルマンの効果！召喚・特殊召喚されたときにフィールドに他のカードが無いとき、デッキから2枚ドロ―！」

十代がデッキからカードを2枚引いた。

(っ、やっぱりか！)

それを見てヒノキはそんなことを思う。

バブルマンはアニメ版のとりでもない効果のものだった。

「くそっ、カードを一枚セットしてターンエンド！」

仕方なくカードを1枚セットしてエンド宣言をする。

(やっぱりバブルマンはとりでもねえな)

そんなことを思いながら。

「俺のターンだ！ドロ―！」

十代がドロ―する。

ついさっきまで手札が1枚だったのに今は4枚になっていた。

(強すぎるだろ……バブルマン)

正直、勘弁してほしかった。

「よし！魔法カード融合回収を発動！墓地の融合とE・HEROフエザーマンを手札に加える。そして、融合を発動！手札のスパークマンとクレイマンを融合！E・HEROサンダー・ジャイアントを召喚！」

E・HEROサンダー・ジャイアント ATK2400

ジャンク・ウォリアーの攻撃力を超えてくる。だが、リバーサイドがあるのでそれはあまり問題ではない。

(まさか……)

こいつもアニメの効果じゃないよな？そんなことをヒノキは思った。まあ、どちらの効果であつたとしても問題はサンダー・ジャイアントの効果の方であつた。

「サンダー・ジャイアントの効果を発動！手札を1枚、墓地へ送り元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントの攻撃力よりも低いモンスター、ジャンク・ウォリアーを破壊する！ヴェイパー・スパーク！」

サンダー・ジャイアントが手のひらにある光球から電撃を放ち、それがジャンク・ウォリアーに向かっていく。

(どうやらこっちは違つたみたいだな)

そんなことを思い、ヒノキはホッとしていた。どっちの効果だろうと破壊されてしまうから別に関係はなかったが。

何はともあれ、そう簡単にジャンク・ウォリアーを破壊させるわけにはいかない。

「手札の、エフェクト・ヴェーラーの効果を発動！」

エフェクト・ヴェーラーを墓地へと送る。

「サンダー・ジャイアントの効果を終ドフェイズまで無効にする！」

「くっ、サンダー・ジャイアントの効果が……」

サンダー・ジャイアントから放たれる電撃は急に勢いを失いジャンク・ウォリアーへと直撃する前に消滅した。

エフェクト・ヴェーラーが一瞬フィールドに現れ、ニコリと微笑んでから姿を消した。

「ありがとうな、エフェクト・ヴェーラー」

思わず札を言ってしまうヒノキ。

（流石ソリッドビジョンだな……）

そんなことを思いながら。

十代の方を見ると、十代は笑っていた。

「やるな！ヒノキ。ここまでジャンク・ウォリアーを守るなんてな。やっぱりお前とのデュエルは面白いぜ！」

そう言って「燃えてきたあ！」とか呟く十代。

「ハハッ、俺も楽しいさ。十代！」

ヒノキの方は小声で「なんたって退学の危険性がないしな」と呟いていた。

（おかげで気楽にやれるからなあ）

ヒノキはそんなことを思う。

入試デュエルや退学のかかったガードマンとのデュエルなど負けたら後がないデュエルに比べたら気が楽だった。

「よっしゃあ、行くぜヒノキ！」

十代が声をかけてくる。

（来るなら来い）

ヒノキも思考を切り替える。

（リバースカードはミラー・フォース。返り討ちにしてやるさ）

そんなことを思いながら。そういったことを考える奴は大体が負けてしまうのだが……

「俺のフィールドにヒーローは2体いる。手札からR・ライトジャスティスを発動！ヒノキのリバースカード2枚を破壊する！」

「何ですと！？」

思わず叫んでしまうヒノキ。

頼りにしていたミラー・フォースは活躍することなく、くず鉄のかかしと共にフィールドから消え去った。

（マジかよ……）

冷汗が背中をつたう。

「これで厄介なかかしは無くなったぜ！」

ついでにミラー・フォースもね、ヒノキはそんなことを言いたくなかった。

「バブルマンを攻撃表示に変更して……バトルだ！サンダー・ジャイアントでジャンク・ウオリアーを攻撃！ボルティック・サンダー！」

サンダー・ジャイアントの両手から放たれた電撃がジャンク・ウオリアーを襲う。

「くっ」

LP3900

今までフィールドで頑張っていたジャンク・ウォリアーが爆散した。

「そして、バブルマンでヒノキにダイレクトアタックだ！」

「うおっ……」

LP3100

初めてのダイレクトアタックをくらうヒノキ。結構な衝撃だった。

「よし、これでターンエンドだ！」

手札が0枚の十代には何も出来ることなく、エンド宣言をした。
ヒノキのターン。

「ドロー！」

カードを引く。

状況はあまりよろしくない。

よもやミラー・フォースが全く活躍しないとは思っていなかった。
くず鉄のかかしが破壊されたのも地味に痛い。

そして十代のフィールドに居るサンダー・ジャイアントも問題だ

った。

サンダー・ジャイアントを何とかしなければ壁モンスターを出しても効果で破壊されてダイレクトアタックを受けてしまう。ちなみに手札にトラップカードは無い。

しかし、何とかかなりそうな手札だった。

「手札から、レベル・ウォリアーを特殊召喚！」

レベル・ウォリアーLV3↓LV4

「おっ、そのカードはクロノス先生の時に使ってたカードか」

「ああ、その通りさ。更に手札のチェンジ・シンクロンを墓地へ送りクイック・シンクロンを特殊召喚」

フィールドに2体目のクイック・シンクロンが現れる。

（このカードにもよくよく世話になるな）

そう思ってヒノキは少し苦笑した。

「おー、またシンクロ召喚って奴か？今度はどんなモンスターが出てくるんだ？わくわくするぜ」

「ハハッ、お楽しみってことで」

十代が再び現れたクイック・シンクロンを見て目を輝かせていた。

「更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げて墓地からレベル・ステイラーを攻撃表示で特殊召喚！」

フィールドにレベル・ステイラーが現れクイック・シンクロンのレベルが1つ下がる。

「そして、レベル4になっているレベル・ウォリアーにレベル4と化したクイック・シンクロンをチューニング！」

回っているカードの中から再びジャンク・シンクロンを撃ち抜いた。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます、光差す道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー ATK2600

「おおっ、試験で見なかったモンスターだ！一体、どんな効果を持つてるんだ？」

「今、見せてやるさ……ジャンク・デストロイヤーの効果！シンク

ロ素材にしたチューナー以外のモンスター1体につきカードを1枚破壊する！素材となったモンスターは1体、よってサンダー・ジャイアントを破壊する。ダイダル・エナジー！」

ジャンク・デストロイヤーから放たれるエネルギーがサンダー・ジャイアントを破壊する。

「うおっ、やべえサンダー・ジャイアントが」

サンダー・ジャイアントが破壊されるのを見て流石に焦りの表情を浮かべる十代。

これで状況はヒノキに有利な方へと傾いた。

「行くぞ！バトルだ！ジャンク・デストロイヤーでバブルマンを攻撃！デストロイ・ナックル！」

ジャンク・デストロイヤーから放たれた4つの拳撃がバブルマンの前で1つに合わさり直撃する。

「うおっ」

LP2000

「そして、レベル・スティーラーで十代にダイレクトアタック！」

レベル・スティーラーが十代に突撃していった。

LP1400

「俺はこれでターンエンド」

エンド宣言をする。

このターン大幅に十代のライフを削ることが出来た。加えてフィールドはがら空き、十代の手札は0、そして自分のフィールドにはジャンク・デストロイヤーが居る、圧倒的に有利な状況だった。

自分の手札も0だが、まあ何とかなるだろうとそんなことを思う。

「なあ、ヒノキ」

「ん？」

十代が声をかけてくる。十代の目は圧倒的に不利な状況だということに全く絶望してなかった。

「このドローで全てが変わる。そう考えたら面白くないか？」

「はは、まったく……」

十代が言ってきたことに対して苦笑をしてしまう。
(実際そんなことをするような奴だから始末におえないな)
そんなことを思いながら。本当に勘弁してほしかった。

「ああ、すげえ面白いな、そりゃ」

「だよな！俺のターン！ドロー！」

カードをドローした瞬間、十代の顔がほころんだ。

(おい、マジかよ……)

ヒノキは呆然としながら、そう思う。

十代ならそういうことが出来るとわかってはいるが、実際に目の前でやられると呆然としてしまう。

「俺は、可能性に賭けるぜ！手札から戦士の生還を発動！基地のバブルマンを回収して、攻撃表示で特殊召喚！出ろ！バブルマン！」

E・HERO バブルマン ATK800

(おいおい、またお前かよバブルマン……)

ヒノキはそんなことを思った。

「バブルマンの効果で2枚ドロー！」

ドローしたカードを見て十代がまた顔をほころばせる。

「よし、まずバブルマンでレベル・スティーラーを攻撃！バブル・シュート！」

バブルマンから放たれた水流を受け、レベル・スティーラーが爆散した。

「ぬっ……」

LP2900

「そして、速攻魔法バブル・シャッフル！自分フィールドのバブルマンともう1体、ヒノキのジャンク・デストロイヤーを守備表示に変更！」

「っ、この流れは」

バブルマンとジャンク・デストロイヤーが守備体勢を取る。

（まずい……ということはあのカードは）

心の中で焦るヒノキ。

この後のことが大体予想できた。

「バブルマンを生け贄に捧げてE・HEROエッジマンを特殊召喚！」

「くっ、やっぱりそいつか」

E・HEROエッジマンATK2600

バブルマンが光となって消滅し、エッジマンが現れる。

(くそ……とんでもねえな)

この状況にはそんな思いしか抱けなかった。

ジャンク・デストロイヤーの守備力は2500、ぎりぎりエッジマンの攻撃力が上回っていた。

「いっけー！エッジマン！パワーエッジ・アタック！」

エッジマンがジャンク・デストロイヤーに向かって直進、そして腕についている刃を展開してジャンク・デストロイヤーを切り裂く。

「くう、ジャンク・デストロイヤーが」

LP2800

「よっしゃー、これでターンエンドだぜ！」

あっさりと逆転されてしまった。

フィールドはがら空き、手札は0、そして相手フィールドにはエツジマン、圧倒的に不利な状況である。

（さっきとは、まるで立場が逆だな）

そんなことを思うヒノキ。

こうなったら自分もさっきの十代のように次のドローに賭けるしかなかった。正直、泣きたい。

「俺の、ターン！ドロー！！」

いつも以上に気合を入れてカードを引く。

この状況、直面したら意気消沈とする人もそれなりにいるほどつらい状況かもしれないが、ヒノキはとんでもない負けず嫌いだった。カードを確認する。

（このカードは……）

1枚で逆転が出来るようなカードでは無かった。しかし、希望がないカードでは無かった。

「俺は貪欲な壺を発動！墓地の5体のモンスターをデッキに戻してシャッフル、その後デッキから2枚ドロー！」

ドローしたカードを確認する。

（これなら、いける）

状況をなんとか出来そうなカードが舞い込んできた。

「へへっ、その様子だと、引けたんだな？この状況をひっくり返せるカードが」

「ああ、その通りさ」

「くうく、これだからデュエルはおもしれえんだ。さあ、見せてくれよ！お前の引いた逆転の一手を！」

目を輝かせながらそう言ってくる十代。

（まったく、本当に心の底からデュエルを楽しんでるな）

ヒノキはそう思っただけ苦笑した。

自分ならピンチの時に楽しむことなんか出来ない、真似できないなと思っただけ。

「ああ、すぐ見せてやるさ！行くぞ！十代！」

「おう！来い！ヒノキ！」

「まずはレベル・ウォリアーを特殊召喚！そしてシンクロン・エクスプローラーを召喚！その効果により墓地に存在するシンクロンと名のつくモンスターを特殊召喚する！」

墓地には貪欲な壺で戻ってしまったため出せるモンスターは1枚しかなかった。

「墓地のチェンジ・シンクロンを特殊召喚！」

シンクロン・エクスペローラーの中央にある空洞からチェンジ・シンクロンが現れ、モンスターが3体フィールドに並ぶ。

「行くぞ！レベル4になっているレベル・ウォリアーとレベル2のシンクロン・エクスペローラーにレベル1のチェンジ・シンクロンをチューニング」

チェンジ・シンクロンが光の輪と化し、その中にレベル・ウォリアーとシンクロン・エクスペローラーが飛び込み1つになっていく。

「シンクロ召喚！光来せよライトニング・ウォリアー！」

ライトニング・ウォリアー ATK2400

ライトニング・ウォリアーが現れるのを十代が目を輝かせながら見ていた。

「それで、どうするんだ？ヒノキ。エッジマンの攻撃力は2600、ライトニング・ウォリアーの攻撃力じゃまだ届かないぜ」

「ふふ、それはどうかな。エッジマンをよく見てみる」

「ん？って、何！？どういうことだ！？」

驚愕の声をあげる十代。

エッジマンは守備表示になっていた。

「チェンジ・シンクロンの効果！シンクロ素材になったとき相手フイールドのモンスター1体の表示形式を変更する」

「くっ、そういうことか。エッジマンの守備力は1800……」

「そう、攻撃力が及ばなくても問題ないのさ！バトル！ライトニング・ウォリアーでエッジマンを攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

守備表示のエッジマンをライトニング・ウォリアーが粉碎した。

「うおっ、エッジマンが」

「ライトニング・ウォリアーには相手の手札1枚につき300のダメージを与える効果があるが……今は関係ないな、ターンエンド」

エンド宣言をする。

状況は再びヒノキに有利な方へ傾いた。

エッジマンは倒し、十代の手札は0。次のターンにダイレクトアタックを出来れば終わる。

ヒノキに圧倒的有利な状況、しかし十代は未だにまったく諦めて

いなかった。

「よっしゃ、まだまだ行くぜ！ドロー！」

十代がカードを引く。

このドローで一体どんなことが出来るのか？そう思ってわくわくしてるのだろうとヒノキは思った。

「おっ、相棒か。手札からハネクリボーを守備表示で召喚してターンエンド」

ハネクリボーを召喚して十代がターンを終了する。

（この状況でまだ次に希望をつなげられるカードを引くなんてな）

そう思って何度目かわからない苦笑をするヒノキ。

十代の手札は0。ライトニング・ウォリアーでハネクリボーを戦鬪破壊してもダメージは与えられなかった。

「俺のターン！ドロー！」

カードを引く。

「バトルだ！ライトニング・ウォリアーでハネクリボーを攻撃！ライトニング・パニッシャー！」

ライトニング・ウォリアーがハネクリボーを戦闘破壊した。

「くっ、すまない相棒」

『クリクリ』

気にするな、そんな風に言っているハネクリボーの声が聞こえたような気がした。

（脅威の技術だな、ソリッド・ビジョン）
ヒノキはそんなことを思った。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

ドローしたカードをセットして十代にターンを渡す。
十代は笑っていた。

（何だろう、何故だか逆転されるような気がする）
ハネクリボーが出てきたせいかな、ヒノキはそんなことを思う。

「ハハハッ、おもしろえ。ここまで熱くなれるデュエルは初めてだぜ。相棒が繋いでくれた、ヒノキが何度も逆転して楽しませてくれる、だから俺もこのドローで応えてやるぜ！ドロー！！」

全てを賭けて十代がドローをする。

（応えてやる、か……それで本当に覆してくる奴だからなあ）

ヒノキはそんなことを思いながら眺めていた。事実、十代はドロ
ーしたカードを見た瞬間ニヤリと笑った。

（勘弁してくれよ）

少し、泣きたくなった。

「ホープ・オブ・フィフスを発動！墓地のE・HERO5体をデッ
キに戻してシャッフル！そして、手札及びフィールドに他のカード
が無いため3枚ドロー！」

十代の手札が3枚に増える。

（やっぱりそういうことになっちゃうなあ……）

とんでもない引きだな、とか思いながらその光景を眺めるヒノキ。
しかし、心のどこかでは『ああ、十代だなあ』と納得していた。

「そして、手札からE・HEROバブルマンを守備表示で召喚！2
枚ドロー」

またお前か、バブルマン……そんなことを思う。

「更に強欲な壺を発動！2枚ドロー！」

おい、ちょっと待て。今度は突っ込みを入れたくなった。

「そして天使の施しを発動！3枚ドロして2枚捨てる！」

そして駄目押しに天使の施し。

ターン開始前は0枚だった十代の手札は5枚になっていた。

「アハハ、ハ、ハ」

もはや渴いた笑いしか出てこない。

（これは、突っ込みを入れていいのかな？）

むしろ突っ込んでやりたい、ヒノキはそんなことを思った。

「よし、このカードでケリをつけるぜ！魔法カード融合！手札のフエザーマンとバーストレディを融合！E・HEROフレイム・ウィングマン！」

E・HEROフレイム・ウィングマンが再びフィールドに舞い降りる。

（ケリをつけるってことは……）

ヒノキは少し嫌な予感がした。

十代がデュエルディスクのフィールド魔法のスペースを開く。

「くそっ、やっぱりか」

「へっ、行くぜ！魔天楼、スカイ・スクレイパーを発動！」

フィールド魔法が発動、辺り一面に魔天楼がそびえたった。

そして摩天楼の頂上にはフレイム・ウィングマンがたたずむ。

（やばいな）

思わず冷汗を流すヒノキ。

「バトルだ！頼むぜフレイム・ウィングマン！ライトニング・ウォリアーに攻撃だ！スカイスクレイパー・シュート！」

フレイム・ウィングマンが摩天楼の頂上から飛び立ち、炎を纏いながらライトニング・ウォリアーに向かって降下していく。

E・HEROフレイム・ウィングマン ATK 3100

スカイ・スクレイパーの効果でフレイム・ウィングマンの攻撃力が1000上昇した。

「これで、勝ちだ！」

十代が勝利宣言をする。

冷汗を更に流すヒノキ。

（まずい、このままバトルをしたら……）

ライフポイントは2800。フレイム・ウィングマンの効果も相まってヒノキの敗北だった。

「くそっ、トラップ発動！ガード・ブロック！」

「何!?!」

「一度だけ戦闘ダメージを無効にしてカードを1枚ドロウする！」

炎を纏ったフレイム・ウィングマンが竜の顎でライティング・ウ
オリアーを叩き潰す。

「だけど、フレイム・ウィングマンの効果は受けてもらう！戦闘で
破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを与える！」

フレイム・ウィングマンが竜の顎から炎を放ち、ヒノキを焼いた。

「うおおっ！」

LP400

何とかダメージを軽減することに成功したが、大幅にライフを削
られてしまう。

「くっそ、このターンで決められると思ったのに、やっぱりすげ
えよヒノキ」

十代が賞賛の声を送ってくるがヒノキとしては本当に限界ギリギリだった。

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

カードを1枚セットして十代がエンド宣言をする。

ヒノキの手札はガード・ブロックでドローをした1枚のみ。

ライフは400、生半可なモンスターを出してしまえば次のターンでスカイ・スクレイパーにより強化されたヒーローに倒されて敗北してしまう。

（このターンで決めなきゃ、まずいかもしれないな）

出来れば何か起死回生のカードが引きたいところだった。

「俺のターン！ドロー！」

カードを引く。

ドローしたカードは死者蘇生だった。

「よし、手札の死者蘇生を発動！墓地のライティング・ウォリアーを特殊召喚！」

再びフィールドにライティング・ウォリアーが現れる。

「くっ、フレイム・ウィングマンの攻撃力を超えてきたか」

「それだけじゃないさ！手札のジャンク・シンクロンを召喚！墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！来い！レベル・ステイラー！」

墓地からレベル・ステイラーがフィールドに現れる。

（このターンでトドメを差すには、あのモンスターしかない）
そう思うヒノキ。

「レベル1、レベルステイラーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが3つの光の輪と化しレベル・ステイラーを包み込んでいく。

「シンクロ召喚！アームズ・エイド！そして、アームズ・エイドをライトニング・ウォリアーに装備！」

ライトニング・ウォリアー ATK 3400

ライトニング・ウォリアーの右腕にアームズ・エイドが装着される。

「おお、かけえ」

十代はライトニング・ウォリアーを見てのんきなことを言っていた。

摩天楼の頂上に居るフレイム・ウィングマンと地上に居るライトニング・ウォリアーが対峙する。

「バトルだ！ライトニング・ウォリアーでフレイム・ウィングマンを攻撃！」

声を受けてライトニング・ウォリアーがアームズ・エイドを装備した右腕に電光を纏わせ、腰だめに構えた。

（あつ、そういえば技名わかんねえな）

ライトニング・ウォリアーを見てヒノキはそんなことを思っってしまう。実にどうでもいいことである。

（まあ、いっか適当で）

心の中で自己完結して、ヒノキは叫んだ。

「パワーギア・パニッシャー！」

ライトニング・ウォリアーが摩天楼の頂上にいるフレイム・ウィングマンに向かって跳躍し、腰だめに構えていた右腕を突き出す。

「くっ、フレイム・ウィングマン！」

声を受けてフレイム・ウィングマンが摩天楼から飛び降り迫ってくるライトニング・ウォリアーに向かって降下、炎を纏い竜の顎を突き出してライトニング・ウォリアーと正面衝突した。

衝撃が十代を襲いライフを奪い取る。

LP100

「くっ、ライフは何とか残ったぜ……」

「いや、モンスターを戦闘で破壊した時にアームズ・エイドの効果が発動する!」

「何だって!?!」

ライトニング・ウォリアーはアームズ・エイドを装備した右腕でフレイム・ウィングマンを掴んでいた。

「破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを相手プレイヤーに与える!」

「っ、フレイム・ウィングマンと同じ効果だって!?!」

「やれ!ライトニング・ウォリアー!」

ライトニング・ウォリアーが掴んでいたフレイム・ウィングマン

を十代に向かって投げつける。

「これで、終わりだ！」

「っ、そうはさせないぜ！アームズ・エイドの効果にチェーンしてトラップ発動！」

投げつけられていったフレイム・ウィングマンが十代に激突する前に体勢を立て直して反転、地面に着地し再び飛び上がった。

「な、何！？何だ、一体！？」

「英雄変化リフレクター・レイを発動させた。ヒノキにはアームズ・エイドの効果よりも先にフレイム・ウィングマンのレベル×300、1800のダメージを受けてもらうぜ！」

「っ、ということは……」

「ああ、俺の、勝ちだ！いっけえーリフレクター・レイ！」

飛び上がったフレイム・ウィングマンがヒノキに向かって降下する。

「う、おおおー！ー！」

L P O

そしてヒノキに激突したフレイム・ウィングマンはそのまま消えていった。

デュエルが終了してソリッド・ビジョンが消滅する。

「ガッチャー！！楽しいデュエルだったぜ！ヒノキ」

十代はヒノキに向かって決めポーズを行っていた。

「ア、ハハハハハハハッ」

思わず、笑ってしまうヒノキ。

（勝てなかった、かあ）

この世界で気がついてから初めての敗北。けれど不思議と気分は清々しかった。

（やる前から思った通り、とんでもないデュエルだったな）

手札0枚から一気に5枚まで増やすなんてとんでもない、そんなことを思いながらひとしきり笑った。

そして、十代の方に向かって一言を投げかける。

「十代。俺も、すごく楽しかったぜ！」

「おう！」

少しして2人は寮へと帰って行った。

（あっ、そういやぁ果し状の内容を読まなきゃなあ）
ヒノキだけは、そんなことを思いながら。

第5話《前編》そいつを過労死させるのはちょっと……（後書き）

今回はようやくと十代とのデュエル。ひのき君がギリギリ負けました。デュエルのクライマックスは早い段階で思い浮かんでいましたが、途中経過を考えていなかったので遅くなっていました。でも実は最後の攻防が本当に出来るのかよくわかりません。アームズ・エイドの効果はチェーンブロックを作るそうなので大丈夫だろうと思ってやっしまいました。

次回は後編。いっぺんに書くとは長くなりすぎてしまうのでこうなっていました。早めに更新……出来るといいなあ。

それではさようなら

第6話《後編》ちよ、その攻撃名は……（前書き）

感想でキャッシュのことを教えてくれた方に深く感謝を申し上げます。

再び、第6話をどうぞ。

ヒノキ君が前話の十代並みに頑張ります。

第6話《後編》ちょ、その攻撃名は……

寮に帰ってきたヒノキは手紙を開封して読んでいた。

「ふむ……」

手紙をじっと睨む。

『一目見てから胸が熱く燃えて忘れることが出来なかった。君のことがわからなくて幾日か動くことが出来ず、心で熱く燃えているものをくすぶらせていた。しかし、幾日か過ぎようやく君のことを見つけだすことが出来た。心の中にある確かな想い、私には抑えることが出来ない。君に私の想いをぶつきたい』

手紙には几帳面な字でそう書かれていた。差出人は美上^{みかみ}雪^{ゆき}、夜に女子寮の裏で待っているとのこと。

（時間の指定がかなりアバウトだな）

ヒノキは素直にそんなことを思った。夜といわれても夜はそんなに短くない、加えて場所も翔が覗き疑惑をかけられてしまうところとブッキングしていた。

（どうするか？）

ヒノキは少しばかり悩む。翔と同じタイミングで行ってしまったら覗き疑惑をかけられ縄で縛られ捕縛されてしまう。何せ風呂の時間であるから。

（十代が行くときについていくか）

別に細かい時間の指定は無いから問題ないだろう。ヒノキはそう思った。

方針も決まったので、もう一度じつと手紙を凝視する。

「うゝむ、この内容からするとこの手紙は……」

ぶつぶつと呟きながら真剣に手紙を見るヒノキ。
同じ部屋に居る十代は怪訝な顔をしていた。

「なあヒノキ。さっきから何を見てるんだ？」

流石に気になったのか十代に声をかけられる。

「ん？これか？これは……」

「さっき、ちょっとだけど内容が見えたんだな。多分、ヒノキが見てる手紙はラブレターなんだな」

答えようとしたら隼人に遮られてしまう。ベッドの上に居るから内容が見えたのであった。

「へっ、そうなのか？」

「っておい、勝手に覗きこむなっ」

十代が手紙を覗きこんでくる。

「なになに、一目見てから」

「音読するなっ」

たしなめるも十代はそのまま手紙の一部始終を音読してしまった。

「ほら、ラブレターだろ？」

「確かにそんな感じだなあ」

「いや、どう見たってそうなんだな」

十代と隼人が若干にやにやしながら会話をする。

（まったく、何を言ってるんだかこいつらは……）

ヒノキは十代と隼人が会話している光景を見ながら心の中で溜息を吐いた。

「十代、隼人、これはどう見たってラブレターじゃないぞ」

ヒノキはやんわりと十代と隼人の勘違いを訂正する。

「そうか？」

「ラブレターじゃなかったら何なんだな？」

「ふむ、これは……」

一旦、言葉を切ってもう一度じつと手紙を凝視するヒノキ。
(うむ、間違いないな)

ヒノキは内容をもう一度しっかりと吟味して確信した。

「これは、果し状だ」

「「はっ？」」

少しばかりの静寂。

十代と隼人は間拔けな声を上げて固まっていた。

何を言ってるんだこいつ？とでも言いたげな顔である。やがて、
硬直が解けた十代が動き出して再び手紙の内容をよく見始める。

「ん、言われてみれば果し状に見えないこともないな」

「ほらな」

ヒノキは当然だとしても言いたげに胸を張った。

しかし、隼人は未だに釈然としない表情で食い下がってきた。

「な、何を言ってるんだな。どこからどう見たってラブレターなんだな」

「無理もない。シロウトだからな」

何の素人だ？そう突っ込みを入れる奴はここにはいなかった。

隼人は微妙な表情をしながら押し黙ってしまう。そんな隼人を尻目に十代が話しかけてくる。

「なあ、ヒノキ。これが果し状ってことはデュエルの申し込みか？」

「多分、そうなるんじゃないか？格闘戦を仕掛けてくる可能性も捨てきれないが」

「デュエルするんだったら俺も見えてえなあ」

そんな会話を始め出すヒノキと十代。

隼人はその光景を呆然と眺めていた。

「何か、何かが激しく間違ってるんだな……」

隼人の意見に同意するものはこの空間には居なかった。

夜。

十代と風呂に入ったあと、のんびりと過ごしていたら十代のPD
Aにメッセージが来た。

『丸藤 翔は預かった。助けたくば女子寮の裏に柳 ヒノキと共に
来い』

この合成音声どうやってやったんだろうな？ヒノキはそんなこと
を思う。

「つて、あれ？」

「翔が捕まっただって！？ヒノキ、女子寮に行くぞ！」

「ん？ああ、一緒に行くけどさ……」

ヒノキとしては果し状の件もあるので最初からそのつもりであっ
た。その点は問題ではない。

「よし、じゃあ早速いくぞ。ヒノキ！」

「あ、ああ。うーん、あれえ」

首を傾げながら十代と一緒に寮を出て女子寮へと向かう。

（何で俺も呼び出されてんの？）

そんなことを思いながら。

ボートを漕いで湖を渡る。

「おお、頑張れよ。十代」

「つて、ヒノキ！お前も漕げよ！」

「いや、めんどくさいからなあ。大丈夫だって、1人が漕いでればそのうち着くからさ」

「くっそ、帰りはお前が漕げよな！」

「ああ、はいはい」

そんな感じで女子寮へとやってきた。
目の前には女子3人と翔の姿が見える。

「来たわね。遊城十代、柳ヒノキ」

「はあ、はあ、翔を返せ」

「ってあなた、何か疲れてない？」

一人でボートを漕いでいた十代は疲労困憊だった。
疲れている十代を尻目に翔へ声を掛けておく。

「大丈夫か、翔」

「ヒノキ君、助けてくださいッス」

「その格好、楽しいのか？」

「楽しくなんか無いッス！」

案の定というか翔はやっぱり縄でぐるぐる巻きにされていた。

（やっぱり早めに来なくてよかったな）

哀れな翔の姿を見て、そんなことを思う。果し状の呼び出しに応じて早めに来ていたら翔と同じ末路をたどっていたことだろう。

ちなみに今、他に人影は見えない。いずれも見た覚えのある顔で果し状の相手は居なかった。

「とにかく翔は返してもらおうぜ！」

息を整えた十代が改めて叫ぶ。

（そう簡単にいくわけ無いんだけどね……）

ヒノキはそんなことを思いながら苦笑をした。

「そういうわけにはいかないわよ！こいつは覗きをしたんだから！」

「そうですわ」

「僕、やってないッスー！」

ジュンコともえの言葉に翔が叫ぶ。しかし、大して意味は無い。無実を訴える被告人のような姿であった。

「翔。そういう悪戯は見つかったら意味が無いぞ」

「だからやってないってば！」

うん、知ってる。でも、言わずにはいられなかった。明日香が1つの提案をしてくる。

「どうかしら？デュエルで私に勝ったら翔君は無事に返してあげる。ちょうど3人ずつ居ることだし、3対3で2回勝ったら見逃してあげる」

「何だかよくわからないけど、デュエルと聞いたら断る理由は無いです！」

十代が勝手に承諾してしまう。

「ふうん、まあ頑張れよ翔」

「って、ヒノキ君も頑張ってくださいッス！」

「いや、俺よりも先に翔がデュエルする順番になってるから」

「いつ決めたんスか！？そんなこと！？」

「今、さっき」

「勝手に決めないでほしいッス！」

そんな漫才を繰り広げてからボートに乗って移動しようとした。もちろん翔は縛ったままで。そのままの方が面白いから。しかし、移動しようとした直前に奥から人影が姿を現す。

「柳ヒノキ。待っていたぞ」

決して大声ではないが、よく通る平坦な声が聞こえてきた。
(果し状の相手か？)

そう思って声がした方を振り向く。

「か、可愛いッス」

縛られたままの翔が何か言ったが無視をした。
そこには栗色の髪の毛をした切れ長の瞳をした女が立っていた。
長い髪の毛は乱雑に一本のゴムでまとめられている。

「手紙の差出人か？」

懐に入れておいた果し状を取り出して聞く。
その問いに女は頷いた。

「そうだ。君に手紙を出した美上雪だ」

「時間は今で大丈夫だったのか？」

「ああ、問題無い。手紙には夜としか書かなかったからな。私の落ち度だ」

すまない、と淡々とした口調で謝罪をしてくる。

ヒノキは会話をしながら雪のある部分を見ていた。扇情的に盛り上がっている胸を。

（確か、むかし兄貴が言ってたな……）

今は姉貴になっている兄貴の言葉を思い出す。

『いいかヒノキ。胸が大きな女性は大胸筋が鍛えられている可能性があるから、ものすごく力が強くて武術に長けている可能性があるから逆らっちゃいけないぞ！ひたすらヘコヘコするんだ！』

と、顔をボコボコに腫らした兄貴が言っていた。

（殴りかかられたら、やばいかもしれんな）

ヒノキはそんなことを思い、心の中で危機感を募らせた。ちなみに浮ついた感情は一切感じていない。

後ろで十代と翔がひそひそと話をしている。

「これ、どういうことッスか？アニキ」

「果し状の相手らしいぞ」

「果し状？何スか？それ」

「確か……私の想いをぶつけたい、とかなんとか書いてあったぞ」

「それってラブレターじゃないんスか？」

「いや、果し状だってよ」

そんな会話をしていた。翔はごく一般的な感性を持ち合わせている。手紙を読んでいた時に居合わせていたら隼人が喜んでいたりだろう。

この会話、小声なので他の人には聞こえなかったが近くに居たヒノキにはまる聞こえだった。

（翔、お前もシロウトだな）

会話を聞いていたヒノキはそんなことを思うだけだったが。

怪訝な顔をした明日香が雪へと近づいていく。

「たしか同じ学年の美上雪さんよね。どうしてここにいるのかしら？」

「ふむ、彼に私の想いをぶつけたくて手紙で呼び出したんだ」

ヒノキを指差してそういう雪。

「えっ、それってこ、こくは」

何故か明日香が赤面した。

「ええ〜!？」

「きゃあゝ、告白ですわゝ」

ジュンコともえが騒ぐ。

「やっぱ、ラブレターじゃないッスか」

翔はそんなことを呟いていた。

（皆、色恋沙汰に飢えてるなあゝ）

ヒノキはそう思いながら、事態を見守っていた。

「何を赤くなっているんだ？」

雪はそう言って首を傾げる。表情はあまり変わらないが。そこで何か気付いたように、ポケットから手紙を取り出す。

「そういえば、まだ返していなかったな。差出人は君だろうか？」

「え？ 差出人？」

「すまない。先に私の想いをぶつけたかったから、君の手紙は私が預かっていたんだ」

そう言って明日香に手紙を渡す雪。

（あつ、あの手紙クロノスの偽装ラブレターだ……）
手紙にはキスマーク（クロノスの）がついていた。
（俺にも出したのかよ……クロノス）

ヒノキは少しばかり凹んだ。

「この手紙、翔君が持っていたものと同じものだわ」

「？よくわからないが、彼とは私がデュエルをさせてもらうからな」

「あつ。ええ、わかったわ」

承諾する明日香。そして、雪が歩いてこちらに近づいてくる。

「そういうわけだ。よろしく頼むヒノキ」

「ん、ああ。よろしく、え〜と」

「雪で構わないぞ」

「じゃあ、よろしく雪」

そう言って握手をしてから、全員で2つのボートに別れて乗り込んでデュエルをするために移動をした。

（よかった、果しあいは殴り合いじゃなかったみたいだな）
内心でそんなことを思っでヒノキはホツとしていた。

湖のド真ん中でデュエルが始まった。

最初は十代と明日香のデュエル。

「行けえ！サンダー・ジャイアント！明日香にダイレクトアタックだ！ボルティック・サンダー！」

E・HEROサンダー・ジャイアントが明日香に電撃を放つ。

「ああーっーっ」

L
P
O

原作の通りに十代が勝利した。

「やったッス！これでヒノキ君が勝ってくれたら晴れて無罪放免ッス！頑張ってくださいッス！」

「なんつー他力本願な……」

「ところで、そろそろ縄を解いてほしいんスけど」

「ああ、はいはい。後で後で」

十代と入れ替わりボートの先頭に立つ。
次はヒノキがデュエルする番であった。

「ヒノキ！楽しいデュエルを見せてくれよ！」

「ああ、やれるだけやるさ」

十代、それは応援なのか？割と本気でそんなことを言いたくなつた。

「ヒノキ君、無事に帰れるかどうかはヒノキ君にかかってるッス！」

「いや、俺が負けてもあと一回デュエルが残ってるだろ」

「ヒノキ君にかかってるッス！」

どこまでも他力本願な……、今度はそう言いたくなった。

「まあ、タイタニックにでも乗ってるつもりでのんびりしててくれ」

「って、それじゃ沈むじゃないッスか!？」

「大丈夫だって翔。ヒノキは面白いデュエルを見せてくれるって」

「いや、アニキそういうことじゃなくって」

大丈夫だって冰山にでもぶつからなきゃ沈没しないからさ、多分。心の中でそんなことを思ってから、既にデュエルの準備を済ませている雪と向き合う。

「ヒノキ。私の想いは手紙に書いた通りだ。君のデュエルを見て、私は胸が高鳴るのを感じた。君とデュエルをしたい、この想い数日

たった今でもまったく衰えていない。それどころか強くなっている。だから、君にこの想いを真っ向からぶつきたい！」

「ああ、望むところさ！」

ヒノキの返答を聞いた瞬間、無表情だが少しでも口元をゆるませた。

「って、本当に果し状だったんスカ!？」

思わず翔が突っ込みを入れてしまう。

「翔、お前はシロウトだからな。無理もない」

「って、何のシロウトスカ!？」

「えーと、色々だな」

「何か釈然としないッス！」

そのまま翔は押し黙ってしまった。

「もう、いいか？」

タイミングを計らって雪が声をかけてくる。

「ああ、問題ないぞ。翔がちょっと思春期なもんでさ」

「って意味わからないこと言わないでほしいッス！」

「翔、デュエルがはじまんねえから黙って見てようぜ」

「うう、アニキ」

「というわけで問題ないぞ」

「そうか」

ボートを挟んでデュエルディスクを構える。

「「デュエル！」」

掛け声とともに、お互いにカードを5枚引く。

「先攻は私が貰う。ドロー」

先攻は雪。

ヒノキは手札を確認した時、後攻の方が良いと判断したのであった。

（雪は一体どんなデッキなんだ？）

加えて言えば雪がどんなデッキなのかわからなかったので様子を見たかった。

「私の想い、その全てをこのデュエルで君にぶつける。まず私は手札からマンジュ・ゴッドを召喚」

マンジュ・ゴッド ATK1400

「儀式デッキか！」

出たモンスターだけですぐにどんなデッキか判別出来た。
後ろでは十代と翔が首を傾げていた。

「えっ、なんでそんなことわかるんスカ？」

「うーん、俺も融合しか使わないからわかんねえなあ」

儀式では必須ともいえるモンスターなんだから覚えておこうよ、ヒノキは十代と翔にそんなことを言いたくなかった。

案の上、明日香は呆れ顔をしていた。

「あなた達、マンジュ・ゴッドは召喚されたときに儀式魔法か儀式モンスターを手札に加えることの出来るカード。結構、有名なカードよ」

「えっ、そうなのか？」

「だって僕、儀式デッキとデュエルしたことないし」

「そういえば、俺もあんまりやったことねえなあ」

「あなたたちね……」

儀式デッキはこの世界ではマイナーなようであった。

「ヒノキ、君はカードのことをよく知っているようだな」

「まあ、儀式にはほとんど入るカードだからな」

「流石は私が見込んだ男だ。勉強家なんだな」

雪は何故か感心していた。

（勉強家というのは、何か違う気がするな）

そうは思うが口には出さなかった。デュエルをやっていればそういった割と主要なカードのことはわかるものであるから。ツルプルのステータスを答えろ、なんて言われるのならともかく。

「さて、そういうわけでマンジュ・ゴッドの効果でカードを加えさせてもらう。私はデッキからドリアードの祈りを手札に加える」

黙って成り行きを見守る。

加えた儀式魔法でそれに対応する儀式モンスターもわかった。

（精霊術師ドリアードか……）

どんなコンボをしてくるのかな、そんなことを思う。

精霊術師ドリアードは単体で強力なモンスターではない、コンボをすることで真価を発揮するカードである。ヒノキはそう認識していた。

「更に、手札から速攻魔法 手札断札を発動。お互いに手札から2枚捨てて2枚ドローする」

「くっ、断札か」

お互いに手札を2枚捨てる。

（ちよっと痛いな）

ヒノキには捨てても問題のないカードはあまりなかった。

ボルト・ヘッジホッグとターボ・シンクロンを墓地へと捨てて、2枚ドローする。

「そして魔法カード儀式の準備を発動。デッキの精霊術師ドリアードを手札に加え、今捨てた儀式魔法ドリアードの祈りを手札に加える」

「ちっ、速攻でそろえてくるか」

「そして手札からドリアードの祈りを発動。フィールドのマンジュ・ゴッドを生け贄に捧げ、精霊術師ドリアード降臨」

精霊術師ドリアード ATK1200

マンジュ・ゴッドが光の粒子となり精霊術師ドリアードが湖面に降り立った。

「か、可愛いッス」

翔が鼻の下をのぼして何か言っている。

（翔、お前はブラック・マジシャン・ガール一筋じゃなかったのかい？）

心の中でそう突っ込みを入れた。

「カードを2枚セットしてターンエンド」

ヒノキのターンになる。

「俺のターン！ドロー！」

「ヒノキくん、勝って欲しいッスけどあの子だけは倒さないでほ

しいッス」

「お前ね……一体どっちの味方なんだ？」

「僕は、僕自身の味方ッス！」

「はぁ」

思わず溜息を吐いてしまう。

（やっぱり、こいつ縛ったままにしといて良かった）
そんなことを思った。

何はともあれ手札とフィールドの状況をよく見る。

（精霊術師ドリアード、攻撃力は大したことないが）

2枚のリバースカードが気になった。

（とりあえず、攻め込んでみるか）

手札を見てヒノキは方針を決めた。

「手札からスピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

スピード・ウォリアー ATK 900

ヒノキはシンプルに攻め込んでみることにした。

「バトルだ！スピード・ウォリアーで精霊術師ドリアードを攻撃！」

スピード・ウォリアーが精霊術師ドリアードに向かって走ってい

く。

「むっ、攻撃力の低いモンスターで攻撃するだど？」

スピード・ウォリアーをみた雪が疑問を口にした。

「いや、スピード・ウォリアーは召喚されたターンに元々の攻撃力を倍にすることが出来るのさ！」

スピード・ウォリアー ATK1800

蒼いオーラを纏いスピード・ウォリアーが更に加速する。

「ええー、それじゃやられちゃうじゃないツスカ」

何故か翔が不満そうな声を上げた。

（翔、おまえね……）

ヒノキは溜息を吐きたくなった。

気を取り直して攻撃名を叫ぶ。

「ソニック・エッジ！」

スピード・ウォリアーが精霊術師ドリアードに蹴りかかる。

「リバースカードオープン。聖なるバリアー・ミラー・フォース」

「くっ、そんな単調にはいかないか」

蹴りかかったスピード・ウォリアーはミラー・フォースに消し飛ばされた。

（ろくな登場の仕方をしないなスピード・ウォリアー）
少しだけかわいそうに思った。

「ホッ、よかったッス」

翔がなぜかホッとする。

（お前ね、俺が負けたら次は君がデュエルするんだよ）
そんなことを言いたくなった。

「カードを2枚セットして、ターンエンド」

「エンド宣言をしたな？」

何故か雪が確認をとってくる。

「ああ、したぞ」

「ならばリバースカードオープン風林火山」

「っ、それは!？」

「自分フィールド場に地、風、水、炎、の属性を持つモンスターが居る時に発動できるカード。私は相手フィールドの魔法・罠すべてを破壊する効果を選択」

精霊術師ドリアードは1枚で闇と神以外の全ての属性を持つカード、発動条件は満たしていた。

「くっ」

リバースカード全てが爆発して吹き飛んだ。

フィールドがから空気になる。

(まずいかもしれないな……)

ヒノキは冷汗を流した。

「だが、破壊されたりミッター・ブレイクの効果を発動!スピード・ウォリアーを守備表示で特殊召喚する!」

「むっ、流石だなヒノキ。ここまでやってまだ壁モンスターを出してくるとは、やはり君とのデュエルは胸が高鳴るな」

雪がヒノキのことを褒めてくる。しかし、ヒノキとしてはかなり苦し紛れだった。

（スピード・ウォリアー、すまんな）

さっきミラー・フォースで破壊されたスピード・ウォリアーが再び守備表示で現れるのを見て、そんなことを思った。同じターンで1度破壊されたのに壁のために再び出てくるのは少し哀れであった。

「私のターン。ドロー」

雪がカードを引く。

フィールドは守備表示のスピード・ウォリアーが一体いるのみ。ダメージを受けるのは必至だった。

「クリッターを攻撃表示で召喚。そしてバトル。クリッターでスピード・ウォリアーを攻撃」

スピード・ウォリアーがクリッターの爪に引き裂かれる。

「くっ、スピード・ウォリアー」

唯一の壁が消えてしまった。

「そして精霊術師ドリアードでダイレクトアタック」

ドリアードが手をかざし、そこに5色に輝く魔力が収束されている。

「エレメンタル・レイ」

そして、放たれた5色の光線がヒノキを貫いた。

「くう」

LP2800

「私はカードを一枚セットしてターンエンド」

雪がエンド宣言をする。

（ふう、ちよつとつらかったな）

心の中でそんなことを思うヒノキ。ちなみに前のターンで破壊されたもう1枚のトラップはエンジェル・リフトであった。

現在、フィールドには雪の精霊術師ドリアードにクリッター、そしてリバースカードが1枚。それに対してヒノキのフィールドはがら空きでボードアドバンテージ的には圧倒的に不利。

しかし、幸い手札はそれほど使っていないので雪よりも多く残っているのは僥倖であった。

「俺のターン！ドロー！」

手札をよく見る。

（よし、今度こそ）

精霊術師ドリアードを倒す、そう思うヒノキ。

「いくぞ、雪！」

「ああ、私が君に想いをぶつけるように、君も全力で私にぶつかってきてくれ！」

「手札からジャンク・シンクロンを召喚！」

フィールドにジャンク・シンクロンが現れる。

「むっ、チューナーモンスター、だな」

「その通りさ！ジャンク・シンクロンの効果によりスピード・ウォリアーを特殊召喚！」

このデュエルで通算3度目の登場をするスピード・ウォリアー。フィールドにチューナーとそれ以外のモンスターがそろった。

「いくぞ！レベル2スピード・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロンを」

「シンクロ召喚か。だが、そうはさせない」

「何！？」

「リバーズカードオープン風林火山」

「っ、2枚目だと！？」

「私のデッキに風林火山は3枚入っている。今度は相手モンスター全てを破壊する効果を選択する」

ジャンク・シンクロンとスピード・ウォリアーが爆散していく。

「くっ、やばいか」

「君のデュエルを見てから、君とデュエルをすることをずっと考えていた。君が行うシンクロ召喚はチューナーとそれ以外のモンスターを一旦フィールドに出す必要がある。ならばその時に素材を破壊してしまえばシンクロ召喚は行えない」

「っ、まったくその通りだ。雪よく考えているな」

素直に賞賛の言葉を雪へと送るヒノキ。

実際は手札のカードとシンクロするチューナーや墓地でシンクロするチューナーもいるのだが、ヒノキのデッキには入っていなかった。

シンクロ召喚は存在しないはずの世界だというのに大したものであつた。

（しかし、この状況はまずいな）

ヒノキはそんなことを思う。

このターン、既に召喚権は消費してしまったので通常召喚は可能フィールドはがら空きだった。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

リバースカード1枚でターンを終了する。

「あの人、強いッスね。アニキ」

「ああ、俺もデュエルしてえなあ」

「僕は遠慮しておきたいッス」

「十代に翔君。彼女、美上雪はブルー女子の中でも屈指のデュエリストよ」

「あなたたちが勝てるわけじゃないじゃない！」

「デュエルはやってみなきゃわかんねえだろ！」

「僕はやっぱり遠慮しておきたいッス」

ボートに乗る他のメンバーはわいわいと騒いでいた。

（翔、君って奴は……）

しかし、気持ちにはわからないでもない。

ヒノキは現在進行形でつらかった。

「私のターン。ドロ」

雪がカードをドロする。

その瞬間、すぐく分かりにくかったが口元を少しだけ緩ませた。

（何だ？何かキーカードでも引いたか？）

ヒノキは冷汗を流す。

何か魔法・罨除去カードであつたら敗北であつた。

「ヒノキ。君に私のエースを見せよう」

「エースカードだって？この局面でか……」

「ああ、まず私は手札から儀式の準備を発動。デッキから救世の美神ノースウェムコ、墓地から救世の儀式を手札に加える」

「救世の儀式！？断札の時か」

「その通り。そして死者蘇生を発動。マンジュ・ゴッドを特殊召喚」

マンジュ・ゴッドがフィールドに現れる。

「特殊召喚されたマンジュ・ゴッドでは効果を発動することが出来ないが、これで儀式の準備が整った。手札から救世の儀式を発動！」

マンジュ・ゴッドとクリッターが光となって消えていく。

「降臨、救世の美神ノースウェムコ」

救世の美神ノースウェムコ ATK2700

救世の美神ノースウェムコが湖面に舞い降りた。

それを見た翔は再び鼻の下をのぼす。

「美しいッス……」

またか、翔。ヒノキはそんなことを思った。

（割かし何でもいいんじゃないか、お前は）

そう突っ込みを入れてやりたかった。

「降臨したノースウェムコの効果を発動。儀式召喚に使用したモンスターの数までこのカード以外の表表示のカードを選択する。私は精霊術師ドリアードを選択。神聖なる聖域ディヴァイン・サンクチュアリ！」

救世の美神ノースウェムコを光の膜が包み込む。

（神聖なる聖域ディヴァイン・サンクチュアリ、か）

和約するとどちらも同じ意味になる、意味がかぶっていた。

「そして、墓地へ送られたクリッターの効果でデッキから2枚目の精霊術師ドリアードを手札に加える」

雪がデッキからカードを手札に加える。

（手札は1枚か）

ハンドアドバンテージは勝ってるけどつらいな、ヒノキはそんなことを思った。

「さあ、いくぞヒノキ。バトル、救世の美神ノースウェムコでヒノキにダイレクトアタック」

ノースウェムコの杖に桜色の光が収束していく。

その光景に翔があわてだした。

「まずいッス！2体のモンスターでダイレクトアタックされたらヒノキ君の負けッス！」

ヒノキはというと

（攻撃名、どうするつもりなんだろうな）

割とどうでもいいことを考えていた。状況はまずいのだがそっちの方が気になっていた。

何かノースウェムコの動作を見ていると引っ掛かるものがある。どこかで見たような、もしくは聞いたような、そんな気がする。

そしてノースウェムコが杖から桜色の砲撃を発射する。

「救世の一撃ディヴァイン・バス」

「つて最後まで言わせるかー！リバースカードオープン！聖なるバリア・ミラー・フォース！」

ノースウェムコの放った桜色の砲撃は淡い虹色の障壁に遮られた。

「むっ、ミラーフォースか。しかし、ノースウェムコは指定したカードが存在する限り、カード効果では破壊されない。破壊されるのは精霊術師ドリアードのみ」

砲撃を遮っている障壁が乱反射して精霊術師ドリアードを破壊するが、ノースウェムコの放った砲撃は障壁を突き破りそのままヒノキに直撃する。

「うおっ、く」

LP100

「私はこれでターンエンドだ」

ライフを大幅に削られてヒノキのターンになる。

ヒノキは心の中で戦慄していた。

状況はまずいがそれよりも

（もしスターダストでも攻撃されていたら攻撃名がスターライト・ブレイカーになってたんじゃないか？）

と、そんなくだらないことを考えていた。

（いかん、真剣にならないと）

頭をブンブンと振って思考を切り替える。

「俺のターン！ドロー！」

手札は3枚、フィールドは雪のノースウェムコのみ。

決してよい状況ではなかった。

雪が声をかけてくる。

「さあ、ヒノキ。私は全力で想いをぶつけた。だから、今度は君の全力を私にぶつけてくれ！あの入試デュエルのときみたいな高鳴るデュエルを見せてくれ！」

雪は純粋な瞳をしていた。ヒノキがこれから何かをやることを疑

っていないようである。

(全力、か……)

雪の言葉を反芻して手札を見るヒノキ。

確かに希望が無い手札ではなかったが逆転出来る保証はなかった。

『このドロローで全てが変わる。そう考えたら面白くないか?』

十代は崖下で行ったデュエルするときそう言っていた。

(そうだな……すごく面白いよな)

ヒノキは意を決した。ほぼヤケになって。

「雪!お前はすごく強い。逆転出来る確実な手立ては今の俺にはない。だが、だからこそ俺は可能性に賭ける!」

「ああ、思う存分ぶつかってきてくれ。このデュエルに対する君の想い、私が全部受け止める!」

「いくぞ!手札から魔法カード ワン・フォー・ワン発動!手札のグローアップ・バルブを墓地に送り、チューニング・サポーターを特殊召喚!」

チューニング・サポーターがフィールドに現れる。

(頼むぞ。どうなるかはお前にかかっている)

心の中で語りかけるヒノキ。

ヒノキはチューニング・サポーターを思い切り過労死させるつもりであった。

「そして、デッキの1番上のカードを墓地へ送りグローアップ・バルブを特殊召喚!」

墓地へ行ったカードは激流葬であった。

(くっ、このさい関係ない)

制限カードが墓地へ行くのは少し痛い。

しかし、この際なりふり構っていられなかった。

「シンクロ召喚、だな」

「ああ、その通りさ！レベル1チューニング・サポーターにレベル1グローアップ・バルブをチューニング！」

チューニング・サポーターが光の輪に包まれる。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う、光差す道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン ATK200

「攻撃力200のモンスター、それで一体どうするつもりなんだヒノキ？」

「いや、このカードの狙いは効果にある。チューニング・サポーターとフォーミュラ・シンクロンの効果を発動！」

「むっ」

「チューニング・サポーターはシンクロ素材になったときカードを1枚ドロ―、フォーミュラ・シンクロンはシンクロ召喚に成功したときカードを1枚ドロ―出来る。合計2枚ドロ―！」

「手札補充か」

カードを2枚引く。

「更に、シンクロキャンセルを発動！フォーミュラ・シンクロンのシンクロを解除！」

フォーミュラ・シンクロンが消え、フィールドに2体のモンスターが戻ってくる。

「そして、もう1度シンクロ召喚！フォーミュラ・シンクロン！もう1度2枚ドロ―！」

「一気に4枚の手札補充、流石だなヒノキ！」

手札をよく確認する。

（よし、このカードなら）

なんとかいけそうな手札だった。

「俺はまだ通常召喚を行っていない！手札からデブリ・ドラゴンを召喚！効果により墓地からチューニング・サポーターを特殊召喚！そして墓地のボルト・ヘッジホッグを自身の効果で特殊召喚！これでラストだ、このターン召喚に成功しているのでワンショット・ブースターを特殊召喚！」

フィールドに5体のモンスターが並ぶ。

「すっげえ。ヒノキの奴、フィールドが空の状態からモンスターを5体も召喚したぞ」

「とんでもない展開力ね、それにドロースぐいわ」

「くうくうやっぱヒノキのデュエルはおもしれえなあ！」

外野がなにやら騒いでいた。

（十代、こっちとしてはかなりギリギリなんだよ）

ヒノキとしてはかなり余裕が無かった。限界ギリギリである。

「ヒノキ。やるんだな、シンクロ召喚」

「ああ。雪、お前がさっき俺にエースを見せてくれたように今度は俺のフェイバリットを見せてやる！」

「フェイバリットだって？望むところだ」

「ああ、いくぞ！」

見せてやるというよりは、この状況では1枚しか召喚出来ないといった方が正しかった。

「レベル2ボルト・ヘッジホッグとレベル1チューニングサポーター、レベル1ワンショット・ブースターにレベル4デブリ・ドラゴンをチューニング！」

デブリ・ドラゴンが光の輪を発生させ、3体のモンスターを包み込み1つになっていく。

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン ATK2500

湖面に光の粒子を舞い散らせながらスターダスト・ドラゴンが姿を現した。

「これがヒノキのフェイバリット、綺麗なドラゴンだ……」

雪がスターダスト・ドラゴンに見惚れる。白銀の粒子を舞い散らせるスターダスト・ドラゴンは確かに綺麗だった。

「そして、チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ」

カードを1枚引く。ヒノキの手札は3枚。

（さて、どうするかね）

スターダスト・ドラゴンとフォーミュラ・シンクロンがフィールドにそろったが、特に何もない。アクセルシンクロなんぞ出来ない、何せチューニング・スター・ドラゴンがないのだから。

違う方法をやるしかない。

「手札から死者蘇生！墓地のチューニング・サポーターを特殊召喚！」

同じターンで4度目の登場をするチューニング・サポーター。もはやスピード・ウォリアーよりも召喚された回数が多くなっていた。

「チューニング・サポーターはレベル2としても扱う。レベル2チューニング・サポーターにレベル2フォーミュラ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！アームズ・エイド！」

アームズ・エイド ATK1800

スターダスト・ドラゴンの隣にアームズ・エイドが並ぶ。

「そしてチューニング・サポーターの効果で再びドロ―」

「むう、手札が減らないとは」

雪がヒノキの手札を見て呻いた。

チューニング・サポーターのおかげでかなりカードを使ったはずなのに手札が3枚あった。チューニング・サポーターを使いまわしすぎである。

「よし、装備魔法ジャンク・アタックをスターダスト・ドラゴンに装備！そして更にアームズ・エイドをスターダスト・ドラゴンに装備！」

スターダスト・ドラゴン ATK 3500

アームズ・エイドが光となってスターダスト・ドラゴンに吸収され攻撃力を1000ポイント上昇させた。

「むっ、ノースウェムコの攻撃力を超えた」

「いくぞ、雪！これがお前の想いに対する俺の全力だ！頼むぞスターダスト・ドラゴン！バトル！」

スターダスト・ドラゴンが白銀に輝くエネルギーを収束させる。

「響け！シューティング・ソニック！」

そして全てのエネルギーをブレスにしてノースウェムコへと解き放つ。ノースウェムコはエネルギーに耐え切れず白銀の光に包まれて姿を消した。

「くっ、私のエースが」

LP3200

「まだだ！お前への答えはまだ終わらない！アームズ・エイドとジャンク・アタックの効果！戦闘で破壊したカードの攻撃力分とその半分の値、合計4050ポイントのダメージを受けてもらう！」

スターダスト・ドラゴンがその両翼にジャンク・アタックのエネルギーとアームズ・エイドのエネルギーを収束させる。

「全エネルギーを解き放て！スターダスト・ドラゴン！」

そして、翼に纏った全エネルギーを解き放った。

「私の、負けだな」

L P O

幾重にも及ぶ白銀の閃光が雪へと降り注いだ。

「やったな、ヒノキ！」

「ありがとうッス、これで無罪放免ッス」

「はは、正直やばかったんだけどな」

ヒノキは十代達の言葉に苦笑する。

（フォーミュラとチューニング・サポーターがなかったら勝てなかったな……）

そんなことを思いながら。

『ギャオオオオオーーー！』

最後に咆哮を上げてスターダスト・ドラゴンは消えていった。

（すごいな、ソリッドビジョン）

やはりヒノキはそんな感想をもった。

雪が声をかけてくる。

「私の負けだ、ヒノキ。私に対する君の答え、確かに届いた」

「いや、雪も強かったよ。何かが違っていたら負けていたのは俺だったかもしれない」

「謙遜はするな。君の勝ちだ」

雪はそう言ってヒノキに微笑んだ。

「まあ、何はともあれ僕たちの勝ちッスね！無罪放免ッス！」

翔が騒いで水をさしてくる。

「つて、お前はデュエルしてないだろっ。翔」

「細かいことは気にしないッス！」

「はあ、まったく」

調子のいい翔に溜息が出てきた。

（あとで、何か悪戯してやろう）
そんなことを誓う。

「まあ、これで俺たちの2勝だから翔は返してもらおうぜ？」

「わかったわ、約束だもの。見逃してあげる」

「よし、帰ろうぜ。ヒノキ、翔」

「そうだな」

「そうッスね」

そそくさとボートを漕いで帰ろうとする。

「ヒノキ！」

雪に呼び止められる。

「ん？」

「君とデュエルをすれば、この想いが納まると思っていたがますます強くなった。次は私が勝つからな」

「ああ、わかった。その時は俺だって負けないさ！」

「うむ、これからよろしく頼む」

「ああ」

それを最後に二つのボートはそれぞれ逆方向に向かって漕ぎだした。

「さあ、頑張って漕いでくれよ。ヒノキ！」

「くっ、これって意外ときついな」

ヒノキは約束通りボートを漕いでいた。

「翔、迷惑かけたんだからお前が漕いでくれよ」

漕ぎながら翔に言う。

「別にいいッスけど、それなら縄を解いてほしいッス」

「……自分で漕ぐよ」

「って、何でッスか!？」

翔は未だに縄で縛られたままだった。

「アニキ、縄を解いてほしいッス」

「わかった、任せろ……あつれ、かた結びになっちまったぞ」

「って、ちょ、なんてことをするんスカ！アニキ」

「ナイスだ。十代」

「全然ナイスじゃないツス〜！」

「そのシャレ、つまらないぞ。翔」

「シャレじゃないツス〜！」

結局、翔は寮に帰ってハサミで縄を切断するまで縛られたままだった。

第6話《後編》 ちょ、その攻撃名は……（後書き）

再び、第6話を上げることが出来ました。

何度も言うようですが僕はドリアードにノースウエムコ、大好きです。

ウエムコにいたってはウエムコ様と呼ぶくらい……えっ、誰も聞いてないって？

さて、6話が無いと思っていた方が居たら深くお詫びいたします。それでは

第7話 笑いあえる場所（前書き）

さて、一区切り（？）みたいなものがついたのでちょっとシリアスなタイトル。

この話、2話に分けてもいいくらい長くなってしまいました。ちなみに今までで最長です。

この話で雪がどんな性格か大体わかる、と思います。
それではどうぞ。

第7話 笑いあえる場所

昼休み。

ヒノキは購買でドローパーンを買っていた。一度買ってみたかったのである。

「よし、これでどうだ」

1つを手に取り購入する。

「……これは」

パンが入っていない。カードだけのものだった。

ツルプルン

大砲だるま

13人目の埋葬者

レアリティだけは無駄に高い。

（……どうしろと？）

あまり嬉しくは無かった。

しばし呆然とする。

「ほう、珍しいカードじゃないか」

「って、三沢どっから湧いて出たんだ？」

「最初から居た！人をゴキブリみたいに言うな！」

呆然としていたら後ろから声をかけられた。最初から居たと主張しているが本当にわからなかった。

カードをじっと見つめるヒノキ。

（珍しいっていてもなあ……）

三沢のいったことに対して少し考え込んでしまう。

このカード、確かに珍しい。珍しいのだが、

（ただ珍しいだけだもんなあ）

ヒノキには使い道が無かった。

（使い道がある人はデッキに入れるのかもしれない）

そんなことを思いながら、腰についているデッキケースにカードをしまう。むしろ使う人が居るのなら見てみたい。

「それで三沢、お前は何か買うのか？」

「ああ、昼飯を買いに来たんだ」

「ふうん」

「しかし、ドローパン面白いかもしれないな。俺も1つ買ってみよう」

そう言ってドローパンを漁りだす三沢。

「よし、これにしよう」

1つ手に取り購入する。

「何が出たんだ？三沢」

「ふむ、お前と同じでカードだけのものみたいだ」

「へえ、どんなカードが出たんだ？」

「いや、俺はもう既に持っているカードだ」

そういつて苦笑しながらカードを見せてくる三沢。

ブローバック・ドラゴン

リボルバー・ドラゴン

ガトリング・ドラゴン

(……この差は何なんだろうな？)

少し殴りたくなった。

ぐううううううう

腹が鳴る。

教室。

يَا أَيُّهَا الْمَدِينَةُ الْوَسْطَى

「はあ、この状態をあと数時間もか……」

教室へと辿り着いたヒノキはただボケーと席に座って、空腹に悩まされていた。

教室内には誰もいない。時間は有り余っている。はやく着きすぎてしまった。しかし、別段やることもない。

「……暇だ」

そんなことを呟いても反応する者はおらず、教室内は再び静寂へと包まれる。

かなり退屈だった。

時間だけが流れてゆく。それを、ただボーと椅子に座って過ごす
ヒノキ。

(こういうのもいいかもしれないな)

そんなことを思う。

誰もいない静かな空間で何もやることが無く、ただ無為に時間を過ごしていく。少しばかり退屈に思うがそういった時間をヒノキは心地よく思った。

（こんな時間、前はなかったからなあ）

この世界にくるよりも前、ヒノキはいつも兄貴に振り回されていた。その時間はとても楽しかったけれど、ハチャメチャなほど無茶

苦茶でとても疲れるものだった。だから、ヒノキにとって今の時間は新鮮なものであった。

چند ای ای ای ای ای

静寂に包まれた教室に腹の音が響き渡る。

「でも、この空腹だけはいただけじゃないなあ」

そう呟いてヒノキは溜息を吐いた。

ゆったりとした時間を過ごすのはいいが、この空腹に耐えながら夕食までの数時間を過ごすのは非常につらい。

ちらりと時計を見てみるも、無慈悲なことに時間はまだまだ有り余っていた。

「ふう」

席に座って静かに時間を過ごす。

少しして誰かが教室に入ってきた。

新しく入ってきた人物がこちらの方に向かってくる。

「むっ。ヒノキ、こんなところに居たのか。探したぞ」

「ん？雪か、何か用か？」

教室に来たのは雪だった。

「休み時間だからな。一緒に過ごそうと思ったんだ。友人とはそういうものだろう？」

当然といった表情で雪が聞いてくる。

「そういうもんかなあ？俺にはよくわからないが、他にも友達はたくさん居るんじゃないのか？」

「ふむ、確かに他にも少しばかり友人は居るが……異性の友人は君が初めてなんだ。だから、大切にしようと思ってな」

そう言つて雪は隣の席へ座つた。

「ふうん、まあ暇だったからなあ。話し相手が出来るのは嬉しいかな」

「よくわからないが、君が嬉しいと思ってくれるなら私も嬉しい」

يَا أَيُّهَا الْمَدِينَةُ الَّتِي كَانَتْ تُكَذِّبُ عَنْ قَوْمِهَا الرُّسُلَ أَدْخِلِي آلَ فِرْعَانَ الْمَكْنَئِمَ الَّتِي كَانَتْ أَهْلُهَا يُفْسِدُونَ فِيهَا كُلَّ يُومٍ فِئْتِمِ يَوْمَ الْمَعْزِثِ كُلَّ شَيْءٍ بِحِجَابٍ مُثْقَلٍ يُجْزَى الَّذِينَ كَفَرُوا يَوْمَ الْمَعْزِثِ تِلْكَ الْأَمْثَالُ لِقَوْمٍ أُولِي بُصَيْرٍ

ヒノキの腹が鳴る。

「くう……」

「むっ、君はお腹が空いているのか？」

「ああ、金が無かったもんでさ」

「ふむ、ちょうど良かったかもしれないな」

「ん？」

雪が弁当箱を渡してくる。

「これは？」

「うむ、異性の友人と仲良くなるにはどうすればいいのか、よくわからなくてな。友人に聞いてみたら男と仲良くなるには弁当を渡せばいい、と言われてな」

「なるほど」

「まあ、それで作ってみたというわけだな」

弁当箱を受け取るヒノキ。
その弁当箱はずっしりと重かった。

「随分と重たいな、これ」

「ああ、めいっばい詰め込んだからな」

「すまないな。本当に助かる、ありがとう雪」

「いや、君が喜んでくれるなら私も嬉しい。無駄にならずに済んでよかった」

ヒノキとしては空腹が耐えがたいレベルとなっているのですごくありがたかった。

弁当箱を包んでいるナプキンを外す。

「……」

弁当箱はアルミで出来た真四角のものであった。

弁当箱の蓋を開けてみる。

びっしりと詰まった白米に梅干しが真ん中に1つ、日の丸弁当だった。

「しかし、私としてはこんなもので本当に仲が良くなるのか疑問だな」

「……」

とりあえず一口食べてみる。

「どうだ？」

「……米だな」

「米じゃなかったら困るぞ」

「そりゃ、そうだろうけどさ」

ヒノキはそのまま完食した。

「ごちそうさま」

「ああ。……これで、君と私は仲良くなれたんだろうか？」

「さあ？でも、雪が仲良くなれたと思ったのならそれでいいんじゃないのか？そういうものは目で見てわかるものじゃないからな」

「うん、そうだな。だったら、君と私は仲良くなれたな。きっと」

そう言って、うんうんと頷く雪。

教室内にはちらほら生徒の姿が見える。有り余っていた時間はもう随分と残り少なくなっていた。

「ところで、ヒノキ。君は試験勉強をしっかりやっているか？」

雪が試験勉強について聞いてくる。

「ん？　そういえば明日だったな」

「ああ、その通りだ」

「俺は問題ないな」

「そうか。やはり君は勉強家なんだな」

「いや、そういうわけじゃないさ」

感心する雪を尻目に苦笑するヒノキ。

ヒノキの問題ない、というのは別に勉強をコツコツやっているからではない。

試験勉強は一夜漬け派だった。

「君は随分と謙遜をするんだな。まあ、勉強と一緒にやってもお互いの邪魔になりかねないからな。お互い頑張ろう」

「ああ、そうだな」

会話を一旦区切り時計を見る。

「むっ、そろそろ授業が始まるな。では、私は失礼する」

「ああ、さらばだ」

そして、雪は席を立ち自分の席へと向かった。

（次はグラサン先生の授業か）

そう思い、前を向く。

教室にはほとんどの生徒が席に座っており、授業の時間までもう間もなくだった。

「眠いなあ」

思わずあくびが出てしまう。

雪の弁当は量だけはかなり多かったので、満腹で眠たかった。

（まあ、ちょっとくらい寝てもいいか）

そう思いヒノキは目を閉じた。

深夜、レッド寮。

ヒノキは試験勉強をしていた。

（どうも、頭がくらくらするなあ）

眠気と闘いながら。

試験勉強なんて1日で全部の範囲を勉強しちゃえばいいじゃん、ヒノキはそんな主義であった。場当たりの方策であることこの上ない。

この部屋の他の住人、十代と隼人は既にいびきをかきながら熟睡しており、翔はというと

「デュエルの神様。この翔を墓場よりお救いください」

オシリスのポスターが貼ってある即席で作った祭壇にお祈りをしていた。

原作の通りであるが、翔はヒノキが見ている限り意外にも試験の何日か前からコツコツと勉強をしていたのである。

（そんな無駄なこととしてないで、さっさと寝ればいいのに）
至極、正しいことを思うヒノキ。

その間もバリバリ試験勉強を進めていく。

「ふぁーあ」

流石にあくびが出てくる。

『1日で全ての試験範囲を勉強する』言葉にしてしまえば、意外と簡単そうな感じはするが結構つらいものであった。

「ところでヒノキ君はいつまで勉強してるんスか？」

「ん？」

お祈りを一時中断した翔が質問をしてくる。

「そんなの明日の……ってもう今日か。今日のテスト範囲全部が終わるまでに決まってるだろ」

「ええー、そりゃ無理ッスよ」

絶対に出来るわけがない、そんな顔をする翔。

「でも、そろそろ終わるぞ？」

「えっ！？マジッスか！？」

「おお、大マジだぞっと、これで終わりだな」

片づけを始める。

放課後になってから今までやっていた試験勉強がようやく終了した。

「流石に頭がくらくらするなあ」

「えっ、範囲全部終わったんスカ？」

「ああ、俺は寝るよ」

布団を敷いて寝る準備をする。

「翔、お前も勉強はしたんだから早く寝た方がいいぞ」

「うう、僕は心配なんでもうちよっとお祈りしてるッス」

「ふうん」

そして翔は再び祈りだした。

ヒノキは布団に入り、眠るためにまぶたを閉じる。

（祈れば祈るほど状況は悪化すると思うけどなあ）

そんなことを思うヒノキ。

翔は死者蘇生ではなく、目を瞑りながら祈っているうちにすり替えておいた玉砕指令のカードに祈っていた。

（文字通り、玉砕するんだろうな）

そんなことを思いながら、ヒノキの意識は眠りに落ちた。

試験当日。

祈っていたカードの通り翔は玉砕していた。

（どうやら翔はレベル2以下の通常モンスターだったみたいだな…

…)

翔を見てそんなことを思うヒノキ。中々ひどいことを考えるものである。

ヒノキは朝に翔が走って出ていったあと、隼人と一緒にのんびりと教室に入ったのであった。十代は放っておいて。

(別と一緒に رفتっても良かったけど、なあ)

ヒノキは遅刻をしたくなかった。

さて、翔は見事なまでにただいま玉砕しているのだが、かくいうヒノキも危ない状態であった。

(頭が、くらくらするなあ)

完全な寝不足である。

試験範囲全部を勉強したのはいいが、睡眠時間が足りなかった。睡眠魔と闘いながら問題を解いてゆく。

「えーと、これで最後だな」

最後の問題

『屋根裏の物の怪』のステータスを答えろ

「……何だ、これ？」

テストの最後は試験範囲でも何でもない問題であった。

実際、テストというのはそういうことがたまにある。出題者がふざけているのだ。

しかし、ヒノキにはわからなかった。ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍やブラック・マジシャンといった有名なカードならともかく、初期にでたマイナー

なカードのステータスなんか知らない。

（確か、クリボーみたいな奴だった気がするが……）
明確には思い出せなかった。

（まあ、いっつか1つくらい空欄でも）

そう思い、見直しを始めるヒノキ。

最後の問題はわからなかったが、勉強した甲斐あって結構すらすらと出来た。

「眠いなあ」

ぼつりと呟く。

見直しも終わったのでヒノキは眠ることにした。

それと同じくらいに十代は遅刻して教室に入ってきていた。

休み時間。

「おい、ヒノキ。起きろよ！ ヒノキ」

乱暴に体をゆすられる。

「ん？」

重たい目蓋を開けてみると、目の前に十代が居た。

「なんだ？」

「購買に新しいカードが入るんだってよ！一緒に見に行こうぜ！」

やたら元気な声で十代がそう言う。

ヒノキの頭は眠くてあまり働いていなかった。

「却下。眠い」

それだけ言って再びヒノキは目蓋を閉じる。

「って、おい！新しいカードに興味ないのかよ！？」

「それ以上に眠いんだ。筆記は終わったんだろ？だったら、もう寝かせてくれ」

力ない声でそういうヒノキ。

それにどうせもう売ってないんだから、そんなことも言いたくない。

「しょうがないな。じゃあ、俺達だけで行ってくるからな！」

「アニキ、早くしないと売り切れちゃうよ」

「おう、行くぜ！翔」

そして、十代と翔は教室から出ていった。
入れ替わるように三沢がヒノキに声をかける。

「本当に行かなくても良かったのか？」

「……」

「おい、ヒノキ」

「……」

「無視するなっ！」

「……ZZZZZZ」

「何だろうか、この疎外感」

三沢も教室から出ていった。

「Z Z Z Z Z Z」

しばらくヒノキの寝息だけがこだまする。

「Z Z Z Z Z Z」

「ふむ、よく寝ているものだな」

何故か隣には雪が居た。

数分後。

「ヒノキ。そろそろ目を覚ました方が良好ぞ」

やさしく体をゆすられる。

「ん、あと5分。いや、10分26秒くらい寝かせてくれえ」

目を瞑ったまま、誰かも認識しないまま答えるヒノキ。無論、寝ぼけていた。

雪はちらりと時計を見る。

「むっ、10分26秒だと5分ほど遅刻してしまうな。すまないが3分で我慢してくれ」

「ははは、問題ない問題ない。話がわかるなあ」

「そうか。では、その時になったらまた起こそう」

「おう……ZZZZZZ」

そしてヒノキは再び眠った。

3分後。

「ヒノキ。3分たったぞ」

再び、やさしく体をゆすられる。

「ん？ ああ、雪か。悪いな、起してくれたのか」

「いや、気にするな」

ヒノキは今度こそ完全に目が覚めた。
ちなみに、少し前のやりとりは覚えていない。

「おはよう、ヒノキ。よく眠っていたな、君は」

「ん？そんなに眠っていたのか。起こさないで先に行った方が良かったんじゃないか？」

「そういうわけにはいかないだろう。私と君は友人なんだから」

ほのぼのと会話するヒノキと雪。

「ありがとう。何か悪いな」

「ああ、そろそろ移動しよう。実技まで時間がない」

「そうだな。あとどれくらいだ？」

「あと2分、いやもう1分30秒くらいだな」

「へっ」

雪の言葉にヒノキは凍りついた。しかし、凍りついている暇すらない。

時間は刻一刻と経過していた。

「っ、雪！急ぐぞ！」

「? ああ、そうだな行こうか」

雪と一緒に走って実技試験の会場に向かう。

「しかし、君は何をそんなに慌てているんだ?」

「って、何でそんなに余裕そうにしてるんだよ!？」

「むっ、私は余裕がなくても余裕を忘れない主義なんだ」

「とてもいい主義だなっ! それはっ!」

「むっ、褒めてくれるのか? 何だか照れてしまうな」

そんなずれた会話をしながら走っていった。ヒノキはとても焦りながら、雪は顔色一つ変えずに

観客席。

ヒノキは何とか遅刻せずに間に合った。
翔の隣で観戦している。

「はあ、はあ」

「ヒノキ君なんか疲れてるッスね」

「はぁ、気に、するな」

ヒノキはかなり息が上がっていた。

雪は実技の順番が早かったので既にデュエル場へ向かっている。

「それにしても、アニキはすごいッスね」

「ん、ああ、そう、だな」

前の方を見ると十代と万丈目のデュエルはもうクライマックスに差ししかかっていた。

「万丈目！これで、お互いライフは1000ポイントずつ！でも、ここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたら面白いよな！？」

「何をたわごとをつ、そう簡単につ！」

「でも、引いたら面白いよな！」

十代がデッキに手をかける。

「俺のターン、ドロー。俺はこのカード、フェザーマンを召喚し」

E・HEROフェザーマンが現れる。

「プレイヤーにダイレクトアタック！」

そしてフェザーマンが突撃していき万丈目を切り裂いた。

「うあああー！ー！」

L
P
O

原作通り十代が勝利する。

（あそこでライフぴったりのモンスターを引くなんてすごいな）

自分だったら引けたとしても攻撃力が少し上か少し足りないモンスターを引いてしまいそうだな、とヒノキはそんなことを思った。

ちらりと他の場所も見る。

近くで雪もデュエルをしていた。

相手はガジェットデッキ。

「これで終わらせる。救世の美神ノースウェムコでグリーン・ガジェットを攻撃」

ノースウェムコの杖に桜色の閃光が収束していく。

「救世の一撃ディヴァイン・バ」

途中でヒノキは見るのを止めた。

「何であさっての方向むいてるんスカ？」

「いや、なんかこれ以上は駄目な気がして」

「ふうーん、変なの」

怪訝な顔をする翔。

途中から見るのを止めたが雪はデュエルに勝っていた。

「次、俺の番だな」

「あつ、そうなんスカ？僕、応援してるッス」

「おう、じゃあ行ってくる」

ヒノキはデュエル場へ向かった。

デュエル場

「それで、なんで万丈目がここに居るわけ？」

「万丈目、さんだ！」

「ああ、はいはい。さんだ〜ね」

「貴様っ、馬鹿にしているのか!？」

なんだよ、お前だって気に入っていたじゃないか。そんなことを思うが言わない。

デュエル場には何故か目を血走らせた万丈目が立っていた。

「で、お前は十代とデュエルをして実技は終わったはずだろ？」

「黙れ! 貴様は俺が叩き潰してやる！」

目が血走っているせいか会話が成立しない。

(説明くらい、ちゃんとやってくれよ)

そんなことを思うヒノキ。

「それについては私が説明するーノ」

クロノスが説明にやってくる。何故か意気消沈とした表情である。

「入学試験であれほどの成績を示した遊城 十代と柳 ヒノキではオシリス・レッドの生徒が相手ではつり合いが取れないノーネ。そこでオベリスク・ブルーの生徒であるシニョール万丈目とデュエルをさせることにしたのでスーガ、今度はオベリスク・ブルーとオシリス・レッドではつり合いが取れないノーデ2連戦させることにしたノーネ」

「あゝ、そうですか」

「そんなノーネ。でも、計算違いだったノーネ」

後半を小さな声で呟いてクロノスは戻っていった。

大方ドロップアウトボーイをエリートであるオベリスク・ブルーの手によって潰してやろうとでも思っていたのであろう。

「あゝ、じゃあデュエルするか？」

「ふん、この俺がレッドごときに負けるはずがない！お前を叩き潰して汚名返上してやるわっ！」

威勢よく叫ぶ万丈目。

やはり目が血走っていた。

十代に負けて落ち込むよりもまず少しイっちゃったみたいである。

危険人物にしか見えない。

(何かやだなあ)

そんなことを思いながらデュエルディスクを展開させるヒノキ。

「デュエル！」

手札を即座に確認する。

「先攻は」

「俺が貰う！貴様は黙っている！ドロー！」

「って、何!？」

先攻を万丈目に強奪された。

「俺はY・ドラゴン・ヘッドを攻撃表示で召喚！」

Y・ドラゴン・ヘッド ATK1500

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

目が血走っている割には意外と堅実な手を打ってエンド宣言をする。

「よし、俺のターン！ドロー！」

相手は堅実な手を打ってきた。

（ならば俺も堅実に行くか）

そう思うヒノキ。

「手札からスピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

スピード・ウォリアー ATK 900

「バカな、ただか攻撃力900のモンスターで何が出来る！？」

「へっ、それはどうかな。バトル！スピード・ウォリアーでYードラゴン・ヘッドを攻撃、このとき攻撃力を2倍にする！ソニック・エッジ！」

スピード・ウォリアー ATK 1800

攻撃力の上昇したスピード・ウォリアーの蹴りを受けてY・ドラゴン・ヘッドが爆散する。

「ふん、この程度なんともないわ!」

LP3700

「バトル終了後、スピード・ウォリアーの攻撃力は元に戻る」

スピード・ウォリアーATK900

「カードを1枚セットしてターンエンド!」

なかなか快調な出だしだな、ヒノキはそう思った。

毎回、後攻1ターン目はトラップで攻撃が通らなかったのが1ターン目にまともな攻撃が通るのは初めてであった。

ヒノキとしてはこのまま押し切りたい。

「ふん、俺のターンだ!ドロー!」

血走った眼の万丈目がカードを引く。

「柳 ヒノキ！貴様にはこれから地獄を見せてやる！」

「何？」

「行くぞ！まず俺はXーヘッド・キャノンを召喚！」

Xーヘッド・キャノン ATK1800

XYZの合体ユニオンモンスターの基点がフィールドに姿を現した。

（こいつ、何をする気だ？）

少し嫌な予感がする、心の中で冷汗を流すヒノキ。

万丈目の台詞からしてこれで終わるはずがない。

「そして手札から前線基地を発動！効果により手札からZーメタル・キャタピラーを特殊召喚！」

Xに続いてZがフィールドに揃う。

「くっ、合体パーツを揃えてきたか」

「ククク、だがこれで終わりじゃない！トラップ発動ゲット・ライド！墓地からYードラゴン・ヘッドをXーヘッド・キャノンに装備！そして合体を解除！」

「ちっ、XYZを全部揃えたか」

XYZの合体モンスター全てがフィールドに並んだ。

「行くぞ！X・Y・Zを合体させ」

3体のモンスターが変形・合体をして1つになっていく。

「XYZードラゴン・キャノン！」

XYZードラゴン・キャノン ATK2800

「ちっ、召喚のしにくいモンスターをよくもまあそうやすやすと出せるもんだな」

悪態についてヒノキは歯噛みした。

「さて、まずはその目障りなりバースカードから消し去ってやる！」

「くっ」

「XYZードラゴン・キャノンの効果！手札を1枚捨て貴様のリバ

ースカードを粉碎する！」

ヒノキのリバースカードがフィールドから消え去った。

「ふん、ミラー・フォースか。危ないもんを伏せてやがるぜ」

「ちっ」

思わず舌打ちをしてしまう。

ミラー・フォースが活躍せずに消えたのもそうだが、これによりスピード・ウォリアーを守るものが無くなってしまった。

「これで心おきなく攻撃が出来るってものだ！XYZ・ドラゴン・キャノンで貴様のモンスターを粉碎する！X・Y・Zハイパー・デストラクション！」

XYZ・ドラゴン・キャノンの放つ砲撃を受けてスピード・ウォリアーが爆散する。

「くっ」

LP2100

「これでターンエンドだ！」

ヒノキはかなりのライフを削られてしまった。

「俺のターン！ドロー！」

カードを引く。

現在、万丈目の手札は0。それに対してヒノキは5枚、ライフは削られてしまったが手札は潤沢だった。

（さて、どうするか）

状況をよく考える。

万丈目のフィールドはXYZ・ドラゴン・キャノンに永続魔法前線基地とリバースカードが1枚。

（それに加えXYZ・ドラゴン・キャノンには手札1枚で俺のフィールドのカード1枚を破壊する効果がある……）

中々、厄介な効果を持っているがその破壊効果を逆手に取ろうとヒノキは考えた。

「よしまず俺はジャンク・シンクロンを召喚！効果により墓地からスピード・ウォリアーを守備表示で特殊召喚！」

2体のモンスターがフィールドに並ぶ。

「無駄だぜ！それでシンクロ召喚とかいうのをやるつもりなんだろ

うが、それで入学試験の時に使っていたモンスターを出しても攻撃力は及ばん!」

したり顔で叫ぶ万丈目。

確かにその通りではあった。

「いや、こっから面白くなるのさ」

「何?」

「俺は蘇生したスピード・ウォリアーを生け贄にターゲット・ウォリアーを特殊召喚する!」

ターゲット・ウォリアー ATK 2100

「ターゲット・ウォリアーの攻撃力は生け贄にした戦士族の攻撃力分アップする」

「だが、その程度の攻撃力ではやはりXYZ・ドラゴン・キャノンには及ばん!」

「いや、攻撃力じゃなくて狙いは別にあるのさ」

「何だと!?」

「行くぞ! レベル5ターゲット・ウォリアーにレベル3ジャンク・

シンクロンをチューニング!」

ジャンク・シンクロンが3つの光輪と化しターレット・ウォリアーと同化していく。

「ちい、そういうことか!」

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ!シンクロ召喚!飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」

スターダスト・ドラゴン ATK2500

「はっ、少し驚かされたが攻撃力2500ではないか!それで一体どうするつもりだ!?」

「へっ、こうするのさ。カードを2枚セットしてターンエンド」

リバーズカード2枚を伏せてターンを終了した。

「ふ、はははは!何だそれは?威勢よく召喚した割にはターンエンドか!?」

万丈目が笑いだす。

ヒノキには1つの考えがあった。

「俺のターン、ドロー！そして、XYZ・ドラゴン・キャノンの効果で手札を1枚捨てることで今度はそのドラゴンを破壊してくれるわ！」

「へっ、やっぱりなかったな！」

「何!？」

ヒノキの考えとは万丈目がスターダスト・ドラゴンの効果を知らないがゆえにXYZ・ドラゴン・キャノンの効果で破壊しにくるだろう、という情報アドバンテージの差であった。正直なところ、相当せこい作戦である。

「スターダスト・ドラゴンの効果を発動！生け贄に捧げることでフィールドのカードを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

「何、そいつはそんな効果をもっていたのか!？」

「ああ、その通りさ！ヴィクテム・サンクチュアリ！」

スターダスト・ドラゴンが光の粒子となりフィールドから姿を消してゆく。

「何の！そう簡単にやらせはしない！リバースカードオープン ゲットライド！墓地のユニオンモンスター強化支援メカ・ヘビーウェポンを装備！」

「つつ、コストにそのカードを使っていたのか！？」

「これによりユニオンモンスターが身代わりとなり、代わりに破壊される！」

装備された強化支援メカ・ヘビーウェポンが爆発し、XYZ・ドラゴン・キャノンはフィールドにそのまま残った。

（やばい、なんか強いぞ）

ヒノキは冷汗を流す。

目が血走っているせいか、かなり手ごわかった。

「これで貴様のフィールドはがら空きだ！XYZ・ドラゴン・キャノンでダイレクトアタック！X・Y・Zハイパー・ディストラクション！」

XYZ・ドラゴン・キャノンがヒノキに砲撃を放つ。

（くそっ、まずいな）

ライフポイントは2100。

この攻撃を受けきることは出来なかった。

「リバースカードオープン！ガードブロック！一度だけ戦闘ダメージを無効にして1枚ドロウする！」

「ちい、しぶとい奴め！忌々しい、家庭内害虫並みだな。ターンエンド！」

「エンドフェイズ時、自身の効果により生け贄になったスターダスト・ドラゴンは甦る！」

スターダスト・ドラゴンが再び飛翔しフィールドに舞い降りる。

「何て効果だ。攻撃力が及ばないとはいえ、目障りなドラゴンだ！」

「俺のターン！ドロー！」

カードを確認するヒノキ。

（よし）

引いたのはありがたいカードであった。

「手札から強欲な壺を発動し2枚ドロー！」

2枚カードをドローするも、この状況をひっくり返せそうなカードはこなかった。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

リバースカードをセットするだけでエンド宣言をする。
ヒノキにとってはかなり苦しい状況であった。

「俺のターン、ドロー！」

万丈目がニヤリと笑う。

「俺も引いたぞ！強欲な壺を発動、カードを2枚ドロー！」

「くっ」

少しばかり焦るヒノキ。

特に打開策がない状況ではかなり苦しい。

（勘弁してくれよ……）

そんな泣き言を言いたくなった。

「ふ、ははははは！最高のカードだ！これで貴様は終わりだ！」

万丈目がいきなり笑い出す。

おそらくいいカードでも引いたのであろう、目が血走っているせいかとんでもない引きであった。

「手札からV・タイガー・ジェットを召喚！そして前線基地の効果でW・ウィング・カタパルトを特殊召喚！そして合体、VW・タイガー・カタパルト！」

VW・タイガー・カタパルト ATK 2000
フィールドにXYZとVWが並び立つ。

「くっ、少しやばいか」

「さあ、行くぞ！貴様に地獄を見せてやる！XYZ・ドラゴン・キヤノンとVW・タイガー・カタパルトを合体してVWXYZ・ドラゴン・カタパルト・キャノン！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルト・キャノン ATK 3000

「くっ、こいつの効果は……」

「そうだ！いかに破壊を無効にするそのドラゴンが居てもVWXY Zの効果は除外する！」

確かに除外効果ではスターダスト・ドラゴンに成す術は無かった。

「行くぞ！VWXYZ・アルティメット・ディストラクション！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンがスターダスト・ドラゴンに砲撃する。

(くっ、スターダストが除外されたら……)

ヒノキにとってはかなりまずかった。

手札をよく見る。

『マ、一、わ、を、て』

何かが聞こえたような気がした。

(何だ?)

疑問に思うが、考えている暇はない。デュエルディスクでのデュエルはリアルタイムで進行しているのだから。

「手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を発動!」

「何!? そのカードは、クロノス教諭の時に使った……」

「そうさ! 墓地へ送りWXYZの効果を終フェイズまで無効にする!」

スターダスト・ドラゴンに放たれた砲撃は寸前にかき消えた。

「ちい、ならば戦闘破壊するまで! VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンで貴様のドラゴンを攻撃だ! くらえっ! アルティメツ

ト・ディストラクション！」

しかし、再び放たれた砲撃に飲み込まれスターダスト・ドラゴンは姿を消した。

「くっ、除外は免れたがスターダストがやられちゃったか」

LP1600

「ふはははは！これで次のターンで貴様は終わりだ！ターンエンド！」

ヒノキのターンになる。

「俺のターン！ドロー！」

確かにスターダスト・ドラゴンがやられたのは痛いけど、ヒノキの手札は3枚、フィールドにはリバーズカードが2枚、まだこの状況を何とかする術はあった。

「レスキュー・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

レスキュー・ウォリアーATK1600がフィールドに現れる。

「ふん、今さらそんな低級モンスターを出してどうするつもりだ！」

「狙いは別にあるのさ。リバーズカードオープン！ギブ&テイク！これにより墓地のスターダスト・ドラゴンをお前のフィールドに守備表示で特殊召喚！」

万丈目のフィールドにスターダスト・ドラゴンが舞う。

「バカめ！わざわざ相手に上級モンスターを渡すとは、流石はオシリス・レッドだな！」

「ギブ&テイクの効果は続く。レスキュー・ウォリアーのレベルは特殊召喚したモンスターのレベル分アップする」

レスキュー・ウォリアーLV4↓LV12

「それがどうした！レベルだけが高くなった雑魚に何が出来る！？」

罵倒を浴びせてくる万丈目。

だが、ヒノキにとっては何も問題は無かった。

「意味なんてないさ」

「何？」

「本当の狙いは別にある。バトルだ！レスキュー・ウォリアー！VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンに攻撃だ！」

レスキュー・ウォリアーがVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンに突貫していく。

「バカめ、トチ狂ったか！貴様のモンスターのほうがはるかに攻撃力は下だ！迎撃しろ、VWXYZ・アルティメット・ディストラクション！」

レスキュー・ウォリアーは砲撃に飲み込まれ返り討ちにされた。

「レスキュー・ウォリアーがバトルするとき俺にダメージは無い」

「くだらん、だから何だ！？所詮、無駄な攻撃だ！」

「いいや、これでいいのさ」

スターダスト・ドラゴンがヒノキのフィールドに舞い戻りVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンと対峙する。

「何!?! どういうことだ!?!」

「レスキュー・ウォリアーの効果さ。戦闘で破壊されたとき元々の持ち主が俺のカード1枚のコントロールを得る!」

「ちい、この尻軽が!」

「いや。カード達は信頼してくれる持ち主を裏切らない、ただそれだけさ」

そう言ってヒノキは苦笑した。

(まさか、こんなクサイ台詞を言う日がくるなんてな)

そう思って。

それにしても万丈目は血走った眼をしているせいかとんでもないことを言うものである。

「メインフェイズ2。このターン、召喚に成功しているのでワンショット・ブースターを特殊召喚!」

ワンショット・ブースターATKO

「そして、ワンショット・ブースターの効果を発動! このカードを生け贄にすることで、このターンに戦闘を行った相手モンスター1体を破壊する!」

「何！？ということは」

「レスキュー・ウォリアーと戦闘を行ったVWXYZを破壊する。
ワンショット・ブースター！VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキ
ヤノンを消し去れ！」

ワンショット・ブースターの一部が飛んでいき、VWXYZ・ド
ラゴン・カタパルトキヤノンが爆散した。

「ぐう、VWXYZが破壊されるだど！？」

「カードを1枚セットしてターンエンド」

エンド宣言をする。

VWXYZを倒すことに成功し、ヒノキの圧倒的有利となった。

（何とか勝てそうだな）

そんなことを思い、安堵するヒノキ。

万丈目の手札は0枚、そうそう逆転出来る状況ではなかった。

「ふざけるな。この俺が、この俺がオシリス・レッドなんぞに負け
るわけないだろっ！！」

「……うわぁ」

血走った眼の万丈目が叫ぶ。

もはやほとんどキレル寸前であった。

正直、関わり合いになりたくないほど危ない人に見える。

「ドローー!!……く、くくく、はっはっはっは!!」

ドローしたカードを見た瞬間、万丈目が大声で笑い出した。

「うわぁ……」

やはり、ちょっと引いてしまう。

「やっぱりなあ、俺がレッドなんぞに負けるはずがないんだ!手札から死者蘇生を発動!」

「げっ」

万丈目に引いている場合などでは無かった。

「甦れ! V W X Y Z、ドラゴン・カタパルトキャノン!」

V W X Y Z、ドラゴン・カタパルトキャノンがフィールドに甦る。

「くっ、マジか」

思わず冷汗を流すヒノキ。

（やはり目が血走っているせいなのか）

万丈目がかなり手ごわかった。

「行くぞ！今度こそ、貴様の目障りなドラゴンを消し去ってやる！
VWXYZ・アルティメット・ディストラクション！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンがスターダスト・ドラゴンを除外するために砲撃を放つ。

「くっ、チェーンしてサイクロンを発動させる！対象は前線基地だ！」

「ふん、今さらそんなものを破壊して何の意味がある！？消え去れ！目障りなドラゴンが！」

「意味なんてないさ！更にチェーンしてスターダスト・ドラゴンの効果を発動！サイクロンを無効にする！」

砲撃が直撃する前にスターダスト・ドラゴンは粒子となってフィールドから姿を消した。

「これでVWXYZの効果は空振りに終わる！」

「ふん、あくまでドラゴンを守る気か。だが、貴様の場はがら空きだ！VWXYZでダイレクトアタックだ！アルティメット・デイストラクション！」

今度はヒノキに向かって砲撃が放たれる。

「リバースカードオープン！トゥルース・リインフォース！」

「何!？」

「デッキからレベル2以下の戦士族モンスターを特殊召喚する！出ろ、マッシュ・ウォリアー！」

マッシュ・ウォリアーがフィールドに現れ、VWXYZの砲撃をヘリポートで受け止めた。

「ちい、そのモンスターは……」

「そう、1度だけ戦闘では破壊されずダメージ計算も適用しない！」

「くそっ、ターンエンドだ！」

苦り切った顔でエンド宣言をする万丈目。

「そして、スターダスト・ドラゴンはこのとき再び飛翔する！」

「ちい」

スターダスト・ドラゴンが舞い戻り、ヒノキのターンになる。

（まずいな）

ボードアドバンテージ的にはヒノキが有利であったが、手札は0。

（運を天に任せる、そんなことを何度もやるはめになるとはな）

少しばかり苦笑してしまう。

（本当に勘弁してくれ……）

ヒノキは泣きたくなった。

『マ、タ、あ、ら、で』

また何か聞こえる。

（幻聴ってやつかな、そういえば頭がくらくらしてきた……）

ヒノキはここにきて寝不足がぶり返してきた。

くらくらとする頭に1つの言葉がよぎる。

『カード達は信頼してくれる持ち主を裏切らない』

思わず少し笑ってしまいうひノキ。

（自分で言ったくせに、その俺が信じなかったらおわらいぐさだな）
そんなことを思った。

「行くぞ！俺のターン！ドロー！」

覚悟を決めてカードを引く。

（やっぱ、信じるもんだな）

状況を何とかできるカードが舞い込んできた。

「シンクロン・エクスプローラーを召喚！効果により墓地のジャンク・シンクロンを特殊召喚！」

「くっ、この状況！レベル7、まさか」

「もうわかってるみたいだな。万丈目」

「さんだ！」

「どうでもいい、行くぞ！レベル2マッシブ・ウォリアーとレベル2シンクロン・エクスプローラーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが光輪と化し、3体のモンスターが1つになっっていく。

「集いし叫びがこだまの矢となり空を裂く、光差す道となれ！シンクロ召喚！貫け、ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー ATK 2300

「っ、やはり、そのモンスターは入学試験の時の！」

「ああ、そうさ。ジャンク・アーチャーの効果！VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンを除外する。ディメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーが放った矢をうけてVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンはフィールドから姿を消した。

「バカな、バカな！この俺が2回もレッドに負けるというのか！？」

「行くぞ！まずジャンク・アーチャーでダイレクトアタック！貫け、スクラップ・アロー！」

万丈目がジャンク・アーチャーの矢をうける。

「ぐああ！」

LP1400

「トドメだ！頼む、スターダスト。万丈目にダイレクトアタック！」

声をうけてスターダスト・ドラゴンがエネルギーを収束させる。

「ふざけるな、ふざけるな！こんなことが！」

「受け入れろ、万丈目！響け、シューティング・ソニック！」

スターダスト・ドラゴンが解き放ったエネルギーは白銀の光となり万丈目を飲み込んだ。

「ぐ、うわあああー！」

LP0

デュエルが終わりソリッド・ビジョンが消滅する。
何とかヒノキは勝利することが出来た。

「バカな、こんな、こんな……」

万丈目は今度こそ意気消沈としていた。

「万丈目、お前はかなり強かったぞ」

「うるさい、敗者に情けをかけるつもりか」

「いや、本音なんだけどねえ」

「あと、万丈目、さんだ……」

律儀だなお前、そんなことを言いたくなった。

『見せてもらいましたよ柳ヒノキ君』

上の方から校長の声が聞こえてくる。

『カードへの厚い信頼、モンスターを信じ何度もモンスターを守る精神、そして何度不利になっても挫けない前向きな姿勢、素晴らしいものでした。よって君も遊城十代君と同じくラー・イエローに昇格です』

「いや、俺はその」

ヒノキは何か言おうとしたが大歓声に遮られてしまった。

「もしもし校長。聞いてま」

「ヒノキ！面白いデュエルだったぜ！」

「うう、アニキもヒノキ君もレッドからはいなくなっちゃうんスね」

「ラー・イエロー昇格おめでとう。歓迎するよ」

いつの間にか下に降りてきていた皆に言葉を遮られる。

「いや、だからちょっと校長に話が」

「ヒノキ」

今度は雪が声をかけてきた。

「良いデュエルだったな。流石は私の友だ」

「……あゝ、もういいや」

結局、校長には何も言えずに実技試験は幕を閉じた。

試験終了後、オシリス・レッド寮。

ヒノキは十代と一緒に帰ってきていた。

「ういゝす」

「やっほ」

「アニキにヒノキ君！？何で！？」

「何でってここは俺達の部屋だからな」

「うんうん」

ヒノキは十代の言葉に頷く。

「そうだ、俺はここが気に入っている。燃える炎、熱い血潮、熱血の赤のオシリス・レッドを気に入っている。離れる気なんてさらさらないぜ！」

「アニキ、僕嬉しいよ。でも、ヒノキ君は何で？」

「うえっ、俺は、その……さくらんぼの赤、イチゴの赤、そしてリンゴの赤、甘い果実のオシリス・レッド寮を気に入っているから

さ！」

「って、意味わかんないスよ」

適当なことを言ったら突っ込みを入れられてしまった。

「まあ、翔に教えとかなきゃいけないことがあったからさ」

言葉を切って、まだ朝の状態で残っている祭壇へと近づく。

「翔、お前が祈ってたのは死者蘇生じゃなくて玉砕指令のカードだったのさ」

「なっ!?!」

「しかも裏には念のために降格処分まで重ねて置いておいたのさ」

「何てことするんスカー!?!」

地味にひどい悪戯を告白するヒノキ。

「テストに玉砕!?!そのうえ降格処分って、オシリス・レッドから降格したら退学じゃないッスカー!」

「まあ、気にすんなって翔」

「そうだぞ、細かいことは気にするな」

「ひ、ひどいッスー！……でも、また一緒に居られるのは嬉しいッス！」

「おわっ、くつつくな！暑かしい！」

「ははは、モテモテだな十代」

「ってヒノキ！今さりげなく避けただろ！？」

「ははは、気のせいさ」

くつついている翔と十代を他人事のように傍から見て楽しむ。

「嬉しいよ、アガ、アガガガ」

「これも情熱の赤って奴かな」

「アハハハハ！」

「ってヒノキ！お前は笑いすぎだ！」

そして十代も笑い出した。

アハハハ、と十代とヒノキの笑い声が部屋にこだまする。

結局のところヒノキはせっかく出来た友達と離れたくなかった。
けなのであった。

第7話 笑いあえる場所（後書き）

デュエルの構成は今回も難航してしまい、気がつけばジャンク・アーチャーで決まってしまうました。バリエーションが少なくて申し訳ありません。

それにしてもヒノキはちょっとせこいなあ。

次回、なるべく早く更新したいと思います。それでは

第8話 何か色々違う気がするなあ（前書き）

随分と遅くなっていました。前回、文字数が最長だと前書きで言いましたが気がついたらこの話もあり文字数が変わらない。何ででしょう？通りで時間がかかったなあと後になって思いました。それではどうぞ

第8話 何か色々と違う気がするなあ

ヒノキは今、隣に居る人に抱きつかれていた。

「こ、こわいんだな。こわいんだな」

「ねえ、離れてくれないかな。お願いだから……」

「こわいんだな」

「……」

懇願をしても離れてくれない。

ヒノキは隼人に抱きつかれていた。正直、何1つ嬉しくない。

今は食堂で怖い話をしている最中だった。

翔の話が終わりに差しかかっている。

「で、水の底に欲しいカードが映っていてそれに手を伸ばしたら……
……たちまち海に引きこまれちゃうそうッス！」

「へえ、行ってみてえ！その入り江！」

「アニキ、そうじゃないでしょ……」

「こ、こわいんだな！」

「だから、隼人……離れてくれて」

隼人の隣に座ったのは間違いだったかもしれない、ヒノキはそんなことを思った。

今日は廃寮探検に行く日の前夜である。

（明日は若〇が来るのか）

隼人に抱きつかれながらそんなことを思い出す。

（まあ、十代がデュエルするだろうから関係ないかな）

まるで他人事のように呆然と考えるヒノキ。でも、声は聞きたいからついていこうと決めていた。

（退学の危険性があるけど、まあ大丈夫だろう）
と自己完結する。

退学になりそうになったとしても、そのときはそのときに考えよう、と。

ヒノキはかなりの事なかれ主義であった。

「ところで、隼人よ。そろそろ離れてくれないか？」

「うっ、悪かったんだな」

隼人が離れていく。が、なんだかビクビクしている。

（そんなに怖いか？）

翔の次は十代がカードを引き、話をしていた。

「小さい頃、夜になると押入れから声が聞こえてきてさ。寝てる間にカードの精霊が出てきて遊んでるんじゃないかと思って、カード

ケースを開けてみるんだよ」

「それで？」

「なんでもないんだな」

それは怖い話なのか？と突っ込みを入れたくなった。

十代の話を聞いて、ふと思う。

（カードの精霊、か）

そういった存在が居るということはわかってるし、自分も精霊が居るということは信じている。しかし、ヒノキは今日にいたるまで精霊の姿を見たことはなかった。

（でも、なんか声のようなものが聞こえたことはあったんだけどなあ）

十代とのデュエルと月一試験での万丈目とのデュエルのことを思い出す。

（まあ、驚異の技術ソリッドビジョンと幻聴ってとこかな）
再び自己完結した。

「皆さん、何をしているんですかニャー？」

「あっ、大徳寺先生」

大徳寺先生がやってくる。

「今、引いたカードのレベルの分だけ怖い話をする遊びをやっ

ス」

「それは面白そうですニャ。どれどれ私も」

そしてカードを引いて話を始める。今は使われていない閉鎖寮の話を。

再び、隼人が抱きついてくる。

「だからさ……」

「こ、こわいんだな」

やはり離れてはくれない。男に抱きつかれて誰が得をするのだろうか？

（まあ、その手の人は得するんだろうけどさあ）

ヒノキにそっち方面の趣味はなかった。

大徳寺先生の話を適当に聞き流すヒノキ。

大体の話はわかってるので別に聞く気はなかった。

「そろそろ部屋に戻る時間だニャ。では、おやすみ」

大徳寺先生が出ていく。

「閉鎖寮、ねえ。ところで、隼人はなれてくれ」

「うつ、わるかったんだな」

「なんか怖い話ッスねえ」

「面白そうじゃん！明日の晩、そこ行ってみようぜ」

「うん、こわいけど俺も行ってみたいんだな」

「隼人、怖がりなのに好奇心は旺盛なのな……」

ということで閉鎖寮に行くことが決定した。

ちようどいい区切りだと思い、ちらりと時計を見る。

（ふむ、そろそろ寝た方がいいか）

もう既に結構な時間になっていた。

「じゃあ、そろそろ怖い話もやめて片付けようか」

と、立ち上がりながら皆に提案する。

「そうだな。そろそろ寝ようぜ」

「そうなんだな。俺ももう眠いんだな」

十代と隼人が時計を見てから賛成する。しかし、翔だけ何かが引

っ掛かるような顔をした。

「あれ？でもヒノキ君だけ1回もやってない気がするッス」

「そういやあ、確かにヒノキの話は聞いてないな」

「そういえば。全然気付かなかったんだな」

「くっ、ぬかった」

ヒノキだけ話をしていない、その事実には皆が気付く。

ヒノキは面倒だからという理由で、隼人の隣で何食わぬ顔をしな
がらずと話を聞いていたのであった。それに加えて、いきなり怖
い話をしろと言われても困るといった気持ちもあった。

気付かれてしまったてはもはや後の祭り、それでもヒノキは少しだ
けあがいてみる。

「もう時間も時間だしさ、片づけた方がいいと思うんだよ僕として
は」

嘘くさいセリフを似非爽やかスマイルでのたまってみる。

「最後にヒノキの話を聞いてから片づけようぜ」

「いいッスねアニキ。じゃあヒノキ君、早く引いてくださいッス」

「立ってないで座るんだな」

意味がなかった。誰も反応してくれない。

「……はあ、何でもいいから反応してくれよ。スルーはないだろ」

「そんなのどうでもいいッス」

「なにげにひどいぞ翔」

とりあえず椅子に腰を下してカードを引くことにした。

「えーと、ビッグ・コアラか」

「おっ、けっこうレベル高いな」

「レベル7ッスね」

「俺のカードなんだな」

引いたカードは隼人のカードらしい。コアラなので大体予想出来たが。

とはいえ、レベル7というのは意外と高い。

ヒノキは若干困った表情をした。いきなり怖い話をしろと言われ

でも思いつかないのである。

ありがちな怪談話をするという選択肢もあるが、ヒノキとしてはそれでは少しつまらない、自分が話をするからにはそこらには無さそうなものにしたかった。

「さあ、ヒノキ君。最後にとっておきの奴を頼むッス」

「面白い話を期待してるぜヒノキ」

椅子に座って少し考え込んでいたら十代と翔、2人に急かされる。こういった遊びでじっくり考える時間をくれというのも無理な話である。

（仕方ない、即席で出たところ勝負で行くか）
覚悟を決めて口を開くことにした。

「昔、俺が通っていた学校で実際に起きたらしい出来事だ」

皆が静かにヒノキの話を聞く。

「ある男子生徒が忘れ物をして、夜遅く学校に忘れ物を取りに行ったんだ」

「忘れ物って、何を忘れたんだ？」

「アニキ、そこはたいした問題じゃないと思うッス」

「カバンだ。愚かにもその男子生徒は自分の通学カバンを持たずに下校してしまったらしい」

「ヒノキ君も律儀ッスね」

翔が1人で突っ込みをしている。隼人はビクビクしながら真剣に話を聞いていた。

「そのあと、無事に忘れ物を教室から回収した男子生徒は普通に帰ることにしたんだ」

「それで？」

「そのまま歩いて帰ろうとしたら、学校の敷地内にあるプールのあたりで声を掛けられたんだ。もう教師達すら帰っている時間にも関わらず」

翔と隼人がごくりと唾を飲み込む。

「それで、怪訝に思った男子生徒が振り向くとそこには……」

「そ、そこには？」

「い、いったい何が居たんだな？」

もったいぶって一呼吸置く。

「そこにはブーメラnpantsをはいたムキムキの男が悠然と仁王立ちしてたんだ」

「ギャー！変態じゃないッスか！？」

「こ、怖いんだな」

翔が叫び声を上げ、隼人は抱きついてきた。しかし、十代だけは平気な顔をしている。

「それで、どうなるんだ？」

「ああ、ブーメラnpantsをはいたムキムキの男が後ろにあるプールを指差してこう言ってくるんだ『なあ、やらないか？』って」

「ま、ますます変態じゃないッスか！？」

「こ、こわいんだな。こわいんだな」

「朝になって男子生徒は死体になって発見された。その顔は気持ちよさそうだけどものすごく嫌そうな微妙な表情をしていたという。無論、その男子生徒が何をされたのかは誰も知らない」

ヒノキの話は終わった。

皆は一様に異なる反応をしていた。十代は引きつった顔をしており、翔は叫び、隼人は抱きつきながらビクビク震えていた。

「嫌ッスゝ、嫌ッスゝ！変態じゃないッスかゝ！？想像したくもないッスゝ」

「こ、こわいんだな。そんなところ行きたくないんだな」

「俺もちよつとそこには行きたくねえなあ」

皆の反応を見て満足するヒノキ。

即席で作ったにしては上出来だと自画自賛したくなった。

話も終わったので片づけをしたいのだが抱きつかれているせいで動けない。

「なあ、ヒノキ」

「ん？なんだ十代？」

「今のって本当に怖い話だったのか？」

「さあ？でも実際に自分が同じ目にあったらこの上なく怖いと思うけどな。むしろ、本当にあった微妙な話って感じかな」

というわけでこの日はもう眠ることにした。

翌日の夜。

ヒノキは昨夜に決定した通り十代達と廃寮に来ていた。

その寮は広く、調度品も中々良いものを使っており、埃まみれの状態をどうにかすればそれなりの見栄えになることが予想できる。

なんとももったいない話だ、ヒノキはそう思った。

「へえ、けっこういいところじゃん。俺達、レッド寮からここに引っ越しするか？」

先頭を歩いている十代がそんなことを言う。

翔と隼人はブルブルと首を横に振っていた。まあ、無理もない反応である。

「うーん、掃除すりゃ使えらと思うんだけどなあ」

「確かに。俺も今もったいないと思っていた。でも、この広さを4人で掃除するのはちよつと厳しくないか？」

「それもそうか、でも住む部屋だけを掃除するんなら何とかならないか？」

「って、アニキにヒノキ君！ここに住むことを前提に話をしないで

ほしいッス！」

真っ暗な廃寮に翔の叫びがこだまする、かなり必死の様子であった。隼人も隣でうんうんと首を縦に何度も振っている。

「えー、そこまで嫌がることか？」

「絶対に嫌ッス！」

「何か出てきそうなんだな。こんなところに住みたくはないんだな」

烈火の勢いで十代に反対する2人。
ヒノキもあることに気づいていた。

「悪い、十代。やっぱり俺もここには住みたくない」

「ヒノキまで反対するのかよ。ちえっ、何か出てきそうって一体何が出るって言うんだよ」

「十代、よく見ろ。もうそこに出てきてる」

「へっ？」

翔の方を指差す。

「うわー！な、何スカ！？一体、僕の後ろに何が居るんスカ！？」

「ほら、黒光りするGがあんなにいっぱい」

「うわぁ、出そうってゴキブリの話かよ。確かにちよつと嫌だなあ」

カサカサと動く黒い物体を見て十代は納得していた。
長い間、掃除もされずにほったらかしにされていた場所である。
いない方がおかしい。

「なっ、だからここに住むのは止めにしとこう」

「そうだな。じゃ、先に進むか」

十代と二人で先に進んでいく。
後ろの方では何故か翔が涙を流していた。

「もう嫌ッス……アニキもヒノキ君もなんかずれてるッス」

「げ、元気出すんだな翔。それに早く行かないと置いてかれちゃうんだな」

「隼人君……ありがとう、僕には仲間が居たんだね」

翔と隼人は友情を深めていた。

（何やってるんだか）

ヒノキはその光景に少しばかり呆れた。

「おーい！翔、隼人！置いてっちゃうぜ！」

「あ、待ってよアニキ！」

「こんなところに置いていかないでほしいんだな！」

急いで追いかけてきた翔と隼人と一緒に先へと進んでいく。

しばらく話し声もなく足音だけが響く。ヒノキはキョロキョロと辺りを見回しながら歩いていた。

（蜘蛛の巣が、すごいな）

天井の隅や壁などには蜘蛛の巣が張っており、まさしく幽霊屋敷とでもいうような佇まいである。しかし、ヒノキは先の会話から分かる通り幽霊が出そうとかそんなことを気にするような人間ではない。

（幽霊、か。もし出るんだったら仲良くなれる友好的な奴がいいな）
ヒノキはくだらないことを考えていた。

『キャアアアー！！』

奥の方から悲鳴が聞こえてくる。

「今のって」

「皆、行ってみようぜ！」

悲鳴が聞こえた方に向けだす。

「これは、明日香のエトワール・サイバー」

「何故、躊躇なく断言できる？」

「あっちに引きずった跡があるんだな」

「……もしも、スルーは止めてほしいんだけど」

「そんなことはどうでもいいッス！」

「翔……お前って奴は」

さらに奥へと進んでいく。そしてヒノキ達は闘技場を彷彿とさせる広い空間へと出た。

棺桶のようなものの中に明日香が気絶した明日香が入っている。

「明日香っ！」

十代が叫ぶ。

あの棺桶は一体どんな構造をしているのだろうか？ちょっと調べてみたい、ヒノキはそんなことを思った。
奥から仮面をつけた男が出てくる。

「ようこそ遊城十代、柳ヒノキ」

「誰だ！？貴様は！？」

「へっ？何で俺も？」

「我が名はタイタン。闇のデュエリスト」

「おい、またスルーかよ」

少しばかり無然とした表情をしてしまう。スルーされる割合が多い気がする。

ちよつとばかり嫌な気分ではあったがヒノキは少しばかり感動していた。

（おお、若○だ）

何故、自分まで名前を呼ばれたのか気になるがそんなことは割とどうでもよくなる。

ヒノキが感動している間も会話は続いていた。

「行方不明になった生徒も貴様の仕業だな！明日香を返せ！」

「お前らが私に勝ったら解放してやろう。無論、闇のゲームでな」

叫ぶ十代に対して不遜な態度で言い返すタイタン。

闇のゲームなんか出来ない癖によく言うよ、とヒノキは思わず小声で本音を言ってしまう。現在のタイタンがただのイカサマデュエリストだと知っているのも仕方のない反応である。

しかし、小声で呟かれていたヒノキの言葉をタイタンはしっかりと聞いていた。

「ほう、ならば柳ヒノキ。その身で闇のデュエルとくと味わわせてやろう。お前が勝ったらあの娘を解放してやる」

「えっ、おいちよつと待て。あんたの相手は……」

十代じゃないのか？そんなことを言いたくなる。十代とタイタンのデュエルを見物する気満々だったヒノキにとっては寝耳に水だった。

「くっそ、本当は俺がデュエルしてえところだけど奴からの指名じゃ仕方ねえ。ヒノキ、絶対に勝てよ！」

「いや、やりたいんなら別に譲ってやつても……」

「ヒノキ。デュエルディスクなんだな」

「って、おい」

しかし、思わずデュエルディスクを受け取ってしまう。

「ヒノキ君、あんな奴に絶対負けちゃダメッス！」

「勝てよ！ヒノキ！」

「頑張るんだな」

次々と声援が送られてくる。これで行かなかったら男ではない、もしくは空気の読めない男である。

（くっそー。こうなったら仕方ない。なるようになれだ！）

意を決してヒノキはデュエルディスクを左腕に装着した。

デュエルディスクを構えてタイタンと対峙する。

「小僧。お前が吐いた先ほどの言葉、後悔させてやろう。お前が出来るわけがないと言った闇のデュエルでな」

「へっ、全くよく言うよ。本当に出来ない癖に」

「ふん、ならばその身でとくと味わうんだな」

「「デュエル」」

ヒノキにとっては想定外のデュエルが始まった。

「先攻は貰う。俺のターン！ドロー！」

「ヒノキ！絶対勝てよな！」

「ああ、任せておけ！」

手札を確認する。

デュエルをするからには想定外だとか、話が違うとか、言っている暇はない。

気持ちを引き締める。

このデュエル、万が一にも負けるわけにはいかないのだから。

（初っ端から全開で行く！）

手札を見て戦略を決めた。

「行くぞ！手札のボルト・ヘッジホッグを墓地へ送りクイック・シンクロンを特殊召喚！手札からレベル・ステイラーを召喚！そして自身の効果で墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

フィールドにモンスターが3体並ぶ。

「レベル2ボルト・ヘッジホッグとレベル1レベル・ステイラーにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが拳銃を引き抜き、前方で回転する数枚のカードの中からロード・シンクロンを撃ち抜く。

「集いし希望が新たな地平へいざなう、光差す道となれ！シンクロ召喚！駆け抜ける、ロード・ウォリアー！」

ロード・ウォリアーATK3000がフィールドに降り立つ。

「すごい、ヒノキ君1ターン目から攻撃力3000のモンスターを召喚したッス」

「今までに見たことのねえモンスターだな。流石ヒノキだぜ」

「これならきつといけるんだな」

1ターン目から攻撃力3000のモンスターを召喚したことに十代達は目を輝かせた。

「ほう」

タイタンも少なからず驚いている。

「ロード・ウォリアーの効果を発動！1ターンに1度、デッキからレベル2以下の戦士族か機械族を特殊召喚する。出るマッシュ・ウォリアー！」

マッシュ・ウォリアーが守備表示でロード・ウォリアーの隣に並ぶ。

「更にロード・ウォリアーのレベルを1つ下げ墓地からレベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚。カードを1枚セットしてターンエンド！」

タイタンが感心するように呻いた。

「ほう、1ターン目から攻撃力3000のモンスターを従え守備モンスターを2体も出すとは。さぞかし安心出来るだろうなあ」

「そうだぞー！サレンダーするなら今の内だぞー！」

翔が調子に乗って声を張り上げる。あまりよろしくない発言だ。
(……ん?)

ヒノキはタイタンにある違和感を感じていた。だが、それは抽象的でまだはっきりとは自分でもわからなかった。

おとなしくデュエルの経過を観察することにする。

「何を馬鹿な。これは闇のデュエル、始まったが最後サレンダーなどありはしない。私のターン、ドロー」

タイタンがカードを引く。
ヒノキとしてはほぼ万全の態勢。恐れるものは何もなかった。

「私は手札のジェネラルデーモンの効果を発動。このカードを墓地へ送りデッキから万魔殿^{バンデイモニウム}、悪魔の巣窟^{アサシム}を手札に加えて、発動する」

殺風景な闘技場がおどろおどろしい不気味な空間へと姿を変えてゆく。

「さしずめ地獄の一丁目といったところか。更に私はインフェルノクインデーモンを召喚」

インフェルノクインデーモン ATK900

「さて、小僧」

タイタンが声をかけてくる。

「デュエルの序盤から攻撃力3000のモンスターを出すことが出来てさぞかしご満悦だろうなあ。だが、そのお前のしもべがお前に牙をむくのだ」

「何？ 一体、何をするつもりだ？」

「見よ、このカードにより頼りになるしもべはお前を裏切るのだ！
手札から装備魔法 フォーリンダウン 墮落を発動！」

ロード・ウォリアーに黒いオーラが纏わりついていく。

「くっ、これは……コントロール奪取か！」

「その通り、このカードを装備したモンスターはデーモンと名のついたモンスターが私のフィールド場に存在する限り呪縛から解き放たれることはない」

黒いオーラを纏ったロード・ウォリアーがタイタンのフィールドへと移っていき、ヒノキの敵と化した。

「くっ、ロード・ウォリアー」

ロード・ウォリアーが敵と化したこの状況はヒノキにとってはかなりつらい。

（だが、フィールドにはマッシュ・ウォリアーが居る）
しかし、まだ何とかなる状況であった。

「さて、まずはそのテントウムシから蹴散らしてやる。インフェルノクインデーモンで攻撃だ」

「くっ」

インフェルノクインデーモンの発した攻撃によりレベル・ステイラーが消え去った。

「私はカードを1枚セットしてターンエンド」

タイタンがエンド宣言をする。

（何かおかしい）

ヒノキは再び違和感を感じた。

最初は漠然としていてもややとしたものだったが今の行動を見て、段々とヒノキの中で明確な形になっていく。

十代達の会話が入る。

「あれ？何で奪ったロード・ウォリアーで攻撃してこないんスか？」

「翔。この前の試験の時に見ただろ、ヒノキのマッシュ・ウォリアーには1ターンに1度戦闘では破壊されずダメージ計算も適用しない効果があるんだな。だから、攻撃しなくてもおかしくはないんだな」

「あつ、そっか。確かにおかしくないッスね」

「いや、おかしいぞ」

「何がおかしいんスカ？アニキ」

「よくわかんないんだけど、絶対に何かおかしい気がするんだよ」

「アニキ。それじゃ、こっちも分かんないッスよ」

「うーん、何だ？絶対に何かおかしいんだけど、何がおかしいんだー？」

十代もヒノキと同じ違和感を感じているようだった。

（あのとき……）

ヒノキは状況をよく思い出す。

1ターン目、タイタンはシンクロ召喚を見ても全く驚かなかった。シンクロ召喚のないGXの世界で初見のはずなのに。

そして、さっきのターンにマッシュ・ウォリアーには攻撃をしてこなかった。初めて見るモンスターのはずなのに。

このことからヒノキは答えを導き出した。

「タイタン、あんた俺の使うカードのこと知ってただろ？」

それ以外に考えられない。

タイタンがいきなり笑い出した。

「フアーハッハッハッハ、その通りだ小僧。私は闇のデュエリスト、お前がシンクロ召喚とかいう未知の召喚方法を使うことや、お前のモンスターの効果なぞ全てお見通しよお」

「そうだ！俺もそこがおかしいと思ってたんだ！」

「きたないぞ！」

「卑怯者！」

「フハハ、何とでも言えい」

「この変態仮面がー！ロリコン！性犯罪者！恥を知れ、恥を！」

「ぶるああー！ー！やかましいわ！」

怒鳴り散らすタイタン。

まるで千年眼を所有していたころのペガサスのようなことを言っていたが、おそらく依頼されたときにクロノスから色々と聞いていたであろう。

「小僧、なんなら向こう側に居るお前の仲間から闇に消し去ってやつてもいいんだぞ！」

「へっ、誰がそんなことをさせるか。十代達を消させたりなんかさせないさ」

「ヒノキ君が自分でまいた種のくせに、なんかありがたみが薄れるッス」

「細かいことは気にするな、翔。俺のターン！ドロー！」

デュエルを再開させる。

「そしてスタンバイフェイズになった。この瞬間、ロード・ウォリアーに装備された^{フオーリンダウン}墮落の効果で800ポイントのダメージを受けてもらうぜ」

ロード・ウォリアーに纏わりついた黒いオーラがタイタンに降り注ぎライフを削っていく。

「ぬう、これしき」

LP3200

千年パズル（もどき）が光を発する。

「わっ、あいつの右足が消えたッス！」

「え？ 右手だろ？」

「うーん、俺には頭が消えたように見えるけどなあ」

皆、タイタンの肉体のどこかしらが見えなくなるようになった。というか十代は頭が消えたように見えているらしい、相当シユー

ルな光景を見ていることだろう。

「これが闇のデュエルをするということだ。ライフが0になれば闇へと沈む。更にスタンバイフェイズを迎えているこの瞬間、インフェルノクインデーモンの効果も発動する。デーモンと名のついたモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイント上昇させる」

インフェルノクインデーモン ATK1900

「攻撃力が上昇したか。ならば、メインフェイズ！手札からマックス・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

マックス・ウォリアー ATK1800

フィールドに降り立ちマッシュ・ウォリアーの隣に並ぶ。

「ほう。攻撃力が上昇するモンスターか」

「へっ、よく知ってやがる。ならこの後のことも分かるだろう？バトルだ！マックス・ウォリアー、ロード・ウォリアーを呪縛から解放して！」

マックス・ウォリアーがインフェルノクインデーモンへと突撃していく。

「いけるんだな。これでロード・ウォリアーが帰ってくるんだな」

「へっ？　どうということッスか？」

フォーリンダウン
「墮落はコントロールを奪う厄介なカードだけど、デーモンがいない
きや破壊されちまうんだ」

そう、このバトルが成立してインフェルノクインデーモンを倒す
ことが出来れば、タイタンのフィールドからデーモンが居なくなり
フォーリンダウン
墮落は自壊する。

そうなればロード・ウォリアーがヒノキの場に戻ってきてきて有利に
なるはずだった。

「そう簡単にいくと思うな。攻撃宣言時にトラップを発動、リビン
グデッドの呼び声。これにより墓地のジェネラルデーモンを復活」

ジェネラルデーモン ATK 2100

「ちっ、これでフィールドにデーモンが2体……」

「そう、例え片方を倒したとしてもお前のモンスターが呪縛から解
き放たれることはない」

「くっ、だとしてもそのままマックス・ウォリアーでインフェルノ

クインデーモンを攻撃だ！スイフト・ラッシュ！」

マックス・ウォリアー ATK 2200

攻撃力が上昇したマックス・ウォリアーがインフェルノクインデーモンを打ち倒す。

ヒノキはデーモンを強化する効果をもったインフェルノクインデーモンを倒すことを選んだのであった。

タイタンのライフが削られる。

LP 2900

「モンスターを戦闘破壊したことによりマックス・ウォリアーの元々の攻撃力は次の俺のスタンバイフェイズまで半分になる」

マックス・ウォリアー ATK 900

「カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

このターン、ヒノキは結局ロード・ウォリアーを取り返すことは出来なかった。

「私のターン、ドロー。ジェノサイドキングデーモンを召喚」

ジェノサイドキングデーモン ATK 2000

再びフィールドにデーモンが2体になる。

(くそ、これじゃあ……)

心の中で舌打ちをするヒノキ。

例えばヒノキのターンに片方を戦闘破壊しても片方は残ってしまう。これではロード・ウォリアーを取り返すことが出来なかった。

「さて、ではお前のしもべでお前のしもべを消し去ってやろう。ロード・ウォリアーよ、マックス・ウォリアーを攻撃するのだ」

ロード・ウォリアーがマックス・ウォリアーへと飛びかかっている。

「やらせるか！リバースカードオープン！くず鉄のかかし！」

かかしがロード・ウォリアーの前に現れて攻撃を遮った。

「そしてくず鉄のかかしはセット状態に戻る！」

「ほう。ならば今度はジェネラルデーモンで攻撃」

ジェネラルデーモンが手に持つ剣でマックス・ウォリアーを切り裂く。

「くう、マックス・ウォリアーが」

LP2800

ライフが削られたのを確認してタイタンが千年パズル（もどき）を取り出す。そして、千年パズル（もどき）が光を発する。

「消えてゆく、ライフと共にお前の肉体が」

言葉を言い終わると共に光が納まった。

「消えたの右手、だよね？」

「右足、だろ？」

「俺には左足が消えたように見えるぜ？」

「一体、どういうことッスか？」

見えなくなっているものの違いに頭を悩ませる十代達。

ヒノキはというと

（そういえば、あれってどうやって光を出してるんだらう？）
どうでもいいことを気にしていた。

「さて、このままお前のマッシブ・ウォリアーに攻撃しても意味は

ない。私はこのままターンエンドだ」

ヒノキのターン。

「俺のターン！ドロー！そしてスタンバイフェイズ、また墮落フオーリンダウンの効果でダメージを受けてもらう！」

再び、ロード・ウォリアーに纏わりついている黒いオーラがタイタンへと降り注ぎライフを削った。

LP2100

「ぬう」

ライフポイントは逆転した。

ヒノキはロード・ウォリアーをじっと見つめる。

タイタンの場にデーモンは2体、戦闘破壊をしても片方は残りロード・ウォリアーの呪縛は解かれることがない。加えてロード・ウォリアーの攻撃力は3000、このままタイタンの場に居座らせるのは危険。

手札を見る。

（仕方ない、すまないなロード・ウォリアー）

ヒノキは心の中で詫びを入れた。

「俺は手札からターボ・シンクロンを攻撃表示で召喚！」

ターボ・シンクロンATK100

「バトルだ！ターボ・シンクロンでジェネラルデーモンを攻撃！」

ターボ・シンクロンがジェネラルデーモンへと突っ込んでいく。
その光景を見て翔と隼人が騒ぎだした。

「何やってるんスカ！」

「そんなことをしたらやられちゃうんだな」

しかし、ヒノキとしては問題ない。

「小僧、お仲間の言う通りだぞ。ジェネラルデーモンの攻撃力は2100、お前のモンスターでは足元にも及ばん」

「多少の無理は承知の上さ。ターボ・シンクロンがバトルするとき
戦闘対象を守備表示に変更することが出来る！」

ジェネラルデーモンDEF800

ジェネラルデーモンが守備表示になり、そこにターボ・シンクロンが突っ込んでいく。

「くっ」

LP2100

ターボ・シンクロンが跳ね返されて戻ってきた。

「結局、お前は何がしたかったのだ？」

「今に見せてやるさ」

タイタンが不思議そうな声を出す。

事前にヒノキのカードを知っていたとはいえ、まだ今までのデュエルで1度も使っていないターボ・シンクロンの効果は知らないようだった。

「ターボ・シンクロンの効果！ターボ・シンクロンの攻撃によって発生したダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを手札から特殊召喚出来る！」

「何！？それが狙いだっただのか！」

「受けたダメージは700、俺は攻撃力300のレベル・ウォリアーを特殊召喚！」

レベル・ウォリアーが現れ、フィールドに3体のモンスターが並ぶ。

「そしてリバースカードオープン！」

「ぬ、それは1ターン目から伏せていたカード」

「そうさ！トラップカード緊急同調を発動！同調せよ、俺のカード達！レベル2マッシュ・ウォリアーとレベル3レベル・ウォリアーにレベル1ターボ・シンクロンをチューニング！」

ターボ・シンクロンが光の輪を発生させた。

「集いし絆が更なる力を紡ぎだす、光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよターボ・ウォリアー！」

ターボ・ウォリアー ATK 2500

フィールドに降り立ち、タイタンのモンスター達と対峙する。

「すごいッス！コンボで上級モンスターを召喚したッス！」

「しかも、バトル中の特殊召喚だからまだ攻撃が出来るんだな」

「俺は信じてたぜ。ヒノキは面白いことをやってくれるって！いっけー、ヒノキ！」

言われずとも行く気満々だった。

「バトルだ！ターボ・ウォリアーでロード・ウォリアーを攻撃する！」

「馬鹿な、血迷ったか。お前を裏切ったロード・ウォリアーの攻撃力は3000だぞ」

「いや、ターボ・ウォリアーにはある効果が存在する。その効果は普段は全くと言っていいほど機能しない効果だが、お前がロード・ウォリアーを奪ったことでこの効果は機能した！行け！ハイレート・パワー！」

ロード・ウォリアー ATK 3000 ↓ 1500

「何！？どういうことだ！？」

「ターボ・ウォリアーはレベル6以上のシンクロモンスターに攻撃するとき攻撃力を半分にすることが出来るのさ！」

「ぬう」

「眠れ、ロード・ウォリアー。アクセル・スラッシュ！」

ターボ・ウォリアーの手刀がロード・ウォリアーを貫く。

「うおおおー！」

LP1100

奪われたロード・ウォリアーはフィールドから消え去った。

「俺はこれでターンエンドだ！」

状況はヒノキに有利な方へと傾く。

だが、ヒノキとしてはタイタンの手札が多いことが少しだけ気がかりだった。

「私のターン、ドロー」

タイタンの手札は3枚。

「小僧。お前のモンスターの攻撃力は2500、私のモンスターでは太刀打ち出来ない。ゆえに、お前を直接狙うことにしよう」

「ん？プレイヤーだけを狙うだど？」

「私は魔法カード　デイスカバード・アタックを発動。フィールド

のジェネラルデーモンを生け贄に捧げる」

ジェネラルデーモンが光の粒子と化してジェノサイドキングデーモンに吸収されていく。

「このターン、ジェノサイドキングデーモンは直接攻撃することが出来る！」

「くっ」

「行けい、ジェノサイドキングデーモンよ。小僧にダイレクトアタック！」

ジェノサイドキングデーモンの腹が開き、攻撃体勢に入る。

「トラップ発動！くず鉄のかかし！」

「ならばジェノサイドキングデーモンの特殊効果を発動！回れ運命のルーレットよ！」

ルーレットの炎が回り出す。2か5に止まれば無効化されてしまう、確率は3分の1だが、

「っ、しまった」

「ハハハ、ルーレットの目は5。運命は私に味方した」

ヒノキはタイタンがイカサマをすることを忘れていた。

「くらえい！炸裂！五臓六腑！」

ジェノサイドキングデーモンの腹から出てきた無数の虫がターボ・ウォリアーをすり抜けてヒノキに直撃した。

「ぐうつ」

LP100

ディスカバード・アタックの名称は何なんだ？そう突っ込みを入れたくなる。

再び、千年パズル（もどき）を取り出すタイタン。

「そーら、もう体に力が入らないだろう。立つ力すら残っていない」

千年パズル（もどき）が光を発している。

ライフは既に残り少ないからやっているのだろうが、ヒノキはもう限界だった。

「く、くく、あーはっはっはっはっは！」

腹を抱えて笑いこんでしまう。

「何！？何故、まだ立っていられる！？何がおかしい！？」

困惑するタイタン。

「くく、だってなあ。俺には消えているように見えてないからさあ」

実はヒノキは千年パズル（もどき）が発する光を1度としてまともに見ていないのであった。目を瞑ったり、逸らしたりして。

アニメでは千年パズル（もどき）が破損したら、消えた体の一部も見えるようになっていた。ならば、最も怪しい光を見なければいいだけである。

それにヒノキは催眠術のことを多少知っていた。

「タイタン、知っているか？催眠術ってのは心の中で絶対にかからない人っている人には熟練の人でもかけるのは難しいもんなのさ」

「ぬう、催眠術だ！？何を馬鹿なことをほざく。私は闇のゲームを操る闇のデュエリストだ！」

なおも自分が闇のデュエリストであるとタイタンは言い張る。
周りで見ている十代が声を張り上げた。

「だったらタイタン！あんたの持つ千年アイテムそれが何個あるか知っているはずだ！」

「うっ、それは、な、7」

「あ、当たってるッス」

「フッフ、なーなあ」

翔、そんな自信なさげな7に反応するのはどうかと思うぞ？そんなことをヒノキは言いたくなった。

（まったく）

溜息が出そうになってしまう
今度はヒノキが声をかける。

「だったらタイタン。俺も1つ気になることがある」

「何？」

「あんたの持つ千年パズル、パズルっていうからにはその名の通り分解できるんだよね？」

「ぬう……」

「見たところ継ぎ目が無いんだけど、分解できないってことは無いよなあ？」

「くっ、ぬぬぬぬ」

呻きながら歯ぎしりをするタイタン。
どうやら分解は出来ないようであった。

「ええい。私の術と仕掛けが効かないとあれば、これ以上は無意味。さらばだ」

タイタンが千年パズル（もどき）を地面に叩きつけてそこから煙幕が発生する。

（ふう、これで終わり、でいいかな？）

逃げるタイタンを追いかければ本当の闇のデュエルを行うことになってしまふ、ヒノキは尻込みしていた。

「待て！逃げるな、最後までデュエルしろ！ヒノキ、あいつを追うぞ！決着を着けるんだ！」

「って、おい十代！」

十代が駆け出していく。

（くっ、まずい）

仕方なく十代を追いかけるヒノキ。

闘っているデュエリストが居ないのに闇の空間に閉じ込められたらどうなるかわからない、そんな恐怖に駆られてのことだった。

走って前に進んでいくにつれて周囲にある石像の瞳があやしく光っていく。

「待て！タイタン！」

「十代！戻れ！お前は引き返すんだ！」

「なに言ってるんだよヒノキ！そんなことできるかよ！」

「そんな場合じゃないのはこっちも……っ！遅かったか」

「何だ？これは？」

そして、周囲は闇の空間に包まれた。

周囲が全て漆黒に染まった闇の空間、正面にタイタン、少し離れたところに十代が居た。

「何だ！？これは！？本当に闇のゲームがあったというのか！」

タイタンが叫ぶ。

その周囲に闇としか形容できない何かが集まり、タイタンへと群がっていく。

「いやだー！助けてくれえい！」

「くっ」

タイタンの体に群がり、口の中へとどんどん入っていく。
それは直視しがたい光景であった。

（っそうだ、十代は大丈夫か？）

十代の方を見る。

『クリリー！』

「こいつらハネクリボーにおびえているのか？」

十代の方はハネクリボーが何とかしているようだった。

（良かった。原作通り、何とかなっているようだな）

ホッと一息つく。

しかし、それも束の間、ヒノキの方へも闇がじりじりと近づいて
きていた。

「くっ」

「ヒノキ！待ってろ、今そっちに行く！」

十代がヒノキの方へ近づこうとする。しかし、ハネクリボーが居るとはいえ流石に闇に行く手を阻まれて進むことが出来ない。

(まずい、終わったか?)

ヒノキは冷汗を流す。

もはや身動きすら難しいほどに闇は近づいてきていた。体に群がるため飛びかかろうとしてくる。その瞬間

『マ、ターに、づ、なー!』

はつきりとしなない幻聴が聞こえた。

「? ということ、だ? 退いていく?」

闇がヒノキの周囲から退いていく。まるで、何かを恐れるように。

(何かが見えるような……)

ヒノキはじっと前方に目を凝らす。

何かうすぼんやりとした曖昧な影が見えるような気がした。

十代が離れた所から声をかけてくる。

「ヒノキ! 今、お前の目の前に……えーと何て名前だったかな? お前がよく使うカードなんだけど、そのカードの精霊が居るぞ」

『クリクリ』

「は? 精霊?」

ハネクリボーはしっかり見えるが目の前にはぼやけた影しか見えなかった。

『マ、ター、わた、が守、す！だ、ら、マス、一、デュエル、、ば、て、だ、い！』

再び、何かが聞こえる。

(デュエル？、そうだ！)

タイタンの方を見るヒノキ。

「……」

タイタンは俯いたまま立ち尽くしていた。

「タイタン、あんた」

「デュエルを再開するぞ」

「くっ」

タイタンの声の質が少しだけ違う気がする。
闇に取り憑かれてしまったようであった。

「私は強欲な壺を発動、デッキから2枚ドロ。そして手札のシャドウナイトデーモンを召喚」

シャドウナイトデーモン ATK2000

「ターンエンドだ」

タイタンの声にはどこか覇気が無い気がした。
ヒノキのターンになる。

「俺のターン！ドロー！」

カードを確認してからタイタンの手札をよく見る。
タイタンの手札は3枚。

（これなら、このデュエルを終わらせられる）
ヒノキはそう思った。

「手札からエフェクト・ヴェーラーを召喚！」

エフェクト・ヴェーラーがフィールドに現れ、ヒノキに向かって
頷く。

「頼むぞ！レベル6ターボ・ウォリアーにレベル1エフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

光の輪がターボ・ウォリアーを包み込んでゆく。

「シンクロ召喚！光来せよ、ライトニング・ウォリアー！」

ライトニング・ウォリアー ATK2400

（ん？）

ライトニング・ウォリアーがいつもよりも強い輝きを放っている気がした。

頭をブルブルと振る。

（今はそんな場合じゃない）

小さな疑問よりもデュエルを終わらせることの方が先だった。

「そうか！そいっただったら、ヒノキ！決めちまえ！」

「……」

十代が声をかけてくるが、タイタンは一言も発しない。

「任せろ十代！バトルだ！ライトニング・ウォリアーでジェノサイ

ドキングデーモンを攻撃！」

声を受けたライトニング・ウォリアーが右腕を天高くかざし、その手に電光がきらめいてスパークする。スパークしている電撃の残滓が当たるだけで闇が消えていく。

「頼む！ライトニング・パニッシャー！」

そして天にかざしていた右腕を腰だめに構えてジェノサイドキングデーモンへと突撃していく。そして、右腕をジェノサイドキングデーモンに突き出した。

「ぬおおおっ！」

LP700

まき散る電光が当たり周囲の闇が少しずつ晴れていく。
ジェノサイドキングデーモンが爆散する。

「そして、ライトニング・ウォリアーの効果！お前の手札は3枚、よって900ポイントのダメージを受けてもらう！ライトニング・レイ！」

ライトニング・ウォリアーの胸から放たれる閃光がタイタンを包

んだ。

「ううおおおおー！！！」

LP0

そして、タイタンの直撃した閃光が拡散して闇は完全に消え去った。

黒一色だった空間が、元の場所へと戻る。

「……あれ？」

「やったな！ヒノキ！」

「ヒノキ君！アニキ！いきなり消えたりして心配したッス！」

「良かったんだな」

皆が駆け寄ってくる。

「それにしてもビックリしたな、いきなりわけわかんない黒い場所になってよ。全くタネが分からなかったぜ。なっ、ヒノキ！」

「えっ、ああ、そうだな」

思わず生返事をしてしまうヒノキ。

（おかしい、何か違うくないか？）

ヒノキは考えごとをしてしまった。

実際はこんな風に闇が晴れていただろうか？と、ヒノキの頭の中は疑問だらけだった。

ちらりと前の方を見る。

誰も気づいていないがタイタンがこそこそと逃げ出していた。

（まあ、いつか）

ヒノキは疑問を全部放棄する。

誰も闇に呑み込まれることは無かった1人の人間を救うことが出来たのだ、このことで何かが変わってしまったとしてもその時はその時に考えよう、と。

ヒノキはそのまま皆と一緒に廃寮を出ることにした。

帰り道にて。

十代が明日香に写真とカードを渡してから、しばらく歩いたところでヒノキは十代に声をかけていた。

「なあ十代。その近くに浮いてるのって」

透明なハネクリボーを指差す。

「おっ、ヒノキにも見えるのか。俺の相棒だ」

『クリクリ』

自分には精霊が見えたのか、とヒノキは初めて知る事実に対し感動していた。

「ヒノキ、お前の隣にもいるぞ」

『クリ』

「へっ？」

見回してみるが周囲には何も見えない。

「何も見えないぞ？」

「はっ？何言ってるんだ？今、お前の目の前で手を振ってるぞ」

『クリクリ』

「いや、そんなこといわれてもハネクリボーしか見えんぞ？」

「あゝあ、何かいじけちゃったぞ」

「いや、そんなこと言われても」

ヒノキは釈然としない気持ちになった。

「アニキー！ヒノキ君！何やってんスか？変な会話してないで、早く帰りましようよ」

「まあ、とりあえず今は帰ろうぜヒノキ」

「……そうだな」

ヒノキは精霊が見える人の気持ちと見えない人の気持ちを同時に味わった気がした。

第8話 何か色々違う気がするなあ（後書き）

段々と更新速度が落ちてきているという問題、なるべく何とかしたい……

さて今回はタイタンとのデュエルでした話の構成をどのようにするか地味に迷っていて遅くなりました。後はやはりデュエル、デーモンとかほとんど知らないので四苦八苦しました。色々に至らない部分があると思いますがご容赦ください。では、次回に会いましょう。

第9話 《前編》予想してた予想外、勘弁してください（前書き）

時間をかけた割には薄っぺらい内容。本当にすいません。その割には話を分割してます。ごめんなさい。

話の構想は出来あがっているので更新は早めに行いたいと思います。……多分。

それではどうぞ。

第9話 《前編》予想してた予想外、勘弁してください

ドンドンドンドン！！

けたたましい音で目を覚ます。

『開けろ！ここを開けろ！』

ドアの向こうから怒鳴り声。

「ふぁゝあ」

ヒノキは寝ぼけ眼をこする。

（あゝ、確かアカデミア倫理委員会、だったかな？）

ぼけゝ、と働いていない頭でのんびりと事態を把握していく。

その間も断続的にドアを叩く音が聞こえてくる。騒がしいことこの上なかった。

（廃寮でのごと呼び出し、だよな。分かっていたとはいえ面倒だな）

ヒノキはそんなことを思う。多分、何とかなるんだろうけれど面倒なものは面倒である。

朝っぱらからご苦労なことで、とヒノキはそんなことしか感じなかった。

ドンドンドンドン！

ドアを叩く音が部屋に鳴り響く。

「おいしい、皆々客だぞ」

だらけきった声で呼びかけて自身は布団にもぐるヒノキ。
応対する気は全くなかった。
ヒノキの声で十代が起きる。

「うーん、何だ？ やけにうるさいなあ。ヒノキ、どうなってんだ？」

「客だよ、客。応対は任せたぞ」十代

「客？ こんな朝っぱらからか？」

「そうそう。じゃ、よろしく頼む」

ヒノキは無責任にも十代に全て投げた。

（十代に任せておけば大丈夫だろ）

そんなことを思っ

て。ヒノキは布団の中でまどろみに身を任せることにした。

布団の中でぬくぬくとしながら、音だけが耳に入ってくる。

ドンドンドンドン！

『開けろ！ここを開けるんだ！』

「あゝ、はいはい。ちょっと待ってくれよ」

律儀にもしっかりと応対する十代。

だが、声が小さかったせい、ドアを叩く音が途絶えることは無い。乱暴にドアを叩く音が次第に強くなっていく。

『開けろ！速やかに開けなければこの扉を爆破する！』

「ばくは、バクハ、って爆破！？ちょ、ちょっと待ってくれ！」

まるでどこぞの軍曹みたいなことを言うなあ、とヒノキは思った。十代が扉を開ける。

ヒノキは布団の中で見て見ぬふりをしていた。まだ眠いのである。昨夜は廃寮に行ってデュエルをしてきたせいで就寝時間が遅かったのだ。こんな朝早くに起きるのは冗談ではなかった。

まどろみの中、声が聞こえてくる。

「遊城十代、並びに丸藤翔、柳ヒノキ、前田隼人、この部屋に居るもの全員こちらに来い」

ヒノキは一気に目が覚めた。

（えっ？何で皆？）

何か台詞変わってない？とそんなことを言いたくなる。

自分の名前が呼ばれるのは覚悟していたが隼人まで呼ばれるのは予想外だった。

とりあえず布団から出て、全員で扉の方へと向かう。

「首謀者の遊城十代と柳ヒノキだな」

「は？首謀者？」

「へ？何で俺も首謀者なの？」

「調べはついている。お前たちを査問委員会に連行する」

「もしもーし、スルーですかー？」

というわけで、この部屋に居る住人は堅苦しい服を着たいかつい人たちに連行されていた。

（最近、スルーされる割合が多い気がする……）

ヒノキだけはそんなことを考えながら。

査問委員会。

大きなモニターに校長、クロノス教諭、倫理委員長の顔がどアップで映し出されている。

その中心で、まるで被告人のようにヒノキたち4人は立っていた。

「「「ええっ！？退学ー！？」」」

ヒノキ以外の全員が声を揃えて驚愕の声を上げる。

正直、予測できていた事態だったのでヒノキだけは皆の後ろでのんびりあくびしていた。

「本日未明。遊城十代と柳ヒノキの主導でお前たち以下4人が閉鎖され立ち入り禁止区域とされた特別寮に入りこみ内部を荒らした。調べはついている！」

どうやって調べたんだろうね？素朴な疑問を心の中で呟く。

（やっぱりクロノスがチクったんだろうか？）

そんなことを思うが別にどうでもよかった。

どうやって調べたのか？なんてことが分かっててもこの状況は何1つ改善しないのだから。

「何でも言うこと聞くからチャンスくれよ！」

十代が下手に出て頼み込む。

この状況を見ると、入学初日にやったガードマンとのデュエルを思い出した。

（そうだよね、実際こんな状況になったらなりふり構ってられないよな）

まるで事態に関係のない第三者的な視点でヒノキは傍観する。

事態の行く末が予想できるので喋る気は無かった。

「ならば、別のペナルティを提案するーノ。それは制裁タッグデュエル」

「制裁タッグデュエル？」

「ふあゝあ」

「ヒノキ君、マイペースススね」

「気にするな」

クロノスが言葉を続ける。

「遊城十代と丸藤翔、柳ヒノキと前田隼人でタッグを組んでデュエルするーノネ。デュエルに勝ったら無罪放免ーナノネ」

「タッグデュエルか。面白そうだな」

「ええゝまずいッスよアニキ」

「ヒノキ、俺達でタッグを組むってどうするんだな？」

「大丈夫、大丈夫。何とかなるって……多分」

能天気言い放つヒノキ。

心の中で、このために4人全員を呼んだのか、と納得していた。

「校長。本人たちも納得したようでースが？」

「うむ、ならば仕方あるまい」

「負けたら即退学！制裁タッグデュエルの対戦相手はおって私から発表するーノネ！」

というわけで解散になった。

（そういや結局グラサン先生しゃべんなかったな……）

グラサン先生も一応モニターに映っていたが結局一言も言葉を発さなかった。

レッド寮に帰ってきて、翔が喚いていた。

「僕がアニキとタッグを組むなんて無理だよー！ヒノキ君、変わってくれよー！」

「いや、俺と隼人、十代と翔で固定らしいから変更は無理だぞ」

「翔、きばるんだな！俺もきばる！」

「はぁー、何でこんなことになっちゃったんだろう……アニキとヒノキ君でタッグを組めば絶対に勝てるのに」

「いや、お前と十代のタッグでも絶対に勝てるさ」

「うう、そんなことないッス……僕じゃ絶対にアニキの足を引っ張っちゃうッス」

「あはは、は」

まさか確定事項だから絶対に勝つよ、なんてことは言えない。
むしろヒノキとしては自分と隼人のタッグが心配だった。

退学のかかったイレギュラーでのデュエル。

絶対に負けることは出来ない。

タッグパートナーは名指しで変更不可。今頃クロノスは翔が十代の足を引っ張って、隼人がヒノキの足を引っ張ることを期待していることだろう。

「隼人、絶対に勝とう。タッグデュエルにさ！」

「うん、俺も絶対に勝ってこの学園に残りたいんだな！」

勢いよく頷く隼人。気合は十分だった。

「へー、2人ともやる気満々だな。俺たちも頑張ろうぜ、な！翔」

自分のデッキを調整しながら十代が翔に声をかける。

「うう、アニキもヒノキ君も隼人君も元気ッスね……皆、タッグデュエルやったことあるんスか？」

「無いぞ、だから面白いんじゃないか！」

「俺も無いんだな。でも、頑張らないと退学になっちゃうんだな」

「うーん、無いといえば無い、のかな？」

1人だけ煮え切らない返事を返すヒノキ。

(TFとか随分やったけど、あれはやった内に入らないかな？)

そんなことを考えながら。

皆の様子に翔が呆れたように溜息を吐く。

「皆、何て無茶苦茶なんだ……怖くないんスか？負けたら退学なんスよ！」

「勝ちゃいいんだよ、勝ちゃ。まだお前のデッキ特性もなんにも知らないし、まず腕試しにデュエルというじゃねえか」

そう言ってデュエルに誘う十代。

(やっぱ、結局はデュエルなんだなあ)

そんなことを思う。

「ヒノキ、俺たちはどうするんだな？」

「ん？」

十代の方を眺めていたら隼人に声をかけられる。

「俺たちもデュエルをした方がいいのかな？」

「うーん、そうだな。じゃ試しに……って、あ」

言葉を止める。ヒノキは途中で気がついた。

（そういえば、今の隼人のデッキって……）

そう、ただのコアラデッキである。

確か、隼人の父親がやってきて退学をかけたデュエルをするためにデッキを強化するまではコアラばかりが入ったデッキのはずであった。

「やっぱり今日は翔と十代のデュエルを見ることにしようぜ」

「うん？よくわからないけど、そういうことなら今日は止めとくんだな」

翔と十代のデュエルを観戦することに決める。

とりあえず隼人のデッキが強化されてから色々と考えることにした。

皆で寮を出て崖下へと向かう。

隼人の背中を見ながら移動するヒノキ。

（あれ？　そういえば隼人は退学をかけたデュエルを2回もこなすことになるのか）

少し、申し訳ない気分になった。

第9話 《前編》予想してた予想外、勘弁してください（後書き）

今回、久しぶりにデュエル無しな内容。ちょっとばかりデュエルが無い話が続くかもしれません、本当に申し訳ない。

いきなり文字数が少なくなったので短く感じたかもしれませんが
ご容赦ください。それでは

第10話《中編》あの人の気持ちがいさなかつた気がする（前書き）

中編です。今回も少し内容は薄いです。

後編も出来るだけ早く出そうと思っています。……出来たら。

それではどうぞ

第10話《中編》あの人の気持ちが少しわかった気がする

晴れ渡る青空の下。

ヒノキは木陰でボケーと空を見つめていた。

制裁タッグデュエルが言い渡されてから1日経過している。

崖下で行われた翔と十代のデュエルは良くも悪くも原作通りだった。今頃、十代はカイザーにデュエルを挑むために図書館でデュエル許可願いを作成していることだろう。

パートナーの隼人はまだコアラデッキのままだし、ヒノキはやることが無かった。

「はぁ」

ただボケーと空を見続ける。

本日は雲1つない快晴、気温も暑すぎず寒すぎず心地よい。このまま寝てしまうのも少しばかり魅力的に思えた。

心地よい風が木陰で寝そべるヒノキの体を通り過ぎる。

（本当に寝るのもいいかもしれないな）

心の中で苦笑した。

ふと思いついたようにデッキケースからデッキを取り出す。

「精霊、か」

ヒノキには少しばかり考えたいことがあった。
そのせいで否が応でも目が冴える。

『カードの精霊』

十代は居ると言っていたが、ヒノキにはその姿が視認できなかった。

（なんでなんだろうなあ……）

本当によくわからない。ハネクリボーは見えるというのに。

あの闇の空間で十代が言っていた。

『ヒノキがよく使っているカードなんだけど、その精霊が居るぞ』
と、確かそんなことを。

「よく使うカード、ねえ」

色々と考えてみる。

スピード・ウォリアー、クイック・シンクロン、チューニング・サポーター、精霊が居るとしたらこれらの内のどれかかもしれない。意外にエフェクト・ヴェーラーをよく使っていることにも気がついたが、絶対に違うと心の中で否定した。こういった可愛い感じの精霊が自分の近くに居るわけがない、と。

いくら考えても所詮は推測の域を脱することは無い。

やはり、もやもやとした感じが心の中に残った。

「そういえば、あるゲームで言ってたっけ……」

記憶を掘り起こす。

『精霊は居ると信じる心があればどんなところにだって存在するし、

どんなものにも宿っている』

ならば自分は精霊の存在を信じていないのかもしれない、自分では信じているつもりであったが本当はどこかで精霊の存在を否定している自分が居るのかもしれない、とそんなことを思った。

「くだらないな」

本当にくだらない。

ヒノキはデッキをデッキケースにしまった。

いくら考えても答えなんて出やしない。

ヒノキは再びボケーとすることにした。もしかしたら今も近くで精霊が何かをやっているのかもしれないが。

「ごめんな」

独り言を呟いて、また綺麗な青空を眺めることにした。

.....

少し時間が経過する。

遠くの方から足音が近づいてきた。

「さがしたぞヒノキ」

視界にいきなり雪の顔が入ってくる。

とりあえず体を起こすヒノキ。

「どうしたんだ？」

「聞いたぞ、制裁タッグデュエルの話」

そう言って雪が隣に腰を下ろす。

一体、誰から聞いたのだろうか？と情報ソースを疑いたくなった。
雪が言葉が続ける。

「廃寮に行ったらしいな」

「ああ」

「……なんで、私も誘ってくれなかった？」

「へ？」

ヒノキは思わず意味のない呻きを洩らした。

雪の声が弱弱しく不安げになっている。

「校則違反は褒められたものじゃない、それは分かっている。でも、やるなと禁止されていることはやりたくなるものだ、仕方ない。私たちは友だろう？そういったことも出来ればなるべく一緒に過ごしたかった」

「うん、その、何とかすまないな」

「謝らなくてもいい。今、君は退学の危機に立たされている。その危機に友である私が何も出来ない、応援することくらいしか出来ないことがつらいんだ」

「……」

ヒノキは思わず言葉を無くしてしまう。

雪の言葉はストレートだった。

着飾った言葉なんか一切ない、自分の気持ちを偽りなく伝えてくる。

すごく純粹だな、とヒノキはそう感じた。

雪がヒノキの瞳を覗きこむ。

「ヒノキ、私はこんな形で君と別れたくない」

第3者が聞いたら告白と勘違いしそうな台詞だった。もっともそんな人間はこの場には居ないが。

「絶対に勝って欲しい。私はもっと君と仲良くなりたい、大切な友を大切にしたいんだ。それに、まだ私は君との再戦をしていないからな。君は私のライバルでもあるんだ」

最後まで真剣な表情、真剣な瞳、真剣な声音で言いきった。

「く、くくく」

ヒノキは思わず視線をそらして笑ってしまふ。

「む、何故笑う？ 私は正直な気持ちを言っただけだぞ」

「いや、気にしないでくれ」

「むう」

ほんの少し釈然としない表情をする雪。

正直な気持ちを言っただけ、らしいが何でもかんでも正直に言いすぎな気がした。

「雪、心配しなくても俺は負ける気なんか一切ないさ」

「む、そうか。それは頼もしいな。私は応援することしか出来ないが絶対に勝ってくれ」

「ああ、まかせといてくれ」

自信満々に断言する。

ヒノキとしてもこんなところで退学になる気はさらさらなかった。

姉貴と一緒に過ごす灰色学園ライフなんてごめんこうむる。

「……ふむ、そうだな」

雪が突然ポツリと呟く。

「私は決めたぞ、ヒノキ」

「何を？」

当然の疑問。

いきなり主語を抜いて話しかけられても分かるわけが無かった。
雪が立ち上がる。

「これからはなるべく君と一緒に居る！ 私たちは友だ、拒否権は無いぞ！」

こちらを見下ろしながらビシッと宣言をしてきた。

反応に困る。

いきなりそんなことを言われても何を言えいいのか分からない。

「あゝ、その暇なのか？」

「いや、私が君と居たいから一緒に居る。ただそれだけだ」

「え〜と……」

言葉に迷っていたらPDAに着信が来た。
これ幸いとヒノキはPDAをチェックする。

『ヒノキ！翔が居なくなっただ！』

（あつ、もうそんな時間なんだ）
心の中で呟く。

「むっ、君のルームメイトが居なくなっただのか」

雪がヒノキのPDAを覗きこんだ。

「悪いな。まあ、そういうことだからちよつと探しに行ってくる」

「む、何を言ってるんだ？もちろん私も行くぞ」

「もちろんって……」

「私はなるべく君と共に居ると決めたからな」

「あゝ、まあとりあえず探しに行くか」

「うむ」

ヒノキと雪は翔を探しに行くことにした。
道中で雪がヒノキの隣にある何もない空間を少しだけ見つめる。

「……ふむ」

「どうかしたか？」

「いや、何でもない」

ヒノキは少しばかり怪訝な表情をしながら翔を探しに行った。

結論から言うと翔はすぐに見つかった。

アニメで見たせいで大まかな場所を把握していたのだから当たり前だが。

「ふむ、確か翔といったか。君の友人は一体何をしようとしているんだ？」

イカダに乗っている翔を見て雪が疑問を投げかけてくる。

「さあ？不可能にでも挑戦しようとしてるんじゃないかな」

実際に見ていると本当に何がしたいのかよくわからなかった。

普通、イカダで海は渡れない。

むしろヒノキとしては翔1人でイカダを作ったということの方が驚きだった。

「早くしないと晩御飯が無くなっちゃうんだな」

近くに居る隼人が呟く。

確かにもうかなり遅い時間だった。

十代が翔の乗っているイカダに飛び乗る。

「あっ、イカダが……」

「むっ、意外とあっさり壊れたな」

作り方が悪かったのであろう、イカダは海の藻屑と化した。

「助けて！僕、泳げない！」

「バ、バカ！しがみつくな！沈む〜！」

十代と翔がバタバタやっている。

ここは底が見えるくらい浅瀬なのだが。

「ヒノキ、君のルームメイトは何をやっているんだ？」

「う〜ん、コント、かな？」

「の、のんびり話している場合じゃないんだな！翔、十代ー！」

隼人が飛び込んでゆく。

しつこいようだが浅瀬である。

「あっ、浅い」

ヒノキと雪は2人だけ静かに状況を見ながら立っていた。

「……ふむ、私たちも飛び込んだ方がいいのだろうか？」

「いや、別に問題ないと思うぞ。服が濡れるだけだしさ」

のんびりと会話する。

思い切り傍観者のような立ち位置であった。むしろ、この場に居なくても何1つ問題ない気がする。

「このまま行かせてくれよ、アニキ。僕のことはいから別のパートナーを探して、アニキだけでも退学を免れてくれよ」

「つべこべ言うんじゃない！俺は決めたんだ、パートナーはお前だ！」

「でも今の僕じゃ」

パートナーが居なくなったら不戦敗になる気がする、ヒノキはそんなことを言いたくなった。

じれったくなったのか十代がこっちを振り向いて協力を要請する。

「皆からも何か言ってくれ！」

「翔、早くしないと晩御飯が無くなっちゃうんだな！」

「あゝ、海に出るんだったらイカダよりボートを拝借した方がいいと思うぞ」

「むっ、私もか？……ふむ、海に出るのだったら食料を積まないと餓死するのではないか？」

「……うう、みんな」

「翔、皆もこう言ってんだ！一緒に帰ろうぜ！」

「うう、むしろ帰る気無くなったッス。皆、本当に僕を探しに来たんだよね？」

どうやら失敗したようであった。ほぼ当然の結果である。

「逃げるのか？翔」

上の方から声が聞こえてくる。

（まるで良かったようなタイミングだな）
なんてかっこいい登場のしかたなんだ、ヒノキはそう思った。

「お、お兄さん」

「逃げ出すのか？」

「そ、それは」

「それもいいだろう」

カイザーが翔から顔を背ける。

「おい、行っちゃうってよ。あんたの弟」

「仕方ないな」

わざと冷たい言葉を選んで言っている、ヒノキにはそんな風に思えた。

そうすることで翔が反発してアカデミアに残ることを選択してくれるように。

（カイザーはすごく弟思いな兄貴だな）

勝手にそんな感想を抱いた。

「せめて餞別でもあげてやらないか？俺とカイザー、あんたのデュエルで！」

「君とデュエル？面白い、いいだろう」

十代とカイザーがデュエルをすることが決まった。

「……あっ」

ヒノキは出るタイミングを逃した。

「む、どうかしたかヒノキ」

「早く行かないと置いていかれちゃうんだな」

傍観者と化していた2人に急かされる。

「ああ、悪い。今、行くよ」

デュエルのために皆で移動をする。

ちなみに十代とカイザーのデュエルは見ごたえのあるものであった。

〈精霊たちの会話〉

夜の寝静まったレッド寮の部屋で精霊たちは語り合っていた。

『ひどいんですよ。マロンちゃん、マスターがわたしのことを無視するんです』

『クリクリー』

元気を出せ、とハネクリボーが肩を叩く。

クリクリと言う声を出すから『マロン』と呼ばれているようであった。

『今日だって頑張ってマスターにいっぱい話しかけたのに全然気づいてくれないんです……』

『クリッ！』

『うう、わたしってマスターに嫌われているのかな』

いじけて床にのの字を書き始めてしまう。

『クリ！クリクリッ、クリー！』

『そんなことを言われても……それにわたしってマスターに見えてないみたいだし』

会話が成立している。

おそらく励ましの言葉でも投げかけられたのであろうが、未だにいいいじしていた。

『頑張って大きな声で話しかければちよつとは聞こえるはずなのに』

『クリッ！クリー！』

『うう、そうですね。こんなことで挫けてちゃいけませんよね!』

『クリリ〜♪』

急に元気になってガバツと立ち上がる。

『うん、明日からも頑張ってマスターにいっぱい話しかけちゃいます!』

『クリ〜♪』

ハネクリボーが短い手で一生懸命拍手をした。
どうでもいいことだが、既に深夜0時を過ぎているので明日ではなく今日である。

『ファイトツ、お〜! 頑張れ、わたし!』

『クリ! クリリ〜!』

当然のことながら誰にもこの会話を聞こえていない。
この会話以外はいびきがこだまするだけであった。

第10話《中編》あの人の気持ち少しわかった気がする（後書き）

次回デュエル。

頑張って書いていこうと思います。

今回、キャラによって一人称が被ってしまうので文字によって差別化してみました。でも、ひらがなの方が雰囲気に合わせていると僕としては思います。

何の精霊なのか正式名称は書いていませんが、まあ誰でも分かるでしょう。

それでは次回にて

第11話《後編》それ、反則な気がする（前書き）

後編、これではようやくラストです。

それにしてもタッグデュエルは少し長くなってしまふ。今回、デュエルがある割には意外と早く書くことが出来たと自分では思っています。

それではどうぞ。

第11話《後編》それ、反則な気がする

制裁タッグデュエル当日。

ヒノキ達4人はデッキの調整を行っていた。

父親とのデュエルのために隼人のデッキが強化されたので、ヒノキは隼人と念入りにデッキを調整している。ちなみにヒノキは古のルールを隼人に提供したのだが、全く使われなかった。

「うーん、俺のデッキはこんな感じでいいんだな」

隼人が最終デッキ調整を終える。

「うーむ」

「ヒノキの方はどうなんだな？」

「えーと、ちょっと待ってくれ」

パラパラとタッグ用に調整したデッキのカードを確認するヒノキ。

「ん、あと1枚か」

どうしようか？

ヒノキは少し困りながら床に置いてある自分のカードをちらりと見る。

「……このカードは」

ある1枚のカードに目が止まった。

（いいかもしれないな）

デッキにそのカードを入れる。

「よし、俺もこれでOKだ」

ヒノキもデッキ調整を終えた。

カードを片づけてデッキをデッキケースにしまう。

「隼人、今日は絶対に勝とうな」

「うん、頑張るんだな！」

隼人もヒノキの言葉に同意した。

退学になる気など更々ない。

ましてや隼人にいたっては父親との退学をかけたデュエルを経て
いるのでその思いもひとしおだった。

準備が完全に整ったので、今度は十代と翔の方に視線を向ける。

「すゝ、はゝ、うう、緊張するなあ」

「翔、そんなに難しく考えんなよ。はじめてのタッグデュエルなんだ、楽しまないと損だぜ？」

「もうアニキったら……今日のデュエルは勝たないと意味ないんだよ？」

「楽しんで勝てばいいんだよ。きっと面白いデュエルになるって」

十代と翔はデッキ調整も終えて、のんびりと会話していた。
時間を確認する。

「ふむ、十代！翔！そろそろ行かないか？」

「おつ、デッキの調整は終わったのか？ヒノキ」

「ああ、バッチリさ」

自信満々に頷くヒノキ。

デッキはとても満足のいく調整が出来た。
翔が近くで深呼吸をしている。

「うう、やっぱり緊張するッス」

「翔、頑張るんだな。勝たないと退学になっちゃうんだな」

「……隼人君、足ふるえてるよ？」

「こ、これは武者震いなんだな！」

翔と隼人の様子に苦笑した。

2人とも緊張しすぎである。

「うう、アニキとヒノキ君はいつも通りッスね。アニキはさっき聞いたからいいとして、ヒノキ君は緊張しないんスカ？」

「ハハ、やる前から緊張なんかするわけないだろ。やるときになつてから緊張するかどうか考えるさ」

「ヒノキ君、意味分かんないス」

「うーん、そうかねえ。まあそんなことはいいからそろそろ行くことにしようぜ」

「それもそうスね」

「よっしゃ、それじゃあデュエルしに行こうぜ！くうー、燃えてきたー！」

「が、頑張るんだな」

そしてヒノキたちはデュエルに向かうことにした。

『限界バトルたたきつけて〜♪』

しかし、出鼻をくじかれる。

「ヒノキ、携帯が鳴ってるぞ？」

「悪い、ちょっと待ってくれ」

このタイミングで誰だよ？

ヒノキは心の中で悪態をつきながら携帯にでる。

「もしもし？」

『ヒノキッ！聞いたぞ、あんたアカデミアを退学になるんだってね！』

「姉貴か……」

一体どこから聞いたんだ、と小一時間ほど問い詰めたくなった。それにしても声が大きい。

近くに居る十代や翔、隼人の3人にも会話の内容が筒抜けであった。

「切っていいか？」

『うん？失礼な奴ね、小さな頃から一緒に居るお姉ちゃんを邪険にする気？そんな風に育てた覚えはないぞっ』

「……うん、切ろう！」

『って、ちょっと待ちなさい！全く、あんたって奴は……ちょっと会わないでいるだけでこんなにも心が離れていくものなのね』

「姉貴、悪ふざけはもういいって。いい加減、本当に切るよ？」

『だから姉貴じゃなくて私のことはお・ね・え・ちゃ・ん、と呼びなさいって！……もう、ちょっと横道にそれただけじゃないの』

「……はあ」

横道にそれ過ぎである。

ヒノキは頭を抱えなくなった。

一体、何の用があるというのだろうか？疑問は尽きない。加えて言うところのままで遅刻してしまう。

少しばかり辟易とした。

「で？」

『ああ、そうそう忘れてた。オホン……ヒノキ！あんた退学になるんだってね！』

「その台詞はさっき聞いた」

『あれ？そうだったけ？まあ、そんな細かいことは気にしないでいいの』

適当なことこの上ない。

『で、どうなの？あんた退学になるの？』

「今からそれを決めるデュエルをしてくるんだよ」

『ふーん、何でもデュエルで決めるってことね。それじゃあ、あたしはあんたを迎えに行く準備をしないとね』

「姉貴、話をちゃんと聞いてたのか？」

『ふっふーん、どうせあんたが負けるんだから関係ないの』

なんとも失礼な物言いであつた。

少しイラッとくる。

しかも姉貴はどことなく上機嫌である。

『んっふっふっふ、これでもう少ししたらあんたと一緒に過ごす幸せな学園生活が始まるのね』

「始まらないって、そんな灰色な学園生活」

『大丈夫、勉強はあたしが教えてあげる』

会話のキャッチボールが地味に成立しない。

姉貴はヒノキが退学になることを信じて疑っていないようであった。

『ふふん、そもそもアカデミアに入学出来たことが何かの間違いだったの。ちゃんと荷造りして編入試験に備えなさいよ。あっはっはっは』

「だからデュエルに勝てば退学にならないって」

『無理無理、負けるに決まってるって。大丈夫、退学して落ち込んでもあたしが慰めてあげるから。それでおとなしくあたしにこき使われるの。くくく、あっはっはっは！』

「……」

ヒノキは黙って通話を切った。

ついでに電源も切ってポケットにしまう。

姉貴の笑い声はかなり癪に障った。

「気にすんなって、ヒノキ。デュエルはやってみなきゃわからねえぜ」

十代が声をかけてくる。

まったくもってその通り、姉貴にも同じ台詞を言ってやりたい。
ヒノキは引き攣った顔をしていた。

「ふ、ふふふふふ」

怪しい笑いが零れる。

「うわあ、こりやかなり頭にきてるなあ」

「無理もないッス。それにしてもすごいお姉さんだったッスね」

「家族じゃない。近所に住む1つ上の幼馴染だ」

「そ、そうなんスカ……ヒノキ君、声に抑揚が無くて怖いッス」

「気にするな」

「ヒ、ヒノキ大丈夫か？」

あまり大丈夫では無かった。

「さあ、皆！さっさとデュエルしに行くぞ！」

馬鹿みたいに声を張り上げる。
ストレスでも発散するかのよう。

「あはは、は……おいヒノキの奴、何かやべえ顔してるぞ」

「こ、こわいッスね」

「今度からヒノキはあんまり怒らせない方がいいんだな」

「おう」

「そうッスね」

三人がしきりに頷きあう。
ヒノキはとても悪どい笑みを浮かべていた。

「何してるんだ？早く行かないと遅刻になるぞ」

「悪い、すぐ行く」

「さ、逆らわない方がいいんだな」

「うん」

そして4人は制裁タッグデュエルへと向かうことにした。

（負けられない、絶対に負けられない）

ヒノキは心の中で呪詛のように呟き続ける。

あれだけ勝てるわけがないと言われて、本当に勝てなかったらただの笑いものであった。

観客席。

デュエル場では十代と翔のタッグが最後の攻防をしている。

ユーフォロイド・ファイターATK8000

「アニキが身をもって気付かせてくれたんだ。たとえば戦闘で倒せなくてもダメージは通る！フォーチュン・テンペスト！」

ユーフォロイド・ファイターが蒼く輝く光線を放つ。

「ぬおおおーッ！！」

LPO

ダーク・ガーディアンを貫通した衝撃が迷宮兄弟のライフを全て奪い取った。

「やったんだな！十代と翔が勝ったんだな！」

「ふむ、攻撃力8000か。すごいな」

ヒノキの隣りに居る2人が声を上げる。

（ユーフォロイド・ファイターって、融合素材によって乗ってるモンスターが違うのかな？）

もし、そうだったら見てみたい。

ヒノキは至極どうでもいいことを考えていた。

次はヒノキと隼人の番。

「よし、じゃあ隼人そろそろ行くぞ」

「うん、わかったんだな」

隼人と共に席を立つ。

「むっ、ヒノキもう行くのか？」

「ああ、絶対に勝つさ」

「そうか、何だか今日の君はギラギラしているな」

ガラガラってなんだろうか？

ヒノキは雪の言葉に首を傾げた。

「ヒノキ！早く行かないと遅れちゃうんだな！」

隼人に急かされる。

「悪い、雪。そういうわけだから行ってくる」

「うむ、頑張ってくれ。私は応援しているぞ」

「ああ、ありがとう」

隼人の方を向く雪。

「隼人と言ったか、君のことも応援しているぞ。ヒノキと共に頑張ってくれ」

「な、何か照れるんだな」

隼人の顔が赤くなる。

（隼人の奴、風邪か？）

そんなことを思いながら、ヒノキは隼人と共に観客席を離れてデュエル場へと向かった。

迷宮兄弟が目の前に立っている。

十代達に引き続き、同じ相手がデュエルをするようであった。

「では引きつづーき、柳ヒノキと前田隼人ペアの制裁タッグデュエルを行うノーネ！」

クロノスがデュエルの説明を始める。

ライフポイントは共通で8000、フィールドは共用。

「隼人、絶対に勝つぞ」

「うん！絶対に勝って十代達と一緒にオシリスレッドの部屋に帰るんだな！」

「我らをそう簡単に打ち負かすことが出来ると思うな」

「先程は不覚をとったが、我ら流浪の番人 迷宮兄弟」

「「タッグデュエルの真髓を教えて差し上げようぞ！」」

どうでもいいがハモるのは止めていただきたい。

ヒノキは本当にどうでもいいことを言いたくなった。
全員がディスクを構える。

「」「デュエル！」「」

退学をかけたタッグデュエルが始まった。
1ターン目は隼人から。

「俺のターンなんだな。ドロー！」

手札を見て隼人が少し悩む。

（頼むぞ、隼人）

ヒノキは心の中でエールを送った。

「よし、まずはこいつを攻撃表示で召喚するんだな！デスコアラ
を召喚！」

デスコアラ ATK1100

ヒノキはずっこけた。
会場内がどよめく。

『あっちゃ、隼人の奴またやっちゃまいやがった』

『隼人君、お父さんとのデュエルと同じことをやっちゃったッスね』

『ふん、バカめ。たかが知れるな、これで忌々しい柳ヒノキの奴も終わりだ』

『ふむ、何かの作戦だろうか？』

かなり散々な言われようであった。
ちなみに当然のごとく何の作戦でもない。

「は、隼人……お前って奴は」

「あつ、またやっちゃったんだな。興奮しすぎて忘れてたんだな」

フィールド場でやる気満々なデス・コアラが哀愁を誘っていた。

「ふはははは、リバーズモンスターを攻撃表示とは」

「恐れ入る」

「「この未熟者が！」」

迷宮兄弟が隼人を嘲るように笑う。

本当にハモるのは止めてほしい。

「……これでターンエンドなんだな」

意気消沈とした様子の隼人がエンド宣言をした。

「私のターン、ドロー！カイザー・シーホースを召喚してターンエンド」

カイザー・シーホース ATK1700

「俺のターン！ドロー！」

ヒノキはちらりと隼人の方を見る。
（こりゃフォローしないと駄目だな）
どよよん、という擬音がびったり当てはまるほど落ち込んでいた。

「隼人、デス・コアラを使わせてもらうぞ」

「えっ？」

「手札からデブリ・ドラゴンを召喚！そして、通常召喚に成功しているためワンショット・ブースターを特殊召喚！」

フィールドに3体のモンスターが並ぶ。

「レベル3デスコアラとレベル1ワンショット・ブースターにレベル4デブリ・ドラゴンをチューニング！」

デブリドラゴンが発生させた4つの光輪に2体のモンスターが入っていった。

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

『ギャオオオオーーッ！』

フィールドに舞い降りて咆哮を轟かせる。

「むう、シンクロ召喚」

「タッグパートナーのモンスターを使い強力モンスターを召喚するとは」

呻きを洩らす迷宮兄弟。

「へっ、シンクロ召喚はレベルを合わせなきゃいけない性質であるがゆえに素材となるモンスターは全て表側表示でなければならぬ。隼人はこのためにデス・コアラを攻撃表示で召喚したのさ」

「へっ？」

「なっ、隼人！」

隼人にアイコンタクトを送る。

「あっ、その通りなんだな。作戦通りなんだな」

これで一応の取り繕いが出来た。

このタグデュエル、1ターン目は誰も攻撃できないので片方のフィールドががら空きでも何の問題もない。

これはタグデュエルなのだ、パートナーの失敗はパートナーが取り返せばいい。

「成る程、ぬしらもタグデュエルの真髓が」

「少しは分かっているようだな」

案の定、迷宮兄弟はヒノキの言い分を信じていた。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「ヒノキ、ありが」

「気にするな。その先は言わなくていい」

迷宮弟のターンになる。

「ドロー！ 兄者、使わせてもらう。カイザー・シーホースを生け贄に捧げる」

「カイザー・シーホースは光属性モンスターを召喚するとき2体分の生け贄とすることが出来るのだ」

カイザー・シーホースが光の粒子となりフィールドから消える。

「雷魔神・サンガを召喚！」

雷魔神・サンガ ATK2600

「すまない、兄者」

「なにお前のためだ、犠牲にもなろう」

「いや、礼をせねば私の気がすまぬ。魔法カード闇の指名者、宣言するのは水魔神・スーガ」

「ふふ、ありがたい。もちろん私のデッキにそのカードはある」

水魔神・スーガを手札に加える迷宮兄。

（その使い方は本当にやっていいのか？）

反則じゃないのか、とそんなことを言いたくなった。

「私はこれでターンエンド」

隼人にターンが回る。

「俺のターン、ドロー。このカードは……ヒノキ！お前から貰ったカードを使わせてもらうんだな！」

「ん？あのカードか。よし、いけ！隼人！」

「魔法カード古のルールを発動！手札のレベル5以上の通常モンスター、ビッグ・コアラを特殊召喚するんだな！」

ビッグ・コアラATK2700

「更に手札からコアラッコを攻撃表示で召喚」

コアラッコATK100

2体のコアラがやる気満々でフィールドに現れる。
少しシュールな光景だった。

「コアラッコの効果を発動。エンドフェイズまで雷魔神・サンガの攻撃力を0にするんだな！」

雷魔神・サンガATK0

「ぬう、サンガの攻撃力が」

「さっきのデュエルよく見てたんだな。ゲート・ガーディアンは召喚させないんだな！まずはコアラッコで攻撃！」

コアラッコが手に持つ貝を投げつける。

「くっ、サンガ！リフレクションだ！」

投げられた貝は雷の壁に阻まれた。

「こうなることはわかってたんだな。でも、その効果が使えるのは1回だけなんだな」

「ぬう」

「いっけー！ビッグ・コアラ！必殺ユーカリボム！」

ビッグ・コアラが突進していき雷魔神・サンガを押しつぶす。

「ぬおおおー！」

LP5300

大幅にライフを削ることに成功した。

「ナイスだ、隼人！」

「俺も失敗してばかりじゃないんだな」

おそらくデス・コアラの失敗で頭を冷やしてよく考えたのだろう。

フォローしたかいがあった。

「ぬう、サンガが倒されるとは」

「中々やる」

迷宮兄弟が呻く。

雷魔神・サンガを倒されたのはかなり痛いようであった。

「俺はこれでターンエンドなんだな」

エンド宣言をする隼人。

満足げな表情だった。

「私のターン、ドロー。魔法カード生け贄人形を発動、地雷蜘蛛を生け贄に捧げ水魔神・スーガを特殊召喚！」

水魔神・スーガ ATK 2500

「さて、サンガが倒されたことには少し驚かされたがお主は1つ失敗を犯した」

「それは攻撃力100の脆弱なモンスターを攻撃表示でさらしたこ

と」

「うっ」

隼人が呻く。

確かにコアラッコを攻撃されればダメージは免れなかった。

「私は融合を発動！手札のギガテック・ウルフとキャノン・ソルジャーを融合。現れよ、迷宮の魔戦車！」

迷宮の魔戦車 ATK 2400

懐かしいカードだな。

ヒノキはそんなことを思った。

「行け！迷宮の魔戦車！コアラッコを攻撃するのだ！」

「う、うわわっ」

コアラッコに迷宮の魔戦車がドリルをうならせて進撃していく。

この攻撃が通れば大きなダメージを受けてしまう、もっとも通ればの話だが。

「リバースカードオープン！立ちほだかる強敵！」

「何！？」

コアラツコの前にスターダスト・ドラゴンが立ちほだかり迷宮の魔戦車の進路を塞ぐ。

「迷宮の魔戦車の攻撃は俺のスターダスト・ドラゴンが受ける！迎撃だ！シューティング・ソニック！」

スターダスト・ドラゴンのブレスが迷宮の魔戦車を消し去った。

「ぬおっ！」

LP5200

「ヒノキ、ありがとう。助かったんだな」

「気にするな。隼人がうまい具合に攻めてくれたんだ、守りは俺がやってやるさ」

隼人に向かってサムズ・アップする。

「ぬう、立ちはだかる強敵の効果で私は全てのモンスターで攻撃しなければいけないが生け贄人形によって特殊召喚したスーガはこのターン攻撃が不可能。私はこのままターンエンドだ」

苦々しい顔の迷宮兄。

ヒノキのターンになる。

「俺のターン！ドロー！」

状況はかなり有利であった。

「バトル！スターダスト・ドラゴンで迷宮弟にダイレクトアタックだ！響け、シューティング・ソニック！」

スターダスト・ドラゴンが迷宮弟にブレスを放つ。

「スーガ！リフレクション水魔障壁！」

湧き上がる水の壁がスターダスト・ドラゴンのブレスを遮った。

「ダメージを0にする！」

どうやら雷魔神の時はよくわからなかったがダメージを0にする効果らしい。

ヒノキはホッとした。

これで風魔神が出されても気兼ねなく攻撃することが出来る。

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド」

スターダスト・ドラゴンの攻撃により水魔神・スーガのリフレクションは発動することが出来なくなった。

「私のターン、ドロー。手札から天使の施しを発動、3枚ドローし2枚捨てる。そして魔法カード死者蘇生！墓地の雷魔神・サンガを特殊召喚！」

雷魔神・サンガが再びフィールドに現れる。

「ちっ」

これでまた一回はリフレクションが使えることになった。

（タッグだと少し厄介だな）

そんなことを思う。

「さて、今度こそコアラツコを蹴散らしてやろう。サンガよ、攻撃だ！雷衝弾！」

コアラツコに雷撃が降り注いだ。

「トラップ発動！ガード・ブロック！1度だけ戦闘ダメージを0にする！」

薄い光の膜が隼人を衝撃から守る。

「隼人、ガード・ブロックの効果で1枚ドローだ」

「お、おう。ヒノキ、ありがたいんだな」

デッキから1枚カードを引く隼人。

「ぬう、中々のコンビネーション」

「手強い」

「カードを1枚セットしてターンエンドだ」

迷宮弟がエンド宣言をする。

ヒノキは隼人の方を見ていた。

（何だ？）

隼人がドローしたカードを見て微妙な顔をしている。

（今の状況じゃ、使えないカードでも引いたのか？）

ヒノキは首を傾げた。

「俺のターン、ドロー。うつ」

更に微妙な表情をする。

探りを入れてみることにした。

「どうした隼人？ トイレにでも行きたいのか？」

「そんなわけないんだな！ ただちよつと足りなかったただけなんだな」

「ふーん」

隼人の言葉を考える。

足りないとは何のことだろうか？

頭の片隅で考えるヒノキ。

デュエルは進んでいく。

「俺はビッグ・コアラで水魔神・スーガを攻撃するんだな！ ユーカリボム！」

ビッグ・コアラが突撃していった。

「サンガ！リフレクションだ！」

雷の壁に阻まれる。

これでサンガもリフレクションを使いきった。

「カードを1枚セットしてターンエンドなんだな」

モンスターの状況が変わらないままターンが渡る。

「私のターン、ドロー」

「この瞬間、リバースカードオープン！リビングデッドの呼び声！墓地の風魔神・ヒューガを特殊召喚！」

風魔神・ヒューガ ATK 2400

「くくく、ありがたい」

「そんなカードいつの間に墓地へ送ったんだな！？」

「天使の施しの時か」

フィールドに3体の魔神がそろってしまった。

「くっ」

「まずいんだな！」

「お主らに」

「我らの究極モンスターを」

「「お見せしよう」」

だからハモるのは止めてほしい。
つらい状況でもどうでもいい突っ込みは言いたくなかった。

「フィールドの雷魔神・サンガ、風魔神・ヒューガ、水魔神・スー
ガを生け贄に捧げ」

3体の魔神が光の柱と化す。

「出でよゲート・ガーディアン！」

ゲート・ガーディアン ATK 3750

光の柱からゲート・ガーディアンが姿を現した。

「おお、またこの目で見られるとは素晴らしい」

「って、校長！席に戻ってくださいーネ！」

「私も近くで見たいんだよ」

「駄目ですーノ！」

「校長権限です」

リングのふちで何かやっている。

いい気なものである。

しかし、気持ちにはわからなくもない、ゲート・ガーディアンは確かに大きかった。

「どうでもいい」

小声で呟く。

とにかく今はデュエルである。

ヒノキは気を引き締めた。

「さて、ではゲート・ガーディアンでビッグ・コアラを攻撃する。
魔神衝撃波！」

雷と風と水のエネルギーを合わせた衝撃波がビッグ・コアラを直撃する。

「うわっ！ビッグ・コアラが！」

LP6950

「更に私はディフェンス・ウォールを守備表示で召喚」

ディフェンス・ウォールDEF2100

「このモンスターが守備表示で存在する限り相手モンスターは全てこのカードを攻撃対象とする。私はこれでターンエンド」

これで迷宮弟へのダイレクトアタックも出来なくなった。

「俺のターン！ドロー！」

手札を見る。

ヒノキは思わず舌打ちをしたくなった。

チューナーばかりで何も出来ない。

「くっ、バトルだ！スターダスト、ディフェンス・ウォールを粉碎しろ！響け、シューティング・ソニック！」

スターダスト・ドラゴンのブレスがディフェンス・ウォールを打ち倒す。

「ターンエンド！」

エンド宣言をするしかなかった。

「私のターン、ドロー！ほう、いいカードを引いた」

迷宮弟がニヤリと笑みを浮かべる。

「手札から魂の解放を発動、墓地の雷魔神・サンガ、風魔神・ヒューガ、水魔神・スーガを除外する」

「……ん？」

「な、何をする気なんだな？」

ヒノキにもよくわからなかった。

（わざわざ除外してどうするつもりなんだ？）
疑問が頭に浮かぶ。

しかし、相手の狙いがすぐに分かった。

LP3200

「ライフを2000ポイント支払い、魔法カード次元融合を発動！」

「って、それは」

禁止カードじゃねえか！

そう叫ぼうとして、寸前で思いとどまる。

強欲な壺や天使の施しが使えるのだ、次元融合が使えてもおかし
くなかった。

「くっ」

「互いのプレイヤーはゲームから除外されているモンスターを可能な限りフィールドに特殊召喚する！」

「といっても我らの魔神以外に除外されているカードはないがな」

フィールドに再び三体の魔神がそろう。

「行くぞ。再び雷魔神・サンガ、風魔神・ヒューガ、水魔神・スーガを生け贄に捧げてゲート・ガーディアンを特殊召喚！」

ゲート・ガーディアン ATK 3750

ゲート・ガーディアンがフィールドに2体並んだ。

「に、2体目のゲート・ガーディアンなんだな」

「くっ、よくまあそう簡単に出せるな」

思わず悪態をついてしまう。

ゲート・ガーディアン of 巨大な体が2体も並ぶのは流石に圧迫感を感じた。

「今度はスターダスト・ドラゴンを倒してやろう。ゲート・ガーディアン！ 魔神衝撃波！」

ゲート・ガーディアンが放つ衝撃波がスターダスト・ドラゴンを貫く。

「くうっ」

LP5700

「これでお主らのフィールドにモンスターは居なくなった」

「いや、スターダスト・ドラゴンはこの程度で墜ちはしない。リバーカードオープン！奇跡の残照！」

1度フィールドから姿を消したスターダスト・ドラゴンが再び舞い上がった。

「このターンに戦闘破壊されたモンスターを1体、墓地から特殊召喚する！」

「ぬう、中々にしぶとい。私はこれでターンエンドだ」

何とかスターダスト・ドラゴンを守ることが出来た。しかし、ヒノキには今のところ手立てが無い。隼人に頑張ってもらいたいところであった。

「俺のターン、ドロー。うつ、ちょっと遅いんだな」

隼人が顔を曇らせる。

「俺はラッコアラを守備表示で召喚してターンエンドなんだな」

ラッコアラDEF100

「私のターン！ドロー！装備魔法メテオ・ストライクをゲート・ガ
ーディアンに装備してラッコアラに攻撃！魔神衝撃波！」

ゲート・ガーディアンは攻撃でラッコアラが消し飛んだ。

「メテオ・ストライクの効果で貫通ダメージを与える！」

「うわあああーっ！」

LP2050

「はははは！我らの前に」

「敵は無い！」

それにしてもかなり調子に乗っている。

ヒノキは奥歯を噛みしめた。

心の中でどんな悪態をつこうと状況が不利なのは事実。
隼人にいたっては心が折れかけていた。

「も、もう駄目なんだな。こんな状況で勝てるわけないんだな……」

「くっ、隼人！心を強く持て！勝つ手段はまだあるさ！」

「でも」

「皆で一緒にオシリスレッドへ帰るんだろ？十代達は乗り越えたのに俺たちが諦めて負けちゃったら、ただの笑い話さ。本当にくだらない、な？」

「ヒノキ……そうなんだな、俺きばるよ！きばって皆と一緒に部屋に帰るんだな！」

「ああ、その意気さ！俺のターン、ドロー！」

ヒノキはカードを引く。

（ん？このカードは）

朝、デッキが1枚足りなくて投入したカードだった。

（しかし、これは……）

少し考え込んでしまうヒノキ。

頭の片隅で考えていた、今までの隼人の言動を思い出す。
変な顔をしていたので探りを入れたとき

『ちよっと足りなかったただけなんだな』

と言っていた。

2体目のゲート・ガーディアンが召喚された次のターン、

『うっ、ちよっと遅いんだな』

と言って、顔を曇らせていた。

足りなかったと言っていた時、フィールドにはビッグ・コアラが居た。そして、遅いと言っていた時はフィールドにビッグ・コアラは存在しなかった。

頭の中で情報を整理して答えを導き出す。

（そうか、融合素材の話か！）

ヒノキは心の中で納得した。

ならば隼人はあるカードを手札に持っているはず。

「隼人！お前のカードを借りるぞ！」

「え？何だかよくわかんないけど、わかったんだな！」

「よし、魔法カードエクステンジを発動！これにより隼人と手札を1枚交換する！」

隼人のところへと行き、手札を見せ合う。

「どれにするんだな？」

「よし、やっぱりあった!」

ヒノキは目当てのカード、融合を隼人の手札から拝借した。
隼人もカードを1枚持っていく。

「それで」

「手札など交換してどうするつもりだ?」

「こうするのさ。隼人、使わせてもらうぞ!魔法カード融合!手札のジャンク・シンクロンと場のスターダスト・ドラゴンを融合!」

スターダスト・ドラゴンとジャンク・シンクロンが融合し1つになっ
てゆく。

「融合召喚!轟け、波動竜騎士ドラゴエキイテス!」

波動竜騎士ドラゴエキイテス ATK 3200

2体のゲート・ガーディアンに対峙する波動竜騎士ドラゴエキイ
テス。

「ほう、攻撃力3200の融合モンスター」

「しかし、ゲート・ガーディアンは攻撃力は3750だ」

そんなことはわかっている。

確かにこのままでは攻撃力が及ばなかった。

「リバースカードオープン！突進を発動するんだな！」

「隼人、お前」

「いくんだな、ヒノキ。2人の力でゲート・ガーディアンを倒すんだな！」

「ああ！突進の効果で攻撃力が700ポイントアップだ！」

波動竜騎士ドラゴエキィテスATK3900

「何！？」

「ゲート・ガーディアンは攻撃力を上回ったぞ！？」

「バトルだ！波動竜騎士ドラゴエキィテスで迷宮弟のゲート・ガーディアンに攻撃！スパイラル・ジャベリン！」

波動竜騎士ドラゴエキィテスが手に持つ槍でゲート・ガーディア

ンを貫く。

「ぬおおおっ！」

「ゲート・ガーディアンが！」

LP3050

「ナイスなんだな、ヒノキ！」

「隼人、お前のおかげさ」

突進が無ければゲート・ガーディアンを倒すことが出来なかった。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

ヒノキはターンを終了する。

「私のターン、ドロー！魔法カードダーク・エレメントを発動！」

LP1525

「墓地にゲート・ガーディアンがいるとき、ライフを半分支払うことで闇の守護神・ダーク・ガーディアンを特殊召喚する！」

闇の守護神・ダーク・ガーディアン ATK 3800

「ダーク・ガーディアンは戦闘で破壊されない無敵のモンスター」

「ゲート・ガーディアンが倒されたことには驚いたが、片方のフィールドはがら空きだ」

波動竜騎士ドラゴエクイテスはヒノキのモンスター、確かに隼人のフィールドはがら空きだった。

「くっ、やはり見逃さないか」

「ま、まずいんだな。この攻撃を受けたら負けちゃうんだな」

「ダーク・ガーディアンよ、プレイヤーにダイレクトアタックだ！
ダーク・シヨックウェーブ！」

ダーク・ガーディアンが斧を振りあげる。

「う、うわわ」

「させるか！リバースカードオープン！速攻魔法ハーフ・シャット
！」

ダーク・ガーディアン ATK1900

「ダーク・ガーディアンの方々の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！」

「ぬう、だがそのままダイレクトアタックだ！」

斧から放たれた衝撃波が隼人を襲う。

「うわあああーっ！」

LP150

「うう、ヒノキ助かったんだな」

「ふう、危ない」

「ぎりぎり持ちこたえたか」

「しかし、次は無い」

「エンドフェイズにダーク・ガーディアンは元に戻る」

闇の守護神・ダーク・ガーディアン ATK 3800

「私はこれでターンを終了だ」

ヒノキは隼人の方を見る。

（隼人、頼むぞ）

心の中でエールを送る。

このデュエルは隼人に全てがかかっていた。

隼人が何も出来なければゲート・ガーディアンに攻撃されて敗北、
守備モンスターを出してもメテオ・ストライクで貫通効果を持っているため攻撃されて敗北。
絶体絶命の状況だ。

「俺のターンなんだな、ドロー！」

隼人がカードを引く。

ヒノキは安心していた。

「隼人！幕を下ろすのは任せた。これでラストターンだ！」

「うん、わかったんだな！」

エクステンジの時に手札を見て知っていた。
隼人にはこの状況を打破する術があることを。

「俺は今引いた魔法カード黙する死者を発動！自分の墓地にあるレベル5以上の通常モンスターを守備表示で特殊召喚するんだな！ビッグ・コアラを特殊召喚！」

ビッグ・コアラがフィールドに現れる。

「魔法カード融合を発動！ビッグ・コアラと手札のデス・カンガルーを融合してマスター・オブ・OZを融合召喚！」

マスター・オブ・OZ ATK4200

「ぬっ、攻撃力4200」

「だが、ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない。ゲート・ガーディアンを倒したところで攻撃力は3750、このターンで我らを倒すことは出来ない」

隼人がこちらを見てくる。
それに対してヒノキは頷いた。

「ヒノキ、あるとき交換したカードを使わせてもらうんだな！」

「ああ、最後のコンビネーションを見せてやろうぜ！」

「よし、手札から装備魔法ジャンク・アタックをマスター・オブ・OZに装備するんだな！」

ジャンク・アタックが装備され、マスター・オブ・OZの体に力がみなぎる。

「なんだ？何も変わらんではないか？」

「それでどうするというのだ？」

「へっ、装備魔法ジャンク・アタックは戦闘で破壊したモンスターが持つ攻撃力の半分のダメージを与えるカードなのさ」

「「何!?!」」

驚愕の声を上げる迷宮兄弟。

「ダーク・ガーディアンは戦闘で破壊されないモンスターだけど、ゲート・ガーディアンは倒すことが出来るんだな！」

「行け、隼人！これでラストだ！」

「うん、これで終わらせるんだな。いっけー！マスター・オブ・OZ！エアーズ・ロッキー！」

マスター・オブ・OZがゲート・ガーディアンを殴り倒す。

「ぬおおおっ！」

LP1075

「そして、この瞬間」

「ジャンク・アタックの効果が発動するんだな！」

「いっけーっ！」

ゲート・ガーディアンを殴り倒したマスター・オブ・OZがその拳にためたエネルギーを迷宮兄弟へと叩きつけた。

「ぬおおおおおーっ！」

LP0

勝敗が決してソリッドビジョンが消えると共に、会場から歓声が湧き上がる。

「やったー！これでまたアカデミアに残れるんだな！」

「ふっふっふ、姉貴の奴ざまあみろってんだ」

これで灰色学園生活から逃れることに成功した。
十代と翔が観客席からこちらに走り寄ってくる。

「隼人！ヒノキ！面白いデュエルだったぜ！」

「僕なんかゲート・ガーディアンが2体並んだときは生きた心地が
しなかったツスよ」

「いや、翔がデュエルしてたわけじゃないだろう？」

「それくらいハラハラしたってことツス！」

「何はともあれ、これで皆そろってレッド寮の部屋に帰れるんだな
！」

歓声の中、喜びを分かちあっていると校長がやってきた。

「ほっほっほ、皆さん元気がいいですね。そんなに元気なら宿題を上げましょう」

「げっ、しまった」

「デュエル理論のレポート30枚です」

「「「えええーっ!」」」

十代達が大声を上げる。
ヒノキも露骨に嫌な表情を浮かべてしまう。

「校長」

「何かね? 柳君」

「3枚で許してくれませんか?」

「駄目です、30枚です」

「せめて9枚くらいで」

「駄目です」

「なら、」

「って、ヒノキ君! なに枚数を減らそうとしてるんスカ! ?」

翔に突っ込まれてしまった。

「だって少ない方がいいだろ？」

「そりゃそうッスけど……」

「というわけで校長、お願いします」

「そんなにレポートが嫌かね？」

「はい！」

笑顔で頷く。

「むしろ1枚でOKにしてください」

「ヒノキ君、流石にそれは」

「調子に乗りすぎなんだな」

「はっはっは、柳君は正直だね。わかりました、レポートは40枚にしましょう」

「って、増えた!？」

枚数が増えてしまった。

「ヒノキ！何てことしてくれたんだ！」

「増えちゃったじゃないツスカ！」

「40枚って、書ける気がしないんだな」

「校長！校長ー！」

「はっはっは、頑張りたまえ」

叫びを無視して校長が行ってしまう。

「あ、あああ……」

ヒノキは床に両手をついた。

「増えてしまった」

「ヒノキ君のせいじゃないツスカ」

「くそ、こりゃ徹夜しかねえかな」

「デュエルには勝ったのに、何でこうなるんだな」

4人の間に気まずい空気が流れた。
誰かに肩を叩かれる。

「ヒノキ、良かったよ。君が退学にならずに済んで」

「雪か、ありがとう。ところでレポ」

「私もレポートが大嫌いだ、君とは気が合うな」

「ちょっと手伝」

「応援だけはしっかりしているぞ」

そして雪も行ってしまった。

「ヒノキ君、往生際が悪いッス」

「皆で仲良く徹夜でレポート書き上げようぜ」

「はあ、憂鬱なんだな」

「は、ははは、仕方ないな」

どよんとした重い空気をまとってヒノキ達はレッド寮へと帰るところにした。

第11話《後編》それ、反則な気がする（後書き）

エクステンジでパートナーと手札を交換、闇の指名者でタッグパートナーを指定できるのでから出来るだろうとやりました。

今回はあまりデュエルの内容を悩まず書けました。

それにしてもゲート・ガーディアンを2体召喚するとは、とんでもないですね。結構ノリで書いてました。

なるべく早く更新しようと思っています。それでは次回で。

第11話ex 見えないところから（前書き）

11話を別の視点から所々デュエルや台詞を省いている点があります。そちらは11話の方で。

読むとしたらヒノキ君が何かをしている脇でこんなことをやっているんだあ、くらいで読んでください。

それではどうぞ

第11話 ex 見えないところから

く精霊の1日く

朝、部屋の住人達が真剣にデッキ調整を行ってる中で精霊は自らの主に一生懸命話しかけていた。

『マスター！今日はタッグデュエルをするんですね？頑張ってください！』

「ふむ」

しかし、話しかけられた人物、柳ヒノキは呻き声を上げながら真剣にデッキを確認している。

普通に無視されていた。

『うう、やっぱり反応してくれない……』

主には自分が見えていない、その事実に落ち込んでしまう精霊。どんなに話しかけてもヒノキは言葉を返してくれない。それでもくじけなかった。

『マスター、わたしは今日のデュエルも傍で応援してますからね！』

「ふむ、タッグだったらこっちの方がいいかな」

めげずに話しかけるもやはりデッキの方ばかりを見て全く反応してくれない。

「聞こえていない。」

「見えていない。」

「気付いてくれない。」

話しかけるたびに突き刺さる事実。

『このカードを入れてみたらどうですか？』

「よし、これをデッキに入れてみるか」

指差したカードとは違うカードをデッキへと入れる。

聞こえていなくても、見えていなくても、気付いてくれなくても懸命に声をかけ続けた。

気付いてくれるまで、一生懸命話しかけ続けると決めたのだからそして、楽しくお話をしたい。

そんな決意と願望を胸に秘めていた。

デッキ調整を終えた隼人がヒノキへと近寄る。

「ヒノキの方はどうなんだな？」

「えーと、ちょっと待ってくれ」

『たしか、あと1枚足りないはずですよ？』

もちろん声なんか聞こえるはずもないヒノキはパラパラとデッキを確認し始めた。

『マスター……』

わかってはいても悲しくなる。

「ん、あと1枚か」

デッキの枚数を数え終わったヒノキが少し困った顔をしながらキョロキョロと辺りを見回す。

あと1枚はどうするんだろう？

素朴な疑問を抱きながら精霊はヒノキを見守った。

「……このカードは」

ヒノキの動きが止まり、ある1枚のカードを手取る。

『あつ、そのカード』

「……」

口元に少しばかりの笑みを浮かべて、ヒノキは手に取ったカードをデッキへと加えた。

少しばかり温かい気持ちになる。

偶然の一致なのであろうが、デッキに加えたカードは少し前に自分が指差したカードだった。

『マスター、わたしが見えますか？』

「……」

やはり無反応。

見えていない。

だけど心のどこかで繋がっている、そう思った。

「よし、これで俺もOKだ」

ヒノキがカードを片づけて立ち上がる。

「隼人、今日は絶対に勝とうな」

「うん、頑張るんだな！」

『マスターに隼人さん、頑張ってください！ファイトっ、です！』

ヒノキはそのまま十代達の方をちらりと見て、隼人は少し訝しげな顔で辺りを見回していた。

やはり声を返してはくれない。

けれど、それでもいいと思えた。

ヒノキは皆と楽しそうに話をしている。

それを傍で見続ける精霊。

（気付いてくれる、いつかきつと気付いてくれる）

心の中で繰り返し唱え続ける。

元気になれる、ちっぽけな希望を秘めた自分にしか効かない魔法の言葉。

確信があるからこそくじけずにいられた。

『マスター！わたしはいつでも傍で応援してますからね！』

部屋を出てデュエルへと向かうとするヒノキに声をかける。

反応してくれなくても、それでもよかった。

そんな少し晴れた気分でデュエルへと向かうヒノキへについていこうとしたら突如携帯電話が鳴りだす。

「もしもし？」

『ヒノキッ！聞いたぞ、あんたアカデミアを退学になるんだってね！』

「姉貴か……」

電話の応対をするヒノキ。

相手の声が大きいせいか、会話が筒抜けだった。

『マスター、楽しそう』

羨ましの瞳でその光景を見てしまう。

ヒノキの電話に対応する姿は何だかうんざりとしていて、呆れているようだったがどこか楽しそうに見えた。

『ふふん、そもそもアカデミアに入学出来たことが何かの間違いだったの。ちゃんと荷造りして編入試験に備えなさいよ。あっはっはっは』

「だからデュエルに勝てば退学にならないって」

『無理無理、負けるに決まってるって。大丈夫、退学して落ち込んでもあたしが慰めてあげるから。それでおとなしくあたしにこき使われるの。くくく、あっはっはっは！』

「……」

ヒノキが電話を切って怪しい笑いを洩らし始める。

いつか自分もあんな風にお話が出来るとなりたい、冗談や軽口が平気で言い合えるほどに仲良くなりたい。

「さあ、皆！さっさとデュエルしに行くぞ！」

今度こそデュエルへと向かおうとするヒノキの傍まで飛んでいく。精霊は主とお話がしたいと強く思った。

ヒノキと隼人のタッグデュエルが開始する直前、精霊は当然のごとく傍に居た。

向こう側には迷宮兄弟が立っている。

『うわー、見てくださいマスター！あの人たちはどうして頭に文字を書いてるんでしょうね？』

「隼人、絶対に勝つぞ」

「うん！絶対に勝って十代達と一緒にオシリスレッドの部屋に帰るんだな！」

『……ううう、いいもん。きっといつか気付いてくれるからいいもん』

いいいじしてしまいそうになるが、自分自身を励まして何とか立ち直った。

「我らをそう簡単に打ち負かすことが出来ると思うな」

「我ら流浪の番人 迷宮兄弟」

「「タッグデュエルの真髓を教えて差し上げようぞ！」」

全員がデュエルディスクを構え

「「「デュエル！」」「」」

デュエルが始まった。

「俺のターンなんだな。ドロー！」

ヒノキが隼人の方を見る。

『マスター！頑張ってくださいね！』

「……」

声をかけるも視線は隼人に向いたまま。

「よし、まずはこいつを攻撃表示で召喚するんだな！デス・コア
ラを召喚！」

デス・コアがフィールドに現れた瞬間、ヒノキがずっとこけた。

『わわっ、マスター！大丈夫ですか！』

ヒノキは何事もなく立ち上がる。

『もう、気を付けてくださいね？マスター』

「隼人……お前って奴は」

『マスターいきなり倒れると危ないですよ？』

「あつ、またやっちゃったんだな。興奮しすぎて忘れてたんだな」

無視されたままデュエルが進んでいく、ヒノキは微妙な表情をしていた。

そのことを少しばかり不満に思いながらも精霊は首を傾げる。
自身もデュエルモンスターズの精霊である、カードの効果はよく知っていた。

（どうしてデス・コアラを攻撃表示で召喚するんでしょう？）
やる気満々なデス・コアラを見ながらそんなことを思う。
迷宮兄がカイザー・シーホースを召喚してヒノキのターンになった。

「隼人、デス・コアラを使わせてもらおうぞ」

「えっ？」

『どうするんですか？ マスター』

「手札からデブリドラゴンを召喚！そして、通常召喚に成功しているためワンショット・ブースターを特殊召喚！」

『あっ、そういうことですか。マスター、さすがですね！』

「レベル3デス・コアラとレベル1ワンショット・ブースターにレベル4デブリ・ドラゴンをチューニング！」

精霊の声には当然反応することなくヒノキがシンクロ召喚を行う。

「集いし願いが新たに輝く星となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

『ギャオオオオーッ!』

スターダスト・ドラゴンがフィールドに舞い降り、咆哮を轟かせた。

「ぬう、シンクロ召喚」

「タッグパートナーのモンスターを使い強力モンスターを召喚するとは」

『さすがはわたしのマスターです。えっへん!』

主が褒められて少し気分が良くなる。

「へっ、シンクロ召喚はレベルを合わせなきゃいけない性質であるがゆえに素材となるモンスターは全て表側表示でなければならぬ。隼人はこのためにデス・コアラを攻撃表示で召喚したのさ」

『そうだったんですか、びっくりです』

「へっ?」

『あれ? マスター、隼さんがびっくりしてますよ?』

「なっ、隼人!」

「あつ、その通りなんだな。作戦通りなんだな」

『???』

精霊は頭を抱えた。

（あれ？じゃあ、何であのとき倒れたんだろう？）

作戦通りだったとしたら、あの行動の意味がわからない。

それによく考えたらヒノキの手札にチューナーがあるかどうか
もよくわからないのにシンクロ召喚の布石でリバースモンスター
を攻撃表示で召喚するのはおかしいことだった。

「成る程、ぬしらもタッグデュエルの真髓が」

「少しは分かっているようだな」

ヒノキが少しばかり満足げな表情をする。

「俺はカードを1枚セットしてターンエンド」

「ヒノキ、ありが」

「気にするな。その先は言わなくていい」

もしかしたらパートナーを庇って元気づけるためにやったのかも
しれない。

精霊は今までのやり取りを見ていてそう思った。

『マスターってやさしいんですね』

ヒノキは迷宮兄弟の方を見ている。

やはり返事は返ってこなかった。

『はあっ』

思わず溜息を吐いてしまう。

やはり返事がないのはつらくて悲しい気持ちになる。

それでも傍に居て明るい声で話しかけた。

しばらくデュエルが進行して

「フィールドの雷魔神・サンガ、風魔神・ヒューガ、水魔神・スーガを生け贄に捧げ、出でよゲート・ガーディアン！」

ついにゲート・ガーディアンが召喚されてしまった。

ヒノキが苦虫を潰したような表情をしている。

『うわわっ、なんかすごいモンスターが出てきましたよ！』

「……」

現れたゲート・ガーディアンに慌てる精霊。

「おお、またこの目で見られるとは素晴らしい」

「って、校長！席に戻ってくださいーネ！」

「私も近くで見たいんだよ」

「駄目ですーノ！」

「校長権限です」

リングのふちでも騒いでいた。
精霊もその大きさに目を丸くする。

『すごいですー、あんなに大きいですよ！』

「……」

『ほら！見てくださいマスター！』

「どうでもいい」

『ガン！』

小声でどうでもいいと言われてしまった。

夜。

『どうでもいいってどうでもいいってどうでもいいって……』

部屋の隅で壁側に体育座りをしながらの字を書いていた。
部屋の中央では4人がテーブルで仲良くレポートをやっている。

「ああー！終わらねえー！」

「40枚なんて無理があるッス」

「諦めるな皆、諦めたらそこで試合終了ですよ」

「ヒノキ君、そんなネタ発言はどうでもいいッス」

「そもそも枚数が増えたのはヒノキのせいなんだな」

「どうでもいいが、喋るより手を動かす方がいいぞ」

「ウガァー！頭がパンクしそうだー！」

「アニキ、頭から煙吹いてるよ？」

「オーバーヒート寸前なんだな」

あまりレポートははかどっていないようであった。

『ひどいですよマスター、どうでもいいってひどいですよマスター』

『クリ、クリクリ』

『うう、そりゃわたしに言ったんじゃないかもしれないけど……マスターがどうでもいいってどうでもいいってどうでもいいって』

『クリ』

部屋の隅っこの方ではハネクリボーが慰めるのに苦心していた。
結局、朝までいいいじしたまま立ち直ることはなかった。

第11話 ex 見えないところから（後書き）

とりあえずほとんど毎日精霊はこんな感じで過ごしていると思う
てください。

ハネクリボーが慰めるのに疲れていそうです。
それでは次回で

第12話《前編》哀れなあの子に魂の救さ……えっ、パロディはやめろって？

題名の通り、あの子に救済を上げ、られるかなあ？
色々あつて遅くなりましたが第12話です。

第12話《前編》哀れなあの子に魂の救さ……えっ、パロディはやめろって？

「うゝむ」

目を擦りながら黒板を見る。

（妙だな）

どういうわけか視界がぼやけていた。

前の方ではグラサン先生が授業を行っているのだが、よく見えな
い。

これでは授業を真面目に受けろというのは無理な話、現にヒノキ
のノートは白紙だった。

「はあゝ」

この授業は諦めることにする。

一時間くらいノートを取らなくても大丈夫だろう、と首を少し横
に振ってよそを見た。

「ん？」

瞬間、視界が開けて明瞭な光景が瞳に映し出される。
しかし、すぐにぼやけてしまった。

（新手の病気かな？）

ヒノキは首を傾げた。

この現象がなんであるにせよ、視界がぼやけてよく見えないことは事実。この日は全くとっていいほど授業をまともに受けることが出来なかった。

授業が終わって放課後になった頃、精霊たちは相談を行っていた。ちなみにヒノキはぼけくと崖のあたりで海を見ながら座っている。かなりの暇人である。

誰もいないヒノキ達の部屋の中で相談する精霊達。

『マロンちゃん、どうしたらマスターはわたしに気付いてくれると思いますか？』

『クリ、クリクリ？』

『そうですねー、いっぱい話しかけたりとかあ……あと今日は少し強引なこともやっちゃいました！』

『クリリ？』

『それはですねえ』

そして、今日やった強引なことをハネクリボーに話し始める。

・
・
・
・
・

授業中。

『じーーーー』

「……」

ヒノキが黒板を見ている目の前でジッと凝視する。

『じーーーー』

「うゝむ」

『じーーーー』

「はあゝ」

『うわわっ』

ヒノキがいきなり顔を横に向けた。

「ん？」

慌てて視界に体を割り込ませる。

『じーーーーー』

「……」

この日は1日中ずっと同じことをやっていた。

少しでも違和感を感じてくれれば見えるようになるかもしれない、と。

・
・
・
・
・

『こんな感じです』

『ク、クリ』

『少しは違和感を感じてくれたみたいなんですけど、マスターにはまだわたしが見えないみたいなんです』

『クリー』

ハネクリボーが同情でもするかのように肩をポンポンと叩く。ほとんど毎日こんな相談をやっているので手慣れたものであった。

『どうしたらマスターはわたしのことが見えるようになるんでしょう？』

『クリクリ？』

『マロンちゃんが見えているのですから、わたしのことも見えるはずなのに』

『クリッ、クリリ』

『もしかして実は見えているけど無視しているだけとか！……うつ、想像したら悲しくなってきました』

『クリ！クリクリッ！』

『そ、そうですよね！マスターがそんなひどいことするわけありませんよね！』

『クリ』

『でも、あのときわたしにどうでもいいってどうでもいいってどうでもいいって……はっ！こんなことをしている場合じゃありませんでした！』

気を取り直して精霊たちはどうすればヒノキに姿が見えるようになるのか頭を悩ませる。

そもそもハネクリボーの姿は見えているので全ての精霊が見えるはずなのだ、しかし実際は見えていない精霊が存在する。考えれば考えるほど奇妙なことでどうすればいいのか全く分からなかった。

思わず溜息が出てしまう。

『はぁ、どうすればいいんでしょう』

『クリリ』

精霊たちは肩を落とした。

作戦が何1つ思い浮かばないまま時間だけが過ぎていく。

『そもそもどうしてマスターにはわたしが見えないんでしょう？』

『クリクリ』

最終的にどうして見えないのか？という根本的な原因に突き当たってしまう。

作戦だとかそういったことも結局はこれが分からなければ対策の立てようがなかった。

『うーん、どんなことでもいいからマスターとお話できれば何かわかるはずなんですけど……』

『クリー、クリリ』

『そうなんですよねえ、マスターとお話できないからこんな相談をしてるんですねえ』

はぁ、と再び溜息を吐いて大きく肩を落としてしまう。どうにかしようにもどうすることも出来なかった。

『どうすればいいんでしょう……』

『クリッ……クリッ！クリリー！』

途方にくれる精霊に向かって、任せろと言わんばかりにハネクリボーは自らの体を短い手でポンポンと叩き自己主張する。

『クリ！クリクリ、クリ！』

『えっ、どうして見えないのかマスターに聞いてきてくれるんですか？』

『クリ！』

『そうですね！なにかがわかるかもしれないし、マロンちゃん頑張ってください！』

『クリリッ！』

そしてハネクリボーはヒノキのところへと飛んでいった。

レッド寮近くの崖。

目の前には蒼く煌めく海が広がっている。

ヒノキは崖下に両足を投げ出して地面に腰かけていた。

「うーん」

しきりに目を擦る。

眼下に広がる海は鮮明に見えており、ぼやけていたりよく見えな
い部分は全くなかった。

「わけがわからんな」

ヒノキは怪訝な表情で首を傾げる。

今日、授業中ずっと視界がぼやけていたのは何だったのだろうか？
頭に疑問が浮かぶ。

よく見えなかったせいで今日のノートは全て白紙だった。といっ
てもそんな些細なことを気にするタイプではないが。

（とりあえず眼球の病気とかじゃなさそうだな）

ヒノキはホッと胸を撫で下ろす。

眼球の病気など全く知らないが多分大丈夫だろう、むしろ大丈夫
でなければ困る。

問題を強引に解決して……というよりは投げ出してヒノキは再び
海を眺め続けることにした。

「ふあゝあ、何か今日は何もやる事が無いなあ」

ボケくと海を眺め続ける。

こんなことなら授業が終わった後に十代か雪のどちらかと一緒に居ればよかった。

ヒノキは退屈すぎて眠気を感じてきた。本当に何もやることが無い。

「まあ、暇な時は暇を持て余すのもまた一興かな？」

愚にもつかないことを呟いてヒノキはボケくと海を眺め続けることにした。

空が青い。

海が蒼い。

風が気持ちいい。

でも、退屈だ。

そんな感じでボケくとしていた。

少しして、何かが近くまでやってきて静寂を破る。

『クリく、クリクリく』

「ん？ハネクリボーか、十代は一緒じゃないのか？」

やってきたのはハネクリボーだった。

ヒノキが辺りを見回してみるも他には誰もいない。

「珍しいな。十代と一緒にじゃないなんて」

『クリリッ』

「ふむ」

ハネクリボーの鳴き声に対して呻きを上げるヒノキ。
話相手が居れば少しは暇つぶしになる。

これ幸いとヒノキはハネクリボーを相手に会話することにした。
ちようどいい具合に周囲には誰も居ないので精霊と話をしても奇妙に思う人間は居ない。

ハネクリボーが何か言いたそうにこちらを見つめる。

「それで俺に何か用があるのか？」

『クリ！クリクリッ、クリリ？』

「ふむふむ」

『クリリッ、クリ！クリクリッ！』

「うーん、成る程」

『クリッ。クリクリッ、クリリ？』

「うん、よくわかった」

少なくとも会話が出来ないことだけはよくわかった。

「ごめん。何言ってるかよくわからない」

『クリッ! ?』

ハネクリボーはしょぼーんとして、来た道に戻っていった。
その姿を見送りながら首を傾げる。

「何だったんだ？」

ハネクリボーが寮の部屋に戻ってくる。

『どうでした？ マスターと何かお話できましたか！』

『くゝ、クリ、クリリー』

しょぼんとしながらハネクリボーは事の顛末を話した。
聞いていくうちに満面の笑みをたたえていた精霊の顔から喜色が
抜け落ちていく。

『そうですか、マスターにはマロンちゃんの言葉がわからなかったんですか……』

『クリー』

誰もいない部屋で仲良く一緒に落ち込む精霊達。

どよよんという擬音がぴったり嵌るほど部屋の雰囲気は陰気なものになっていた。

精霊が床に体育座りをして、その肩にハネクリボーが乗る。

『これ以上どうすればいいんでしょう？』

『クリー』

どうしようもないほど作戦は行き詰っていた。
今この場に居る人員(?)では何をすることも出来ない。

『ううう、マスター……お話がしたいですう』

『クー！クリクリリ』

『うう、大丈夫です。わたし泣いてません』

『クリー……』

心配そうな鳴き声が洩れる、精霊は眼の端に溜まった涙をそっと拭った。

こんなことで挫けるわけにはいかない。

気を取り直してどうすれば自らの主に姿が見えるようになるかを考える。

主とお話できないこと、主に自らの存在を気付いてもらえないこと、それはとてもつらくて悲しいけれどその悲しさに負けて何もせずに泣き出してしまえばつらくて悲しいことはつらくて悲しいまままで終わってしまうのだから。

精霊達は誰も居ない部屋で知恵を絞り続けた。

『でも、本当にどうすればいいんでしょう？』

『クリ』

とはいえ、そう簡単に作戦が思いつけば苦労はしない。考えても考えても何もいい案が思い浮かんでこなかった。

ハネクリボーを肩にのせながら床に体育座りをしてうんと唸りながら考え込む。

やはり見えない、言葉が通じない、このコンビではどうしようもなかった。結局、相談は行き詰る。

『はあ』

『クリ………』

溜息しか出てこない。

部屋に再び陰気な雰囲気の流れ始めた。

ガチャリ

陰気な部屋の空気を入れ替えるように扉が開かれる。

「おっ、相棒！こんなところに居たのか！急にどっかへ行っちゃうから探したぜ」

ハネクリボーを探していたらしい十代が部屋の中へと入ってきた。

『クリ、クリリッ』

『マスターのお友達の十代さんですか』

「おう！ヒノキの精霊も一緒だったのか。部屋で何してたんだ？」

靴を脱いで部屋の中に上がり、十代が精霊コンビのところへ近寄っていく。

『クリリ、クリクリリッ』

「相談をやったって？へえ、何の相談だ？」

『どうすればマスターにわたしの姿が見えるようになるのか一緒に考えてたんです』

『クリ』

「あ、そういやヒノキはハネクリボーの姿は見えるけど自分の精霊は見えないんだよねあ」

『はい……マスターにはわたしのことが見えてないんです』

自分が言ったことに肩を落としてしまう精霊。

自分の口で何度も見えないということを言葉にするのは自虐行為に等しい。わかっていることだが精神的につらい。

しょぼんとした精霊を見て十代とハネクリボーが慌てだす。

「落ち込むなって！そのうちヒノキにも見えるようになるって！」

『クリ！』

『うう、大丈夫です。マスターとお話できる日までわたしはくじけません！』

「おう！その意気だぜ！」

『クリ』

立ち直った精霊に対して十代とハネクリボーが拍手した。
メンバーに十代を加えて相談が再開する。

「それで今までどんなことを話してたんだ？俺も力になるぜ？」

『クリ、クリクリッ』

「うんうん、成る程。相棒がヒノキに何で見えないのか聞こうとしたのか」

『はい。でも、マスターには言葉が通じなかったんです』

『クリー』

「うん、そうか。ヒノキにはハネクリボーが何を言ってるのかわからねえのか」

うんうんと今までの話を聞きながら納得する十代。
話を聞き終わり名案が思い浮かんだとばかりに顔を上げる。

「よっしゃ！だったら今度は俺がヒノキに聞いてくるぜ！」

『えっ、いいんですか？』

「おう！俺だったらヒノキに言葉が通じないなんてことは無いからな！」

『クリクリリー!』

「ハハ、そんな怒るなって相棒。それじゃちょっと行ってくるぜ!」

『はい! 十代さん頑張ってください!』

「おう!」

精霊は満面の笑顔で部屋から出ていく十代を見送った。

ただ黙って海を眺める。

ゆったりとした波の音、風に運ばれてくる磯の香りが心地よい。

「暇だ」

しかし、ヒノキは退屈だった。

いつか釣竿を買おう、とそこそこ切実に心の中で決意する。

正直なところハネクリボーにはどこかへ行っただけで欲しくなかった。

何を言ってるのか全く分からないが話し相手も居ないのは暇すぎるのだ。

「どーしたもんかな」

呟いてから溜息を吐いて途方に暮れる。
とりあえず海を眺め続けることにした。

「ハハハ、ハ」

喝いた笑いが出てくる。

自分は何て不毛なことをしているんだろうか？
ヒノキは何故だか悲しくなった。

「おい、ヒノキー！」

後ろから自分を呼ぶ声が聞こえる。
ハネクリボーの次は十代がやってきた。

「今度は十代か。俺に何か用か？」

「おう。ちょっとヒノキに聞かなきゃいけないことがあってさ」

そう言ってヒノキの傍までやってきて立ち止まる。

「?座ったらどうだ?」

「いや、聞くこと聞いたらすぐに行かなきゃいけねえからさ」

用が済んだらすぐに自分の所からは居なくなるらしい。

結局のところ退屈な時間は退屈なままか、とヒノキは少し落ち込んだ。

「それで?」

「おう、何でヒノキには自分の精霊が見えねえのか……だったかな?」

「何で語尾が疑問形なんだよ。自分の精霊が見えない理由なんて俺が知りたいくらいさ」

「あゝ、そりゃそうだよな。自分で理由がわかったら苦労しないよな」

全くもってその通りである。

原因がわかっていて問題なんてほとんどが自力でどうにか出来る、ヒノキとしてはむしろ原因がわからないことが最大の問題だと声を大にして言いたかった。

十代が質問に行き詰ったのか、うんうんと唸りながら悩みだす。

「うゝん、一体何を聞けばいいんだ?」

「いや、質問される立場の人間に質問自体を聞いてどうするのさ」

「そんなこと言われてもよお……ヒノキ、とりあえずデッキを見せてくれ」

「ん？ ああ、ほら」

何の疑いもなしに腰のデッキケースからデッキを取り出して十代へと渡すヒノキ。

（まあ、昆虫デッキ（笑）の人みたいにカードを海に捨てたりはしないから問題ないだろ）

そんな感じで心の中で安心しながら。

十代がパラパラと手渡されたデッキのカードを1枚ずつよく見る。やがて、ある1枚のカードで手が止まった。

「おっ！間違いない、お前の精霊はこのカードだ」

デッキに入っている1枚のカードを見せてくる。

「はっ？これが？」

「ああ、間違いないぜ」

「いや、何かの見間違いじゃないのか？」

「絶対にこのカードだ」

「うーん、でもなあ……」

訝しげな表情でとことん疑うヒノキ。

（これは有り得ないだろ？）

カードを見ながら心の中で否定する。

十代が見せてきたカードはエフェクト・ヴェーラーだった。

「十代。やっぱり、このカードじゃないと思うぞ」

「いや、絶対にこの、えーとエフェクト・ヴェーラーだな。こいつが精霊なんだって！」

「でも、そう言われてもなあ……やっぱり有り得ないと思うんだよなあ」

「絶対にこいつだって！ヒノキ、どうしてそこまでこのカードじゃないって思うんだよ？」

「だってなあ……ちょっとデッキを返してくれないか？」

「ん？ ああ」

十代から自分のデッキを受け取る。そして、1番上にあるエフェクト・ヴェーラーをじっと見つめる。

うん、やっぱりと1人頷いて納得した。

エフェクト・ヴェーラーはとても可愛い。

「こんな可愛い精霊が俺の近くに居るわけがない」

「は？」

十代がポカーンとした。

もう一度、カードをよく見る。

「うん、やっぱりこんな可愛い精霊が俺の近くに居るわけがない」

思ったことをそのまま口にした。

わけがわからないという顔をする十代。

ヒノキはそれを不思議に思った。

何か変なことを言っただろうか、と。

やがてヒノキの言葉をかみ砕いて理解することが出来たらしく再起動をはたす。

「あゝ、つまりお前はそのエフェクト・ヴェーラーが可愛いから自分の精霊じゃないって思ってたのか？」

「ああ、その通り」

「うゝん、なんかしっくりこねえな」

「そんなもんかねえ？」

怪訝な顔をする十代に、ヒノキも首を傾げた。

（何て言えばわかるかな？）

頭を悩ませる。

「うゝむ、そうだな……十代、例えばお前がさ」

「ん？ ああ」

「宝くじで1等の三億円が欲しくて何枚かくじを買ったでしょう」

「それ、何の関係があるんだ？」

「単なる例え話さ。とりあえず聞いてくれ」

「ああ」

「それでだ。お前は三億円が当たることを期待しているけど1等は大勢の人が買ったくじの中でほんの一握りしかない。だから、1等が欲しいけど心のどこかでは当たらないと思っている自分が居るって感じかな？」

自分でも首を傾げながら説明を終えるヒノキ。

十代はやはり怪訝な表情をしていた。

「うーん、やっぱよくわかんねえなあ。宝くじなんか買ったことないからわかんねえけどさ。きっと当たるかどうか最後までワクワクすると思うぜ」

「あー、そうだった。お前ってそういう奴だったよな」

若干、肩の力が抜けてしまう。

説明は十代に意味を成さなかった。

自分でもかなり遠回りでわかりにくい説明だと思うが、これ以上どう説明していいかわからない。

ヒノキは説明することを諦めた。しかし、十代は未だにウンウン唸っている。

説明する本人が諦めたというのに何とも粘り強いものだ、とヒノキは他人行儀な目でその光景を眺めた。

「うーん、つまり」

「ああ」

十代は自分なりに解釈したらしい。

「ヒノキはそのエフェクト・ヴェーラーが自分の精霊で居て欲しいけど居るわけがないと思ってるってことか？」

「ふむ、まあそんな感じかな？」

「よっしゃ、とりあえずわかった」

とりあえず納得したようである。

「じゃあ、ヒノキ。聞くこと聞いたから俺は戻るぜ」

「ああ、じゃあな」

「おう！絶対にヒノキにも自分の精霊が見えるようにしてやるからな〜！」

十代が走って道に戻っていった。
途端に辺りが静かになる。

「さて、どうやって暇を潰そうか？」

ヒノキはまたボケーとすることにした。

第12話《前編》哀れなあの子に魂の救さ……えっ、パロディはやめろって？

前編とか、そんなのばかりですいません。

でも遅くなってしまったので、これからは頑張っていきたいと思っています。

それでは

第13話《後編》人それを勘違いという……えっ？だからパロディはやめろだっ

後編です。

軽く最長文字数の自己記録を更新してしまいました。

どおりで長くなったと……

次回は出来る限り早く、したいなあ

それではどうぞ。

第13話《後編》人それを勘違いという……えっ？だからパロディはやめろだっ

十代が部屋に戻ってくる。

「今、戻ったぜ」

『ど、ど、ど、どうでした十代さん！マスターは何て言っていましたか！？』

部屋に入ってきた瞬間、精霊・エフェクト・ヴェーラーが飛んでくる。瞳をキラキラと輝かせながら。

「うおっ、まあとりあえず落ち着けて」

『クリッ』

『はい！わたしは落ち着いています！それでマスターは何て言っていたんですか！？』

「ハハハ……」

首をブンブンと縦に振って先を促すエフェクト・ヴェーラーに十代は苦笑した。

全然、落ち着いてなどいない。
しかし、それは無理もない話でエフェクト・ヴェーラーは自らの

主が何と言っていたのか早く知りたかった。

もしかしたら、それによって主に自らの姿が見えるかもしれないのだから。

十代に詰め寄る。

『それでマスターはどんなことを言っていたんですか？』

「ああ、ちょっと待ってくれよな」

とりあえず十代は靴を脱いで部屋に上がった。

待ちきれないとばかりにウズウズしながら傍を飛ぶ。

十代が座ったのを確認してから再び声をかけた。

『それでマスターは何て？』

「ああ、エフェクト・ヴェーラーのカードを見て可愛いって言うたぞ」

『え？』

一瞬、言葉が認識できずにポカンと呆ける。

主が自分のことを可愛いと言っていた。

頭の中で何度も反芻する。

マスターがわたしを可愛いって……

言葉を認識していき、段々と頬が紅潮していき自然と笑顔になる。

『えへへ、わたしが可愛いだなんてそんな……えへへ、マスターに褒められちゃいました』

ニコニコとはにかみながら嬉しそうな声を上げるエフェクト・ヴェーラー。

嬉しい気持ちでいっぱいだった、心がポカポカと暖かくなるのを感じる。

主が自分のことを可愛いと言っていたという事実、これがわかっただけでも十代が聞いてきてくれてよかったと思えた。

にこにこ笑っているエフェクトヴェーラーに十代が控えめに声をかける。

「まだ続きがあるんだけど、もういいかあ？」

『クリクリ』

『あっ、はい。それで他には何て言ってたんですか？』

若干、夢見心地で先を促した。

嬉しくて顔が勝手に笑顔になってしまう。

もうどんなことを聞いても問題が無い気がした。

「あゝ、それで……うゝん、何か言いづらいな」

『？何ですか？』

「えゝ、あゝ」

『??:??:?』

十代はバツが悪そうに口ごもる。
何やらとても言いづらそうにしていた。

『一体、どうしたんですか?』

『クリリゝ?』

「うーん、そうだな。落ち込まずに聞いてくれよ」

『はい、大丈夫です。わたし、今とてもいい気分ですから』

ニコニコと笑顔で首肯する。
それを見て十代は更に言いくさそうな顔をした。

「うっ、その、こんな可愛い精霊が自分の近くに居るわけがないってよ」

『ふえ?』

言葉にならない声が口から洩れる。

笑顔が一瞬にして凍りついた。
瞳の端に段々と涙が溜まっていく。

『えう、何でそうなるんですかマスター……』

「いや、そんな落ち込むなって」

『クリッ』

いいいじしてしまいそうになるエフェクト・ヴェーラーを十代とハネクリボーがなだめる。

『あう、大丈夫です。わたし落ち込んでなんかいません』

細い腕でごしごしと眼のあたりを拭う。
確かにショックも大きかったが、主が可愛いと言ってくれたことに変わりはない。

そう考えて気を取り直した。

ハネクリボーがポンポンと肩を叩く。

『クリッ』

『ありがとう、わたしはもう大丈夫です』

『クリリッ♪』

ハネクリボーにっこりと笑って見せた。

「おっ、元気になったみたいだな」

『はい!』

「おっし、それじゃ相談を続けようぜ」

『クリクリー』

相談を進行させる。

『それで可愛いから居るわけがないというのはどういうことなんでしょう?』

「えーと、ヒノキの奴は宝くじの三億円がどうか言ってたな」

『クリ?』

『???宝くじって何ですか?』

精霊コンビが首を傾げた。

「いや、宝くじの話は単なる例え話らしいぜ。俺もよくわかんかったしな」

『そうですか』

『クリッ』

『それで結局どういうことなんですか？』

『クリリ？』

「えーと、エフェクト・ヴェーラーが精霊でいて欲しいとヒノキ自身は思ってるけど、心のどこかでこんなに可愛い精霊が自分の傍に居るわけがないと否定している……ってことだったな」

十代が説明を終える。

色々なことがわかったけれど、エフェクト・ヴェーラーは首を傾げた。

結局、どうしても主には自分の姿が見えないのだろうか？

『マスターがどんなことを考えているのかはわかりましたけど、わたしが見えないこととどんな関係があるんでしょう？』

『クリリ？』

「そういや、よくわかんねえな」

うゝん、と全員が唸りながら頭を悩ませる。
しかし、何も答えは出てこなかった。

「よっしゃ、こういうときは三沢に聞いてみようぜ」

『???』

『クリクリリ』

「あいつは秀才だからな。きっと何かわかるはずだ」

『そうなんですか?』

「おう! ラー・イエローの寮に行ってみようぜ!」

『クリ!』

三沢さんってどんな人でしたっけ?

エフエクト・ヴェーラーは首を傾げながら十代達と共にレッド寮の部屋を後にした。

崖上で座りながらヒノキが眠っていた。

「Z Z Z Z Z」

脚の上に両肘が乗っており、寝息を立てながら前傾姿勢になっているヒノキをкаろうじて支えている。

「ふむ、何故このようなところで寝ているのだろうか？」

雪は隣で首を傾げた。

眠たいのなら部屋で寝ればよいのに。

素直な感想が頭に浮かぶ。だが、ヒノキを起こすことはしない。

（きっとここで寝ることに何か意味があるのだろう）

心の中で自己完結した。

気持ちよさそうに寝ているのを無理に起こすこともない。

今いる場所は日光が暖かく、波の音が心地よく、風が気持ちいい良い場所だった。

足に引っ掛かっている肘の片方が外れヒノキが崖下へと傾いていく。

「むっ、危ないな」

落ちる前に襟首を掴んで引き揚げた。

崖下を覗き込んでみると意外と高さがある。

「ふむ、落ちたら怪我をしてしまうな」

少しだけヒノキを引っ張って崖下に落ちない位置に調節した。

「Z Z Z Z」

「よく眠っているな」

寝息が聞こえる。

体を引っ張って動かしたというのに起きる気配が全くなかった。
寝息に合わせて頭がゆらゆらと上下する。

「ふむ」

目の前にはヒノキの黒々とした髪の毛があった。
とりあえず触ってみる。

「Z Z Z Z Z」

「むっ、さらさらとしていて手触りがいいな」

ヒノキの髪はさらさらとしていて絹糸のようであった。
手で梳いてみても引っ掛かるところが無い。

自分の髪の毛を触って比べてみる。

「ふむ、私の方が少しごわごわしているな」

「Z Z Z Z Z」

今度からもう少し髪の毛に気を使おうと決めた。

（友人というのは色々なことで競いあったりするらしいがこういうことかもしれない）

そんなことを思いながら。

「Z Z Z Z Z Z Z」

「さて」

一息ついたところで辺りをキョロキョロと見回す。

「ふむ、姿が見えなかったのだがやはり居ないのか」

状況を再確認して独り言を呟いた。

「むう、仕方がない。もう少し他を回るか」

「Z Z Z Z Z」

本当は友人と一緒に居たかったのだが、大切な用事があるため一緒に居ることが出来ない。

「Z Z Z Z Z Z Z」

「すまないな、ヒノキ」

眠っているヒノキに謝罪を述べて雪はその場を後にした。

イエロー寮、三沢の部屋。

「それで、一体どうしたんだ十代？」

「おう、ちょっとお前に聞きたいことがあって皆で来たんだ」

「皆って、1人しかないじゃないか」

「あっ、やべ。まあ細かいことは気にすんなって、あははは」

笑ってごまかした。
ちなみにすぐ傍でエフェクト・ヴェーラーとハネクリボーが浮いている。

『クリクリ』

『十代さん、結局なにを聞くんですか？』

「あんま急かすなって」

「誰も急かしてなど居ないが？」

「いや、そっちの話じゃなくてさ」

三沢が怪訝な表情をした。
とにかく話を進める。

「それでだなあ、お前に聞きたいことってのは」

「ん、ああ。何を聞きたいんだ？」

「あゝ、何て聞けばいいんだ？」

『ふえ？ え』と』

『クリリ』？』

「いや、聞きたいことも決まってるのにここに来たのか？」

三沢が若干呆れ顔をした。

精霊コンビと十代が唸り声を上げる。

来たのはいいが聞くことをあまり考えていなかった。

『えーと、見えるはずのものが見えないことはあるんですか、でどうでしょう？』

『クリクリリッ』

『あっ、そうですね！その言葉をつけ足せば完璧ですね！』

「ん、そう聞けばいいのか……あー、と心の中で存在を否定することで見えるはずのものが見えなくなるってことはあるのか？」

「いや、何で棒読みなんだ？」

「そんな細かいことはいいからさー、それで実際見えなくなることってあるのか？」

「うーん、そうだな……」

三沢が難しい顔で考え込む。

おそらく持てる知識を総動員しているのだろう。

やがて1つの答えを導き出したのか、難しい顔で切りだしてきた。

「十代、メンタリズムというものを知っているか？」

「いや」

『クリリ？』

『メンタリズム？』

「メンタリズムというのは人間の心理的錯覚や暗示などを利用したパフォーマンスのことだ」

「それが見えないこととどんな関係があるんだ？」

「いや、聞きかじっただけで俺もよくは知らない」

だが、と前置きをする。

「そういったパフォーマンスが存在するくらい人間の脳は不思議だということだ」

「へえ」

「実際に病床に伏した女性が薬だと言われて差し出されたシロップを、薬だと思い込んで毎日飲んでいたら完治したという事例もある」

「それってマジか！」

『ふええ、ビックリです』

『クリッ!』

「まあ、そういう話もあるくらいに人間の思い込みというものはすごいことだな。自己暗示という言葉もある、十代が言っている見えるはずのものが見えないというのはそこらへんの人体の神秘が関係しているのかもな」

そう言って、三沢が締めくくった。

ふーん、と十代はわかつているのかいないのかどっちともつかない言葉を洩らす。エフェクト・ヴェーラーに至っては横でしきりに感心している。

「それで、お前の話で言ったら、どうすればその見えていないものが見えるようになるんだ?」

「ん、そうだな。そこにそれがあると信じさせればいいんじゃないか?」

「成る程。よっしゃ!よくわかったぜ、サンキューな三沢!」

「って、十代もう行くのか!?」

「おう!やらなきゃいけないことがあるからな!行こうぜ、皆!」

『クリッ!』

『え？お、置いてかないでください！』

十代が慌ただしく部屋から出ていった。

「だから、皆と言っても1人しかないじゃないか……」

三沢は部屋の中で1人さびしく怪訝な顔をしていた。

レッド寮の方へと歩きながら会話をする。

三沢に聞いたことで色々なことが分かった。

「三沢が言ってたこと、よくわかんなかったけど俺は当たってると思うぜ。お前たちはどう思う？」

『クリ』

『はい、精霊は極めて霊的な存在ですからマスターの考えによって見えなくなることもあり得ます』

「そうなのか。よっしゃ！これでどうすればいいか見えてきたぜ！」

意気揚々と道を歩く。

何も分らなかったときよりも大きな希望があった。

これで主に自らの姿が見える。

顔が自然と笑顔になった。

『えへへ。十代さん、頑張りましょう！』

「おう！」

『クリ！クリリー！』

『あつ、もちろんマロンちゃんも一緒ですよ？』

『クリリ〜♪』

ハネクリボーが機嫌よさげに鳴く。

少し前、部屋で悩んでいた時のような暗い雰囲気は一切なかった。
十代が精霊達の会話を聞いて怪訝な表情をする。

「マロンちゃんって何だ？」

『クリクリ言うからマロンちゃんです』

「へえ〜。あれ？その名前、他のカードであったような……う〜ん、
思い出せねえなあ」

『あれ？そうでしたっけ？』

『クリ、クリクリ』

『はい？何ですか？』

『クリリ、クリクリッ、クリ』

『えっ？呼び方を変えて欲しいんですか？』

「思い出した！そういや迷犬マロンってカードがあったな！」

『クリリ、クリ！』

『うーん、困りました。どう呼べばいいんでしょう？』

和気あいあいと会話をしながら帰り道を進んでいく。

マロンちゃんでは迷犬マロンと被るから呼び方を変えて欲しいと言われても他に良い呼び方が思いつかない。

エフエクト・ヴェーラーは頭を悩ませた。

『うーん、どうしましょう？』

『クリリッ』

ハネクリボーがキラキラとした眼差しで期待している。

『うーん、やっぱり思いつきません』

『クリリ……』

『わわっ、そんなに落ち込まないでください！』

「ははっ、大丈夫だって。呼び方くらい自由だっていいじゃねえか、な？相棒」

『クリリ！』

「えっ？そういう問題じゃないって？」

『クリ、クリリ！』

間違いを糾弾するようにハネクリボーが大きな声で鳴いた。
どうも他のカードと呼び方が被ることが問題らしい。

『うーん、わかりました。新しい呼び方を考えておきます』

『クリリ〜』

頼むよと言わんばかりに肩をポンポンと叩かれた。
そんな感じで和気あいあいと仲良く会話しながら進んでいると、
前の方から雪がやってくる。

「ふむ」

「おっ、雪か。こんなところで何やってるんだ？」

『クリッ』

『あっ、こんにちは』

「むっ」

雪は十代の周囲、精霊のいる方をじっと見ていた。
何だろう、と精霊達は不思議に思う。
とりあえずニッコリと笑いかけてみた。

「ふむ」

「どうしたんだ？」

「むっ、君はさっき会話をしていたようだがその幽霊たちが見えて
いるのか？」

精霊達を見ながら雪が言ってくる。

『わたしたちは幽霊じゃないです！』

『クリクリリー！』

「どうなんだ？」

『ううっ、無視しないでください』

『クリリッ』

抗議の声も普通にスルーされてしまった。
十代が質問に答える。

「ああ、俺にはこいつらの姿が見えてるぜ。雪にも見えてるのか？」

「うむ、幼少の頃から霊感が強いせいかな人には見えていないものが見えるんだ」

『あっ、そういえばわたしのことをじっと見てるときがありましたね』

「うむ、ヒノキの傍を飛んでいたので気になってな。悪霊の類では無いみたいで安心していた」

雪の言葉に納得する。それと同時にエフェクト・ヴェーラーは微妙な表情になった。

雪は精霊のことを幽霊だと思っているようである。
エフェクト・ヴェーラーは憮然とした。精霊と幽霊とは大きな

隔たりがある。

精霊というものは想いや自然界の力または超常的な力などが昇華したものであり、幽霊というものは肉体を失った人間の霊魂である。よくわからないけどきつとそういうものだ、と心の中で頷いた。

「それで雪。何でここに居るんだ？」

十代が再度質問をする。

ちらりと視線でエフェクト・ヴェーラーを差して答えた。

「ふむ、その幽霊に用事が」

『幽霊じゃなくて精霊です！』

『クリー！』

「むっ、とにかく用事があったんだ」

「へえ、そういうことか」

『あう、だから無視するのはやめて……って、え？わたしに用事で
すか？』

「ああ、その通りだ」

雪が頷く。

自分に用があるらしい。

エフェクト・ヴェーラーは首を傾げた。

今日お話しするのが初めてなのに何の用事があるのだろうか、と。雪が用件を切り出してくる。

「今日、君はヒノキの前でずっと顔を見つめていたようだがヒノキには君が見えるようにならないのだから止めた方がいいぞ」

『ひ、ひどっ!?!』

容赦のない言葉が心にグサツと突き刺さった。

思わず地面にしゃがみ込みのの字を書き始めてしまう。

『あううう、どうせわたしなんてどうせわたしなんてどうせわたしなんてどうせわたしなんて……』

『クリ!クリリクリッ!』

『そんなこと言われても、わたしはマスターに見えてないし、声をかけても返してくれないし、気付いてももらえないし……ううっ、お話したいですよマスター』

『クリ!クリクリ!』

「あちゃ、そんな落ち込むなって!」

ハネクリボーと十代が必死に慰める。しかし、心にグサリと刺さったものは簡単に抜けそうになかった。
いいいいじとのの字を書いてしまう。

「むっ、私は変なことを言ったか？」

雪は不思議そうな顔をしていた。

何もおかしいことは言っていないはずだが、と小声で呟いている。
未だにいいいいじとしているエフェクト・ヴェーラーは完全に涙目と化していた。

『きつといつか、いつかお話しできるもん』

『クリー、クリリ！』

「あゝ、もう。そのヒノキに姿が見えるようになるために作戦を立てるんだろ？ 元気出せって！」

十代が声を張り上げるもエフェクト・ヴェーラーは反応しない。
そう簡単に立ち直ることが出来ない、いいいいじとしてしまう。
十代の言葉に雪の方が反応した。

「見えるように出来るものなのか？」

「ん、ああ。ヒノキにはハネクリボーの姿が見えているから見える

はずなんだ」

『クリー』

「ふむ、ヒノキにはこの空飛ぶ毛玉が見えているのか」

『クリリ！クリ！』

「むっ、怒っているのか？何を言っているのかよくわからないな」

『クリリッ！？』

ハネクリボーもショボーンとしてしまう。

『クリリー……』

『ううつ、わたしなんてわたしなんてわたしなんて……』

「おい、そんなに落ち込むなって！元気出そうぜ！どうすれば見えるようになるのか作戦会議をするんだろ？」

「ふむ、そういうことなら私も力になろう」

「いや、それはありがてえけどさ」

十代は落ち込む精霊達を見て溜息を吐いた。

しばらくの間、十代が精霊を慰める声が辺りに響いていた。

日が暮れ始めた頃、崖下。

「ヒノキ、おいヒノキ！起きろって！」

「うーん、むむ」

体が揺さぶられる。
ヒノキは目を覚ました。

「ふあゝあ。ん？十代か？」

「おう」

「むっ、私も居るぞ」

「ん？雪も一緒か」

『クリクリッ』

回転の鈍い頭で状況を把握していく。

どうやら暇すぎて眠ってしまったらしい。

目の前には十代と雪、それとハネクリボーが居る。

（随分と眠っちまったみたいだな）

崖下に広がっている夕焼けで茜色に染まった綺麗な海と空を見て
そう思った。

『マ、タ、おは、ご、い、す』

何だか耳鳴りがする。

耳鳴りが聞こえる方に顔を向けると空間の一部がぼやけて見えて
いるような気がした。

頭を振る。

（寝起きというのはどうもいかな）

そんなことを思いながら。

「ハハハ、ちょっと可哀そうだな」

「ふむ」

「ん？何を言ってるんだ」

ヒノキは十代の言葉を怪訝に思った。

何が可哀そうだというのだろうか？

本当によくわからない。

（まあ、いいか）

どうでもいいし、と投げやりに片づけた。

「ヒノキ、1つ聞きたいことがあるのだが」

「ん？何だ？」

雪が質問してくる。

宙に浮かぶハネクリボーを指差す。

「君にはこの空飛ぶ毛玉が見えているのか？」

『クリリ！』

ハネクリボーが少し怒っている。

流石に毛玉は無いだろ。

ヒノキは第一にそんなことを思った。

「つて、雪にもハネクリボーが見えているのか！？」

「ふむ、その反応だとこの愛くるしい毛玉は見えているんだな」

『クリクリリ！』

「いや、毛玉って呼ぶのは可哀そうじゃないか？確かに毛玉だけど
さ」

「むう。ならヒノキ、そこに浮いている幽霊は見えるか？」

『だ、ら、幽、い、い、です！』

また耳鳴りがした。

今度は何もない……少しぼやけて見える空間を指差す。
頻繁に聞こえる耳鳴りの発信源。

「うーん、ちょっとぼやけて見えるだけで何も見えないな」

「むっ、そうか」

何かを納得した雪が少しだけ離れて、小声で何かを呟き始めた。
雪が指差していた空間をじっと凝視する。

「うーん」

『??? せん、わ、しを、てどう、た、で、か?』

「ふーむ」

『えへ、な、か照れ、い、す』

「成る程」

少しぼやけた空間を見つめ続けて納得することが出来た。

（ここには幽霊が居るのか）

精霊が見える人間には幽霊も曖昧な形で認識できるらしい。

昼間、視界がぼやけていたのはこの幽霊がずっと目の前に居たのが原因だったようだ。

ヒノキは少しすっきりした。

（早く成仏してくれよ）

心の中で冥福を祈っておく。

「ヒノキ！」

後ろから名前を呼ばれる。

振り向くと十代がデュエルディスクを2つ持っていた。

「デュエルしようぜ！」

「いや、いきなり何を言ってるんだ？」

「だからデュエルしようぜ！」

「聞こえなかったわけじゃないって。そもそも精霊がどうか言ってたんじゃないのか？」

「そのためにデュエルするんだよ。デュエルをすればきっと精霊が見えるようになるって」

デュエルをすれば万事OKという超理論。

ヒノキは少し呆れた。

（それで見えるようになるんだったら、もう見えてるって）

そうは思うがとりあえずディスクを受け取る。

別にデュエルを断る理由は無かった。

「よっしゃ！それじゃデュエルしようぜ！3人でバトルロイヤルだ
！」

「は？それは聞いてないぞ」

「むっ、私もやるのか？わかった」

雪がデュエルの準備をする。

「いいのか、雪？知らなかったみたいだけどさ」

「ふむ、力になると言っただけからな」

「それ、何の話？」

「君の話だ」

答えると同時に雪の準備が終わった。

「よっしゃ、それじゃデュエルしようぜ！きっと、精霊の見える奴2人とデュエルしたら見えるようになるはずだぜ」

「いや、どういう根拠だよ？」

「むっ、そういうこともあるのか」

「バトルロイヤルってのも1回やってみたかったんだ」

そっちが本音だろ？と突っ込みたくなった。

『クリクリ』

『マス、ー！が、ば、て、、さい！』

ハネクリボーの声と耳鳴りも聞こえる。

耳鳴りの方はすぐ傍で聞こえた。

（応援してくれてるのかな？だったらありがたいな）

でも、早く成仏して欲しかった。

三角形になるように散らばってディスクを構える。

「「デュエル」」

初めてのバトルロイヤル方式でのデュエルが始まった。

「よし、最初は俺から行かせてもらうぜ！ドロー！」

十代がカードを引く。

「E・HEROバブルマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROバブルマンATK800

「フィールドに他のカードが無いため効果で2枚ドロー！」

十代の手札が7枚に増える。

正直、いきなりバブルマンは止めて欲しかった。

「更に装備魔法バブル・ショットをバブルマンに装備することで攻撃力が800ポイントアップするぜ！」

E・HEROバブルマンATK1600

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

手札を4枚消費したはずなのに、手札が4枚ある。

（こっちのバブルマン強すぎるだろ）

そう思って、ヒノキはバブルマンをちらりと見た。

「さて、それじゃ2ターン目は俺が貰う。ドロー！」

デッキからカードを引いて、少し考える。

バトルロイヤルルールでは迷宮兄弟と行ったタッグのときみたい
に最初は誰も攻撃することが出来ず、最初に攻撃が出来るのは十代。
（あれ？そういえば）

デュエルの前に十代が言っていたことを思い出す。

『精霊が見える奴2人とデュエルすれば見えるようになるはずだぜ』
そんなことを言っていた。

（これって、実質2対1なんじゃ……）

少しばかり、げんなりとした。

「くっ、俺はスピード・ウォリアーを守備表示で召喚してターンエ
ンドだ」

スピード・ウォリアーがヒノキの前で守備態勢を取る。

守備力はかなり低いのだが、手札は魔法ばかりでシンクロ召喚が
出来るカードも揃っていないのでこれしか方法が無かった。

「私のターンだな、ドロー」

雪がカードを引く。

「カードを2枚セット、モンスターをセットしてターンエンド」

堅実な手を打ってきた。

「うし、俺のターン！ドロー！」

カードを引いたのを確認してヒノキは気を引き締める。
このターンから攻撃が可能となる。

「E・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROスパークマンATK1600

「更にスパークガンをスパークマンに装備！」

光が形となりスパークガンがスパークマンの手に納まった。

「いくぜ、ヒノキ！」

「くっ、やっぱり俺を狙ってくるか」

「スパークガンの効果を発動！スピード・ウォリアーを攻撃表示に変更する！」

スパークマンが狙いを定めて引き金を引く。

そして、スパークガンから放たれた電撃がスピード・ウォリアーを攻撃表示へと変更させた。

スピード・ウォリアー ATK 900

「くっ、まずいな」

「バトルだ！スパークマンでスピード・ウォリアーを攻撃！スパーク・フラッシュ！」

スパークマンがスパークガンを左手に持ち替えて電撃を放つ。

「くう」

LP 3300

スピード・ウォリアーが爆散してライフが削られていく。

「更にバブルマンでダイレクトアタックだ！バブルショット！」

水流の砲弾がヒノキに直撃する。

「ちっ、くうっ」

LP1700

「俺はこれでターンエンドだ！」

序盤だというのに大きくライフを削られてしまった。

（これだから1ターン目は攻撃できないってのは）

心の中で舌打ちをする。

しかし、今はそんな益体のつかないことを考えても仕方がなかった。

「俺のターン！ドロー！」

『マス、ファイ、ッ、す！』

また耳鳴りが聞こえる。

それには取り合わずに反撃を試みることにした。

「手札からジャンク・シンクロンを召喚！効果で墓地のスピード・ウォリアーを守備表示で特殊召喚！」

フィールドに2体のモンスターが並ぶ。

「レベル2スピード・ウォリアーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンがレバーを引っ張って3つの光輪を発生させ1つになってゆく。

「集いし星が新たな力を呼び起こす、光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアーATK2300

フィールドに舞い降りて攻撃態勢を取る。

今の状況では攻撃力が1番高いモンスターの召喚に成功した。

（さて、どうするか？）

十代の場にはHEROが2体とリバーズカードが2枚、雪のフィールドはセットモンスターとリバーズカードが2枚。

とはいえ、スパークガンを持ったスパークマンを残しておけば十代のターンでジャンク・ウォリアーが倒されてしまう。

取るべき手段は一択しかなかった。

「バトルだ！ジャンク・ウォリアーでE・HEROスパークマンを攻撃！スクラップ・フィスト！」

ジャンク・ウォリアーが跳躍、バーニアを点火して急加速を果し右拳をスパークマンに叩きつける。

「うおっ！スパークマン！」

LP3300

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

これでスパークガンにより表示形式を変更させられることは無くなった。

「ふむ、私のターン。ドロー」

雪がカードを引く。

「むう、私には誰も攻撃してこなかったな」

「ん？」

「裏守備のカード、メタモルポットを反転召喚」

メタモルポットATK700

裏側表示のカードが反転し、嘲るような笑い声を上げた。

「「げっ」」

「全てのプレイヤーは手札を全て捨てデッキから5枚ドローする」

「あっちゃー、融合を使つときゃよかったぜ」

「くう、手札4枚もか」

手札を全て墓地に捨てる。

（こんなことなら使つとけばよかった）

心の中で後悔した。

墓地に捨てさせられたカード

死者蘇生

シンクロキャンセル

貪欲な壺

ミラクルシンクロフュージョン

正直、あまりおいしくなかった。
全員が5枚ドロースるのを雪が確認する。

「ふむ、それではフィールドにセットしておいた儀式の準備を発動。
デッキから救世の美神ノースウエムコ、墓地から救世の儀式を手札
に加える」

「メタモルポットの時か」

「その通りだ、ヒノキ」

着々と儀式召喚の準備が整っていく。

「手札から永続魔法 昇華する魂を発動。更にマンジュ・ゴッドを
攻撃表示で召喚」

マンジュ・ゴッド ATK1400

「マンジュ・ゴッドの効果でデッキから2枚目の救世の美神ノース
ウエムコを手札に加える」

「おっ、エースがくるか？」

「くっ」

楽しげな声を上げる十代とは対照的にヒノキは体を強張らせた。
デュエルの前に十代が言っていた台詞からして、おそらく攻撃対象は自分。

（早くどちらかのライフを0にしないとまずいな）
ヒノキは苦い顔をした。

「では、いくぞ。儀式魔法 救世の儀式を発動。手札のノースウェムコを生け贄に捧げ救世の美神ノースウェムコ降臨」

救世の美神ノースウェムコ ATK2700

荘厳な光を舞い散らせ、地に降り立つ。

「ノースウェムコの効果を発動。対象は昇華する魂、神聖なる聖域
「ディヴァイン・サンクチュアリ」

ノースウェムコを桜色のオーラが包み込んだ。

手札をちらりと見る。

エフェクト・ヴェーラーがある、使えば効果を阻害することが出来るが

（いや、まだ使いどきじゃない）

ヒノキは首を振った。

手札は温存しておく。

「そして儀式召喚に成功したため永続魔法　昇華する魂の効果で儀式に使用したノースウェムコを手札に戻す」

雪が墓地のノースウェムコを手札に戻した。

これからバトルになるはず、ヒノキは身構える。
おそらく攻撃されるはずだから。

「バトル、救世の美神ノースウェムコでE・HEROバブルマンを攻撃」

「な、何!？」

「あれっ?」

ヒノキは肩透かしを食らった。

「むっ、何を驚いているんだ?これはバトルロイヤルだろう?」

「いや、そうだけどよお。これはヒノキに精霊が見えるようにするためのデュエルなんだぜ?」

「だが、バトルロイヤルだろう?誰を攻撃しても自由なはずだ」

「ふう」

安堵の息を吐く。

十代と雪のやり取りを聞いて少しほっとした。

十代は精霊が見える2人で攻撃するつもりだったようだが、雪は普通にバトルロイヤルをするつもりなのである。

少なくとも2対1ではないようなので安心した。

十代は計算が狂ったとでもいうような顔をしていた。

「あっちゃ、作戦の打ち合わせをしときゃよかったぜ」

「むっ、よくわからないがノースウェムコで攻撃する。救世の一撃
デイヴァイン・バスター」

ノースウェムコが魔力を杖へと収束させ桜色の砲撃を発射、バブルマンが光に飲み込まれる。

砲撃が納まった時、バブルマンは無事な姿を晒していた。

「むっ、倒せてないだど？」

「装備魔法バブル・ショットの効果！バブル・ショットを破壊することで戦闘破壊を無効にしダメージを0にする！」

バブルマンが持っていたバブル・ショットが爆発する。

「成る程、そういうことか」

「そう簡単に俺のHEROはやらせないぜ！」

「なら、もう一度攻撃するまでだ。マンジュ・ゴッドでバブルマンを攻撃」

マンジュ・ゴッドが大量にある腕でバブルマンをボコボコに殴り倒した。

「うわぁ」

『な、だ、ちよっ、ひ、気が、す』

少しばかり引く。

おとなしくノースウェムコの砲撃でやられていた方がまだ幸せだったような気がした。

マンジュ・ゴッドが殴り終えてバブルマンが爆散する。

「うおっ！」

LP2700

「更にメタモルポットでダイレクトアタック」

メタモルポットの中に入っている黒い物体が伸びて十代に激突した。

「ぐう」

LP2000

「これでターンエンド」

十代のターンになる。

「俺のターンだ！ドロー！」

手札は6枚。

十代の手札が多いのは非常にまずい。

（多分、俺を攻撃してくるんだろうなあ）
そう思い、気を引き締めた。

「いくぜ、ヒノキ！」

「やっぱり俺なのか……」

「おう！当たり前だろ！」

何を今更という感じで十代が断言する。
正直、勘弁してほしかった。

「魔法カード闇の量産工場を発動！墓地の通常モンスター2体、スパークマンとフェザーマンを手札に加える！」

「くっ」

「むっ、融合召喚か？」

「おう！魔法カード融合を発動！手札のスパークマンとエッジマンを融合！E・HEROプラスマヴァイスマンを融合召喚！」

E・HEROプラスマヴァイスマン ATK2600

「うっ、確かあのモンスターは……」

うろ覚えのカード効果を思い出す。

『ど、した、で、か？マス、一なら、と、じょう、す！』

また耳鳴りが聞こえた。

「プラズマヴァイスマンの効果！手札を1枚捨てることで相手の攻撃表示モンスターを1体破壊する！」

「くっ、そうだった。そういう効果だったな」

「へへっ！いけ、プラズマヴァイスマン！ジャンク・ウォリアーを破壊だ！」

「くっ」

プラズマヴァイスマンが電撃を放ちジャンク・ウォリアーへと向かっていく。

「手札のエフェクト・ヴェーラーの効果！プラズマヴァイスマンの効果をエンドフェイズまで無効にする！」

『はわわっ、出番ですか？』

何故か後ろの方からエフェクト・ヴェーラーがフィールドに現れ、ジャンク・ウォリアーへと放たれた電撃が霧散した。

「よっしゃ、今だ！」

十代が何故か声を張り上げる。

「つて、あれ？今、声が聞こえたような」

『ふえ？え、えっと、マスター！頑張ってください、ってもう時間ですか！？』

慌ただしくエフェクト・ヴェーラーが姿を消していった。

『あ、うゝ、と、然の、でうま、べれ、せ、で、た』

何やら幻聴が聞こえる。

（恐ろしいなソリッドビジョン、喋ることも出来るのか）

海馬コーポレーションってすごいな、と感心した。

十代が晴れやかな表情になる。

「よっしゃ、これで作戦は成功かな。ここからは普通にデュエルを
楽しむぜ」

作戦って何だろうか？

ヒノキは首を傾げた。しかし、その間にもデュエルは進行して
いく。

「E・HEROバーストレディを攻撃表示で召喚！」

E・HEROバーストレディATK1200

「そして、バトルだ！まずプラズマヴァイスマンでジャンク・ウォリアーを攻撃するぜ！」

プラズマヴァイスマンがジャンク・ウォリアーの前に移動し巨大な両腕で包み込み電撃を浴びせる。

電撃に耐え切れずジャンク・ウォリアーが爆散した。

「くう、ジャンク・ウォリアーが！」

LP1400

「次はバーストレディでダイレクトアタックだ！バーストファイヤー！」

「くっ、これ以上はやらせないさ！リバースカードオープン！トウルースリインフォース、効果によりデッキからレベル2以下の戦士族、マッシュ・ウォリアーを守備表示で特殊召喚！」

マッシュ・ウォリアーDEF1200

ヒノキの前で防御態勢を取りバーストレディの進路を塞ぐ。

「やるなヒノキ。マツシブ・ウオリアーの守備力とバーストレディの攻撃力は同じ、攻撃は中断だ」

バーストレディが両手の炎を消して十代のフィールドに戻っていた。

「ふう、何とか保ったな」

「そいつはどうか？手札から融合解除を発動！」

「っ！まずいか？」

「いくぜ、プラズマヴァイスマンの融合を解除！」

プラズマヴァイスマンの姿が2つに分かれE・HEROエッジマンとE・HEROスパークマンが姿を現す。

E・HEROエッジマンATK2600

E・HEROスパークマンATK1600

「むっ、追加攻撃か。流石はヒノキの友人だな」

「うっ、これもやっぱり」

「おう！もちろんヒノキのマツシブ・ウォリアーに攻撃するぜ！いっけー、エッジマン！パワー・エッジ・アタック！」

「くう、耐えてくれマツシブ・ウォリアー！」

エッジマンの刃をマツシブ・ウォリアーが手に持つヘリポートで受け止めた。

「これで2回目だ、スパークマン！スパーク・フラッシュュ！」

続いてスパークマンから放たれた電撃がマツシブ・ウォリアーに直撃する。

「くっ、やられたか」

「よっしゃ、マツシブ・ウォリアー撃破！俺はターンエンドだ！」

フィールドががら空きにされてしまった。

「くっ、俺のターン！ドロー！」

カードを引く。

手札はメタモルポットのせいで罨ばかりだった。

(まづいけど、何とかなるかな?)

そんなことを思うヒノキ。

とりあえず今はモンスターカードを出さないとまずい。

「マックス・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

マックス・ウォリアー ATK1800

「いくぞ十代！やられた分は取り返してやるさ！バトル、マックス・ウォリアーでE・HEROスパークマンを攻撃！スイフト・ラッシュ！」

マックス・ウォリアー ATK2200

攻撃力が上昇したマックス・ウォリアーがスパークマンを打ち倒した。

「くっ、やってくれるぜヒノキ」

LP1400

「モンスターを戦闘で破壊したことによりマックス・ウォリアーの元々の攻撃力は半分になる」

マックス・ウォリアー ATK 900

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

これだけ罠を伏せれば大丈夫だろう、と。
ヒノキは少し安心しながらエンド宣言をしていた。

「私のターン、ドロー」

雪がカードを引く。
引いたカードを見て呻いた。

「むう、結果的に漁夫の利になってしまうか」

雪が小さな声で呟く。
一体、何を引いたのか気になる。
ヒノキは少し嫌な予感がした。

（でも、リバー스가3枚あるから大丈夫だよな？）
そう言い聞かせて心の平穏を保つ。が、あまり意味は無かった。
雪が引いたカードを使う。

LP3000

「魔法カード拡散する波動。ライフを1000ポイント払い、このターン私のレベル7以上の魔法使い族である救世の美神ノースウェムコは全てのモンスターに攻撃出来る」

「おお、そのカードって確か遊戯さんも使ってたカードだよな？
くう、ワクワクするぜ！」

十代が能天気な声を上げた。

ヒノキは冷汗を流す。

ライフは1400しかない、マックス・ウォリアーを攻撃されたら負けだった。

(でも、まだリバースカードが)

心の中で自身を励ましている最中に雪がデュエルを進行させる。

「更に墓地の救世の儀式の効果。救世の儀式を墓地から除外することで私の儀式モンスター1体、救世の美神ノースウェムコはカード効果の対象にならない」

ノースウェムコの纏っているオーラが更に強力になった。

「げっ!？」

「へえ、面白い儀式魔法だな」

再び十代が能天気な声を上げるが、それどころではない。

（まずい、まずいぞ）

心の中で焦る、冷汗が止まらなかった。

「いくぞ、救世の美神ノースウエムコで全てのモンスターを攻撃する」

ノースウエムコが杖を振りあげ、周囲に桜色の光球が2つ生成され攻撃準備に入る。

（いかん）

頭の中で3枚のリバースカードを確認した。

聖なるバリア・ミラー・フォース、発動してもノースウエムコには破壊耐性があるため無意味。

激流葬、発動することも出来ない。

くず鉄のかかし、対象を取る罠カードなので発動不可。

どうしようもなかった。

「全てのモンスターを撃ち抜け、ディヴァイン・バスター！」

杖の先端と2つの光球から極太の光線が放たれる。

その内の1つがマックス・ウォリアーを飲み込んだ。

「うおおっー!!」

LP0

ソリッドビジョンが消えてリバースカードの表示が消滅していく。
ヒノキのデュエルは終わった。

「ふう、あぶねえ。何とかライフは残ったぜ」

LP800

何故か十代のライフは残っている。

「むっ、ということだ?」

「へへっ、ギリギリ非常食の発動が間に合ったんだ」

言われてみれば確かに十代の魔法・罠ゾーンに伏せてあった2枚のリバースカードが消えていた。

「成る程、ということは攻撃を受けた時点でライフは2400に回復していて戦闘ダメージで1600のダメージをくらっても問題なかったのか」

「そういうことだ、ヒノキ」

「ふむ、しぶといな」

「じゃあ、俺は静かに観戦してるからな」

「おう！」

「むっ、では心の中で応援をしていてくれ」

「ああ」

2人が向きあう。

ヒノキは負けてしまったので観戦モードに移行することにした。

『残、でし、ね、マス、—』

「ふむ」

幻聴を無視してデュエルを振り返ってみる。

結局、十代とヒノキの双方が雪を相手に2対1でデュエルをしているような形になっていた。

（さて、結末はどうなるかな？）
静かに見守る。

「私はターンエンドだ」

十代のターンになった。

「俺のターン！ドロー！」

手札が2枚になる。

「魔法カード ミラクル・フュージョンを発動！墓地のフェザーマ
ンとバーストレディを融合！E・HEROフレイム・ウィングマン
！」

E・HEROフレイム・ウィングマンATK2100

とんでもないな。

ヒノキは素直にそう思った。

（ドローしたのがミラクル・フュージョンとは）

流石は十代だ、とそんなことを思う。

「むっ、だがフレイム・ウィングマンの攻撃力ではノースウェムコ
には及ばない」

「慌てるなって、HEROにはHEROにふさわしい闘う舞台って
もんがあるんだ。フィールド魔法 摩天楼・スカイスクレイパー・
を始動！」

日が暮れてきた崖に摩天楼がそびえたっていく。

「うん、やっぱりね。残り一枚がスカイスクレイパーだったか」

『えーと、攻、りよ、ア、プする、し、つけ？』

幻聴がよく聞こえるが、よく聞き取れなかった。

摩天楼の頂上にはフレイム・ウィングマンが立っている。

「むっ」

「これで終わりだ！フレイム・ウィングマンで救世の美神ノースウエムコを攻撃！スカイスクレイパー・シュート！」

フレイム・ウィングマンが摩天楼から降下し、ノースウエムコに向かって下降していく。

「ふむ、漁夫の利というものはうまくいかないな」

竜の顎を叩きつけられ、ノースウエムコが消滅した。

LP2600

「むう、すまないノースウェムコ」

フレイム・ウィングマンが竜の顎を構えて、雪の前に立つ。

「更にフレイム・ウィングマンの効果で戦闘破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらうぜ！」

放たれた炎が雪を包み込んだ。

LP0

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

十代が決めポーズをして、ソリッドビジョンが消滅していった。

「むう、負けてしまうとは」

「いや、バトルロイヤルってのもハラハラしておもしろくな」

十代と雪がこっちに向かってくる。
ヒノキも片づけて立ち上がった。

「ふむ、やはり横からかすめ取るというのはうまくいかないものなんだな。今度は正々堂々と真正面から行こう」

「は、は」

雪の呟きに苦笑してしまう。

正直、拡散する波動は予想外だった。

十代が声をかけてくる。

「どうだ、ヒノキ？精霊は見えるようになったか？」

「むっ、そういえばそういう話だったな。どうなんだ、ヒノキ？」

「へ？精霊？」

「ああ、そこに居るぞ」

十代がある一部分を指差した。

「ん？」

『マ、ター！わた、見えて、すか？』

何かが聞こえる。

どうもぼやけ具合がひどくなっている気がした。

「ああ！雪が言ってた幽霊か！早く成仏してくれよ？」

『つて、違います！わたしは幽霊じゃないです！』

今度ははっきりとした大声が聞こえた気がした。

「あつれ〜？何で見えるようになってねえんだ〜？」

「ふむ、やはり見えるようにはならないものなんだな」

『あう、う、て見え、いん、か、何で、霊な、すか……』

「ん？悪い、よく聞こえない」

夕暮れの崖によく聞こえない幻聴が響いていた。

夕食の後、寮の部屋。

『うう、幽、いじゃ、のにゆ、霊、ない、に……』

『クリ、クリリー』

どうもはつきりとしないう聴がずっと聞こえる。
ぼやけてよく見えない空間の近くにハネクリボーが飛んで、話しかけるように鳴き声を上げていた。

「ヒノキ君、部屋の隅っこなんか見てどうかしたんスか？」

翔に声をかけられる。

「いや、何か声みたいなのが聞こえてさ」

「何も聞こえないッスよ？」

「いや、何でもない」

「変なの」

ヒノキはハネクリボーがいる方から視線をそらした。
これ以上、気にしても同じ部屋に居る翔に不思議がられるだけである。

ちなみに、隼人と十代は風呂に行っていて部屋にはいなかった。

「そうだ、翔。今日の分のノートを見せてくれないか？」

「ヒノキ君、今日はノート取ってないんスか？」

「いや、何か目の調子が悪くてさ」

「ふうん、大丈夫ッスか？」

「ああ、だからノートを貸してくれないか？」

「僕、今日ずっと寝てたッス」

色々と終わった気がした。

不意にポケットに入っていた携帯電話が震えだす。

「ヒノキ君、電話ッスか？」

「ああ、ちょっと悪いな」

断りを入れて携帯を取り出した。

ディスプレイの表示は自宅。
とりあえず通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『ヒノキか』

「父さんか、どうしたんだ？」

電話の声は記憶の物と何1つ変わらない父親の声だった。

『すまない息子よ。我が家では男の地位は限りなく低い』

「は？」

『至らない父を許してくれ』

「いや、意味がわからな」

『ブツッ、ツーッ』

電話が切れる。

（どういうことだ？）

ヒノキは首を傾げた。

第13話《後編》人それを勘違いという……えっ？だからパロディはやめろだっ

この回でヒノキ君はエフェクト・ヴェーラーを幽霊と認識しました。

何とも哀れな……おそらく雪の言葉が無かったらそんな認識はしなかった、かな？

今回のデュエルはバトルロイヤル。人数が増えると随分と長くなってしまう。

でも、正直バトルロイヤルを実際にやったら漁夫の利を狙ったほうがいいんじゃないかと僕は思います。

それでは。

第13話 ex 水面下（前書き）

とりあえず小出しで更新。

14話の中に入れようかと思ってましたが、正直長くなりすぎてしまうのでこういうことにしました。

第13話 ex 水面下

太陽が傾いてきて茜色に染まる閑静な住宅街、その一角に建てられた2階建ての一軒家。

表札には『柳』と書かれている。

そこでは息子に関しての家族会議が半ば無理やりに開かれていた。リビングの椅子に腰かけてまったりとしている中、唯一この家の住人ではない裁^{たち}司^{つかさ}が対面に腰かけている夫婦に向かって口を開く。

「ねえ、おじさんにおぼさん」

声をかけられて、まず最初にヒノキの母、柳^{やなぎ}穂乃香^{ほのか}が反応した。

「あらあら、司ちゃん。私のことは親しげにおねえさまと呼んでちようだい」

糸目で司を見て、うふふと穏やかに微笑する。

「いや、流石におねえさまが通じる歳じゃ」

「うふふ」

グシャッ

「うおっつ！」

突っ込みを入れたヒノキの父、柳^{やなぎ}大樹^{たいじゅ}が、ガタッと椅子から跳ねた。

「何か言ったかしら？ アナタ」

「いや、今日もお前は綺麗だな、と」

「そう、アナタも格好良いわよ」

「ハハハハ、ハ」

「うふふふふ」

仲の良い新婚夫婦みたいなやりとりだったが、どこか殺伐とした雰囲気漂っていた。

大樹はすごすごと黙り込んで、お茶を啜る。夫というのは大体が妻に弱いものなのである。

確かに大樹の突っ込みは正しいもので穂乃香の発言は年齢的にかなり無理がある、だが外見的には十分に通じる発言であったのだ。いかなる努力をもったのか、肌は白磁のような滑らかさときめ細かさをたたえており、身体には余分な肉がついておらずメリハリの利いた体型をしていて服の下から押し上げている双丘が艶めかしい、背中の中ほどまで伸びている長い黒髪はサラサラとしている

のが目で見てわかる。

おそらくこの美貌を維持するのに莫大な金がかかっていることだろう。ちなみに、街を歩いていると女子大生に間違われるのが自慢であった。

言われたことを鵜呑みにした司が口を開く。

「えーと、おじさんにおねえさま」

「うん、何かしら？」

と、満面の笑顔。

ズズズッと大樹は横で茶を啜っている。余計なことは言うもんじやないと第三者的に事態を見守ることに決めたらしい。

「ヒノキをアカデミアから連れ戻さない？」

「ブホッ」

大樹は茶を吹いた。

あらあら、と穂乃香が糸目でちらりと見る。

「お茶がもったいないわよ？」

「ゴホッ、ゴホッ、すまないな穂乃香」

「いえいえ、しっかり味わって飲んでくださいね？ 最高級の玉露ですから」

「！？ 玉露だって？ どおりでいつにも増して茶が旨いと……」

「うふふ、嘘よ。いつも味わって飲んでない証拠ね」

「うっ、そういうわけでは……って、そんな場合じゃない」

大樹が湯呑を置いて司に向き直った。

隣で穂乃香が「あらあら、逃げたわね」と言って笑っている。

大樹は真剣な顔で司を問いただした。

「ヒノキをアカデミアから連れ戻す、というのはどういうことだ？」

「おじさんも知ってるでしょ？ ヒノキが退学になりそうになった話」

「ぬう、あの話か。しかし、ヒノキは頑張って退学を免れたはずだが？」

「うん、何とか退学にはならず済んだみたい」

大樹に対して司は神妙に頷く。

ヒノキがアカデミアを退学になりそうになった話はこの場に居る全員が知っていた。

校則を破った罰としてヒノキが退学を言い渡され、負けたら退学の制裁タッグデュエルを行い、そのデュエルに何とか勝利を納めて

退学を免れたこと。

でも、と司が言葉を続ける。

「ヒノキは一度校則を破って退学になりそうになったの。しかも、入学してから早い段階で」

「うーん、確かにその通りだけど」

「おじさん、あたしが知る限りヒノキはそれほどデュエルが強いわけでもないの。きっと、いつかアカデミアでやっていけなくなると思うの」

ぬう、と大樹が唸った。

穂乃香はうふふと柔和な笑みを浮かべて司の表情をじっと見ている。

大樹は司に難しい顔で切りだした。

「確かに司ちゃんが言ったようにヒノキがアカデミアでやっていけなくなることもあるかもしれない」

大樹の言葉を聞いて司が嬉しそうな顔をする。

「だったら、早速ヒノキを」

「だけどだ」

「えっ？」

「ヒノキは今回頑張って退学を免れることが出来た。だったら、もう少し信用してあげてもいいんじゃないかな？」

大樹の声は諭すようなやさしい声音だった。しかし、司は椅子から立ち上がって食い下がる。

「で、でもおじさん！何とかなったとはいえヒノキは退学しそうになったの！次が無いって断言できる？」

「確かに絶対にはないと断言はできない。でも、ヒノキがどれだけアカデミアに行きたかったのかよく知っている。その道を閉ざすのはいけないことだと思わないか？」

「うっ、だけど……だからこそ！退学になったらヒノキはきつと傷つく！今ならまだ間に合う、今からでも連れ戻してあたしと同じ高校に」

瞬間、穂乃香の糸目がきらりと光った。

「あら、司ちゃん。どうして同じ高校じゃないといけないのかしら？」

「えっ、えーと、それはそのー、あたしと同じ高校なら問題を起こ

さないように見て上げられるかなって？」

しどろもどろになりながら司が自信なさげに答える。目も泳いでいてかなり怪しい。

司の答えを聞いて穂乃香はふふふと笑った。

「あらあら」

「とにかくヒノキをアカデミアから連れ戻したりは」

「アナタ、少し黙ってて」

「しかし」

「うふふ」

糸目だった穂乃香の目が見開かれる。有無を言わせない雰囲気がある。

大樹はすごすごと黙り込んだ。

目を開いたまま穂乃香が司を見る。

「司ちゃん」

「あ、え、え」と

「そんなにヒノキと一緒に居たい？」

視線を動かさずにじっと見つめながらの真剣な質問。
司は瞳を輝かせながら元気よく頷いた。

「うん！あたしはもっとヒノキと一緒に居て楽しいことをしたい！」

「あらあら、ヒノキったらモテモテね」

うふふ、と片手を頬に当てて元の糸目に戻った。
妻の質問が終わったのを確認して、大樹が口を開く。

「とにかくヒノキをアカデミアから連れ戻すなんてことは出来ない」

「ふふふ、私は許可してもいいわよ」

「おばさ、じゃなかった。おねえさま！」

瞳をキラキラとさせて司が喜びの声を上げた。
思わぬところからの後方支援に大樹が声を荒げる。

「何を言ってるんだ！ヒノキの気持ちも考えてやらなければ可哀そうだろう！あの子を信じてあげるべきじゃ」

「でも、司ちゃんの言っていたことにも一理あるわよ」

「そうかもしれないがヒノキの気持ちはどうなる？」

「確かに一方的に連れ戻すのは可哀そうね」

そう言って、司の方を見る穂乃香。

「ねえ、司ちゃん？ヒノキはデュエルがそれほど強くないと言ってたけど、どれくらいなのかしら？」

「少なくともあたしには一度も勝てなかったよ」

「あらあら」

顔は常に柔和な笑みをたたえていて、何を考えているのかよくわからない。賭け事などで大一番の時に相手は困るかもしれない。穂乃香は1つの提案を切り出した。

「なら、司ちゃんがヒノキを連れ戻しに行って、ヒノキが司ちゃんとのデュエルに勝てなかったら連れ戻すことにしましょう」

「おねえさま！」

「うふふ」

司はキラキラとした瞳で穂乃香を見つめる。

しかし、ヒノキにとって最後の味方であり砦でもある大樹は抵抗した。

「駄目だ駄目だ！ヒノキはつい最近も退学を賭けたデュエルを行っただぞ？これ以上ヒノキが退学になるようなことを増やすわけにはいかない！」

「あらあら、ヒノキもアカデミアで勉強をして少しはデュエルが強くなったはずよ？成長していれば1度も勝てなかった司ちゃんにだって勝てるはずよ」

「くっ」

「逆を言えば、もし負けたらヒノキは成長していないということ。お友達と引き離すのは可哀そうだけれど連れ戻すのは仕方ないことよ」

「ぐう」

ぐうの音も出ない、というより大樹はぐうの音しか出てこなかった。

反論は考えればいくらでもあるのだが穂乃香の言い分に勝てるほど確固たるものはない。

大樹は口下手だった。

「そういうわけで司ちゃん。校長先生への手紙は私が書いてあげる

からヒノキの所へ行ってきたさい」

「おねえさま！ありがとうございます」

「うふふ」

瞳を輝かせながら礼を言ってくる司を見て、穂乃香は笑みを深める。

そして、もう一度司に質問を投げかける。

「司ちゃん、そんなにヒノキと一緒に居たいのかしら？」

「うんうん！」

「うふふふ、なら司ちゃんをヒノキの許婚いいなづけにしてあげる」

「えっ？いいなづけ？何かの漬物？それっておいしいの？」

「あらあら、許婚いいなづけを知らないのね。ジェネレーションギャップって奴かしら？」

困ったわね、と全然困った顔ではない穂乃香。

おそらくジェネレーションギャップではなく、ただ単に司がそう言ったことに疎いだけである。

「簡単に言っていると許婚いいなづけっていうのはずっと一緒に居ることが許される

ってことよ」

「おねえさま！」

「うふふふ、お義母さまって呼んでくれていいのよ？」

「お義母さま！」

「うふふふ、若いっていいわね」

椅子に座ってリビングで和やかに微笑む穂乃香。

この時、大樹は自らの敗北を悟り廊下でヒノキに電話をかけていた。

「すまない、息子よ。父は無力だ……」

その顔は本当に申し訳なさそうだった。

第13話ex 水面下（後書き）

次回、デュエル。

今まで電話でしか出てこなかった姉貴が乱入してきます。

といっても、まあ13話のラストで大体こうなることは丸わかりでしたけど。

それでは。

第14話 心の温度（前書き）

はい、とりあえずまた一区切りっぽいものがついたのでシリーズっぽい題名。

かなり時間を喰いました。

ちなみに前回、この話に入りそうにないからと言って分割して小出しにしましたが本当にもう一文字も入らないくらいでした。

というか、1部だけ文字が入らなくて削りました。

かなり更新に時間はかかりましたが、読む時間もかなりかかることでしょう。

今度からはもう少し短くしていきたい。

それではどうぞ

第14話 心の温度

父親のよくわからない電話から2、3日経過した。

何かあるのではないか、と内心で疑いつつもヒノキは問題を放置している。きっとその内わかることだから。

現在、ヒノキは雪と部屋で弁当対決をしていた。

日の丸弁当VSのり弁

雪と一緒に黙々と弁当を食べる。

「ふむ、海苔の香りが香ばしいな。醤油による味付けも丁度いい」

食べる合間に素直な感想を呟く雪。

（シロウトの作ったのり弁を褒めることがよく出来るな）

ヒノキは雪に感心した。

正直なところ、自分が作ったのり弁なのだがそこまで褒めるところは無いと思う。

雪が作った日の丸弁当を食べながら、何を言えいいのか困っていた。

米を食べる。

「うーん」

米だな、という率直な感想しか浮かんでこない。

今度は梅干しに箸をのばしてみる。

パクリと一口。

酸味が口の中いっぱいに広がった。

「うゝむ」

梅干しだな、という率直な感想しか浮かんでこない。
ヒノキは困り果てた。

「何だか質素な弁当対決ッスね」

「何か言わなきゃいけない気がするんだけど、何を言えばいいのか
浮かんでこないんだな」

外野で隼人と翔が何か話をしている。

ちなみに十代は居なかった。おそらく木陰で昼寝でもしているの
だろう。

黙々と弁当を食べ続ける。

「むっ、ごちそうさまだ」

雪がのり弁を食べ終わった。

「簡素な作りながらも海苔の香ばしさと醤油の味が米を引き立てて
いる、おいしい弁当だった。流石はヒノキだな」

ウンウンと頷きながら感想を言ってくる。

（何故か絶賛されている気がする）

ヒノキは少し照れた。

空になった弁当箱をナプキンで包んでから、雪がじっと見つめてくる。

どうやら何か言葉を発するのを待っている様子。

（いかな）

雪の眼差しに心の中で焦る。

何を言えいいのか全く思いつかなかった。

とりあえず弁当をゆっくり食することで時間稼ぎ。ゆっくりと咀嚼してから飲み込んでいく。

食べている光景をじっと見つめられる。

「ふむ」

雪が何やら満足げな表情を浮かべた。

微かな変化なので分かりにくいのだが、いつもは一文字に結ばれている唇が少しだけにこやかになっている。

何がお気に召したのか、ヒノキには全くわからないが今は何とか感想を考えることが先決だった。

日の丸弁当を食べながら思考を凝らす。

（どうする？何を言えがいいんだ？）

薄っぺらい美辞麗句とかうわべの言葉しか浮かんでこない。ヒノキはますます焦った。

「隼人君、僕たちここに居るの気まづくないッスか？」

「そんなこと言っても、外でやることなんて何もないんだな」

外野がうるさい。

おまけに本当に暇なのか、隼人と翔はこちらを呆然と眺めていた。
(そんなに暇なら勉強でもすればいいのに)

そんなことを思う、自分が隼人たちの立場だったら意地でも勉強はしないが。

くだらないことを考えていたら、弁当の中身を全部食べ終わってしまった。

結局、何も思いつかないまま。

(どうしようか?)

雪がじっと見つめている。

とりあえず弁当箱をナプキンに包んでから、向き直る。

「ごちそうさま」

「うむ」

雪が頷いてから、心なしか何かを期待する視線が強まった気がした。

「あゝ、と」

とりあえず声を出してみるが、何も思い浮かばない。雪がじっと見つめてくる。

（どうしようか？）

言葉に困る。仕方ないので率直な感想を言うことにした。

「物凄い、日の丸弁当って感じの日の丸弁当だった」

「そうか」

何故か満足げに目を瞑る。

よくわからないが、ホッとした。

「君は一口一口しっかりと味わって食べてくれるのだな、何だか嬉しいよ」

「ハハハ、ハ」

時間稼ぎのためにゆっくりと食べていたのを勘違いしたらしい、苦笑しか出てこない。

（いかん、罪悪感が半端ない）

自分が何だか薄汚い生き物のように思えた。

『大丈夫、で、か？少、汗をか、て、よ、マス、ー』

近くから心配そうな声が聞こえてくる。

所々聞き取れない部分があるけれど、何を言っているのか想像できくらいには聞こえた。

あまり大丈夫ではない。

そう言っただけだったが、近くに翔と隼人がいるため何も言えなかった。

心の中で罪悪感が増していく。

何も反応を返してやらないというのも、それはそれで後ろめたい気分になった。

（来世では幸せになってくれ……）

心の中で冥福を祈っておく。と言っても、自分に対する気休め程度にしかならなかったが。

「どうでもいいんですけど、ヒノキ君と雪さんの関係がよくわかんないッスね」

「うーん、少なくとも付き合っているようには見えないんだな」

ほのぼのと会話する外野の声。

（付き合うとか、そんなことがあるわけないだろ）

的外れな邪推をしているな、と呆れた。

「むっ、私とヒノキの関係か？」

「いや、そこで反応するか！？ 普通」

「??? どうしたんだ、そんなに声を荒げて？」

「いや、別にどうもしないけど」

普通はスルーする場面じゃないか？

ヒノキは微妙な表情になった。

そうか、とポツリと呟いてから翔と隼人に顔を向ける雪。
よく通る声で言い放った。

「私にとってヒノキはかけがえのない大切な強敵だ」
とま

「何か言葉に違和感がある気がするッス」

翔が無然とする。

違和感って何だろうか？

素朴な疑問を抱く。少なくとも言葉を聞いている限り不自然なところなどないような気がした。

首を傾げていたら雪に声をかけられる。

「ヒノキ、少しいいか？」

「ん？別に構わないけど」

一体、何だろうか？

疑問に思いつつも了承すると、雪が近くに寄ってきた。しかも、
真正面から。

かなり距離が近い。何だかいい匂いがする。

「う、羨ましいッス」

「何か俺も外に出たくなってきたんだな」

後ろの方から翔と隼人のげんなりとした声が聞こえてきた。
全く意味が分からない。

心の片隅で外野の会話に反応しながら、雪の瞳をじっと見つめる。
(目を逸らしたら負けな気がする)
勝手にどうでもいい勝負を行っていた。
おもむろに雪が手を伸ばしてくる。

「ふむ」

「はっ？」

頭の上で雪の手が左右に動く。何故か頭を撫でられていた。

「むう、手強いな」

「いや、何が……ん？」

どういう意味か質問しようとして、あることに気が付いた。外か

ら階段を昇るけたたましい音が響いている。

『走ったら駄目、床が抜けるのニャー!』

『へ? あはは、ごめんなさーい!』

何だか聞き覚えのある声が外から聞こえてきた。
思わず扉の方をじっと見つめてしまう。

「むっ、どうかしたのか? ヒノキ」

顔を動かして扉の方を見たヒノキを訝しがった雪が質問をしてく
る。手をヒノキの頭に置いたまま。

けたたましい足音はまだ鳴り響いている。

「外から覚えのある声が聞こえる気が」

「ふむ、そういえば確かに騒がしいな」

やはり手は頭に置いたまま。

「それにしても君の髪は手触りがいいな」

再び、手を動かして髪の毛を撫でつけ始める。
大して外の様子など気にしていないようだった。
足音が部屋の前で止まる。

「ヒノキッ！ 迎えに来たぞっ！」

バアン、と勢いよく扉が開け放たれた。
全員が扉を開けた人物の方を見る。

「あつ、ヒノキ君の電話から聞こえてきた声ッス」

「確か、ヒノキのお姉さんなんだな」

「ふむ、やはりこの髪質にはまだ勝てんな」

1人だけマイペースに髪の毛を触っている人がいたが。
（というか、いつまで触っている気なんだろうか？）
素朴な疑問を抱いた。
扉の方で立っている姉貴がこちらの方を見てくる。

「やっほー！ ヒノ、って!？」

「むう、それにしてもサラサラとしているな」

髪の毛を撫でている雪を視認して、姉貴が一瞬にして靴を脱ぎ捨てる。

「ストップ！インターセプトッ！」

「うぶっ」

そして扉の方に居た姉貴に勢いよく抱きつかれた。まるで自分のものだ主張するようにギュッと胸に抱かれる。勢いで頭を触っていた雪の手が外れた。

「むっ」

「あたしとヒノキの絆が女によって揺らぐことなんて認めないっ！」

「うー、うう」

『マス、ー！息、ますか？』

再び、心配そうな声が近くから聞こえてくる。かろうじて呼吸は出来る。

全然、変わっていない兄貴。

ヒノキは姉貴の胸に顔を埋めながら感慨深く思った。

兄貴の行動を思い出す。

兄貴も自分が異性と話していると

『待てえい！俺とヒノキの友情が女に脅かされるなんて認めん！』と叫んで乱入してきた。

（本当に何1つ変わっていないな）

兄貴と決定的に違う部分、姉貴の胸に顔を埋めながらそんなことを思った。

「な、何て羨ましいことを」

「流石に妬ましいんだな」

言葉の意味が分からない。

そう言おうとして、ヒノキは姉貴の胸から顔を離そうとした。

「ん？どうしたのヒノキ？あたしの胸の中でそんなに顔を動かして？」

「うーうう」

違うと顔を横に振る。

姉貴の力が強くて離れられなかった。

（くっ、この馬鹿力め）

やはり大胸筋か、と顔に当たる柔らかい感触に悪態をついた。

「うう、羨ましいッス！」

「妬ましいんだな」

再び外野から羨むような声が聞こえてくる。

（好き勝手言ってくれるなあ、変わってくれよ）

げんなりとしながら、姉貴の胸に顔をうずめながら更にもがいた。

「あんた、さっきから何やってんの？」

「んー、むぐぐ、うぐ」

やはり力が強くて離れることが出来ない。違うと顔を再び横に振る。

（どんだけ力が強いんだ？）

やはり大胸筋なのか、と再び悪態をついた。

「うゝ、うむむ」

「??? そんなに、あたしに会いたかったの？」

だから違う、と顔を再び横に振る。

「んっふっふゝ♪そう、そんなにあたしに会いたかったのかゝ」

何か勘違いしたらしい。姉貴の上機嫌な声が頭の上から聞こえてきた。

「んー！んむむ、んむ！」

「大丈夫、大丈夫♪あたしもヒノキにすごく会いたかったぞ♪」

すりすり、と頭の上に頬ずりされる。

全く大丈夫じゃない、意思の疎通が成立していなかった。

「むう、羨ましい……私も今度やってみるか」

何をするつもりなんだろうか？

ヒノキはもがきながら、素朴な疑問を抱いた。とはいえ、今の状態のままでは満足に質問をすることも出来ない。

ヒノキは更にもがいた。

姉貴は未だに頬ずりを続けている。

「はぁ、久しぶりのヒノキだなぁ♪相変わらず柔らかい髪の毛ね」

「くう」

それにしても、姉貴はやたらと上機嫌だった。

早く離れたい。

そう思っ、姉貴の肩を掴んで力を入れる。

女になっていようと、柔らかい胸があらうと、いい匂いがしよう
と、兄貴は兄貴。

ヒノキは何とも思わなかった。

何とか頬ずりを続けていた姉貴を引きはがして、離れる。

「ふう、全く何つー馬鹿力だ」

「あんっ、もう。もう少しヒノキの柔らかい髪を堪能していたか
つたのに」

姉貴が残念そうな声を上げた。

顔を下に向けたまま、げんなりと突っ込みを入れる。

「意味のわからないことを言うなって姉貴」

「ふむ、私には少しわかるな」

「いや、共感しなくていいって」

「むっ、そうか」

本当に姉貴は何をしに来たんだろうか？

はあ、と溜息をついてヒノキは姉貴の方を見た。

女っぽい顔になった兄貴がそこに居た。しかし、一部だけ違和感

を感じる。

「って、何？その頭？」

「あゝ、これ？んっふっふゝ、イメチェンって奴かなゝ」

嬉しそうな顔をして姉貴が金色になっている髪の毛の穂先を手で弄ぶ。

姉貴の姿は、兄貴の時によく見た黒いセーターに青のジーンズという見慣れたものだったが、髪の毛だけは見慣れた黒のロングヘアが先端だけ金髪になっていた。

「何それ？染めたの？」

「そうそう、全部染めちゃったらつまんないと思ってこんな感じにしたの」

どう？と自慢げな顔で聞いてくる。

（そんなこと言われてもなあ）

正直、違和感バリバリだった。

満面の笑顔で思ったことを口にする。

「うん、変だよ」

「んっ、全く失礼な奴だね本当に。アカデミアに入学する前と全然

変わってない」

失礼な言葉に対して姉貴はむしろ満足げな表情で目を瞑って頷いた。ホッと胸を撫で下ろすように。

（変わってない、か）

姉貴の言葉が心に深く残った。

変わっていないはずがない、自分は姉貴の知っている『柳 ヒノキ』とは違うはずなのだから。

思わず眉間に皺を寄せてしまった。

しかし、そんな様子など気付かずに姉貴が言葉が続ける。

「まっ、そんな簡単に変わるわけないよね。だって、ヒノキはヒノキなんだから」

そう言って、姉貴がうんうんと頷いた。

何だか目頭が熱くなる。

（どんな世界でも俺は俺、か）

少し救われた気がした。

（そんな難しいことじゃなかったのかもしれないな）

『俺』は俺なのだから自分らしく生きればいい。

眉間に寄っていた皺は自然と緩んだ。

「ところで結局のところ彼女は誰なんだ？」

不思議そうな雪の声が聞こえてくる。

(いけない)

ヒノキは感傷的になっていた心を振り切り、顔を小さく左右に振った。

「ヒノキ君、何してるんスか？」

「どうかしたんだな？」

「いや、何でもない」

訝しがる外野に適当な言い訳をする。

若干、泣きそうだったなんてことは口が裂けても言えない。

雪の質問には姉貴自ら答えた。

「あたしは裁 司。ヒノキと小さな頃からずっと一緒に居る幼馴染ね」

何故か、『ずっと』の部分を強調する。

『ずっと、緒に居た、すか、うらやま、です』

近くから声が聞こえてきた。

ずっと、なんて言う聞こえはいいが正直なところ腐れ縁の方があっている気がした。

姉貴の言葉に雪が納得する。

「成る程、幼馴染か。私には居ないな」

感慨深げにポツリと呟いた。

「まあ、ほとんどの人には居ないらしいよな」

「むっ、そういうものなのか？」

「どうなんだ？翔」

「いや、ヒノキ君どうして僕に振ってくるんスか？」

「えっ？翔ってそういうポジションだろ？」

「勝手にそんな役回りにしないで欲しいッス！」

翔の叫びがこだまする。

翔で遊ぶのはこれぐらいにして本題を切り出すことにした。

「それで姉貴は結局何をしに来たんだ？」

「ヒノキ君、スルーしないで欲しいッス」

「むっ、私の質問はどうなったのだ？」

「細かいことは気にするなって」

「ふむ、成るほど細かいことだったのか」

「いや、雪さん。そこは納得するところじゃないッス」

翔が少し疲れたような声で雪に突っ込みを入れる。
それを尻目にヒノキは姉貴に質問を投げかけた。

「それで、姉貴は何しに来たんだ？」

「……」

「姉貴？」

呼んでも反応が無い、様子がおかしい。
姉貴はヒノキの方を呆然と眺めていた。

「姉貴、どうかしたのか？」

とりあえず顔の前で手をパタパタと横に振ってみる。
姉貴はゆっくりと顔を動かしてヒノキを見つめた。

「ヒノキ……」

「ああ、何？」

「あんた、あたしが居なくても楽しくやってるのね……何だか寂しいな」

俯きながら弱弱しい声を出している。

何だか物憂げな雰囲気だった。

（姉貴……）

まるで女の子みたいな声で『寂しい』なんて殊勝なことを言っている姿は正直、

「気持ちわる、ぐふっ！」

無言で殴られた。

「本当にヒノキは失礼な奴ね！全く！」

「くっ、この馬鹿力め」

兄貴の言っていたことは正しかった。ヒノキは悪態をつきながら納得をする。

結構な衝撃だった。それなりに痛い。

「今のはヒノキが悪いんだな」

「自業自得ッスね」

何故か責められる。

（俺が悪いのか？）

殴られた頬がジンジンと痛みを発していた。

「ヒノキ、大丈夫か？」

雪だけが心配そうな声を上げて近寄ってくる。
何だかとても嬉しく感じた。

「雪、ありがとう。俺の味方はお前だけだよ」

「私にとって君はかけがえのない存在だからな、心配もするさ」

「雪……」

「ストーーーープッ！」

間に姉貴が割り込んでくる。

「こんな展開に需要はないの！1000円安いわ！」

「むっ?？」

「はぁ。姉貴、言ってることの意味が分からない。あと、多分1000年早い、だ」

「そんな細かいことはどうでもいいの！」

姉貴が切り捨てるように叫んだ。

確かに細かいがそういうことは目敏く反応したくなるものなのだ。

(まあ、本当にどうでもいいことだけども)

小さなことを細かく突っ込みたいお年頃なのさ、とヒノキは微妙な表情をした。

姉貴がビシッと指を差して口を開く。

「とにかく！今日、あんたはあたしと一緒に帰るんだからこんな展開は必要ないの！」

言いきった瞬間、部屋が静寂に包まれた。

「「つて、えええー！ー！ー！」」

少しして驚愕の叫びがこだまする。

ヒノキもポカンと口を開けて目を見開いた。

「ど、どういふことなんだな!？」

「ヒノキ君に雪さん! 落ち着き払ってる場合じゃないツスよ!？」

「むっ、私はとてつもなく驚いているが？」

雪が無表情で返答をする。

よくわからないほどだが、眉間に皺が寄っていた。

（俺を連れ戻す？）

それは退学ということか？

ヒノキも再起動を果す。

「って、聞いてないぞ! 姉貴、一体どういふことなんだ？」

「2、3日前にヒノキン家の家族会議で決まったの。おじさんは反対してたんだけどお義母さまが賛成してくれたの」

「はっ? おかあさま？」

言葉に違和感がある気がした。

おかしい。兄貴は母が言っていたことを鵜呑みにして母のことはお姐さまと呼ぶ、もしくはおばさん。

（ごめんよ、翔）

少し前に翔が言っていた台詞に共感できる気がした。

心の中で謝罪を終えて、2、3日前のことを思い出す。

（というか父さんの電話はこういうことだったのか）

おそらく姉貴の口ぶりからして連れ戻すことを提案したのは姉貴。今まで父の電話がどういふことなのかわからなかったが、ようやく納得することが出来た。

父が家族会議の場で苦労しているのが目に浮かぶ。

（父さん、苦労しすぎて禿げるなよ）

今は遠い地に居る父へエールを送る。でも、正直もう少し頑張っ
てほしかった。

「というわけでヒノキ。あんたはあたしと一緒に帰るの」

「何がというわけで、だ。話がいきなりすぎるっての、まったく」

はあ、と溜息を吐く。

連れて帰ると言われて、はいそうですかと付いていく気なんてさ
らさらなかった。

姉貴が不満そうな声を上げる。

「そんなこと言われても、お義母さまが書いた校長先生宛ての手紙
はもう渡しちゃったし」

「手紙？ いつの間にそんなものを」

「ふふん、ヒノキに会う前にちょいっとやっといいたの」

自慢げな顔をする姉貴。

（勘弁してくれよ）

手紙を渡したということは、ほぼ確定事項。回避のしようが無かった。

本当に溜息しか出てこない。

理不尽なうえに、退学なんかになったら困るというのに。本当に勘弁してほしかった。

「まったく、本当にバカ姉貴なんだから」

「んっ？失礼な奴ね、おねえちゃんをけなす気？とにかく、あんたはアカデミアの生徒を辞めてあたしと一緒に帰るの」

「断る、絶対に辞めてなんかやらないさ」

「もう、ヒノキはわがままねえ」

呆れたような表情をする姉貴。どっちがだ、と小声で呟く。

姉貴にだけは言われたくない言葉だった。

『アカデミアの生徒を辞める』つまりは退学、あるいは転校。その言葉に周囲の人間が強く反応する。

「ひ、ヒノキ君！大丈夫だよね！？退学になんかなかったりしないよね？」

「せっかく一緒に制裁タッグデュエルを乗り越えたのに居なくなっちゃうなんて嫌なんだな」

「ヒノキ、君は私の前から居なくなったりしないよな？」

「問題ないって、俺もここを離れる気なんてさらさら無いさ」

心配そうな声を上げる面々に本音を告げておく。退学になるかどうかはともかくとして。

姉貴はどんなことでも強引に押し進めるような人間だと分っているが、『退学』なんて一大事を譲ってやるつもりは無かった。姉貴が不満そうに唇を尖らせる。

「もう、ヒノキは頑固ね。おとなしくあたしと一緒に幸せになりなさい」

「誤解を招くような台詞を言うなって、俺にとっちゃ灰色だろうが」

「もう、そんなにおねえちゃんと一緒に居たくないって言うの？反抗期って奴？」

「絶対に違うと思うぞ」

「昔はおねえちゃんって言って後ろを付いてきてくれたのに」

「本当に昔の話だな、それ」

おそらく石拾い事件の前までだからかなり短い期間である。

「今からでも遅くないぞっ、あたしのことは親しみを込めてお・ね・え・ちゃ・んって呼びなさい」

「もう手遅れだって、今さらそんな呼び方をするわけないだろ姉貴」

「ヒノキ、話の趣旨がずれてきているぞ」

雪が冷静に突っ込みを入れてきた。

いつの間にか姉貴の呼び方に関する話になっていたことに気が付く。

突っ込みを入れられて怪訝そうな顔をする姉貴。

「あれ？　そういえば何の話をしていたんだっけ？」

話が逸れていた僅かの間で本題を忘れたらしい。

出来ればこのまま忘れて帰ってくれたら御の字だった。

（このまま1人で帰ってくれないかな）

そんな希望的観測を考える。

「ヒノキの姉上、確かヒノキをアカデミアから連れ戻すという話だ」

「あゝ、そういえばそうだった」

姉貴が手のひらをポンと叩く。希望的観測は味方によって打ち砕

かれた。

ヒノキはげんなりとしながら雪を見つめた。
うまくいくとは思っていなかったけど、そんな簡単に打ち砕かな
くてもいいじゃないか。

そんな想いを視線に込めながら。

「むっ、すまない。敬語というのは苦手なんだ」

「いや、そういうことじゃなくって」

「？」

曖昧な表情をするヒノキを見て、雪が首を傾げた。
正直なところ、文句を言っても何の意味もないことなので仕方が
ない。

とはいえ、これで厄介事が復活してしまった。

（こうなったら、むしろ自分から突っ込んでいくか）

そう思い、口を開く。

「それで、姉貴。何で俺を連れ戻すとかそういう話になったんだ？」

「何でって、あたしが連れ戻そうって言ったからに決まってるじゃ
ないの」

「はあ」

予想していたこととはいえ溜息が出るのを止められなかった。

「あんた、少し前に退学になりそうになったじゃないの？そんなヒノキじゃアカデミアでやっていくことが出来ないと思うから連れ戻してあたしと同じ高校へ通わせることになったの」

「そういう風に姉貴が提案したわけなんだ？」

「うん」

姉貴が頷く。

（まったく、本当に無茶苦茶だな）

そう思っ、げんなりとした。

姉貴の言っていた連れ戻す理由。前半の部分は建前として中々よく出来ている。

確かに一度禁忌を犯した者が2度目を起こさないという保証は無い、少なくとも外部の人からしたら。

（俺としてはもう退学になる気なんかないんだけどなあ）

そうは思うのだが、こういう場合本人の意志は関係なかったりするのがづらいところだった。

そして後半の部分。

姉貴の願望が透けて見える気がした。

もし連れ戻されたとしても、姉貴と同じ高校に通わなければならぬ理由はない。更に連れ戻すことを提案したのは姉貴自身。

（いつも無茶苦茶だとか、バカだとか思ってたけど……）

流石に今回は暴走しすぎだ、とそんなことを思った。とはいえ兄貴も毎回無茶苦茶だったので慣れているのだが。

そこまで灰色学園生活を送らせたいのか、と更にげんなりした。

連れ戻される理由を聞いた雪達が憤慨する。

「むう、理不尽だな」

「そうッス！一回退学になりそうになったからって連れ戻すのはひどすぎるッス！」

「ヒノキはアカデミアでちゃんと頑張ってるんだな！」

「うっ、そんな勢いよく文句を言われても、ねえ」

たじろぎながら姉貴が視線を向けてくる。

「いや、何の同意を求めてるんだ？意味が分からないぞ、姉貴」

「いいじゃないの、ちょっとくらい大好きなおねえちゃんを擁護してくれたって」

「無茶を言うなって、あと自分で大好きなとか言うな」

「ヒノキ君、一大事の割には落ち着いてるッスね」

「ヒノキ、君は今怒ってもいいと私は思うぞ」

「いや、そんなこと言われてもなあ」

雪達の指摘に対してヒノキは言葉を濁した。

怒ったとしても何の解決にもならないことは経験的に知っている。どうせおろおろとしながら必死に的外れな謝罪をしてくるだけだから。そしてどんなことがあるうと自分が起こした行動は最後まで完遂するのが『裁 司』という人間だから。

しかし、所詮は経験談である。本人以外に理解出来ようはずがない。

怒らない理由など説明出来なかった。

話を逸らすことに決める。

「皆、とりあえず校長室に行かないか？手紙のことも気になるし」

「あつ、そういうえば校長先生の所に連れて来るように言われてたっけ」

思い出したように呟く姉貴。
本当に忘れっぽい。

「はあ、まったく。そういうわけだから校長室に行こうか」

「ふむ、そうだな。私も付いていこう」

「俺も行くんだな！」

「僕はアニキにこのことを知らせてくるッス！」

先に部屋から翔が出ていく。
姉貴を含めた4人で校長室へ向かうことになった。

4人で連れだって校長室に入る。

「来たかね、柳君」

扉をくぐった瞬間、声をかけられる。校長は重々しい表情をしていた。

校長が入ってきた面々を見回す。

「むう、呼んだのは柳君と裁 司さんの2人だけのはずですが」

「すみません。ヒノキのことが心配で」

「私もどういふことなのか気になる。ヒノキはアカデミアを去ることになるのか？」

「むう、まあいいでしょう。そのまま聞いてください」

難しい顔のまま一区切りする校長。部屋が静寂に包まれる。
他に音のない静かな空気の中、校長が静かに話を始めた。

「裁 司さんが持ってきた柳君の母上からの手紙を読ませてもらいました」

一通の手紙を手にとって見せてくる。

「この手紙には柳君が裁 司さんとデュエルをして敗北した場合アカデミアを退学して家に連れ戻すという旨が書かれていました」

「つまり、あたしとヒノキで退学を賭けたデュエルを行うということになるの」

「そういうことになります。残念ながら家族間の問題なので私には口を挟むことは出来ません」

「成る程」

校長の話を聞いてヒノキはホッとした。

問答無用で連れ戻されるわけではない、要はデュエルに勝てば何の問題もないのだ。

（だったら勝つしかないな）

ヒノキは気を引き締めた。

しかしながら1つ気になることもある。母が書いた手紙の内容。

「校長、ちょっとその手紙を見せてもらってもいいですか？」

「ああ、別に構わないよ」

校長から手紙を受け取る。そして手紙を開いて中を見た。

「うぐっ」

『???これ、なん、書、てある、すか?』

雪と隼人も手紙を覗きこんでくる。

「むっ、これは」

「よ、読めないんだな」

手紙は行書体で書かれていた。達筆過ぎてむしろ解読が困難な代物だった。

（これだから大人の文字って奴は……）

ヒノキは手紙に悪態をついた。

雪が手紙をじっと見入っている。

「成る程、ひどい話だな」

「えっ、これ読めたのか?」

「むっ、問題なく読めるが？」

「すごいんだな、俺には何が書いてあるのかさっぱりなんだな」

「うん、俺もさっぱりさ」

「ふむ、そういうものか？」

不思議そうな声を上げる雪。

ヒノキと隼人は顔を見合わせて、肩を竦めた。
姉貴が不思議そうな顔をする。

「ヒノキ、お義母さまの手紙読めないの？」

「これっぽっちも、というかおかあさまって何だよ？」

「ふーん、ヒノキ宛てに別の手紙があるからそっち読んどきなさい」

「そういうのあるんだったら早く出してくれよ」

「オッホン」

校長の咳払いが聞こえてきた。
途端に静かになる。

少々、騒ぎ過ぎたようである。

「もういいかね？」

「あつ、はい。ありがとうございました」

「うむ、気にしないでいいよ」

手紙を返す。

校長がそれを受け取り、引き出しへとしまった。
キィと椅子に座りなおして話を再開する。

「さて、色々と準備もあるでしょう。柳君と裁 司さんのデュエルは2時間後に行うことにします」

「はい、わかりました」

「デュエルは私も見学させてもらいます、2人とも頑張ってください」

表情を緩めて校長が笑う。

（2人ともって、負けるわけにはいかないんだけだなあ）

そんなことを思いながらヒノキたちは校長室を後にした。

校長室を出た瞬間、十代がやってくる。

「ヒノキ！退学になりそうって本当か！？」

「はあはあ、アニキ速すぎッス」

後ろから息を切らした翔もやってくる。どうやらかなり急いだきたようだった。

「つて、この人誰だ？」

姉貴を見て十代が不思議そうな顔をする。

「アニキ、この人はヒノキ君のお姉さんで」

「裁 司っていうの、ヒノキとずくと一緒にいた幼馴染ね」

「ふくん、そういえば電話から聞こえてきた声と同じ声だな」

自己紹介を聞いて十代が納得する。どうやら電話から漏れ聞こえた声を覚えているようであった。

姉貴の自己紹介を聞いて疑問に思ったことを素直に口にする。

「姉貴、何で『ずっと』の部分強調するのさ」

「へっ？だって、あたしとヒノキの仲じゃない？」

「いや、そんなこと言われても」

意味ありげな目配せをしてくる姉貴に対してヒノキは微妙な表情をした。

正直、腐れ縁だと思う。

姉貴に應對している脇で十代達が隼人と雪に事の次第を聞いているのが耳に入る。

「なあ隼人、雪、結局ヒノキはどうなるんだ？アカデミアを退学になっちまうのか？」

「どうなってるんスか？」

「うむ、何とも理不尽な話だった。ヒノキが姉上とデュエルをして負けたら退学になって連れ戻されることになっている」

「デュエルをするのは2時間後なんだな」

「マジかよ！ってことはヒノキはまた退学を賭けたデュエルをやるのか」

「ヒノキ君も大変ッスね」

同情するなら金をくれ。

姉貴の応対をしながら、思わずネタに走りたくなった。
事情を知った十代と翔が安堵の息を洩らす。

「いやあ、ビックリしたぜ。このままヒノキがアカデミアから居なくなっちゃうのかと思ってたけど、デュエルに勝てば退学にはならねえんだな」

「ホントよかったッス。ヒノキ君ならきつと勝てるッス」

「そうなんだな。俺も校長室で話を聞いて安心してたんだな、このまますぐに退学ってわけじゃなかったんだな」

「うむ、何とも理不尽な理由であったがヒノキがデュエルに勝てば何も問題は無い。これからも一緒に居られるな」

十代達4人が一様に安堵の息を洩らす。

（まあ、問答無用で連れ戻されるわけじゃなくて俺も安心したな）
ヒノキも心の中で安堵した。

姉貴が無然とした表情で雪を見ながらポツリと呟く。

「んー、何だか言葉に甘いものを感じるわね。やっぱり女は要注意ってことね」

そう言って、ウンウンと首を縦に振る。やはり今まで自分は間違

っていなかった、とでも言うような仕草だった。

（兄貴の時もそうだけど、何で女性を目の敵にするんだろうな？）
と、素朴な疑問を抱く。

いつも異性と話していると兄貴がどこからともなく湧いて出てきて乱入してきたことを思い出した。

（まあ、別にどうでもいいんだけどなあ）

興味ないし、と気にしないことにする。

素朴な疑問よりも今は姉貴から受け取らないといけないものがあった。

姉貴の方に向き直って、声をかける。

「姉貴、母さんからの手紙があるんだろ？」

「へっ？あゝ、お義母さまからの手紙ね。ちょっと待ってねえ」

そう言って、ポケットをぐそぐそと探る姉貴。

ジーパンの後ろについているポケットから手紙を取り出した。

「ん、ちょっと折り目がついてる」

「そんなところに入れとくからだよ」

「まあ、いいや。はい、手紙」

差しだされた手紙を受け取る。折り目のついた手紙は少し生暖かった。

(まったく)

ハァ、と溜息を吐いてから手紙を開封しようとする。

「……すまん、ちょっと見づらいんだけど」

「気にすんなって」

「僕たちも気になるんスよ」

「むっ、そのまま封を開けてくれ」

「俺も何て書いてあるのか気になるんだな」

いつの間にか近くに来ていた十代達が覗きこんできた。

正直なところ、かなり見づらいのだが全員で読むことにしてヒノキは手紙を開封した。

かなりくだけた文章で始まっている。

『やっほー、愛しの息子ヒノキ。元気にしてますか？アカデミアに入学してから電話もしていないので随分と久しぶりですね。さて先日、ヒノキを連れ戻すことが家族会議で決定しました。お父さんは物凄く反対していましたが、司ちゃんがどうしてもヒノキと一緒に居たいと言うのでお母さんが許可しちゃいました。ごめんなさいねヒノキとしては理不尽だと思うでしょう、でもお母さんも女の子なので応援したくなったのです。許婚の司ちゃんとデュエルをして負けたら司ちゃんと同じ高校に通ってあげてね。 P・S・ 若いっていいわね』

と、偕書体で綺麗に書かれていた。

「……はっ？」

思わずポカンとしてしまう。

手紙を覗きこんでいた翔と隼人が驚愕の声を上げた。

「ヒノキ君！いいなづけてどういうことッスか！？な、なんて羨ましい」

「妬ましいんだな！」

「いや、そんなこと言われてもさあ」

曖昧に言葉を濁す。

ヒノキ自身にもどういふことなのか分らなかった。
十代が首を傾げている。

「うーん、ところでいいなづけて何だ？」

「むっ、私にもわからないな。もう少し雑学を増やした方がいいかもしれない」

雪も不思議そうな声を上げて首を傾げた。

後で調べておくか、と小さな声で呟いている。

（別に調べなくてもいいんじゃないか？）

そんなことを思いながら、ヒノキはもう一度手紙をじっくりと見た。

『許婚の司ちゃん』何度見てもやはり書いている文章は変わらない。
いいなづけ

許婚、双方の親の合意で結婚を約束された関係、簡単に言うとは婚約者のこと。

（姉貴と俺が許婚……姉貴と俺が？）

頭の中で反芻していく。

姉貴が自分の許婚、つまりは兄貴と自分が許婚。

（いかん、吐き気が）

兄貴と自分が結婚式を挙げている場面を想像して気持ち悪くなった。多分、同性婚が可能な国に移住するんだろうと無駄にたくましい想像力を働かせてしまった。

「姉貴、許婚ってどういうことだ？」

何故か許婚ということになっている姉貴を問いたです。

暇そうにキョロキョロと辺りを見まわしていた姉貴があっけらかんと答えた。

「あー、そのことね。家族会議の時にお義母さまが『ヒノキの許婚にしてあげる』って言って、そういうことになったの」

と、姉貴が少し嬉しげな顔をする。

「んっふっふ、いいよね許婚って。意味はよくわからないけど、ヒノキとずっと一緒に居ることが認められるんだもの。といっても元からヒノキとずっと一緒に居る気だったんだけどねえ」

「……はぁ~~~~っ」

ヒノキは思わず大きな溜息を吐いた。

姉貴は許婚の意味をよく知らないらしい。

（まったく、母さんは何言ってるんだか）

母親に対して心の中で悪態をつく。

「ヒノキ、頭を抱えてどうかしたのか？」

「よくわかんねえけど、デュエルまでまだ時間があるんだろ？寮に帰ってデッキ調整をしようぜ」

声をかけられて未だに校長室の前から動いていないことに気が付いた。

「そうだな、とりあえずレッド寮に戻るか」

「おう、そうと決まったら早く戻ろうぜ！調整する時間が無くなっちまうからな」

「むっ、デッキ調整か。私も力になろう」

「僕、許婚ってわかった時点で何だかやる気無くしたッス」

「俺もなんだな」

「まっ、とりあえず戻るんならさっさと戻ることになしましょう」

「って、姉貴が仕切るな」

姉貴に突っ込みを入れてから、とりあえずレッド寮に戻るため歩き出す。

母さんは余計なことをしてくれたもんだ、とうんざりしながら。
(まったく、昔っから兄貴は母さんの言うことを鵜呑みにしてたからなあ)

本当に全然変わっていない、とヒノキは寮へと戻る道を皆で歩きながら昔のことを思い出した。

.....

とある夏の日の出来事。

家でのんびりとしていたらピンポンと来客を告げるチャイムが鳴り響く。

「ヒノキッくん！あつそびましょ、なんてね」

玄関を開ける前に兄貴の大きな声が外から聞こえてきた。
朝から近所迷惑なことこの上ない。

正直なところ、羞恥心の1つでも持って欲しいところだった。
はあ、と思わず溜息を吐いてしまう。

（今日は一体何をする気なんだか）

そんなことを思って、うんざりしながら。

とはいえ、ほとんど毎日こんなことの繰り返しなので別に悪感情は抱かない。それどころか本当に毎日やってくるので、むしろ何も行動を起こさないことの方が違和感を感じるくらいだった。

「……はあ」

何だか慣れてしまっている自分が恨めしい。

自虐的な溜息を吐いてから鍵を外して玄関を開けた。

兄貴がシャベルを2つ肩に担いで立っている。

「よっ！ヒノキ、穴掘りに行こうぜ！」

「……ふう」

全く意味が分からない。

ヒノキは頭を抱えた。

兄貴の恰好は穴掘りに行こうという自らの言動に真っ向から喧嘩

を売るような、黒のセーターに青のジーンズという見慣れた服装。

このくそ熱いなか黒いセーターを着用して気でも狂ったんじゃないのか、と頭を疑う。

（まあ、兄貴だからなあ）

それだけで納得出来る、夏でもセーター着用なのは兄貴の下らない意地であることを知っていた。

「それで、何で穴掘りに行くわけ？」

とりあえず理由を聞く。抵抗をしても無意味なのは知っているが理由だけは知っておかなければならない。

質問をされた兄貴は得意げな顔をした。

「ふっふっふっふ、よくぞ聞いてくれたなヒノキよ」

「そりゃねえ、理由くらいは聞いておかないとさ」

「うんうん、モチベーションってのは大事だよな」

わざわざ使わなくてもいい横文字を使って、兄貴が満足げな顔をする。

そして、その嬉しそうな顔のままジーンズのポケットをこそごそと漁って、後ろ側についているポケットから1枚の紙を取り出した。

「何だ、これ？」

「ふっふっふ、電柱に張ってあったのをちょいっと取ってきたんだ」

「何やってんだか」

若干、呆れながら兄貴が持っている紙に書いてある文字を読み上げる。

紙には胴体が太く体が短い蛇のような絵が書いてあった。

「あゝ、ツチノコを見つけた人には1000万円を進呈します？ 見つかるわけないだろ」

「へへっ、問題ない！ 俺に心当たりがあるからな！」

「兄貴……」

その心当たりは多分間違っている。

ヒノキは微妙な表情をした。

兄貴が自信に満ち溢れた不吉な（ヒノキにとって）表情を浮かべながら肩に担いでいるシャベルの片方を渡してくる。

「さっ、行こうかヒノキ！ 1000万が待ってるぞ！」

断言する兄貴。

この自信はどこから湧いてきているのやら。
そうは思うがとりあえずシャベルを受け取る。

「兄貴、正直その1000万は誰も獲得出来ないと思うぞ」

「あっはっは！だったら、俺たちで獲得すればいいじゃないか！」

やはり正直に思ったことを口にしても無駄だった。

（まあ、暇だから行くけどさ）

兄貴と同じように受け取ったシャベルを肩に担ぐ。

「うし、それじゃ1000万をゲットしてウハウハになるための穴掘りに出発だ！」

「ハハ、ハ、そのまんまだな兄貴」

「いいじゃないか！こういうのはシンプル・イズ・ベストなんだよ！後、俺のことは兄貴じゃなくてお・に・い・ちゃ・んと呼べ。敬意と友情そして俺たちのメモリアルを込めてな！」

「意味が分からないっての」

「あっはっはっは、細かいことは気にするな！レッツ&ゴーだ！」

「はぁ、漫画の名前を叫ぶなって」

兄貴に突っ込みを入れる。

この穴掘りの結果は見えている。おそらく大人気のゲームを予約もせずに『絶対に買える』という根拠のない自信を抱いて店に買いに行った子供みたいなことになるだろう。

ヒノキはそんな確信を抱いて、穴掘りのために山へ向かう兄貴の隣でうんざりとした。

（でも、まあいいか）

きつと後で思い出して『馬鹿なことだったな』と笑えるような出来事になるはず。だからこそ、どんなにうんざりしようとする結局は兄貴に付き合っとうんざりとするようなことをやる。兄貴に付き合っているときはどんなにうんざりしたとしても、それは楽しい思い出なのだから。

（俺は変人なのかもしれないな）

そんなことを思った。

隣で歩いているひたすら上機嫌な兄貴の能天気な声が聞こえてくる。

「へっへっへっ、1000万もぎとったら何に使おうかな？ヒノキと一緒に温泉を発掘しに行くのも面白いかな」

「……やっぱり俺は至って普通の人間だな」

兄貴の呟きを聞いて、自分が変人であるなど有り得ないと思いたくおした。

（まったく、兄貴は）

本当にバカだ、と心の中で呟く。

兄貴は貰える可能性が限りなく0である1000万円を既に貰え

る気でいた。

何ともおめでたい。

（まあ、兄貴だし）

やはり、それだけで納得することが出来る。

兄貴の行動に付き合う理由はもう一つあった。

ヒノキは兄貴の性格をよく知っていた。

兄貴は下らないことでも気になったことはとことん考えを突き詰めるような性格をしている。だから、兄貴に考える時間を与えてはいけない。どんどんと考えを煮詰めていき、最初に思いついた行動よりもとんでもないことをやりだすから。

今は穴掘りで済んでいるが時間をおいたらどんなとんでもないことを言い出すか分らない。

（でも、何で穴掘りなんだ？）

若干、疑問に思いながら兄貴と共に山へと向かった。

兄貴と共に穴を掘り続ける。

もう太陽は傾いてきており、月がうつすらと空に浮かんでいた。当然のことながらツチノコは発見できていない。

辺りは既に穴だらけ。

（ここ私有地じゃないよな？）

そんなことを心配しながら兄貴の横で穴を掘り続けた。

掘っている穴が一段落ついて兄貴がシャベルを地面に突き立てて休憩をする。

「ふう、おっかしいな。全然ツチノコが出てこないぞ？」

不思議そうな声を上げる兄貴。

おかしいと呟いているが発言自体が既におかしい。

（どう考えてもツチノコなんか出るわけないだろ）

心の中で突っ込みを入れながら穴を掘り続ける。

出てくる可能性が0のものを見つけるという不毛な目的ではなく、
純粹に穴を掘るといふ単純作業が少し楽しくなってきた。

「ふゝ、ざっとこんなもんかな」

一通り掘り進めてシャベルを止める。

穴の形は完璧な円形、左右対称になっており、中央の部分が一番
窪んでいて外円部に近づくほど浅くなっていた。

掘った穴をじっくりと見つめる。

（うん、中々に美しい穴だ）

体に若干の疲労感を感じながら、満足げに頷いた。
作業を止めたのを見て、兄貴が声をかけてくる。

「ヒノキゝ、ツチノコは出てきたか？」

「いや、さっぱり」

すっきりとした表情で兄貴に対して返答をした。

美しい穴が掘りたかっただけで、ツチノコなど探してはいない。

兄貴は少し肩を落とした。

「やっぱ、そう簡単には出てきてくれないか。早くしないと誰かに1000万を取られちゃうな」

「いやいやいや」

何を言ってるんだ？と少し呆れる。

兄貴の中では穴を掘ればツチノコが出てくることは確定事項のようであった。

そもそもそこが一番おかしい。

シャベルを地面へと突き立てて、質問をする。

「兄貴、何でツチノコを見つげるために穴を掘るんだよ？」

「へっ？ヒノキは知らないのか？」

質問をされた兄貴は心底不思議そうな顔をした。

何でこんな常識を知らないの？とでもいうような感じである。

（何だろう、何か理不尽な気がする）

少しイラッとした。

兄貴が地面に突き立てたシャベルに寄りかかりながら、自らの根拠を語りだす。

「お姐さまが前に言ってたんだ」

「はあ、母さんのせいか……一体、どんなことを言ってたんだ？」

「おう、『タケノコが文字通り竹の子供であるように、ツチノコは土の子供なのよ』ってニコニコしながら言ってたんだ」

得意げな顔をする兄貴。

開いた口が塞がらなかった。

（成る程、だから土を掘れば出てくると思ったわけだ）
心の中で納得する。

母さんはきつとうまいことを言ったつもりなんだろう。

（土の子供って意味が分からないって）

溜息を吐いてから空を見上げる。

あらあら、と柔和な笑みを浮かべる母の顔が空に浮かんでいる気がした。

・
・
・
・
・
・
・

レッド寮の部屋。

さも当たり前のように一緒に戻ってきた姉貴に対して「デッキ調整をするから」と言って部屋を追いだしデッキ調整を行っていた。

部屋を追いだす際、姉貴はかなり渋っていたが

『まっ、あと2時間くらいすればヒノキと一緒に帰れるんだし別にいいか』

と言ってアカデミアの見学に出掛けて行つた。
やはり姉貴の中では既に自分がデュエルに勝つことは確定事項らしい。

何とも失礼な話だ、とヒノキはそんなことを思った。
今は十代と雪の2人と共にデッキ調整を進めている。

(デッキに手を加える必要があるのだろうか?)

そんな疑問を抱きながら。

不意に雪が一枚のカードを勧めてきた。

「ふむ。ヒノキ、このカードなんかどうだろうか？」

「うん？ どれどれ、ってメタポンか」

「むっ？ メタポン？」

雪が不思議そうな声を上げる。

ただ単に自分が気に入った呼び方をしているだけなのでスルーして欲しかった。

雪が自分で勧めたカードをじっと見つめる。

「ふむ、成る程そういうことか。メタポン、中々愛らしい呼称だな」

淡々と言いきって、雪は納得をした。

雪が勧めてきたカードはメタモルポット。

とりあえず雪からカードを受け取ってじっくりと見る。

「うゝむ、このカードはちょっとデッキに入らないかな」

「むっ、そうか……残念だ」

返答を聞いて雪は肩を落とした。そして、カードを吟味する作業を再開する。

どうやら雪は互いのプレイヤーの手札が関係する効果をもつカードがお気に入りらしい。

他にも雪が勧めてきたカードは手札抹殺と手札断札だった。少しデッキに投入するのは無理がある、とはいえ真剣に考えてくれる分まだありがたい。

ちらりと十代の方に視線を向けてみる。

「へえゝ、ヒノキのカードは面白い効果のものが多いなゝ」

十代はただ単にカードを見て楽しんでいた。

「おっ、これは入試の時に使ってたカードだな！」

ファイティング・スピリッツを手取る。

十代の瞳はキラキラと輝いていた。

ファイティング・スピリッツをじっくりと見てから他のカードに目移りする。

今度はプリベント・スターを手を取った。

「へー、こっちの装備魔法も面白い効果だね。ダークブライトマ
ンやスパークガンとコンボで使える、これいいな！ヒノキ、このカ
ード譲ってくれよ」

キラキラとした純粋な瞳を向けてくる。

「なあ十代、デッキ調整に付き合うという話じゃなかったのか？」

「あっ」

十代の動きがぴたりと止まった
気まずそうに頭をかきはじめる。

「いやー、悪い悪い。見たことのない面白いカードがたくさんあつ
たから、何かワクワクしちまってさー」

「アニキらしいッスね」

「そうなんだな」

「あははは、は」

十代は笑って誤魔化した。

やはりというか一目瞭然であったが、十代は当初の目的をすっかり忘れていた。気持ちは分からなくもないが。

自分で言ったことくらいしっかりと遂行してほしい。

（吐いた唾は飲み込めないって言うしな）

と、そんなことを思った。

話題をそらすように十代が声を張り上げる。

「そういえばよ！ヒノキ、お前の姉ちゃんってどんなデッキを使ってるんだ？強いのか？」

「えっ？姉貴のデッキ？」

「むっ、そういえば私もそれは気になるな」

「えーと、姉貴のデッキねえ」

ヒノキは言葉を濁して曖昧な笑みを浮かべた。

姉貴がどんなデッキなのか正直わからない。

兄貴とはよくデュエルをしたのだが、アニメに影響されてやたらと満足満足うるさかった。

（でも、こっちシンクロは無いからな）

おそらく昔に兄貴が使っていたデッキのどれかではないかと大体の予想は出来るが正確には分からない。

適当なことを言って誤魔化すことにした。

「入学する前は『俺』が一度も勝てなかった（らしい）から姉貴は強い（と思う）ぞ。でも、デッキはちょっとわからないかな。姉貴

って結構頻繁にデッキを弄るからさ」

「へえ、ヒノキの姉ちゃんってそんな強いのか。こりゃ今日のデュエルは面白くなりそうだな」

「ふむ、そんなにデッキ特性を変えてくるのか」

「ハハ、ハ、まあね」

曖昧な返事を返す。

後半部分は完全に嘘。

少し後ろめたい気分になった。

「って、本当に大丈夫なんスカ！？ヒノキ君！」

「どうした？いきなり大声を出して？」

「何か反応薄いッスね。だって、負けたら退学なんだよ！お姉さんには一度も勝てなかったんでしょ？」

「うーん、多分大丈夫なんじゃないか？根拠は無いけど」

「って、そんな適当な！？」

翔が叫ぶ。

確かに投げやりな返事であった。

（でもなあ）

姉貴とデュエルをした記憶は無いので何だか実感が沸いてこないのだ。

大丈夫なのか、と聞かれても適当なことを言うしかなかった。

「まあ、きっと大丈夫だろ。何とかなるさ」

「でも、根拠ないんスよね？」

「翔、きっとヒノキなら大丈夫だって。デュエルはやってみなきゃわかんねえんだからさ！それに、いままで勝てなかったからって今日も勝てないと決まったわけじゃないぜ？」

「そうそう、十代はいいことを言うな」

「もう、アニキもヒノキ君もお気楽っすね」

そう言って翔は溜息を吐く。

（はて？俺は至って普通の感性をしているはずだけどな）

ヒノキはそんなことを思いながら、デッキ調整を進めた。

奥の方で椅子に座っている隼人が口を開く。

「でも、ヒノキの話聞いて納得したんだな。ヒノキの姉さんはやたらと自信満々だったんだな」

「確かにそうだったツスね。ヒノキ君が2時間後に退学になることが決まってるような言い方してたツス」

「ふむ、確かにその点は私も気になったな」

隼人の言葉に翔と雪が同意した。

思わず苦笑いをしてしまう。

（まあ、姉貴だし）

それしか頭に思い浮かんでこなかった。

雪が言葉を続ける。

「ヒノキの姉上は君がデュエルに勝つ可能性は万に1つもないというようなことを言っており、更には君を理不尽な理由で退学にさせようとしている。ヒノキ、君は怒ってもいいと思うぞ」

「いや、そんなこと言われてもなあ」

再び答えに困る質問をされてしまった。

心なしか皆の視線が集中している気がする。

怒らない理由なんか1つしかない、ただ単に慣れているから。たったそれだけ。

言っても仕方ない気がするのだが、何も言わないわけにはいかなかった。

「何て言うかさ、思い出があるから、かな？」

「思い出？」

「ああ」

怪訝な声を上げる雪に対して頷く。

思い返してみれば今までの人生は兄貴との思い出で彩られている気がした。

「いつもいつもバカみたいでうんざりとするようなことに巻き込まれた、後で考えてみるとバカだったなって笑いが出てくるような、そんな思い出が一杯あるんだ。だから、イラッとすることはあっても怒りとかは湧いてこないんだよな」

若干、口元に笑みをたたえながら言い切る。

どんな世界だろうと裁 司は裁 司。

姉貴は兄貴なんだから何も変わらない、そんな想いを込めて。雪は少し寂しそうにしながら納得をした。

「成るほど。2人で積み重ねた時間、その思い出が君と姉上を繋ぐ絆というわけか」

何だか大げさな解釈をされている。

「要するに慣れちゃったってことツスよね。何だか不憫に思えてきたツス」

「ヒノキも苦勞してたんだな」

翔と隼人には何故か哀れまれていた。
十代がいきなり立ち上がる。

「だったらさ！ヒノキ、お前の姉ちゃんが知らないアカデミアでの
思い出、俺たちの絆をデュエルを通してぶつけてやろうぜ！」

「……ああ、そうだな」

十代の言葉に対して静かに頷いた。

（それに灰色学園生活は嫌だからな）

そんなことを思っ

デュキ調整を終えて立ち上がる。

「よし！それじゃ、いっちょ姉貴に見せつけてやるか！俺たちの絆
を！」

「おう！ヒノキ、絶対に勝てよ！」

「ふむ、私も君の姉上と同じようにもっとヒノキと時間を積み重ね
ていきたいからな。私も近くで応援しているぞ」

「ああ、それはありがたいな」

デュキとデュエルディスクを持って姉貴とのデュエルに向かうこ

とにした。

「ねえ、隼人君。爽やかに締めくくってたけど、アニキは結局デッキリ調整を全く手伝ってなかったよね？」

「そういえばそうなんだな」

後ろで翔と隼人がそんな会話をしていた。

デュエル場に辿り着くと先に来ていた姉貴の姿があった。

観客席は当然のごとくガラガラで十代達の四人しか座っていない。

「あゝ、やっと二時間たったのゝ」

暇そうな声を上げる姉貴。

あくびをしてパリパリと頭を掻いた。

長時間この場所で暇そうにしていたのが仕草だけで分かる。

「というか、姉貴。アカデミアを見て回ってたんじゃないのか？」

「あゝ、それねえ。1人で見て回ってもつまなくなってるね、ヒノキを案内に連れて行けばよかった」

姉貴は失敗を悔いるような表情をしていた。

かなり無茶を言っている。

ヒノキは小さく溜息を吐いた。

観客席の会話が耳に入る。

「それにしてもワクワクするな！ヒノキが勝てなかったって、一体どんなデッキを使ってくるんだ？」

「アニキ、そんなこと言ってる場合ッスか？」

「ヒノキはこのデュエルに負けたら退学になっちゃうんだな」

「はっ、翔に隼人も心配し過ぎだって。ヒノキは強いぜ！デュエルをしたことのある俺が言うんだから間違いない」

「うむ、その点は私も同感だな」

何か信頼されている。

会話を聞いてヒノキは少し嬉しくなった。

『マスタ、、緒に頑、りましょう、！マ、ターならき、、勝て、

す!』

すぐ近くからも応援の声が聞こえてくる。

(ありがとう)

よく聞き取れないけど、とそんなことを思いながら声が聞こえてきた方向に頷いた。

(負けるわけにはいかないな)

心の中で改めて思う。

何故この世界に自分が居るのか全く分からない。でもアカデミアに居ること何かが分かるかもしれない、アカデミアで過ごすこと自体に何かの意味があるのかもしれない。こんなところでアカデミアを退学になるわけにはいかない、それにもっとアカデミアで十代達と一緒に過ごしたかった。

(ああ、負けたら下らない笑い話さ。それこそシャレにもならない、な)

フツと自嘲的に鼻で笑い、気を引き締めた。そして腰についているケースからデッキを取り出しディスクにセット、姉貴の方に向き直る。

「さうて、それじゃ姉貴。デュエルを始めるか」

「そうね、さっさと済ませて一緒に帰りましょう。そして、あたしと一緒に幸せになりなさい!」

「って、誤解を招くような言い方するなっ!」

「ゴカイ? 虫なんかお呼びじゃないけど?」

姉貴はディスクにデッキを納めながら、本気で不思議そうな顔を
した。

（それは釣りの餌だ……）

ヒノキは呆れながらこめかみを押さえた。

「あんた、大丈夫？頭痛でもするの？」

「いや、ちよつと呆れてただけ」

「ん、失礼な奴ね。まあ、別にいいけど。とにかく、あんたは今日
あたしと一緒に帰って同じ高校に通うことになるの！」

姉貴が指を突き付けてビシッと宣言をする。

全くもってかなり横暴な物言いであった。

指を差してきた勢いで金色に染められた髪の毛の穂先がゆらゆらと揺
れている。

（そういえば）

ふと思い出した。

姉貴とは電話で多少話することはあったが、顔を合わせるのは
今日が初めて、何ヶ月も会っていない。

おそらくその間も姉貴は色々と考えたのであろう。そして、その
考えが会わない間に濃縮還元されていき

（ことここに至る、というわけか）

姉貴の暴走の原因を推測して、少しげんなりとした。

大徳寺先生がデュエル場の上に昇ってくる。

「では、このデュエル。僭越ながら私、大徳寺が立会人を務めさせてもらうニャ」

そう言つて、ちょうど真ん中のあたりで立ち止まった。

デュエルを行う人間を一回ずつチラリと一瞥して視界に納める。

「両者ともに準備はよろしいですかニャ？」

「はい、問題ないです大徳寺先生」

「あたしの方も準備OK」

返事を聞いて大徳寺先生が一度頷いた。

デュエルディスクを構えて姉貴と対峙する。

「それではお互い悔いの残らないように闘ってください」

大徳寺先生の言葉を聞いて、デュエルディスクを展開。

「デュエル！」

同時に5枚のカードをデッキから引き抜いた。
手札を確認した姉貴が口を開く。

「ヒノキ、あたし先攻もらっていい？」

「ん？」

わざわざ許可を取るなんて珍しい。

少し考え込みながら手札を確認。

（基本的に先攻の方が有利だろうけど）

手札は別に後攻でも問題なかった。

「まあ、いいか。別に姉貴が先攻でも構わないぞ」

「そう。じゃあ、あたしが先攻ね」

姉貴がデッキに手をかける。

どんなデッキなのか知リたかったので先攻を譲ることにした。

（さて、一体どのデッキなんだ？）

おそらく最初の動きを見ればどんなデッキなのかわかるはず、そう確信して姉貴の動きをじつくりと注目する。

「あたしのターン、ドロー！」

姉貴がカードを引いた。

そのまま手札のカードを流れるように取る。

「カードを5枚セット」

姉貴のフィールドに5枚のリバースカードが現れた。
最後の1枚を手にする。

「そして豊穰のアルテミスを召喚してターンエンド！」

豊穰のアルテミス ATK1600

「さっ、あんたのターンよ」

「成るほど」

フィールドに現れたモンスターを見てデッキを把握した。

（あのデッキか）

おそらく以前に兄貴が『相手に何もさせなきゃ強いだろ』という
単純明快な思考のもと作り上げたパーミッションのはずだろうと、
心の中で確信する。

観客席の会話が聞こえてきた。

「ふむ、アルテミス。成るほど、姉上のデッキはパーミッションか」

「えっ？雪さん、何でそんなことわかるんスか？」

「むっ？一目瞭然だと思うが？」

「翔、豊穰のアルテミスはカウンター罠が発動するたびに1枚ドロ―させてくれる効果モンスターなんだ」

「へえ、そうなんスカアニキ。……って、それじゃフィールドのリバースカードはほとんどカウンター罠ってことツスカ!？」

「うむ、推測の域を出ないがそれで間違いないだろう」

「へへっ、面白そうなデツキだよな。俺もデュエルしてみてえ」

「僕はちよつと遠慮しておきたいッス」

「恐ろしいデツキなんだな」

うん、作成した本人も恐ろしいって言っていたよ。
心の中でギャラリーの会話に返答をする。

兄貴は考えなしにカウンターを伏せまくって手札コストの必要なカードが使えなくなるといった事態によく陥って、『俺には無理だ、何て恐ろしい』とぼやいてデツキを崩していた。

(姉貴がパーミッションなんて使えるのか?)

むしろ姉貴の心配をしながらデツキに手をかけた。

「俺のターン!ドロ―!」

「この瞬間リバーカードを発動、永続罨 シンセティック・エンジェル 人造天使！」

ドローした瞬間、姉貴のフィールドに存在する5枚のリバーカードのうち1枚が露わになる。

「まあ、あんたに説明は必要ないと思うけど。これはカウンターが発動されるたびにトークンを生み出すカードなの」

「あゝ、あの面倒なカードか」

姉貴の説明に昔のことを思い出しながら、手札を確認する。
幸い手札にはこの状況にうってつけのカードがあった。

「よし、ならメインフェイズ。手札から魔法カード大嵐を発動！」

フィールドに風が吹き荒れる。

「フィールド上の魔法・罨を全て破壊する！」

「ふっふりん、そう簡単に行くわけないでしょ。カウンター罨 魔宮の賄賂を発動！魔法・罨の発動と効果を無効にする！」

「ちい」

姉貴のリバースカードを破壊しようとした暴風は1枚のカードで効力を失った。

「さあ、魔宮の賄賂の効果でカードを1枚ドロしなさい」

「くっ、まあこんなもんか」

デッキから1枚カードをドロし、同時にフィールド場で表側になっていた魔宮の賄賂が消滅していく。

「そしてカウンター罠が発動したため、あたしは豊穡のアルテミスの効果で1枚ドロし。永続罠 人造天使の効果で人造天使トークンを守備表示で特殊召喚」

人造天使トークンDEF300

姉貴がカードを1枚ドロし、1体のトークンが豊穡のアルテミスの隣に並んだ。

ふふん、と機嫌よさげな微笑を浮かべて姉貴が口を開く。

「甘いねえ、ヒノキは。本当に詰めが甘い、そう簡単に除去できるわけではないでしょ？」

「まあ、そうだろうさ」

「んっふっふ。あんた、アカデミアでも目先のことにとらわれてミスをしたことや勝てる勝負を逃したことが有ったんじゃないの？ やっぱり、ヒノキはあたしと一緒に帰って同じ高校に通うべきなの」

「うぐっ」

苦い顔で呻きを洩らす。入試の時にエフェクト・ヴェーラーを無駄に使ってしまった次のターンに困ったことを思い出した。

『わわっ、元気、してくだ、い！マス、一はいつだって一生け、い頑、ってました！』

近くから元気づけようとしてくれる声が聞こえてくる。

（ああ、問題ない。俺は元気さ）

ウン、と一度頷いてから気持ちを切り替えた。

正面にいる姉貴をしつかりと見据える。

「確かに失敗をしたこともあったさ」

「ふふ、やっぱりねえ。あんたのことは何でもお見通しなの」

「……ハ、ハ」

「?どうかしたの?」

渴いた笑いを洩らすヒノキを見て姉貴が訝しげな表情をした。

「いや、何でもない」

「ん?なら、いいけど」

姉貴が渋々といった感じで納得をする。
気を取り直して、言葉が続ける。

「とにかく、失敗をすることがあったとしても退学しなきゃなら
ないとは別問題。失敗したら失敗したときに打開策を考えるだけさ
!」

「ふう〜ん、言うじゃないの。だったら、このデュエルに勝って
みなさい!」

「ああ、やってやるさ!」

姉貴に力強く頷いて見せた。

『あんたのことは何でもお見通しなの』

姉貴の言葉が頭の中で反響する。

(何でも、か)

確かに『裁 司』とは物心がつく前からずっと一緒に居た。『裁

『司』のことはよく知っている、その逆もまた然り『裁 司』は『柳 ヒノキ』のことをよく知っていることだろう。

だけど、自分は柳 ヒノキであるが姉貴の中に居る『柳 ヒノキ』ではない。それと同時に姉貴も『裁 司』であるが自分がよく知っている兄貴ではない。

同じ存在、本質は変わらない。けれども、確かに違っている面があることをデュエルを通してお互いに感じなければならない。そんな気がする。

（負けられない理由が増えたな）
そう思って気を引き締めた。

「いくぞ、姉貴！手札からマックス・ウォリアーを召喚！」

マックス・ウォリアー ATK1800

フィールドに降り立つのを見て姉貴が笑みを浮かべる。

「ふーん、あんた相変わらずウォリアーって名前のカードを使っているの」

満足げで嬉しそうな声だった。

（本当は入って無かったはずなんだけどねえ）

そうは思うが声には出さない。

姉貴が3枚になったリバースカードの1枚を発動させた。

「カウンター罠 キック・バックを発動！悪いけど、このカードの効果でヒノキのマックス・ウォリアーの召喚を無効にして手札に戻ってもらうから」

「くっ」

発動されたキック・バックのカードから衝撃波が放たれる。

マックス・ウォリアーが衝撃波に吹き飛ばされ手札に戻ってきた。

「召喚権を失ったか」

「ふふん、更にカウンター罠が発動したことによりアルテミスの効果で1枚ドロ―、人造天使の効果で人造天使トークンを守備表示で特殊召喚」

人造天使トークンDEF300

姉貴がカードを1枚引き、再び人造天使トークンがアルテミスの隣に並んだ。

「なら、カードを三枚セットしてターンエンド！」

リバーズカードだけでターンを終了する。

（姉貴のリバースカードは残り2枚か）

全部カウンターだとしても姉貴のターンで使えるのは2枚。

大丈夫なはずだ、そう思って自分のリバースカード3枚をちらっと見た。

「あたしのターン！ドロー！」

姉貴がカードを引く。

「んっふっふ、あんたのカードを封殺してあげる。あたしは人造天使トークン1体を生け贄に捧げて天魔神インヴェシルを攻撃表示で召喚！」

天魔神インヴェシル ATK 2200

人造天使トークンが光の粒子となり、入れ替わるようにフィールドへと降り立った。

（確かあいつは、まずい！）

効果を思い出して心の中で焦る。

「させるか！リバースカードオープン、激流葬！モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚されたときにフィールド上の全モンスターを破壊する！」

「あつまーい！リバースカード発動、神の宣告！ライフを半分支払って激流葬の発動と効果を無効にする！」

LP2000

「そして、豊穡のアルテミスの効果で1枚ドロ。人造天使の効果で人造天使トークンを守備表示で特殊召喚！」

人造天使トークンDEF300

「くう」

「んっふっふ」

激流葬は役目を果たすことなくフィールドから消え去った。

天魔神インヴィシルが健在なことに思わず苦々しい顔をしてしまう。

「説明は必要ないと思うけど、天魔神インヴィシルは天使族を生け贄に召喚された場合インヴィシルがフィールドに存在する限り魔法カードはその効力を失うの」

「くっ」

「もちろんあたしの魔法も意味をなさなくなるけど、あたしのデッキには1枚も魔法カードが入ってないから別に問題ないのよねえ」

そう言って笑う姉貴。

（ピーキーな構成してるな、全く）

この世界で強欲な壺も入れていないのか、と思って少し驚いた。姉貴がデュエルを進行させる。

「さーて、バトル！天魔神インヴィシルでヒノキにダイレクトアタック！」

インヴィシルが 光り輝く白色の光球を放った。

（くっ、これは通るか？）

若干の不安を抱きながらリバースカードを発動させる。

「リバースカードオープン ガード・ブロック！1度だけ戦闘ダメージを無効にしてカードを1枚ドロウする！」

放たれた光球は薄い光の膜に遮られた。

（何もしてこなかったか）

少し安心しながらカードをドロウする。

「ふうん、やるじゃないのヒノキ。だったら、次はアルテミスでダイレクトアタック！」

今度は豊穰のアルテミスが突撃してきた。

「2回目のダイレクトアタックだな。リバーズカードオープン
ンフュージョン・チャフ！」

突撃してくるアルテミスの前にチャフが散布される。

「2回目にダイレクトアタックしてきたモンスターは1回目にダイ
レクトアタックしたモンスターと戦闘してもらう！」

「うっ、やるじゃないの」

アルテミスが方向転換してインヴェシルに向かっていき、白く輝
く光球で迎撃された。

LP1400

「ううう、アルテミスがやられちゃったか」

姉貴が残念そうな声を上げる。
これでアルテミスの効果でドローされることは無くなった。

「なら、カードを2枚セットしてターンエンド！」

姉貴がターンを終了する。

「俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードを手札に加える。手札は5枚あった。
姉貴のフィールドをじっと見る。

（魔法が使えない、か）

インヴェシルが邪魔だった。

手札にある強欲な壺が使えない。

（倒すしかないな）

相打ちでも消えてもらうしかない、そう決心した。

「手札からマックス・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

マックス・ウォリアーが再びフィールドに降り立った。
それを見て姉貴が動く。

「カウンター罠キック・バック！もう一度手札に戻りなさい、マックス・ウォリアー！」

「くっ、またか」

再び衝撃波に吹き飛ばされてマックス・ウォリアーが手札に戻ってきた。

（くっ、つらいな）

心の中で呟く。

「そして、カウンター罠を発動したため人造天使の効果で人造天使トークンを守備表示で特殊召喚！」

人造天使トークンDEF300

フィールドに現れ、更に姉貴の場に並ぶ。

前のターンに引き続いて何も召喚出来ないまま召喚権を失ってしまった。

「手札を2枚セットしてターンエンド！」

再びリバースカードだけで終了する。

自分フィールドにモンスターがないのは少しつらかった。

「あたしのターン！ドロー！」

姉貴がカードを引く。

引いたカードをちらっと確認して姉貴が口を開いた。

「バトル！天魔神インヴェシルでヒノキにダイレクトアタック！」

指示を受けて天魔神インヴェシルが光り輝く光球を放つ。

「くっ、リバースカードオープン！くず鉄のかかし！」

「うっ、そのカードって確か面倒なカードだっけ」

ヒノキを守るように現れたかかしに姉貴が嫌そうな声を上げた。
嫌そうな表情のまま姉貴がリバースカードを発動させる。

「カウンター罠 盗賊の七つ道具！ライフを1000ポイント払ってくず鉄のかかしを無効にして破壊！」

LP400

姉貴のライフが減少してくず鉄のかかしが爆散した。

「ちっ、かかしが！」

「そして、カウンター罠を発動したことによりトークンを生成！」

人造天使トークンDEF300

4体目の人造天使トークンがフィールドに現れ、姉貴のフィールドを埋め尽くす。

そして、天魔神インヴィシルが放った光球が消滅した。

「何だ？」

姉貴のフィールドを埋め尽くす人造天使トークン達と天魔神インヴィシルが光の粒子となって消えていく。

「さあ、ヒノキ。ラスト1枚のリバースカードも消し去ってあげる」

「何だって？」

「自分のカウンター罠が発動に成功したとき、自分フィールドに存在する全てのモンスターを生け贄に捧げ特殊召喚する！」

4体の人造天使トークンと天魔神インヴィシルが光となって消滅、そして新たなモンスターがフィールドに舞い降りた。

「裁きを下す者、ボルテニスを攻撃表示で特殊召喚！」

裁きを下す者、ボルテニス ATK2800

「ボルテニスの効果！生け贄に捧げた天使族の数まで相手フィールドのカードを破壊する！」

「くっ」

稲妻が最後のリバースカードに降り注ぎ爆散する。

「ヒノキのフィールドはこれでがら空き、ボルテニスでダイレクト」

「まだだ！破壊されたリミッター・ブレイクの効果！俺はスピード・ウォリアーをデッキから特殊召喚する！」

スピード・ウォリアー DEF400

「しぶといねえ、ヒノキ。だったらボルテニスでスピード・ウォリアーに攻撃！ジャッジメント・サンダー・レイ！」

空から降り注いだ雷がスピード・ウォリアーに直撃して爆散した。

（くう、何とかダメージを受けずに済んだか）
スピード・ウォリアーに感謝して少しホッとする。

「あたしはカードを1枚セットしてターンエンド」

姉貴がエンド宣言をした。

フィールドには裁きを下す者、ボルテニスが佇んでおり、少し威圧感を覚える。

（がら空きにされちゃったか）

状況を確認してからデッキに手をかける。

その時、姉貴が口を開いた。

「ヒノキ、あんたはやっぱりあたしには勝てない。おとなしく諦めなさい」

「何だって？」

思わず、眉をひそめる。

ドローをせずにサレンダーをしろ、とそんなことを姉貴が言っている。

「ヒノキ、あんたはデュエルが始まってから今まで何が出来た？モンスターの召喚は無効にされ、魔法も無効にされ、罠で何とかしのいでいるだけ」

「……」

黙って言葉を聞く。確かに姉貴の言うことはおおむね間違っていないかった。

このデュエルの過程が頭に浮かんでくる。

大嵐を無効化され、2度にわたるマックス・ウォリアー召喚の無効化、激流葬も無効化され、手札の魔法カードも思うように使えなかった。

姉貴がやさしい表情で言葉を紡ぐ。

「ヒノキ、あんたがアカデミアに通うのは無理があったの。だから、おとなしくおねえちゃんと一緒に帰ろう？」

「……」

姉貴の言葉をただ黙って静かに聞いた。

確かに思い返してみればこのデュエル、自分のターンで何1つ思うように行動することが出来ていない。

姉貴の一方的な攻勢が繰り広げられていた。

『マスター！諦めないでください！サレンダーなんかしちやいけません！』

何もない空間から必死な叫びが聞こえてくる。

（ああ、そうだな）

もちろんサレンダーなどする気は欠片もなかった。

姉貴は1つ勘違いをしている。デッキからカードをドローする。

「俺のターン！ドロー！」

「ヒノキ、あんたホントに負けず嫌いね」

ドローするのを見て姉貴が呆れるように呟いた。

引いたカードを確認して手札に加え、姉貴の方をしっかりと見て口を開く。

「姉貴、アカデミアに入学する前の『俺』と今の俺は違う」

「いきなり、どうしたの？」

急に脈絡のないことを言いだしたヒノキに姉貴が怪訝そうな表情を浮かべた。

それには構わず言葉を続ける。

「確かにこのデュエルは今まで姉貴が主導権を握ってきた。だけど、姉貴のライフは今400ポイントで俺は一回もダメージを受けていない」

「！！」

言葉を聞いて姉貴がハツとした。

そう、コンフュージョン・チャフでダメージをくらい自らのカウンター罠でライフコストを払い姉貴のライフは既に400ポイント。対するヒノキは初期ライフ4000のまま。更に姉貴の手札が1枚であるのに対してヒノキの手札は4枚。

様々な想いを言葉に込めて口を動かす。

「アカデミアの入試を受けた時から姉貴の知らない思い出が俺の中にあるんだ」

「んう、くっ」

姉貴が唇を噛みしめ、暗い表情を浮かべた。

アカデミアで過ごした『裁判司』が存在しない思い出がある。更に自分の中には姉貴との思い出は存在しない、思い出の中の『裁判司』は兄貴であり姉貴じゃないから。それだけの差異で思い出が変わらないのだとしても確かな違いがお互いに存在している。

正確に伝わるとは思っていないが、言葉にそんな想いを込めていた。

悔しくて寂しそうな表情のまま姉貴がポツリと呟く。

「あたしの知らない時間、あたしの知らないヒノキ……」

「そうさ、俺がいま姉貴に言ったこと……それが！今の俺と姉貴に勝てなかった昔の『俺』との違いなのさ！」

「んう、認めない。ヒノキは変わってなんかいない！あんたはあたしと一緒に帰るの！幸せな高校生活のために一緒に帰るの！」

「断る！確かに全く同じで変わってなんかいないだろうさ、けれどそれでも！変わっている部分が確かにあるということを姉貴に教えてやるさ！」

「そんなことを言うんだったら、あたしに勝ってみなさい！勝ってあたしを納得させてみなさい！」

「へっ、元からそのつもりさ」

姉貴に対して力いっぱい断言した。

「いくぞ、姉貴！」

「来なさい！その根拠のない自信をへし折って上げる」

『頑、りましょう！マ、ター！』

よく聞こえない声に対してウンと頷く。

既に魔法を封じていた天魔神インヴィシルはフィールドに存在しなかった。

「手札から魔法カード強欲な壺！デッキからカードを2枚ドロー！」

デッキからカードを2枚引く。

「ふーん、まずは手札補充ってわけ？」

「その通りさ。そして手札からレベル・ウォリアーをレベル4として特殊召喚！」

レベル・ウォリアー ATK300

フィールドに現れたのを見て姉貴が怪訝な表情をした。

「攻撃表示？あんた、いつもそのカードは守備表示で壁にしていたのにどういふつもりなの？」

どうやらアカデミア入学前の『俺』は特殊召喚効果を利用して壁として使っていたようである。

「へっ、面白いのはここからさ。手札からワン・フォー・ワンを発動！手札のエフェクト・ヴェーラーを墓地へ送り」

『ふえっ？わ、し捨てられ、うんで、かー！？』

「デッキからチューニング・サポーターを攻撃表示で特殊召喚！」

チューニング・サポーターがフィールドに現れ、レベル・ウォリアーの隣に並んだ。

「へっ？チューニング・サポーター？エフェクト・ヴェーラー？あなたのデッキにそんなカード入ってたっけ！？」

「ハハハ、更に手札からジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚！効果でエフェクト・ヴェーラーを守備表示で特殊召喚！」

「へっ？えっ！？あたしの知らないカードばかり！？」

フィールドに4体のモンスターが並ぶ。

姉貴はひたすら驚いていた。

『やった、わたし復活！えへへ、マスター頑張りました！』

「おお」

エフェクト・ヴェーラーがこちらを見ながら声をかけてくる。

（やっぱ喋るんだな、ソリッドビジョンとんでもないな）

なんてオーバーテクノロジーなんだ、とヒノキは感心した。

ボルテニスに対峙する4体のモンスターを見て姉貴がひたすら怪訝そうな声を上げる。

「そんな、あんたいつの間にあたしの知らないカードを……でも、

いくらモンスターを並べたってその子たちじゃボルテニスは倒せないぞっ」

「これから面白くなるのさ」

「??.」

姉貴はやはり怪訝そうな顔を浮かべた。

（姉貴のフィールドにはボルテニスが1体）
状況を確認する。

（よし、あれでいこう）

ヒノキは戦術を決めた。

「いくぞ、姉貴！レベル4になっているレベル・ウオリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが胴体についているレバーを引っ張り3つの光輪を発生させる。

「な、何？何これ！？どうなってるの？」

「集いし叫びがこだまの矢となり空を裂く、光差す道となれ！シンクロ召喚！貫け、ジャンク・アーチャー！」

ジャンク・アーチャー ATK 2300

2体のモンスターが1つとなりフィールドに舞い降りた。

「シンクロ召喚？何それ！？ど、どうなってるの？あんたがアカデミアの入試に行く前の日はそんなのなかったはずなのに？？」

「あつ、とそれはその」

いかん。

答えられない質問にヒノキは思わず言葉を濁した。

（どうしようか？）

言い訳を考える。

だが、逃げ道を考えていたら姉貴が何かに気がついたようにハッとしました。

「あんた、あたしに内緒で入試のために新しいカードをこっそり集めてたの！？」

勝手に自己完結してくれたようである。

正直、言い訳を考える手間が省けたのでありがたかった。

「まあ、そんなところ、かな」

「んむう。そっか、だからあんた入試の前日はろくに何もやってないはずなのにあんな自信満々だったの」

そんなこと言われても分かりません。
そんな本音を言うことは出来なかった。

「さて、ジャンク・アーチャーの効果を発動！1ターンに1度相手
モンスター1体をエンドフェイズまで除外する！デイメンジョン・
シュート！」

声を受けてジャンク・アーチャーが裁きを下す者、ボルテニス目
がけて弓を構える。

「っ！？エンドフェイズまで除外？あたしのフィールドには」

自分のフィールドに居るボルテニスを見る姉貴。

「そう、姉貴のフィールドにはボルテニスが1体のみ。この効果を
許せばジャンク・アーチャーのダイレクト・アタックが決まる！」

「んくっ、させない！リバースカード発動！天罰！手札を1枚墓地
に送り、モンスター効果の発動と効果を無効にして破壊する！」

弓に矢をつがえたジャンク・アーチャーに雷が降り注ぎ、爆散し
た。

「ちい」

「そして永続罫 人造天使の効果で人造天使トークンを生成！」

人造天使トークンDEF300

新たにフィールドに舞い降りボルテニスの隣に並ぶ。

姉貴がふう〜、と胸を撫で下ろしながら口を開いた。

「どう、ヒノキ？ あんたの新しいカードには驚いたけど、あたしのフィールドにはこれでモンスターが2体。蘇生カードでさっきのカードを呼び戻してもダイレクトアタックは出来ない、諦めて一緒に帰る気になった？」

再び、サレンダーする気になったか？と聞いてくる。

確かにジャンク・アーチャーを蘇生しても無意味なのは言葉の通りだった。

（まあ、残り1枚マックス・ウォリアーだから蘇生うんぬんは何1つ関係ないんだけどね）

そう思って、残り1枚の手札を見つめる。

手札が1枚しかなく、既に通常召喚も行えない。しかし、まだ方策はあった。

「レベル1チューニング・サポーターにレベル1エフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

「つて、また!？」

「ああ、その通り。だから諦める必要なんかないのさ!頼むぞ、エフエクト・ヴェーラー」

『はい!頑張ります!』

エフエクト・ヴェーラーがニコリとはにかむような笑顔を見せる。
(すごいな、ソリッドビジョン。会話も出来るのか)

ひたすらソリッドビジョンに感心した。

エフエクト・ヴェーラーが光の輪を発生させる。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘う、光差す道となれ!シンクロ召喚!希望の力、シンクロチューナー フォーミュラ・シンクロン!」

フォーミュラ・シンクロン ATK200

「な〜んだ攻撃力200じゃないの」

「いや、狙いは別さ。フォーミュラ・シンクロンと素材になったチューニング・サポーターの効果!シンクロ召喚に成功したとき1枚、シンクロ素材に使用されたときに1枚、合計デッキから2枚カードをドローする!」

「えっ?何それ!？」

驚愕する姉貴を尻目にデッキから2枚ドロースる。

「よし、手札のマックス・ウォリアーを墓地へ送りクイック・シンクロンを特殊召喚！更に魔法カード シンクロキャンセル！フォアミュラ・シンクロンのシンクロを解除！」

フィールドに3体のモンスターが並んだ。

（よし、これで準備は整った）

このターンで勝利する、と心の中で意気込む。

（つて、あれ？）

ふとフィールドを見て気付く。

エフェクト・ヴェーラーが笑顔で手を振っていた。

『ただいま、マスター』

「へ？えーと、おかえり？」

首を傾げながら返答をする。

エフェクト・ヴェーラーが物凄く嬉しそうな顔で『えへへ』とはにかんだ。

「？あんた、急になに言ってるの？」

「え？ いや、エフェクト・ヴェーラーが話しかけてきたもんだからさ。ソリッドビジョンってすごいよなあ」

「何言ってるの？ 一言も喋ってなんかじゃないの。それにソリッドビジョンって基本的に言葉を喋らないよ？」

「へ？」

思わず意味のない言葉を洩らして、エフェクト・ヴェーラーに視線を向けてしまう。

（基本的に喋らないって、それじゃさっきのは何なんだ？）
心の底から疑問に思った。

『？？？ どうかしたんですかマスター？ そんなに見つめられると何だか照れちゃいます』

えへへ、と頬を紅潮させるエフェクト・ヴェーラー。
やはり普通に喋っている。

（そういえば）

2、3日前にエフェクト・ヴェーラーが精霊だと十代に言われたのを思い出した。

（もしかして、そういうことなのか？）

今まであまり信じていなかったが精霊なのだとすれば説明がつく。もしかしたらエフェクト・ヴェーラーが見えてなかった精霊なのかもしれない、と思い直した。

（っと、今はデュエルを続けないとな）

エフェクト・ヴェーラーを視界に納めながら、気持ちを切り替え

る。

「レベル1チューニング・サポーターにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが拳銃を引き抜き前方で回転するカードの中からドリル・シンクロンを打ち抜いて、5つの光輪と化した。

「集いし力が大地を貫く槍となる、光差す道となれ！シンクロ召喚！砕け、ドリル・ウォリアー！」

ドリル・ウォリアー ATK 2400

「うっ、また新しいカードなの？」

「そうさ、そしてこのカードの攻撃が通れば俺の勝ちとなる」

「へっ！？あたしのボルテニスは攻撃力2800、人造天使トークンは守備表示、その子がダイレクトアタック出来る効果でも持っていない限り」

「その通り！ダイレクトアタックするのさ！ドリル・ウォリアーは1ターンに1度メインフェイズに攻撃力を半分にすることで相手プレイヤーにダイレクトアタックすることが出来る！」

ドリル・ウォリアーATK1200

「んうっ、そんな!？」

ドリル・ウォリアーの攻撃力が変動したのを見て、姉貴が目を見開いて驚愕する。

姉貴のフィールドにはまだ1枚リバーズカードが残っていた。それは前のターンに伏せたカード。

(恐れることはない、かな)

リバーズカードを推測する。

『ヒノキのことは何でもお見通しなの』

姉貴はそう言っていた。しかし、それと同じように姉貴の……『裁 司』のことはよく知っている。

「姉貴、俺も姉貴のことは大体お見通しさ。多分、そのリバーズカードは今この状況じゃ使えないカウンター罠」

「うえ! えくと、それはどうかな? あははは、は」

目を逸らしながら誤魔化し笑いをする姉貴。

何故わかる、と雄弁に語っているような姿だった。

『さあ、いきましようマスター!』

「ああ、バトルだ！」

「えっ！？ちょ、ちょっ、待」

「ドリル・ウオリアーで姉貴にダイレクト・アタック！」

ドリル・ウオリアーの右手についているドリルが回転し始め唸り
を上げる。

「頼むぞ、ドリル・シュート！」

右手からドリルが発射されボルテニスと人造天使トークンをすり
抜け、姉貴に直撃した。

L
P
O

「そ、そんなぁー！？」

ダイレクトアタックの衝撃で姉貴がペタンと尻もちをついて床に
座り込む。

デュエルの勝敗が決した。

ソリッドビジョンが消滅していく。

（これは？十代が言ってたこと嘘じゃなかったのか）

ソリッドビジョンが消滅したはずなのに、エフェクト・ヴェーラ

ーだけ半透明な姿でその場にとどまり続けていた。

『やりましたね、マスター！』

「ああ」

『流石はわたしのマスターです！例えわたしのことが見えてなくてもわたしはいつでもマスターのお傍に、ってあれ？今マスターとお話出来たような？』

うーん、と顎に人差し指を乗せてエフェクト・ヴェーラーが考え込む。

（ちょっと、ごめんな）

とりあえず姉貴の方に行くことにした。

ペタンと座り込んでいる姉貴のもとに近づいていく。

「姉貴、俺の勝ちだ」

「ヒノキ……」

姉貴は地面に座り込みながら上目づかいで見上げてきた。

（うっ、このアングルは）

何だか背筋にゾクゾクと悪寒が走る。

「あんた、随分と強くなったね」

「あ、ああ、これで姉貴にこき使われる学園生活は無くなったわけだな」

「ごめんね、ヒノキ。散々『弱い』とか『アカデミアじゃやっていけない』とか言っちゃって」

姉貴が素直に謝ってきた。

（そういえば兄貴も自分がやりすぎたと思ったなら素直に謝ってきたな）

姉貴の行動を見て昔のことを思い出す。

確かに違うところがあっても姉貴は兄貴なんだよな、と改めて感じた。

姉貴がディスクから最後のリバーズカードを抜き取り、見せてくる。

「あんたの言った通り。これが最後のリバーズカード」

「トラップ・ジャマー、ね」

推測通り、確かに最後のターンの状況では使えないカウンター罠だった。

ヒノキが見たのを確認して、姉貴がカードをデッキに納める。

「ヒノキ、あたしはあんたをこき使う幸せな高校生活を送りたかったの」

「あのなあ。まあ、でもその計画は水泡に帰したわけだ」

「言ってることはよくわからないけど、本当に残念。でも、それだけじゃなかったの。ヒノキが居なくなってから毎日が退屈でね、あたしはヒノキと一緒に毎日楽しく過ごしたかったの」

「……はあ」

姉貴の言葉を聞いて思わず溜息を吐いた。

（そうだよなあ、毎日バカみたいなことやってたよなあ）
少し遠い目をしてしまう。

思い返せば基本的に兄貴とは毎日一緒に居た。

修学旅行があると聞けば『俺も行く』とついてこようとして先生につまみ出され、ならばと近くの宿を予約しようとして失敗して、最終的にはお土産を頼んでくるそんな人だった。

まったく、と再び溜息を吐きながら未だに床に座り込んでいる姉貴に手を差し伸べる。

「姉貴、つまらないんだったら何時間だって電話の相手になる、何通だってメールの返信もしてやる、遊びたければ休暇を利用してくれればいい。まったく、本当にバカなんだから姉貴は」

「ん、あたしをけなす気？ ヒノキは本当に失礼な奴ね。あと、あたしのことはお・ね・え・ちゃ・んと呼びなさい」

「あ、はいはい。おねえちゃんおねえちゃん」

「んむっ、もつと気持ちを込めて呼びなさい！」

晴れやかな笑顔で怒鳴るような大声を出して姉貴は差し伸べた手を強く握ってきた。

観客席。

ヒノキのもとに行こうとする十代と雪を翔と隼人の2人が止めていた。

「なんだよ、翔。ヒノキが勝ったんだぜ？」

「それは分かってるんすけど、あんな空気の中に突っ込んでいくのはやめた方がいいッス」

「妬ましいけど空気を読んだ方がいいんだな」

「むっ？ 空気を読む？ 文字でも書いてあるのか？」

十代と雪はひたすら怪訝な表情をしている。

突然、叫び出す翔。

「おかしいッス！ アニキも雪さんも、あとヒノキ君も、何でこんなに鈍い人ばかりなんスかー！」

「むっ、運動神経は良い方だと自負しているんだがな、それでも」

「おっ！俺も運動は得意だぜ？」

「2人とも全然わかってないんだな」

隼人と翔は仲良く揃って溜息を吐いた。

港にある灯台の下。

太陽が傾いて空が茜色に染まっている。

姉貴はデュエルに負けておとなしく帰っていった。

「正直、ヒノキと一緒に過ごす幸せな高校生活も魅力的なんだけど約束だからしょうがないか」

と未練がましいことを言っ

ていうか、『ヒノキをこき使って幸せな高校生活』という部分が『一緒に過ごす高校生活』という言葉に完全に置き換わっている。

おそらく『コキを使う』うんぬんはあの時、入学試験の時に一緒に高校に通わないとわかってしまっ

て、勢いで口からポンっ

と出てしまった言葉だったんじゃないか？とヒノキはそんなことを思った。

（むしろ、本当に灰色学園生活を送らせたかったなら嫌なことこの上ないなあ）

ちなみに夕飯の時間が近いらしくて雪は名残惜しそうに寮へと戻っていった。十代達も同様。

今は灯台の下で1人、否2人(?) っきりだった。

『司さん、帰っちゃいましたね。マスター』

「そうだな、と言っても別に何とも思わないけど」

『うう、そうですよね。マスターはわたしのことが見えてない……
って、あれ?』

エフェクト・ヴェーラーが瞳をまんまるに見開く。
そして、真っ直ぐに顔を見据えてきて口を開いた。

『あの……マスター、わたしの声が聞こえてるんですか?』

「ああ、それはもうしつかりと」

『ふえ、は、はわわわ』

エフェクト・ヴェーラーの瞳が段々と涙目になっていき、目の端に涙の粒が溜まっていく。

(な、何だ? 何で泣くわけ?)

ヒノキは少しうろたえた。

『マ、マスター!』

「って、わっ」

感極まったようにエフェクト・ヴェーラーが胸に飛び込んでくる。そして、飛び込んだ勢いのまま反対側にすり抜けた。

『あうっ、えへへ、忘れてました。わたしは物とか人には触れないんです!』

「ははは、何をそんなに慌ててるんだか」

恥ずかしそうに笑うエフェクト・ヴェーラーを見て、笑いながら答えた。

返答を聞いて、力いっぱい詰め寄ってきて力説してくる。

『そんなに慌てることです! 今までどんなに話しかけても、どんなに近くに居ても、気付いてくれなかったマスターが気付いてくれたんですよ!』

「あ、ははは、は」

喝いた笑いが出てきた。

(いかん。罪悪感が半端ないぞ)

エフェクト・ヴェーラーに対して少し負い目を感じた。

詰め寄って大きな声で力強く喋っていたエフェクト・ヴェーラーが急に静かになる。

『あの、マスター？』

「ん？ ああ、何？」

『わたしのこと本当に見えてるんですよね？ 本当に声が聞こえるんですよね？ 本当に、その、わたしがはっきりとわかるんですよね？』

うるんだ瞳で不安そうに声を震わせながら1つ1つ確かめるように言葉を紡いでいった。

3つの言葉に対してたった1つの動作で全て肯定する。

「ああ、バッチリさ！」

『マスター……ひっく、あう、えうう、うう』

「あっはは、は、泣くなって！ 泣くようなことなんて何1つないぞ
〜！」

心の中で焦りながら宥めるために必死になってバカみたいに明るい声を出した。

エフェクト・ヴェーラーがごしごしと細い腕で目の辺りを拭う。

『そうですよね、マスター』

「ああ、そうさ」

『うん。こんなに嬉しい気持ちの時は笑顔の方がいいですよね!』

そう言って、エフェクト・ヴェーラーはニツコリと満面の笑みを浮かべた。瞳の端にきらりと一粒の涙を輝かせながら。

「それじゃあ、寮に帰るか」

『はい!』

寮に向けて足を動かす。

『マスター?』

「ん? 何だ?」

『エヘヘ、何でもないです』

第14話 心の温度（後書き）

この話でヒノキ君はようやくとエフェクト・ヴェーラーが見えるようになりました。

あの子を救済出来て本当に良かった、と自分でも思います。

今回のデュエル、『姉貴にパーミッションは向いていない』というようなことをヒノキ君は考えていましたが。実際その通り、姉貴はプレイングミスをしています。

しかし、文字数の都合で若干削ったので少し足りない部分があるんですよ。本当に分割すれば良かったかもしれません。

それでは今後ともこの小説をよろしくお願いします。

第15話《前編》 無分別なのは良くないと嘆きたい（前書き）

また時間が随分とかかりました。

それにしてもやはり前後編に分けないと相当な長文になってしま
うのが最近の悩みです。ついでに若干スランプ気味です。

なるべく早く更新が出来るように心がけたいです。

それではどうぞ。

第15話《前編》 無分別なのは良くないと嘆きたい

夜。

窓から太陽光が差し込んでおらず、何も見えない真っ暗な部屋。
ヒノキとのデュエルに負けてアカデミアから帰ってきた司はパチ
リと部屋の電気を点けた。

「あゝあ、負けちゃった」

残念そうに呟いて、部屋の隅に位置するベッドに力を抜いて仰向
けに倒れこむ。

しかし、残念そうな声音とは裏腹に晴れ渡った明るい表情をして
いた。

「まさか、ヒノキがあんなに強くなってるなんてねえ」

昼間に行ったデュエルの内容を思いだしながら、独り言を言う。
司としては全く予期していないことであった。

何故ならアカデミアの入試前日に行ったデュエルではヒノキのカ
ードを完封してほとんど何もさせずに勝っていたからである。

（ホントにいつの間にあんなカードを手に入れたんだろ？）

全くヒノキも人が悪い、あんな隠し玉があるんだったら大好きな
おねえちゃんにくらいしつかりと教えてくれてもよかったのに。そ
う思っ、司は唇を尖らせた。

アカデミアの入試前日を思い出す。

・・・・・

部屋の中、机を挟んで向かい合う。

『くっ、インヴィシル？これじゃ手札の装備魔法が使えない……』

『で、どうするの？ヒノキ』

『うぐっ、スピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚だ！』

スピード・ウォリアーのカードを机の上に攻撃表示で置くヒノキ。
司のフィールドには豊穡のアルテミスと天魔神インヴィシル。

『バトルだ！スピード・ウォリアーで豊穡のアルテミスを攻撃！そして、攻撃宣言時にスピード・ウォリアーの効果発動！元々の攻撃力が2倍に』

『あつまゝい！リバーズカード発動！天罰！手札を1枚捨ててスピード・ウォリアーの効果が無効にして破壊！』

『くっ、スピード・ウォリアーが』

ヒノキがスピード・ウォリアーを墓地に置いた。

『んっふっふっふ、モンスター効果をカウンターしたことにより

手札から冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召かゝん♪そして効果により墓地の裁きを下す者、ボルテニスを攻撃表示で特殊召かゝん!』

『うげっ』

モンスターカードゾーンに4枚のカードが並ぶ司のフィールドを見てヒノキが露骨に嫌そうな顔をする。

『ふっふゝん、どうするのゝ? ヒゝノゝキゝ♪』

『くう、カードを1枚セットしてターンエンド!』

『よし、あたしのターン! ドロー! そして、バトル! 全部のモンスターでヒノキにダイレクトアタック!』

『リバーズカードオープン! 聖なるバリア、ミラーフォース!』

『はいはい、カウンター罠トラップ・ジャマー!』

『げっ』

ミラーフォースが無効化されてヒノキにダイレクトアタックが決まる。

ヒノキのライフが0になった。

机の上を片づけながら、デュエルをと思ったことを素直に言う。

『やっぱ、あんたじゃアカデミアに合格出来っこないって』

『くっ、何を根拠にそんなことを言うんだ姉貴』

『だって、今だってあたしに負けたしこれまでだってあたしに勝てたことないじゃないの』

『そりゃ、そうかもしれないけどさあ』

『ていうか、ヒノキ。筆記の勉強してないでしょ？』

『ん？筆記の勉強？姉貴が毎日のように家に押し掛けてくるから出来なかったんだよ』

『あっはっはっは、何言ってるのヒノキ。人を悪く言う前にまず自分に原因を求めなさい』

『はあ』

ヒノキがうんざりするように溜息を吐いた。

『まっ、あんたが受験に失敗して落ち込んで帰ってきててもあたしが慰めてあげるから大人しくあたしと同じ高校に通いなさい！』

『あゝ、はいはい。落ちたらの話ね。姉貴の高校は歩いて10分で行ける距離だから通うのもやぶさかじゃないな。落ちたらの話だけだ』

『落ちたら』の部分をやたらと強調する。

『ん？何か随分と余裕あるじゃないの？何か秘策でもあるの？』

『ぬくっ、あ、あはははは！それは、その、問題ない！明日は明日の風が吹くのさ！』

『ふん。何か気になるな……ほらほら！ヒノキの大好きなおねえちゃんにもどういことなのか教えなさい！』

『いや、自分で大好きなとか言うなよ姉貴』

『別にいいじゃないの。それでどういことなの？』

『あ、あはは、は、は』

ヒノキは眼を逸らしながら気まずそうに頭を掻いた。

・・・

思えばあの時の誤魔化すような仕草は、新しいカードのことを知らせず最初に自分とデュエルをしたときにビックリさせたかったかではないか？と司はそんな結論を出した。

(まったく、ヒノキったらお茶目さんね)

本人に届くことのない言葉を心の中で呟いて、口元を緩めた。

「ふう、でも明日からまた学校、か。退屈でつまらない学校、ヒノ

キがない学校か」

段々と表情が暗くなっていく。

学校のことを考えると憂鬱だった。

ヒノキの言葉を思いだす。

（何時間だって電話の相手になるし、何通だってメールの相手になる、か。でもなあ）

ヒノキが近くに居るか、居ないか、それだけで大きな違いだった。

「でも、デュエルには負けちゃったからなあ」

約束は約束、ヒノキを連れ戻すのは諦めなければならない。

アカデミアで出来た友達と楽しそうに話をしていたヒノキの姿が頭に浮かんできた。

自分の知らない思い出、自分の知らない時間。

何だか寂しいものを感じる。

やはりヒノキを連れ戻して同じ高校で一緒に楽しく過ごしたかった。

だけど出来ない。

約束は約束、違えるわけにはいかなかった。

でも退屈なだけの高校に行くのは面倒くさい、ヒノキが居ないと退屈で世界がモノクロに見える。

「あゝあ、どうにかなんないかなあゝ」

ハア〜と溜息を吐いて、ベッドの上を転がってうつ伏せになる。
何とかしてヒノキと一緒に学園生活を送りたい、でもデュエルに
は負けてしまった。

連れ戻すのは諦めなければならない。だけど……
ぐるぐると思考がループする。

「はあ〜、何か眠くなってきたな〜」

呟いてから、もう一度ごろりとベッドの上を転がって仰向けにな
った。

室内を明るく照らしている電気を見つめる。

眠くて段々と視界がぼやけて目蓋が落ちてくる。その時、天啓が
降りてきた気がした。

『パンが無ければお菓子を食べればいいじゃない』

荘厳なファンファールと共に現れる、豪華なドレスを身に纏った
貴婦人の姿。

薄れゆく意識の中でハッとする。

（そっか〜）

自分は何て狭い視野で物事を見ていたのだろう、ある1つの手段
（パン）が無理ならばそもそも根本的に異なる方法（お菓子）でヒ
ノキと一緒に過ごすことを考えればいいのだ。

・
・
・

「そう！その時あたしは気が付いたの！ヒノキを連れ戻すことが出来たんだったら、あたしがアカデミアに入学しちゃえばいいじゃないって！」

「それで、アカデミアに転校をしてきた、と？」

「うん、そういうこと！よろしくねえ、ヒノキ♪んっふっふ
つふ、あっぱっぱはははははは！」

姉貴がバカみたいに機嫌よく笑う。

その身はブルーの男子がよく着用しているオベリスクブルーの青いコートに包まれていた。自腹で購入したらしい。ちなみに下半身はスカートとオーバーニーソックスを着用、ガーターベルトで止められている。

(全くホントにやることと成すこととんでもないな)

そう思ってヒノキは溜息を吐いた。

ちなみに今居る場所はレッド寮の食堂で朝食の真つ最中。姉貴が騒いでいるせいか何だかじと目で見られている。

「無茶苦茶ツスね、ヒノキ君のお姉さん」

「ふむ、それだけヒノキが姉上に大事にされているということだろう」

翔の眩きに対して何故か当たり前のようにオシリスレッドの食堂に居る雪が答えた。

素朴な疑問を口にする。

「ところで、何で雪がレッドの食堂に居るんだ？」

「むっ、たまには友と朝食を一緒に食べるのも一興かと思ってな。加えて言うところの寮の食事は洋食ばかりであり好きではないんだ」

無表情のまま淡々と言葉にする雪。

「洋食ばかり、か。どんな食事なのか少し見てみたい気もあるな」

「ふむ、成るほど。確かに実物を見るのは大事なことだな」

何かに納得をしたような声で1度頷く。

（まあ、俺には縁のない話だな）

ヒノキは心の中で自己完結した。

女子寮は男子禁制なのである、校則を破る気などは欠片も無い。

平穏無事が一番だ、とそんなことを思う。

「でも、なんだかんだで平穏だった俺の日常が明日、いや今日から崩れていくんだよなあ」

溜息を吐いて高笑いを続けている姉貴を見つめた。

(まあ、仕方が無い)

心の中で割り切る。今さら嘆いても何の意味も無いのだ。
隼人が哀れみのこもった視線を向けてくる。

「ご愁傷様なんだな」

「同情するなら金をくれ」

「ネタ発言禁止ッス」

「まあ、いいじゃねえか。それに俺、ヒノキの姉ちゃんとは一回デユエルしてみたかったんだよな！」

「はあゝ」

ヒノキは再び溜息を吐いた。
大徳寺先生が近寄ってくる。

「ヒノキ君も大変ですね。お金は上げられませんが代わりに先生のニンジンをおあげるのニヤ」

「いや、ニンジンなんか要らな」

「『なんか』とか言っちゃ駄目なのニヤゝ。ニンジンはカロチンをたくさん含んでいて栄養価万点なのニヤ」

ヒノキの皿にニンジンを移し替えてそのまま大徳寺先生は去っていった。

（生野菜は全般的に好きじゃないんだけどなあ）

そんなことを思いながら、山盛りにされたニンジンの1つを箸で挟んで口に運ぶ。

咀嚼するとコリコリという音が鳴った。野菜スティックである。

「ヒノキ君、ドレッシング使わないんスか？」

「ドレッシングなんて邪道だ」

「よくわからないこだわりなんだな」

「ふむ、私には少しわかる気がするな」

「人それぞれこだわってる大切なものがあるってことだろ。なっ、ヒノキ？」

「まあ、そんなとこかな」

十代に同意の返事をして、再びコリコリとニンジンをかじる作業に戻った。

姉貴は未だに高笑いを続けている。

「あっはっはっはっは、うっ！ケホッ、コホッ、気管に入っ、オホッ、コホッ」

姉貴が咳きこんだ。

（はぁ、まったく）

うんざりしながらニンジン齧る片手間に姉貴の背中をさする。

「コフツコフツ、エフツ、ん、悪いねヒノキ」

「ふう、これだから」

『うう、マスターと司さんは仲良しさんなんですね。羨ましいです』

拗ねるように少し頬を膨らませるエフェクト・ヴェーラー。

イヤイヤそういうことじゃない、とヒノキは首を横に振った。

カキーンと、快音を響かせて野球ボールがバックスクリーンに吸い込まれていく。

姉貴と別れて行動が出来る平穏な時間。

授業の時間である。姉貴は当然のことながら2年、学年が違うので必然的に授業の時は別々になれる。

今は体育の時間。男女で別れて授業を行っており、今は野球を行っている。

打者がホームベースに戻ってきてきて1点入る。

「ホームランか、すごいな十代は」

「そうッスよね、流石は兄貴ッス」

洩らした呟きに同意をしてくる翔。

十代がバッターボックスに入った場合、空振り以外は全て長打になっていた。

ちなみに隼人は運動が嫌いなようでこの場には居ない。

（ああ、空が青いなあ）

ヒノキはホームランを見届けてから呆然と空を見上げた。

「って、ヒノキ君！何のんびりしてんスカ！次はヒノキ君の打順ッスよ？」

「いや、すまん。ちょっと空が青いなあと思ってさ」

「ここ屋内ッスよ、天井しか見えないッス！」

「フッ、見えなくてもちゃんとある。心が晴れやかならば、どんなときだって青空が見えるものなのさ」

「いや、そんな得意げな顔されても困るんスけど」

『マスター、頑張ってください！ファイトっ、です！』

エフエクト・ヴェーラーが声をかけてくる。

野球が始まった当初から疑問に思っていたのだが、その手には見慣れないものが握られていた。

「……最初から気になってたんだが、何でポンポンを持ってるんだ？」

『これですか？お友達のフレイヤちゃんに貸してもらいました。今日はこれでマスターのことを一生懸命応援しちゃいます！』

ファサファサとポンポンを揺らしながらキラキラとした瞳を向けてくる。

『フレイヤちゃん』って見たことないけどどこに居るんだろう？そんなことを最初に思ったが割とどうでもいい。

応援してくれること。それ自体は素直に嬉しい、けど複雑な気分だった。

（俺、野球は嫌いなんだけどなあ）

でも、仕方がない。応援されている以上それに応えてあげたい。隣で怪訝な顔をしている翔が声をかけてきた。

「ヒノキ君、さっきからなに独り言を言ってんスカ？」

「細かいことは気にするな」

「ヒノキ君いつもそれッスね。次ヒノキ君の番だからあえて流すッス」

はい、と言って渡してきたバットを受け取る。

（仕方ない、いっちょ頑張ってみるかな）

おとなしくバッターボックスに向かうことにした。

「ヒーノキー！がんばー！かっとなせー！！活躍しなきゃ飯おごらせるぞー！」

何故か観客席の方に姉貴の姿が見える。

（……授業はどうした？）

姉貴は大本が描かれた大きな旗を振りながら声を張り上げていた。周囲の生徒から奇異の視線を向けられる。

溜息を吐きたくなった。

『うう、私も負けてられません！マスター！ファイトっ、です！』

ファサファサと一生懸命ポンポンを揺らすエフェクト・ヴェーラ
！。

可愛らしい姿だけど、対抗心を燃やさなくていい。

そんなことを思いながらバッターボックスに立った。

瞬間、ピッチャーが少しおびえた表情をする。

（だから、嫌なんだ）

ヒノキは心の中でぼやいた。

「かっ飛ばせー！ヒ・ノ・キ！三振したら承知しないぞー！」

『フレ〜フレ〜、マ・ス・ター！頑張れ頑張れ、マ・ス・ター！』

姉貴の応援（？）とポンポンを一生懸命に振っているエフェクト・ヴェーラーの応援を耳にしながらバットを構える。

姉貴の応援（？）がこれっぽっちも嬉しくないのは何故なのだろうか？と思わずげんなりしてしまう。

（まあ、姉貴だし）

自己完結して、気を引き締めた。

微妙に嫌そうな表情を浮かべながらピッチャーが振りかぶって、球が投げられる。

投げられた球の軌道をじっくりと見て、バットを思い切り振り抜いた。

「ふっ、っ！」

キーン、と快音を響かせて勢いよく球が飛んでいく。

「う、うわっ！」

そしてピッチャーの頭をすれすれに横を通り抜けていった。

（……わざとじゃないんだ）

心の中で言い訳をして、1塁に走る。

野球をやると何故か打ち返す球の全てが頭部すれすれの危険なピッチャー返しになってしまい他の人たちからひんしゆくを買うから

野球は嫌いだった。

とりあえず1塁で止まっておく。

「こらー！2塁までいけるって！もっと走れヒノキー！」

無茶を言うな姉貴、とヒノキは文句を言いたくなった。

既に打ち返して地面を転がっていた球は外野のグローブに納まっている。

走れば間に合わないかもしれないかもしれないが

（多分、アウトになるだろ）

堅実なのが1番だ、とそんなことを思った。

『流石です！マスターかっこいいです！』

手にポンポンを持ちながらエフェクト・ヴェーラーが近寄ってくる。

『えへへ、頑張ってくださいマスター！わたし傍でいっぱい応援しちゃいます！』

ニコリ、とはにかんだ眩しい笑顔。

何だか少し暖かい気持ちになる。

「そうだな、出来る限り頑張ってみるか」

『はいっ！頑張ってください！ファイトっ、お〜！』

エフェクト・ヴェーラーの手に握られているポンポンがファサと音を立てた。

「ヒーノキー！盗塁、盗塁だー！2塁まではっしれー！」

姉貴の声が響いてくる。

（本当に、無茶を言うなって）

少しげんなりとした。

ちらりと遠くに居る姉貴を一瞥する。

「ヒーノキー！盗塁だっば盗塁！盗、って何？邪魔しないでもら」

姉貴のすぐ後ろにグラサン先生がいた。

「え〜と、これはその〜、さらば！」

大木が描かれている大きな旗を投げつけてグラサン先生の視界を遮り、姉貴は全速力で逃げていった。

ふう〜やれやれ、と肩を竦めて首を横に振るグラサン先生。

（なんか、すいません）

何故だか申し訳ない気分になった。

姉貴が居なくなっても順調に野球は進んでいく。

中々に平穏で穏やかな気分に浸ることが出来た。

現在は9回の表、バッターボックスには十代。

オシリスレッドの生徒たちから十代コールが上がっている。

（皆、よくやるなあ。俺はのんびりとしとこう）

ヒノキは少し離れた場所でまったりと見守っていた。

「おーい！待てー、その試合ちょっと待ったー！」

今にもピッチャーがボールを投げようとした瞬間、三沢がやってくる。

「すみません、遅れて。デッキ構築論に夢中になっちゃって」

そんな言葉が耳に入ってくる。

授業は既に終盤。とんでもない重役出勤である。

（あれって、出席になるのかな？）

割とどうでもいいことを疑問に思っって首を傾げた。

そんなことを考えている内に三沢がピッチャーを交代してマウンドに立つ。

「ついに出てきたな、三沢。しかし、お前の球もあそこに叩きこん

でやる！」

バットをかざして、バックスクリーンを指し示す十代。
ホームラン宣言である。

「いや、俺の球は打たれはしない。何故なら君の攻略法は既に計算済みだからだ」

三沢の背後に燃え盛る炎が見えた気がした。

(青春してるなあ)

熱血展開をぼんやりと見守る。

それにしても計算で編み出される野球の攻略法って何なのだろうか？

果てしなく疑問だった。

三沢が振りかぶる。

「行くぞ！方程式バージョン1！」

そして右手より放たれる魔球。

十代はあっさり3振した。

「何だろうな、あれ？」

『すごいですねえ。でも、きっとマスターなら打てます！頑張っ

てください!』

「へっ?」

胸の前でファサファサとポンポンを揺らしながらキラキラとした瞳を向けてくるエフェクト・ヴェーラー。

一瞬、何を言っているのか分らずポカンとしてしまう。

(……そうだった)

十代の次は自分の打順がくることを忘れていた。

正直、打てる気がしない。

期待に満ち溢れた純粋な瞳を向けてくるエフェクト・ヴェーラー。

『マスター! ファイトっ、です!』

「えーと、その、まあ出来る限りやってみるさ」

『はいっ! 頑張ってください!』

「あはは、は」

打てなかったらごめんね。

曖昧な笑みを残してバッターボックスに向かった。
バットを構えて三沢と向かい合う。

「ヒノキー! 三沢の球を打ち返してやれー!」

『フレイフレイ、マ・ス・ター！頑張れ頑張れ、マ・ス・ター！フ
アイトっ、お〜！』

声を張り上げる十代、ポンポンを一生懸命振って応援してくれる
エフェクト・ヴェーラー。

「まあ、そういうわけだ。三沢、絶対にお前の球を打ち返してやる
！……出来たら」

「悪いがそれは不可能だ。十代と同様に君の攻略法も既に計算済み
だ」

「それはご苦労なこって」

なんとも暇な奴だな。

という本音は内緒。

わざわざ攻略法をあみだしてくるとは律儀な男である。

攻略法をあみだして対処するほど、大層なことはやっていない。
そこまで恐れる必要ないだろう？、とヒノキは素直に思った。

三沢が振りかぶる。

「いくぞ！不等式バージョン1，25！」

「くっ」

バシインと快音を響かせて球はミットに納まった。

審判がストライクと大きな声で宣言する。

普通に空振り、かすりもしなかった。

（くそっ、なんて中途半端なバージョンなんだ）

どうでもいいことに突っ込みを入れて、悪態をつく。

キャッチャーがボールを投げ返して三沢が受け取った。

（……なんだろう？）

1、2塁にいるオシリスレッドの生徒から『頼むから頑張ってくれよ』的な視線が送られてきている気がする。期待の眼差しを向けられても困る。

『大丈夫です、マスター！まだチャンスはあります！ファイトつ、です！』

エフェクト・ヴェーラーは一生懸命ポンポンを振っていた。

オシリスレッドの野郎どもから向けられる視線はともかく、一生懸命に応援をしてくれている可愛い精霊の応援には応えてあげたい。ヒノキはすっと片足を上げた。

「！その構えは！？」

三沢が眼を見開く。

そう、投手側の足を高く上げて地面に着いている片足のみで立ちバットを構えるという過去に伝説を築き上げた打法。1本足打法である。

「さあ、これで見事バックスクリーンまで打ち返してやるさ」

「ふっ、面白いことをしてくれる。確かに君がその打法を使っているデータは俺の中には無い」

「へっ、来い！勝負だ！」

「いいだろう、勝負だ！」

・
・
・
・
・
・

しばらくしても三沢はボールを投げてこなかった。

（この体勢、疲れたな）

上げていた片足を地面に下ろす。

「今だ！」

「って、おいこら！」

バシインと快音を響かせて球がミットに納まった。

ストライク、と声高々に宣言する審判の声。

バットを振ることすら出来なかった。

（なんてバカなことをしたんだろう……）

俺はアホだ、何で致命的な欠陥に気付かなかったんだろう？

少し前の自分自身をぶん殴ってやりたくなった。

(もう、普通にやろう)

今度は普通に構えなおした。

『マスター！ファイトっ！えっと、たしかあと1回あるはずですよ！元氣出してくださいっ！』

必死な声が耳に入る。

(そうだな)

今持てる力の最大限を出そう。

意識を集中させ、バットを握る手に力を込めた。

三沢が足を天高く上げ、振りかぶる。

「これで終わりだ！スペシャルバージョン連立不等式！」

三沢の手から離れ、高速で迫る球。

じつくりと軌道を見定め

「うおおおー、っと」

バットを思い切り振り抜く、フリをして普通にバントした。

ドタンと地面に倒れるけたたましい音が聞こえてくる。何故かオシリスレッドの生徒全員がずっこけていた。

「あんな思いっきり振りかぶつというバントツスか!？」

「そ、それでこそヒノキだ!」

「アニキ、意味分かんないツス」

そんなやりとりは無視して1塁に向けて全力疾走。
コロコロコロと球が地面を転がる。

「くっ、これは計算外だ。だが」

バントした球は三沢の真ん前に転がっていき、あっさりアウトになった。

チーン、とトライアングルを叩くような擬音が脳内で響いている気がする。

(……終わった)

3アウト、チェンジ、攻守交代。

とぼとぼ、とグローブを取りに戻っていく。

全てが終わった、そんな気がした。

張り切ってはみたが結果は残せず、がっくりと肩を落とした。まあ仕方がない、と自分に言い聞かせてポジティブに前を向く。

ポンポンを持ったエフェクト・ヴェーラーが飛んできた。

「あゝ、その、悪い。何も出来なかった」

『そんなことはありません！とってもかっこよかったです！』

ファサファサと細い腕を縦に振りキラキラとした瞳を向けてくる。一体、どこら辺がかっこよかったのか果てしなく疑問だった。少なくとも自分ではこの上なく無様な姿だと思う。

ヒノキはぽりぽりと頬を搔いた。

グローブを持って自分の守備位置へ向かう。ちなみに守備位置はライト、個人的に一番楽な守備位置だと思っている場所。

のんびりと守備位置に立って、ボケーと十代がピッチャーをやっているのを眺める。

球が1つも飛んでこないなので良い感じに暇だった。

エフェクト・ヴェーラーが遠慮がちに声をかけてくる。

『あの、マスター？』

「ん？何？」

『その、ありがとうございます』

何故か礼を言われた。

（何だ？）

身に覚えが無い。

全く意味が分からず、思わず怪訝な表情を浮かべてしまった。エフェクト・ヴェーラーが頬を紅く染めて言葉を紡ぐ。

『わたしがマスターをいっぱい応援して、マスターがすごく頑張っ

てくれて、とっても嬉しかったです!』

ニッコリと満面の笑顔。

随分と大げさな気がする。

「そんなに嬉しいがするようなことじゃないと思うけどなあ」

『そんなことはありません! 今までどんなに応援しても言葉を返してくれなかった、何とか声を届けることが出来ても不思議そうに首を傾げるだったんです。だから、わたし今とっても嬉しいんです!』

有無を言わせない勢いで自分の気持ちを語るエフェクト・ヴェーラー。

何だかとても申し訳ない気分になった。

渴いた笑いしか出てこない。

エフェクト・ヴェーラーが見えなかった時期のことに關しては何も言うことが出来なかった。

「あゝ、何とか、本当にすまない」

『わわっ、謝らないでくださいマスター! もうマスターはわたしのことがわかるんですから』

「ああ、そうだな」

『これからはいっぱい、いっぱいお話ししよう! ずっと前から楽

しみにしてたんです!』

「ハハハ、それくらいだったら幾らでも相手になるさ」

『えへへ、やった! マスターとお話、楽しみです』

ポンポンを手を持ったまま、頬に両手をあてて顔を真っ赤にしな
がらにはかむ。

何だか物凄く嬉しそうな姿だった。

えへへ、と嬉しそうに笑いながら顔を紅潮させてどこかへ旅立っ
てしまっている。

(お話っただけでここまで喜ぶとは)

今まで一体どのような状態になっていたのだろうか?

何だか不憫に思えてきた。

望むことは自分出来る限り叶えてあげよう、と心に誓う。

エフェクト・ヴェーラーは未だに旅立ったまま帰ってきてなかつ
た。

『えへ、えへへへ、マスターとお話。何だか照れちゃいます／＼』

「いや、照れなくていいからさ」

『うーん、なんのお話をすればいいんでしょう? でも、マスター
とお話できるならどんなことでもいいです。えへへ、楽しみ』

中々、帰ってこない。

守備位置的に話し声を聞かれる心配もないので今なら存分に話が

出来るのだが、戻ってこないで野球の方を眺めることにした。

十代がフォアボールを連発している。

たまらずキャッチャーをやっていた翔がタイムをした。

「ちょっとアニキ、どうしたんスか？2アウトから3連続フォアボールなんて？」

「ハハハ、わざと歩かせたのさ。そうしねえと三沢まで回ってこないからな」

「ええ！アニキは三沢君と勝負したくてわざと3人も歩かせたんスカ！？」

驚愕の声を上げる翔。

まあ、十代の気持ちも分からなくは無い。

男同士、しっかりと白黒はつきりさせるために雌雄を決したいのだろう。

どっかの人も言っていた。

『意地があんだよ！男の子には――っ！』
って。

（でもなあ）

ちらりと塁を見渡す。

1塁、2塁、3塁、その全てに走者がいた。

オシリスレッドの得点は現在3点、対するライイエローは0点。

「これで逆転さよならホームランなんかされたら、笑い話にしかないなあ」

でも、その時はその時。盛大に笑ってやればいい。

ライトでのんびり見守ることにした。

球が飛んでこないことを祈りながら。

マウンドの方を見ると、翔がとぼとぼキャッチャーの定位置に戻っていくところだった。

十代が三沢をビシッと指差す。

「三沢！今度こそお前を打ち取ってやる！」

「それも出来ないことだな。君を打ち崩す方程式も、もう既に出来ている。俺はその数式にのっとりお前を叩くまでのこと。そして、負けたお前は俺のいいなりとなれ！」

だから、数式で編み出される打法とは何なのだろうか？

やはり謎だった。

それにしてもかなり青春してる。

（よくやるなあ、俺はあそこまで熱血出来ないな）

そんなことを思いながら、ぼんやりと見守った。

「勝負だ！」

「来い！1番」

十代が振りかぶる。

「いくぞ2番！くらえっ！俺がHEROだー！」

渾身の1球が投げられた。

三沢がバットを振るい、そこへ吸い込まれていくように球が当た
る。

カキイン、と快音を響かせて球は勢いよく飛んでいった。

（あはは、は、こりや笑うしかねえな）

速度と高さからして取ることは不可能。

順調に球は視界から消えていき、後ろの方から何かが倒れる大
きな音がした。

イエロー寮。

十代渾身の一球を打たれたことで三沢の部屋に書かれた数式を塗
りつぶす作業を手伝うことになった。

（明日が万丈目と三沢がデュエルをする日なのかあ）

頭の中で事実を再確認しながら、白ペンキを地道に塗りたくって
いく。

正直なところ授業で野球をやることは初めてではないので、右目
のあたりに野球ボールをめり込ませていたクロノスを見るまでヒノ
キは気が付かなかった。

気が付いたからといって何かをするつもりは特に無い。ヒノキは
とりあえず目の前の数式を塗りつぶすことに集中していた。

（色むらも無いし均一に塗れたな、あとは丸みを帯びている角のあ
たりを整えれば……）

完璧だな、とヒノキは完成予想図を想像して満足げに笑う。

こういった地味な作業は意外と楽しいものであった。

ペタペタと白ペンキで数式を塗りつぶしていく、部屋の隅で。

ふと思い出したように手を止めて十代達の方をちらりと一瞥する。

（いかな、先取りでホワイト寮の制服になっちまうぞ）

部屋の中央を見ると十代と三沢、翔の3人が白ペンキのつけ合いをしていた。

当初の目標はどうしたんだ、と小一時間ほど問い詰めてやりたい。

まあ、別にどうでもよいのだが。

そんな投げやりなことを思いながら、ヒノキは部屋の中央を見ていた。

空中に浮いているエフェクト・ヴェーラーが声をかけてくる。

『マスターは混ざらなくていいんですか？ 何だか楽しそうですよ？』

「いいのいいの。ペンキを服に付けたくないからな」

返答をして、白ペンキのつけ合いをしている3人を視界から外してペタペタと数式を塗りつぶす作業に戻ることにした。

そうですか、と呟きながらエフェクト・ヴェーラーは不思議そうな表情で部屋の中央を眺めている。楽しげにペンキのつけ合いをしている3人に羨ましがな視線を送っていた。

ドタバタと部屋の中央でペンキのつけ合いをしている音を意識の外にはじき出して、ペタペタと地味に数式を塗りつぶしていくヒノキ。

やがて数式が見えなくなり白の長方形がその場所に残った。

（うん、中々に美しいな）

出来栄えに満足して吐息を洩らす。

（うん、傑作だな）

十分に満足してから次の数式を視界に納め、今度はどんな形に塗りつぶそうか？と思考を凝らす。今までの作品と被らないような形に仕上げたかった。

数式を見つめながらじっと悩む。

どんな形がいいのか、中々思い浮かんでこなかった。

『はわわっ、マスター！後ろっ！危ないです！』

突如、緊迫した声が耳に入る。

危機感を覚え、壁の方を向いたまま振り返らずに反射的に身体を右にずらした。

ついさっきまで身体があった位置を白ペンキが付着した大きめのハケが通過していく。

（っ、危うく制服がホワイトサンダーにつ！？）

まだ時期が早すぎるだろう、とそんなことを思いながら後ろから奇襲を仕掛けてきた刺客の姿を確認した。

「って、翔？どうした？そんな奇抜すぎる迷彩カラーをして？」

「ペンキのせいッス！」

後ろから攻撃を繰り出してきた刺客、翔が赤と白のまだら模様になっている制服を身に纏って叫ぶ。

迷彩と言ってはみたものの色合いが明るすぎて、おそらく迷彩の役目を果たすことは無いだろうことは明白だった。

おまけに何だか攻撃的な姿勢で立っている。不穏な空気を感じ、とりあえず下手に出て様子を見るヒノキ。

「あのー、何をする気なのかな？おとなしく楽しい楽しいペンキ塗りをしようよ、な？」

「駄目ッス！ヒノキ君だけ隅っこで綺麗なままなんて許すわけにはいかないッス！ヒノキ君も真っ白に染めてやるー！」

「な、何というフライング！？」

「おとなしく白に染まるッスー！」

説得を試みてみたが一蹴されてしまった。

先取りした台詞を叫びながら白ペンキの付着したハケを繰り出してくる翔。

少しでも制服にペンキを付着させるわけにはいかない。後々、洗うのがとても面倒だから。

ヒノキは後退しながら翔が繰り出してくる攻撃を回避しながら、再び説得を試みた。

「落ち着くんた、翔！これはっ、かなりっ、不毛なっ、やりとりだっ！」

「いい加減っ、諦めるッス！嫌なのは、最初の内だけッス！」

「何というセクハラ発げ」

『マスター！右っ！』

「うりゃっ！くらえ、ヒノキ！」

「っうおおい」

右側から伸びてきた十代の攻撃を無理に身体を捻ることで回避。
(危なっ!?)

際どいところ通過していったハケを見て冷汗が流れる。エフェクト・ヴェーラーの警告が無ければ確実に制服は悲惨な末路を辿っていたことだろう。

攻撃を仕掛けてきた十代の制服はというと、その悲惨な末路を辿っていた。

楽しそうな表情で口を開く十代。かなり悪ノリしている。

「へっへ、俺も加勢するぜ翔！」

「いや、頼むからやめてくれ」

「ありがとうアニキ。アニキが加わってくれれば百人力ッス！」

「おう、いくぞ翔！」

「だから、ペンキを塗るのは壁にしてくれ」

「問答無用ッス！」

懇願も虚しく攻撃が再開された。

既に当初の目的から随分とかけ離れている。部屋のペンキ塗りはどうした、と突っ込みを入れてやりたい。

（勘弁してくれ）

心の中で嘆息した。

十代と翔が2方向から攻撃を仕掛けてくる。

「うりゃっ、とりゃっ」

「つて、あぶなっ、当たったらどうする！」

「いいじゃねえか、ちょっとくらい白くなってもよ」

「よくないっ」

「おとなしく白に染まるッスー！」

「だからその発言はNじ」

『マスター！えっと、左斜め後ろです！』

三度、エフェクト・ヴェーラーの緊迫した警告。

声を認識した瞬間、振り向きもせずに右側へと飛び退る。

白ペンキを大量に含んだ雑巾が通過、壁に激突して水気を含んだ音を響かせた。

（うわぁ……）

若干、引いてしまう。

相当な量のペンキを含んでいたらしく、壁や床に飛沫が飛び散り水玉模様が出来あがっていた。

もしも回避できなかったら、と悲惨な結末を想像して背筋が震える。

後ろから雑巾を投げつけてきた人物は必然的に1人しかいない。振り向いて確認、案の定おなじく制服が悲惨なことになっている三沢が居た。

その手には投げつけてきたのとは別に白ペンキを大量に含んだ雑巾が握られている。

「この際だ、俺も手伝おう」

「手伝うなっ、こんな不毛なことよりも作業を進めよう、な？」

「それは無理な相談だ、既にそんな段階は飛び越している」

どんな段階だ、と突っ込みを口にする前に雑巾を片手ににじり寄ってきた。

（いかん、いかんぞ）

気が付けば十代と翔もジリジリとにじり寄ってきている。

3方を囲まれてしまった。

絶体絶命。

このままでは制服が真っ白に染まった先取りバージョンになってしまう。

（まずい、な）

ヒノキはその場でよろめいた。しかし、下手に動けば誰かに近づいてしまうことになるので不用意に動くことも出来なかった。

「くっ」

「さあ、ヒノキ君。覚悟するッス、真っ白に染めてあげるッス」

「だから、その発言は」

「いくぞ、ヒノキ！お前の制服も俺たちと同じようにしてやる」

「いや、俺の話を聞いてくれ。というか、お願いだからやめてくだ」

「この際、仕方あるまい。悪いが、諦めるんだな」

「くっ、突っ込みが追いつかん！」

あまりの状況に思わず叫んでしまう。人数が多すぎて返答が追いつかない。

十代達は3方を包囲した状態から、更にジリジリと白ペンキを含んだハケや雑巾を片手ににじり寄ってきていた。

すぐさま攻撃を仕掛けてこられるような位置で停止する。

部屋の中を静かな空気が支配する、嵐の前の静けさ。一瞬たりとも気を緩めるわけにはいかなかった。

（おかしい、何故こうなった？）

内心で首を傾げる。

今までの経緯を思い浮かべても、どうしてこのような状況に至ったのか、全くと言っていいほど不明だった。

とはいえ、この切羽詰まった状況では余分なことを考えている余裕は欠片も無い。

（少しでも油断したら制服があれになってしまう）

『醬油のシミが目立つ』とそんなことをぼやいていた人が着用していた制服を身に纏っている自らの姿を想像してげんなりとした。気を緩めることの出来ない緊張感に額から汗が噴き出た、頬をつたって顎から滴り落ちていく。

空中を自由落下、地面に落ちる。その瞬間、3人が一斉に動き出した。

「くっ」

『はわわ、マスター！わたしの言う通りに動いてください！マスターはわたしが守ります！』

頼もしい声が空中から聞こえてくる。

ヒノキは藁にも縋る思いで勢いよく頷いた。

十代と翔、三沢が3方向から各々の得物で攻撃を仕掛けてくる。

「白に染まるッスー！」

『右です！』

「よし、緊急回避だ！」

エフェクト・ヴェーラーの言う通りに身体を右に逸らせて攻撃をかわす。翔が繰り出してきたハケは何もない空間を通過して、翔がたたらを踏んだ。

間髪を入れずに十代と三沢の攻撃が迫ってくる。

「おりゃ！くらえ、ヒノキ！」

『左斜め前に一步です！』

「おう」

左斜め前に一步踏み込んで回避、そして十代の横を通り抜けて後ろに回った。

『その場にしゃがみ込んで左側にジャンプです！』

「よし」

「何っ！今のをかわすのか！？」

空を切った雑巾に三沢が驚愕の声を上げた。

体勢を整えて3人を視界に納める。

（すごい。いける、これならいけるぞ！）

制服には未だ白ペンキが微塵も付着していなかった。

感謝の意を込めてエフェクト・ヴェーラーにアイコンタクトを送る。

視線に気付くとニコリと微笑みを返してきた。

「な、何なんスか？ヒノキ君のあの機敏な動きは？」

「タイミング的にかわすのは不可能なはずだが」

「すげえな、ヒノキの奴。息ぴったりだな」

『はい、わたしとマスターは仲良しさんですから！』

エフェクト・ヴェーラーが嬉しそうな表情で胸を張る。

（いや、仲良しさんって）

ヒノキは少し微妙な表情をした。

『仲良しさん』、朝に姉貴の背中をさすっていた時にも呟いていた言葉。

もしかしたらエフェクト・ヴェーラーは姉貴に對抗心を抱いているのかもしれない。ヒノキはそんなことを思った。

本当に対抗心を抱いているのならば、それは不毛なことだと言ってやりたい。個々人に向ける感情に順位などつけられようはずが無いのだから。

胸を張っているエフェクト・ヴェーラーを十代は微笑まじげな視線で見えていたが、精霊のことが見えない翔と三沢は怪訝な表情をしていた。

「時々、アニキが何を言っているのか分らなくなるッス」

「ああ、息ぴったりと言っていたがここにはヒノキ1人しか居ないはずなのだが」

訝しげな視線を十代へと向ける2人。

残念ながら疑問が解消される日はおそらく永久に來ないことだろう、とヒノキはそんなことを思った。

自らに向けられている視線など微塵も気にせず十代が声を張り上げる。

「よっしゃ、こうなったら3人連続で攻撃しようぜ！そうすりゃ一回くらい当たるはずだからな」

「え、ああ、そうッスね。それじゃ、一斉にいくッス！」

「いや、俺は何だか釈然としな」

「へっへ、それじゃあいどうぞ！ヒノキ！」

「って、俺の話を聞け〜〜！」

叫んでいる三沢を置いてけぼりにして再度にじり寄ってくる十代と翔。そして結局、三沢も一緒になって接近してくる。

（それにしても皆ノリノリだな）

そろそろペンキ塗りをしようよ、とヒノキは皆に言ってやりたかった。

これではいつまでたってもペンキの塗り替えが一向に終わらない。だが、無駄口を叩く暇もない。

（白に染まりたくは無いなあ）

ヒノキはエフェクト・ヴェーラーにアイコンタクトを送った。

エフェクト・ヴェーラーが首を縦に振って頷く。

『任せてください、マスター！わたし頑張っちゃいます！』

そう言って、ニコリと可愛らしい笑顔を返してきた。

頼もしい限りだな、と心強く思いながらしつかりと正面を見据える。

にじり寄ってきていた3人が一斉に襲い掛かってきた。

「白に染まるッス〜！」

『肩を左に逸らしてください！』

「うおりゃっ！くらえ〜！」

『右斜め後ろに一步です！』

「これでどうだ！」

『ひゃわ、えっと、左にジャンプです！』

声を聞いて的確に攻撃を回避していく。

（見える、俺にも敵が見える！）

1回言ってみたかった言葉を頭の中で叫ぶ。ヒノキはネタに走った。

実際にまだ一度も攻撃には当たっていない。

しかし、十代達の攻撃は止まなかった。

「まだまだあ！どどんいくぞ、皆！」

「おう！ヒノキ君を白に染めてやるッス〜！」

「この状態では不公平だからな、彼の制服も縞模様に変えなければ」

「おっしや、くらえヒノキ！これが俺たちのコンビネーションだ！」

3人からの攻撃が一層苛烈になる。

止まない連撃。1人1人の隙を補い欠点をカバーするように攻撃が繰り返されていた。

速度が増したことによりエフェクト・ヴェーラーが少し慌てだす。

『はわわっ、えっ、え〜と、上上下下左右左み』

「って、それ以上はNGだー！」

突っ込みを入れながらもエフェクト・ヴェーラーの言う通りに動いていく。攻撃は一度も当たらなかった。

（あゝ刻が見える）

これが人類の革新した姿なのか、とか再びネタに走りながら回避を続ける。

『あっ、マスター！足元！』

「へっ？」

瞬間、何かを踏んづけて身体がぐらりと傾いた。

どうやら床に転がっていたバケツを踏んでしまったようである。

調子に乗りすぎた、とヒノキは後悔するが時すでに遅し。

今まで遊び過ぎたせいで白ペンキが大量に溜まっている床に背中を強かに打ちつけた。

背中を抜けていく衝撃に少しばかり息を詰まらせた。頭の中が嘆きの言葉に染まる。

（ああ、ああ、背中だけホワイトサンダーに……）

制服に水分を含んだ塗料が染み込み、背中を白く染め上げていく。ヒノキは少し泣きたくなった。

全員の動きがぴたりと止まり、奇妙な沈黙が部屋の中を支配する。

『やっちゃったよ』という感じの気まずい雰囲気であった。

誰も一言も喋らない中で、部屋の扉が勢いよく開け放たれる。

「やつほー！ ヒノキ！ 面白そうだから手伝いにきたぞっ！」

大きな木が描かれている旗を担いで空気の読めない姉貴が室内に入ってきた。

誰から聞いたんだろうか？と小一時間ほど問い詰めたい。ついでに旗は野球の時間のときにグラサン先生から逃亡するために投げ捨てたはずなのだが、一体どのような手段で取り戻したのかということも気になる。

ヒノキは至極どうでもいいことを気にした。

まあ本当にどうでもいいことだけど、と投げやりに自己完結して扉の方を眺める。

姉貴の後ろから雪も中に入ってきた。

「ふむ、ペンキを塗っていると聞いてやってきたのだが」

雪がキョロキョロと辺りの惨状を見まわす。

所々に白ペンキがついたせいで奇抜な模様になっている壁、白ペンキが零れて水たまりを作っている床、そして制服が白くなっている4人の男達。

「君たちは一体何をやっているんだ？」

雪が当然といえば当然の素朴な疑問を口にする。

この質問に答えられる者はこの空間には居なかった。

(……制服を洗いたいなあ)

そんなことを考えながら、ヒノキはとりあえず立ち上がることにした。

第15話《前編》 無分別なのは良くないと嘆きたい（後書き）

長い割にはデュエルが無い、という。デュエル無しでの長い文章はあまり無かった気がします。

今回は若干ネタに走った台詞が多くなってしまいました。中には元ネタがわからないようなものもあるかもしれませんが。

これからもこんな感じでネタを使うことがあるかもしれませんが。使うとしても適量にとどめていきたいです。

第16話《中編》自分のせいなのか？と誰かに問いたい（前書き）

色々あったせいで随分と遅くなってしまいました。前回なるべく早く更新をしたいと書いたのになかなか時間がかってしまいました。

しかも、デュエル無し。文章が長いというものです。本当にすみません。

あとこの話では三沢と万丈目のデュエルまではいきません。これからはもう少し文章を短くしていきたいと思っています。それではどうぞ

第16話《中編》自分のせいなのか？と誰かに問いたい

部屋に気まずい静寂が流れている。

床に転んでしまったせいで白ペンキの水たまりにダイブしてしまった制服からはポタポタと吸収しきれなかった白ペンキが地面に滴り落ちていた。

宙に浮いているエフェクト・ヴェーラーが涙目になって慌てている。

『ごめんなさいマスター。わたしがもつとちゃんとしていればこんなことには……うう、本当にごめんなさい！』

ペコペコと申し訳なさそうに頭を下げて、姿を消した。

ヒノキは何だかいたたまれない気分になる。

（悪いのは俺の方なんだけどなあ）

調子に乗って足下を疎かにした自分が悪いと自覚してはいるのだが、現在の部屋の状況では喋るわけにはいかずヒノキはエフェクト・ヴェーラーが姿を消すのを黙って見送った。

「ふうん、随分と楽しいことやってたみたいじゃないの」

姉貴がキョロキョロと部屋の惨状を見渡しながら愉快げに笑う。

白ペンキが零れて水たまりが出来ている床、作業の半ばで投げ出されて中途半端に白く染まっている天井、飛沫が飛び散ったせいで荒い水玉模様になっている壁、そして部屋の中央には奇抜すぎる色

合いの制服を着た4人の男達。

確かにペンキで遊んでいると勘違いされても仕方がない光景であった。

姉貴の隣で訝しげに部屋を眺めていた雪がポツリと呟く。

「ふむ、理解に苦しむ光景だな」

まるでお手上げだと言わんばかりの呆れたような声音だった。

雪の発言に対して何かを言う者はこの部屋には居ない。

（本当に何をしていたんだろうな？）

ヒノキは心の中で首を傾げた。

当初の目的は『部屋を埋め尽くしている大量の数式を塗りつぶして綺麗にする』という至って普通のものだったはずである。それが、どうして白ペンキのつけ合いなんかをしていたのか？

発端は分かっている、十代が白ペンキの付着したハケを落としてしまい翔の顔面に直撃したから。それが原因。だが、原因がわかっているからと言ってバカ正直に『何故、白ペンキのつけ合いをしていたのか？』などということの説明できるものでもなかった。

必然的に黙るしかない。何を言えいいのか何1つわからない。（どうすればいいんだろう？）

何だろうか？この膠着状態は、とヒノキはそんなことを思いながら呆然と立ち尽くした。

三沢が少し居心地が悪そうにしながらも前に出る。

「えーと、俺の名前は三沢大地。確か美上雪だったかな。後もう一人は知らない顔なんだが、とりあえず名前を教えてくれないか？」

ナイスだ三沢、とヒノキは心の中で賛辞を送った。

（この膠着状態を打ち破るとは、今度から大統領と呼んで敬うことにしよう）

思わず下らないことを考えてしまった。無論、大統領などと呼ぶ気は欠片も無い。

何にせよ、これで何とか部屋を包み込んでいる気まずい空気を振り払うことが出来る。そう思ってヒノキは少しホッとした。

「あたしの名前？あたしは裁判司、オベリスクブルーの2年でヒノキの幼馴染にして許婚。まあ、ほどほどによろしく」

「なっ、いいなづけだって!？」

三沢が驚愕の声を上げる。

無理もない反応だが、誤解は解いておきたかった。

（まったく、母さんがいい加減なことをしたせいで）
思わず溜息を吐きたくなる。

ヒノキはうんざりとしながらも弁明をするために口を開いた。

「あゝ、あんな三沢。姉貴が言っている許婚っていうのは」

「いや、みなまで言わなくていい。俺にはしっかり理解出来ている、大丈夫だ。広い世の中だからこういうことだってあるんだろう」

「いや、勝手に自己完結して納得するな!」

突っ込みなど聞く耳持たず、三沢は生暖かい目でウンウンと頷いて姉貴の方に向き直る。

何やら勘違いをされてしまった。

(……へっ、いいさ別に。説明する手間が省けたじゃないか)

こういう時こそポジティブシンキングだ、とそんなことを考えて心の平穏を保つ。もっともポジティブかどうかは甚だ疑問であったが。

今まで黙って成り行きを見守っていた翔が声をかけてくる。

「何をそんなに必死になってるんスカ？別にいいじゃないツスカ、司さん美人だし。ヒノキ君が羨ましいツス」

「うぷっ、それ以上は言うな。吐き気が……」

「いや、どんだけ嫌なんスカ!？」

果てしなく嫌だ、とヒノキは言い返してやりたかった。

自分と兄貴がハネムーンに出かけている姿が脳裏に浮かぶ。

この世界での裁 司は兄貴ではなく姉貴だということをデュエルを通して認識してはいたのだが、それでも簡単に割り切れるものはなかった。

「なあ、ヒノキ」

「うええ、って何だ？十代」

「前々から思ってたんだけどよ、いいなづけて何だ？何かの食いもんか？」

「あゝ、その、細かいことは気にするな。あと間違っても漬け物とかじゃないからな」

「えっ、そうなのか？うゝん、漬け物じゃなかったら一体なんなんだろう？」

十代が頭を捻って考え込む。

やはり、十代はこういう方面の話には随分と疎いようであった。

（こういうのを朴念仁っていうのかな？いや、ただ鈍感なだけか？）

ヒノキはそんなことを思いながら、十代から視線を外した。姉貴と三沢が会話をしているのを眺める。

「2年ということは先輩ですか、無礼な喋り方をしてしまってますみません」

「あゝ、気にしないでいいよ。敬語とか面倒くさいし、あんまり好きじゃないんだよねゝ」

「はあ、では普通に喋ることにします」

「あゝ、別にそれで問題ないぞっ、と」

面倒くさそうに対応する姉貴。

随分と失礼な態度である。とはいえ確かに姉貴に対して敬語を使

うというのも何だか違和感を感じてしまう。

記憶を掘り起こしてみても兄貴が誰かに敬語を使われている場面なんて……

（あれ？）

そういえば、と思い出す。

（むしろ俺以外に誰かと話をしてたっけ？）

青春の思い出、それは全て兄貴によって埋め尽くされている。気が付けば隣に兄貴が居た。

本当に毎日毎日一緒に居て、その日々の中で兄貴が別の人と一緒に遊んでいた記憶は1つも無い。

（変態としか言い表わすことの出来ない人が近寄ってきた時はあったけど）

あれは違うよな、そう思ってヒノキは思いなおした。

名前は聞いた覚えが無いので知らないが、やたらと芝居がかった口調で喋る金髪の男。

『やあ、マイステディ司くん。奇遇だね、僕と一緒にアバンチュールを楽しまないかい？』

と芝居がかった仕草でどこからともなく現れて自分の方に怨嗟のこもった恨みがましい目を向けてくる。非常に不本意なことだが兄貴をめぐる三角関係の一角に加えられていたらしい。

それに対して兄貴は当然のごとく露骨に嫌そうな表情を浮かべて叫んだ。

『げっ、寄るな！このゲイが！』

『違うなあ、僕はゲイなどではない。ホモだ！僕はホモであることに誇りを持っている、ゲイと呼ぶのはやめてもらおうか』

誇らしげな表情で違いがよくわからないことを言い返していたのを覚えている。

『どっちでもいいから近寄るな、気持ち悪いんだよ！』

『ふう、冷たいねえ……なんて冷たいんだ。でもそんな言葉は僕にとってには甘美な褒美にすぎない、むしろゾクゾクしてきたよ。さあ、この昂ぶりが収まらないうちに僕と一緒に崇高なる愛の高みへと昇りつめようではないか！フハハハハ！』

『ちょ、やめ、ジリジリ近寄ってくるな！腕を掴むんじゃない！ひ、ヒノキ！助けてくれ！』

ちなみにその時は兄貴から少し離れた場所で苦笑いを浮かべながら『類は友を呼ぶ』ってこういうことかな？とそんなことを思っただけ傍観者に徹していた。

（あれはあれでむしろ清々しい人だったけど……）

いや、と首を振る。

出来ることならあまり思い出したくは無い、ヒノキは頭の中に浮かび上がってきたシルエットを打ち壊し記憶に封をした。

変態を頭の中から消し去り、逸れていた思考の軌道を修正する。

（うゝむ、考えすぎかな。きっと俺の知らない時間に誰かと仲良くしてたんだろうな）

ウンウンと頷いて無理やり納得しようとする。きっとそうだが、そうに違いないとヒノキは自分に言い聞かせる努力をした。しかし（……俺の知らない時間？）

兄貴が居なかった時間を思い出してみる。それは朝に目が覚めるまでのわずかな間、授業が始まってから終わるまでの別々の教室に居る時間、そして夜になって兄貴が家に帰っていき自分が就寝するまでのわずかな時間。あと何だか変なことを考えて兄貴が家にこも

っている時間くらい。

これで果して別の誰かと仲良くすることが出来るのだろうか？

(いや、これ以上は考えないでおう)

兄貴の交友関係は兄貴の問題、第3者があれこれと考えるのは間違っている。それに姉貴と兄貴は同じ存在だけど確かに違う、ということはデュエルのときに確認したはずだ。だから、いいじゃないか。

ヒノキは自分を無理やり納得させた。

「というか君たちはペンキ塗りをしていたのではないのか？そろそろ作業を再開させるべきだと思うが」

冷静な雪の突っ込みが入る。

確かに最もな言い分だった。

「うっ、確かにその通りだ。このままでいても仕方がないな」

「うむ、では皆。ペンキ塗りを再開しよう」

皆の方を向いて雪が宣言する。

こうして作業が中断していたペンキ塗りが再開されることになった。

「あれ？何で雪さんが仕切ってるんスか？」

訝しげな表情で素朴な疑問を口にする翔。

確かに三沢の部屋のペンキ塗りを部屋の主である三沢以外が仕切るというのは奇妙な話ではあったが。

「堂々とペンキのつけ合いをしていた人間が仕切るっていうのは流石に無理があるってことだろ」

「うっ、確かに説得力が無いッスね」

「まあ、そんなところだろうさ。というわけだから、今からは真面目にやろうな？ 楽しい楽しいペンキ塗りを、さ」

「うっ、それもそうッスね」

「よっしゃ、それじゃビッグバンを再開するか！」

「って、元はといえばアニキが僕にハケを落としたのが原因じゃないッスカ！」

「いや、ありゃ手が滑ったんだよ。悪かったって」

「何でもいいから早くペンキ塗りを再開しようよ、2人とも」

「おう！ それじゃビッグバンを再開しようぜ、翔」

「うゝん、何か釈然としないッス」

納得いかないとでも言いたげな表情で翔がポツリと呟いた。

（いや、君も同罪だから）

翔も結構ノリノリでペンキのつけ合いをしていたのだから、十代に文句を言える立場ではない。

そんなことを思いながらヒノキはペンキ塗りを再開する十代と翔の背中を呆然と眺めた。

少し前までペンキのつけ合いをしていた者たちが黙々とペンキ塗りをしている。

未だに扉の近くで旗を担ぎながら立っている姉貴は訝しげな瞳で部屋を眺めていた。

「ふうん、この状況でペンキ塗りねえ」

何か含みのある物言い。

（まあ、仕方ないよなあ）

部屋の中は随分と散らかった。

「ペンキ塗り、普通に塗るだけじゃつままないよね……どうしようかな？」

ブツブツと呟きながら思案する姉貴。

何をする気なのか気になる。

ヒノキにとっては随分と不吉に感じられる発言だった。

（まあ、考えても仕方がない）

部屋のペンキ塗りは作業を進めなければ終わらないのだ。

自分も楽しいペンキ塗りを再開しよう、とヒノキは姉貴を放置す

ることにした。

とりあえず先ほど踏みつけてしまった床に転がっているバケツを立てておく。

「ふむ、この凄まじい状況はそれが原因だったのか？」

「うーん、原因の1つでもある、というのが正しいかな？」

「むう、成る程。随分と厄介なものだな、どこから手をつけるべきか」

真新しいハケを片手に雪が近くまで寄ってきていた。

ちらりと白ペンキがポタポタと滴っている背中を一瞥する。

「む、それにしても君の背中はずいことになっているな」

「いや、まあ自業自得というか、注意力散漫だったというか……まあ、そんな感じだ」

「ふむ、とりあえず脱いだ方が良いのではないか？」

「あゝ、それもそうだな」

雪に言われるがままに白ペンキが滴っている上着を脱ぐことにした。

上着がいつもよりも若干重たい。

（どうしようか、これ？）

手に持ったまま呆然としてしまう。脱いだのはいいがどうするか考えていなかった。

未だにペンキがポタポタと地面に向かって落ちている。

ペンキが染み込み過ぎだった。

（……あつ、そういえば）

ハツとする。

デッキケースは腰のベルトに着いており、いつも背中側に回していた。

慌ててデッキケースを確認する。

（ぬう、何か奇抜な柄になっちまったなあ）

そんなことを思いながらも少しホツとするヒノキ。

ケースの前面は真っ白に染まっているが中に入っているカード達に被害は無かった。

確認も終わったのでとりあえずデッキケースを元の位置に戻して雪の方に向き直すことにした。ペンキが滴っている制服を所在なさに手で掴んだまま。

「それにしても何か悪いな、別にペンキ塗りなんか手伝わなくてもいいのに」

「むっ？何を言っているんだ君は。私たちは友だろう？友というのはいろんなことを一緒にやるものだ、のけ者にされた方が私はつらい」

さも当たり前のように雪は言っただけ。

何やら友達というものに対する認識が随分と美化されているものな気がする。

（まあ、いいか。友達って実際そんなもんだしな、多分）

ヒノキはそんなことを思って、とりあえず気にしないことにした。

「まあ、何にせよ助かったよ色々な意味でさ。ありがとう」

「ふむ、気にするな。私と君の仲じゃないか」

何だか少し誤解されそうな台詞。

雪はにこやかな表情（無表情でわかりにくい）で綺麗な瞳を向けてきた。

「はい、ストープ」

「むっ」

視界が急に大きな樹木が描かれた旗で遮られる。

「あたしとヒノキの絆が女によって揺らぐことなんて認めません。女と2人っきりで会話なんてさせないから」

「むっ？ 奇妙な話だな、この部屋には私以外にも人が居るのだが」

「女と話しているっていうのが問題なの。固く結ばれた絆を脅かすものは何か？ 答えはズバリ女である！ って何かの本に書いてあったの」

「成る程、私も出来る限り気を付けなければならぬな」

「いや、そこ納得するところじゃないだろ」

「むっ？しかし、私自身の性別は女だ。そうなると結ばれた絆は最初から脅かされているということになるのか？……むう、随分と哲学的な命題だな」

よくわからないことをブツブツと呟いて悩みだす雪。

小難しく考え過ぎである。推測の域をでないが、姉貴の言っていた言葉はおそらく男同士の友情を想定しているはず。

ヒノキは成る程と納得して溜息を吐いた。この際、突っ込みをスルーされてしまったとかそんなことは割とどうでもいい。

1つの謎が解けた。

（昔から女子と話していると、どこからともなく兄貴が湧いて出てきたのはこれが理由だったのか）

バカ正直に本の話信じているのか、本当にバカだな。そんなことを考えて、思わず苦笑してしまう。

姉貴は旗を肩に担ぎなおして、今まで旗があった位置に身体を割り込ませてきた。

雪は未だにブツブツと思案している。

「さっ、ヒノキ。一緒にペンキ塗りやろっか」

ブツブツと悩んでいる雪を放置して言い放つ姉貴。

「いや、一緒について……どう考えても1人1人で別々に塗った方が早いだろ」

「あっはっは、何言ってるんのヒノキ？ そんな効率ばかり考えて生きてちゃ人生つまらないぞ、どんなことでも楽しむ努力をしなくっちゃ」

「ふう、何を言ってるんだか全く」

「むっ、私には少しわかる気がするが」

「いやいやいや」

思わぬところに姉貴の言葉に同意する人間が居た。
前に雪が言っていた台詞を思い出す。

『余裕がなくても余裕を忘れない主義なんだ』
と少し誇らしげに言っていた。

案外、姉貴と雪は気が合うのかもしれない。
はぁ、と1つ息を吐いてからヒノキは最初から気になっていたことを聞くことにした。

「ところで姉貴、その肩に担いでいる旗は何なんだ？」

「ん、これ？」

「そう、その旗」

「ふっふん、かっこいいでしょ？アカデミアに転校してきてから授業が出る間も惜しんで1日で作り上げたの」

何故か誇らしげに胸を張る姉貴。

むしろ、そんな物を作る暇があるのなら授業に出た方がよっぽど建設的である。

（とりあえず教室に居るだけ居とけば出席にはなるのになあ）

ヒノキは呆れて何も言えなかった。

とりあえず深くは詮索しないでおく。姉貴はどうせ何も考えていない、衝動的にやっただけだ。

今までの経験から姉貴が急に旗を作りだした動機を推測した。

「まあ、いいや。割とどうでもいいし」

「んん？何その薄い反応？そんなんだと愛想つかされる、ぞっ！まあ、あたしとヒノキに限ってそんなことは有り得ないけど」

不満げに唇を尖らせる姉貴。

後半の言葉で、前半部分が何の意味も持たなくなっていた。

ヒノキは再び溜息を吐く。

「はあ、何でもいいから部屋のペンキ塗りをしようか」

視界の端で十代達が黙々と作業を進めているのが確認出来る。自分だけペンキ塗りをしないで立っているのは悪い気がした。

「ん、まあそれもそうなんだけどねえ。普通にペンキを塗るだけじゃつまらないと思わない？」

「いや、俺は十分楽しい」

素直に本音を言う。

姉貴が信じられないものでも見ているような顔をした。

「え？あんた頭おかしいんじゃないの？」

「……ふう、さて雪。ペンキ塗りを始めようか！」

「むっ、そうだな。私たちだけ楽をするわけにはいかないな」

「って、ちよっ、無視するなつてのヒノキ！あたしの心はひどく傷ついたぞっ！」

「それを言うなら俺の心もひどく傷ついた」

具体的に言うといラツとした。おかしいことを言っている人間に頭がおかしいと言われるのは随分と理不尽な気がする。

とはいえ意図的に姉貴を無視したのは少しばかり意識を逸れさせるのが目的、一種の逃避に近かった。

単純に姉貴の言葉に対して真剣に応対するのが面倒なだけだったとも言える。

「まあ、地味な単純作業ってのはやってみれば意外と楽しいものなのさ」

「ふうん、そういうえばツチノコ探しのときもヒノキは穴掘りを楽しそうにやってたっけ。何でこんな風に育っちゃったんだか……」

どこかつまらなそうにしながらも納得をする姉貴。後半は消え入りそうなほどの小声だった。

（何でって言われてもなあ）

ヒノキは思わず慥然とした表情をしてしまう。

思い出。兄貴が自分を巻き込んで始める突拍子もないことは、それ自体が普段は考えつかないようなバカらしいことだが内容は地味な単純作業が伴う物ばかりだった。

ツチノコを見つけるための穴掘りなんかはその最たる例。

兄貴と一緒にバカらしいことをやっていく内に、気が付いたらそういう地味な単純作業をそれなりに楽しんでやっていた気がする。（しかし、それが何故かと言われると……）

ヒノキ自身にもよくわからなかった。

（つて、今はそんなことどうでもいいじゃないか）

頭を軽く振る。

考えても答えが出てこない不毛な考え事をするよりも、今はペンキ塗りを再開するべきであった。

未だにブツブツと言っている姉貴にペンキ塗りを促す。

「ほら、姉貴。ペンキ塗りをやるぞ」

「ん？まあ、そっか。でもなく、やっぱりただペタペタとハケで塗っていくのはつまらない？」

「って、まだそんなことを」

ヒノキは思わず呆れて溜息を吐きたくなった。

ペタペタと地道に塗っていく以外の方法などあるのだろうか？

そんなものなど無い。むしろ、他に何か方法があるのなら聞きたいくらいであった。

「姉上にヒノキ。時間は待ってくれない、とりあえずペンキを塗るべきだ。それに塗りながらも方法は考えられる」

「んむっ、まあそれもそうか。いいこと言うじゃないの雪ちゃん」

近くでペンキを塗っていた雪の至極最もな言葉に姉貴が一応の納得をする。

ヒノキは少しホッとした。

これでようやくペンキ塗りをする事が出来る。随分と何もしないで話をしていた気がする。早くペンキ塗りをしなければ、そういう作業を再開しようとする。

そこでヒノキは片手に持っている制服の存在を思いだした。

（そういえば、これどうしようか？）

未だにポタポタと白ペンキが滴っている。

持っていても仕方が無いのだが、どこかに置いたとしても未だ多量に含んでいるペンキが染み出して更に制服の赤い部分が無くなっ
ていってしまうのは明白だった。

（本当にどうしようか？）

少し呆然としてしまう。

この際だからずっと手に持ったままでもいいかな、とそんな風に思えてきた。

良い案が思い浮かばず妥協をしようとしている矢先に姉貴が自分に視線を向けていることに気が付く。

「って、何だその不吉な笑顔は？嫌な予感しかしてこないんだけど」

「ふっふっふん、いいこと思いついたっ！ヒノキ、ちょっとその制服貸しなさい」

手に持っていた上着を姉貴にひったくられた。

そして、上着を肩に担いでいる旗の先端にくくりつけていく。

「ここをこうして……よしっ、完成っ！」

何やらモップのような物が出来あがった。

壁に押し付けるとビチャツと水を多量に含んだ重い音がした。そして、それを壁に押し付けたままスーと動かしていく。

その部分が色むらのない綺麗な純白に染まった。

「んっふっふっふっ、どう？」

自慢げな顔で聞いてくる姉貴。

「いや、どうって言われても」

「ふむ、手が届かないところを広範囲に塗ることが出来て中々に効率が良いと私は思うな」

再び思わぬところに姉貴の行動に肯定的な意見を言う者が居た。確かにハケでちまちまと塗っていくより効率はいいかもしれない。あくまで犠牲となるものを考慮しなければ。

(……俺の制服が、蹂躪されていく)

雪の言葉に気を良くした姉貴はスイスイと壁を塗っていた。

自らの制服がモップの先端部分みたいな扱いをされている。が、白ペンキの水溜まりに背中から転んだ時から既に色々と手遅れな気もしていたので別に問題が無いような気もする。だが、しかし……そんな感じでヒノキが少し逡巡していたら段々と壁を染めていく白ペンキの軌跡がかすれてきた。

「んっ、染み込んでいるペンキが無くなってきたみたい。補充をしないといけないかな、と」

制服が壁から離れて、そのまま地面に溜まっている白ペンキにダイブする。

「……まあ、手遅れ、だな」

「あっはっは、大丈夫だってヒノキ。心配しなくてもちゃんと洗濯して返すから」

制服の赤い部分は白ペンキの水たまりに浸されても健気に自己主張をしていた。

効率だけはいいらしく、それなりのスピードで壁が純白に染まっていく。

（制服はあれ一着しかないんだけどなあ）

本当に洗濯してしっかりと白ペンキが落ちるのか、とヒノキは心配になった。

制服が犠牲になる塗り方が功を奏し、ペンキ塗りは意外と早く終わった。

「うし、ようやくビッグバンが終わったな！くあゝ、腹減った」

「そうだな、もう随分といい時間だな。皆！食堂へ行こう。手伝ってもらったからな、昼飯くらい俺が奢ろう」

「おっ、マジか！三沢、お前っていい奴だな」

「僕たち罰ゲームで手伝ってたのに、何か悪い気がするッスね」

「何、気にしなくてもいい。せめてもの礼だからな。それに罰ゲームで手伝ってくれた人だけでもないからな」

三沢が姉貴と雪の方をちらつと一瞥した。

「何でもいいから、早く飯食いに行こうぜ!」

「それもそうッスね! ヒノキ君、三沢君が食事を奢ってくれるみたいッスよ?」

「へ、へへ、へ、相棒、お前はこんなになっちまってもまだ何とか生き残ってくれているんだな」

「ヒノキ君、大丈夫ッスか?」

「は、ははは、は」

「ヒノキくゝん、大丈夫ッスか?」

「あゝ、仕方ねえなゝ。先に食堂へ行くか」

「……そうッスね」

「じゃあ、ヒノキに雪と司さん、俺たちは先に食堂へ行ってるから早く来てくれよなゝ!」

十代達が扉から出ていく。

ヒノキは変わり果てた姿になった制服を握りしめながら、その様子を見送った。

渴いた笑いが止まらない。

当初、転んだ時点では背中だけが真っ白に染まっっていて他の部分に被害は無かったが、モップの一部分として使われたせいでオシリスレッドの赤い制服は時期を先取りした白の制服に変化してしまっていた。

しかし、ほぼ白一色になってしまってもそれでもオシリスレッドの赤はまだギリギリ生き残っている。

そのことが何だか無性に嬉しい。と同時に制服の無残な有様が物悲しくもあった。

「もう、そんなに気を落とすなってヒノキ。ほら、あたしがしっかり洗濯してあげるから」

姉貴の能天気な声が響く。

ヒノキは溜息を吐いた。

「ん？何、その溜息は？大丈夫だって！あたしに任せておけばシミ一つない綺麗な純白になって戻ってくるから！」

「いやいやいや、純白になっちゃ駄目だろうが」

げんなりとしながら姉貴に突っ込みを入れる。

最初から手遅れだった気はしていたので別に何とも思わないのだが、制服は一着しかないので本当に元通りになるのか？それだけが

心配だった。

ポンと肩を叩かれる。

「大丈夫だヒノキ、幸い私はこの手の洗濯には心得がある。君の制服はしっかりと元の形で返してみせる」

「おお、何か頼もしいな。ありがとう雪」

「うむ、君の為だからな」

淡々とした口調で頷く雪。

姉貴の台詞よりも十倍ほど信じるに足る台詞であった。

姉貴が少しばかり無然とした表情をする。

「んむ、この反応に対する落差……何か納得いかない。というか何か甘い雰囲気漂っている気がする」

意味のわからないことをブツクサと口にしていた。

納得いかないとか言っているが、仕方がない。日ごろの行いの差である。

姉貴はもう少し考えて行動をするべきだ、とヒノキは思った。

「んう、まあいいや。とにかく洗濯するから任せておきなさい」

「むっ？何故、私の手も握るんだ？」

ほぼ真っ白に近い制服をひったくられる。
ついでに姉貴は雪の手を握っていた。
そのまま手を引っ張って扉まで向かっていく。

「それじゃヒノキ！えーと何て名前だっけ？まあいっか。あの黄色い子が奢ってくれるみたいだから早く食堂に来るのよ！」

「ふむ？釈然としないが、食堂で君を待っているぞ」

「ああ、わかった」

旗を担いだ姉貴とひたすら怪訝そうにしていた雪が扉の外へと消えていった。

とりあえずその場で見送っておく。

（黄色い子って……）

名前もまともに覚えてもらえてない三沢のことが少し不憫に思えた。

ちなみにエフェクト・ヴェーラーは姿を消してからまだ一度も出てきていない。

未だに落ち込んでいるのかもしれない。

「まあ、俺もさっさと行くかな」

呟いてからヒノキも扉の外へと向かう。

食堂では十代達が待っている。加えてそれなりに腹も減っている
ので早く食事でありつきたかった。
開きっぱなしのドアから外に出る。

（ん？これは）

扉の外に出て、あるものが視界に入った。

それは部屋にあった机。

そういえば、と思います。

（この机の引き出しに万丈目が海に投げ捨ててしまうデッキが入っ
ているんだっけ？）

ヒノキは原作を思いだしていた。

（どうしようか？）

デッキを回収しておくか、そのままにしておくか、少し悩む。

別に万丈目がカードを捨てるのを止めたいとか、そんな高尚なこ
とではない。カードが海に捨てられてしまうのは単純にもったいな
い気がした。

（なんかカードが可哀そうだよなあ）

若干、考え込んでしまう。

今ならカードが駄目になってしまふのを防ぐことが出来る。カー
ドに罪は無い、カードの存在自体が許されることのない絶対悪のも
のは無いのだ。

幻魔の事件にしたって、究極のDと呼ばれるカードが引き起こし
た事件にしたってカード自体が悪いわけではない。悪いのはそれを
悪用した人、そこに宿ってしまった歪んだ力。

（絶対悪、か）

あるとしたらどんなものだろうか？と、少し考え込んでしまう。

例えば所有者にカード自体を使うことを促し、心を浸食していき、
闇へと染める。

そんなカードが絶対悪なのかもしれない。

（まあ、考えても仕方がないな）

ヒノキは頭を軽く振った。

よくよく考えてみれば思い当たるカードが無いわけでもなかったが、深く掘り下げても仕方がない。この世界には正しく存在しないカードなのだから。

机を視界から外す。

（まあ、まだ時間はあるよな。もう少し考えておこう）

自分が何か行動を起こした場合、予測のつかない問題が後々になって発生してしまう気もしたのでヒノキは問題を後回しにして食堂へと向かうことにした。

イエロー寮の食堂で既に集まっていたメンバーと合流して、三沢の奢りでご相伴にあずかる。

イエロー寮の食事はレッド寮の質素な食事に比べると随分と豪華なものであった。

「うっひゃー、うめえー！ やっぱ体を動かした後の飯は格別だな」

「そうッスね、アニキ！ レッド寮の食事とは比べ物にならないッス！」

飯をがつつきながら感想を口々に漏らす。

空腹は最高の調味料ということも相まって箸の進みはかなりの早さだった。

テーブルに乗っている料理はステーキにオムライス、コロッケ、伊勢エビなど。

「うーん、レッド寮のも質素で素朴な感じがして味わいがあるけど、こういうのも中々に素晴らしいな」

「そうッスか？ 僕だったら断然こっちの方がいいと思うッス」

「いや、あの素朴な感じがいいのさ。質素な見ためとは裏腹に味はしっかりしてるしさ」

「ふーん、そんなもんスカねえ」

「おっ！ そんなこと言うんだったら今度のエビフライは俺にくれよ、翔」

「って、それは駄目ッス！ 月に一回しかないんスよ！」

十代の言葉に過剰に反応する翔。

（まあ、気持ちは分からなくないかなあ）

確かに、月に一回しか出ない食べ物を譲ることなんて出来ない。何だかもったいない気がする。

横目で見て苦笑しながらヒノキはハイペースで食事続けた。

「ふむ、成る程」

何に納得しているのか果てしなく疑問な呟き。

雪は黙々とラーメンを音も無く食していた。

(ところで……)

食事をしながらも姉貴をちらりと一瞥する。

(あれは何がしたいんだろうか?)

姉貴は両手に箸を一膳ずつ持っていた。

「んっふっふっふ、これ一回やってみたかったんだよね」

上機嫌な表情で姉貴は右手の箸で蕎麦を、左手の箸でうどんを掴み同時に食べ始める。

その箸の動きに不自然さは微塵も見とれなかった。

(……無駄に器用だな)

率直な感想が頭に浮かぶ。

姉貴の姿は文字通り『無駄に』器用だった。

(まあ姉貴だしなあ)

姉貴の行動をいちいち気にしては身がもたない。それこそ無駄、細かいことは気にするべきではない。

ヒノキは姉貴を完全に放置して食事を進めることにした。

「って、あれ？肉が半分ほど無くなっている」

「んあっ？悪い悪い、よそ見してたから食わねえのかと思ってよ」

「うーん、まあ仕方ない。細かいことは気にしないさ」

「おっ、話がわかるなヒノキは」

「って、ちょっと待ってくださいッス！それで何で僕のコロッケをもってくんスカ！？」

「え？いやゝ、人に食われたからって仕返しにその人のを奪い取るのはワンパターンでつまらない気がしてさ」

「ワンパターンでいいじゃないッスカ！？関係無い僕から取っていくの意味分かんないッスよ！？それに細かいことは気にしないんじやなかったんスカ！？って、何かもう突っ込みどころが多すぎッス！」

「ハハハハ、はっちゃけてんなあゝ」

「って、誰のせいッスカ！？」

翔が叫ぶ。

コロッケを奪ったのは割かしノリでやったことなので深くは考えていなかった。

「まあ、アニキ分の尻拭いは舎弟がやらなければならんってことさ」

「いや、これ以上ないくらい理不尽な仕打ちなんスけど」

「んゝ？ふあんふあふあひ、ふおうふえふあふおふお」

「姉貴、とりあえず啜えている蕎麦とうどんを飲み込んでから喋ろ

うな？」

んぐつ、と口からはみ出している蕎麦とうどんを若干苦しそうに飲み込んでから姉貴が再び口を開く。

「あんたたち、どうせあの子の奢りなんだからまた頼めばいいじゃないの」

「成る程、流石は姉貴だな」

「……わからないでもないけど、それはそれで何か厚かましい気がするッス」

「あっはっはっは、奢りなんだからそんなこと気にしなくていいのに」

「うん、少なくともそれは奢られてる側の台詞じゃないからさ」

「何か、ヒノキ君と司さんは似たものどうしな気がしてきたッス」

翔が小声でポツリと呟く。

（失礼な）

心外だ、とヒノキは心の底から思った。

バカだろうが何だろうと別に構わないが『裁判司』に似ているなんてことは絶対に無い。いつも隣に居たからこそ、より顕著に違いがわかる。

（俺は至って普通の人間だ）

あの今は遠い夏の日にも感じた素直な想いだった。

「そういえばヒノキ」

「ん？何だ姉貴？」

唐突に姉貴に声をかけられる。

「部屋の荷物がちよつと片付かないから、ご飯を食べ終わったら手伝うんだぞ」

言うだけ言って姉貴は再び蕎麦とうどんを両手で食べ始めた。

「って、いやいやいやあたかも確定事項のように言うなっての」

「んえ？ふふあんふあの？」

「いや、それ以前に女子寮は男子禁制だって」

生徒手帳をよく読んでいないのだろうか？と言いたくなる。

（まあ、俺は読んでないけど）

自分のことを棚に上げている気がしないでもなかったが、ヒノキにとっては別にどうでもいいことであった。

雪が怪訝そうな声を上げる。

「むっ、ヒノキは姉上が何と言っているのか理解出来たのか？」

「ああ、『え？不満なの？』だそうだ」

「ふむ、これが絆というものか羨ましいな」

ポツリと呟く雪。

（羨む要素など1つも無い気がするんだけどなあ）

ちなみに1回目のように飲み込んでから話せ、と言わなかったのは単なる余裕の問題だった。

姉貴が蕎麦とうどんを飲み込む。

「んぐっ、ふう。えーと、男子禁制とか言ってたっけ？別に事情をあらかじめ話しておけば許してくれるんじゃないの？」

「うーん、そりゃそこまで頑固頭じゃないと思うけどさあ」

「じゃあ決まりっ！ご飯を食べ終わったら手伝うんだぞっ」

言い切ってから姉貴は再び蕎麦とうどんを啜り始めた。

（まあいっか）

そこまで理不尽な話でもない。

まがりなりにもペンキ塗りの手伝いに駆けつけてくれたのだから礼をするのもやぶさかではない。そんなことを思っただけでヒノキは姉貴の部屋の荷物整理を手伝うことに決めた。

三沢が料理をもってくる。

「さあ皆、ジャンジャン食ってくれ」

「あゝ、居たのか三沢」

「なっ、奢ってくれる人間を居なかったことにするなっ！」

「ああ、悪い悪い」

ヒノキは中身のこもっていない謝罪をした。

（懐の状況は大丈夫なんだろうか？）

そんなことを心配しながら。

女子寮までの道のりを3人で連れだって歩く。

食事が終了したので十代達と別れて姉貴の手伝いに向かうことにした。ちなみに別れ際に見た三沢の表情は少し青ざめていた。

奢る人数が増えたせいで懐が寂しくなってしまったのではないかとヒノキはあたりをつける。

（吐いた唾は飲み込めない、と言うしなあ）

仕方がない、とそんな感想を抱くことしか出来なかった。

姉貴を真ん中に挟んで女子寮へと歩いていく。

最初はヒノキが真ん中で右隣りには雪が居たのだが、姉貴がその間に割り込んできてこの形になった。

別に割とどうでもいいので何とも思わない。

(でも、姉貴は何でもかんでも鵜呑みにしすぎだなあ)

一体どんな本を読んだんだ、とそう思ってヒノキは溜息を吐いた。
隣でウーンと唸っていた姉貴が唐突に口を開く。

「ところでその胸に付いてるやつ重たくないの？」

「むっ？」

脈絡の無い一言だった。

姉貴の視線は雪の扇情的に盛り上がった胸部に向けられている。
雪は自らの胸を両手で下から掬いあげて怪訝そうな声を上げた。

「ふむ、このことか？動くには多少邪魔くさいがもう慣れたな。

姉上の方こそどうなのだ？」

「ん？あたしはこんなもん気にしないで生きてるから」

「ふむ」

何の話をしてるんだか、と会話を聞きながらもヒノキは少し呆れる。

(……やはり大胸筋なのか？)

頭の中にはそんな感想しか浮かんでこなかった。

そんな感じでしたらく道を歩いていると女子寮へと辿り着く。

女子寮の外観はあらかじめ知っていたが、レッド寮とは大違いだ

な。という率直な感想が頭の中に浮かんだ。

まるで中世の貴族が住んでいる屋敷にしか見えない。

（そういえば内装ってどうなってるんだろう？）

ヒノキは首を傾げた。外観は知っていたが、当然のごとく女子寮の中になど入ったことは無いので詳しくは知らなかった。

どんな風になっているのか聞いてみようか、とも思ったが今から中に入るので止めておこうと思いなおして姉貴についていくことにする。

姉貴が門に手をかけて扉を開け放った。

「うわあ」

思わず感嘆の息が漏れてしまう。

女子寮の中は外観と寸分違わない貴族の屋敷みたいであった。

（まあ、アニメで多少は知ってたけどとんでもないなあ）

ヒノキが若干呆然としながら辺りを見まわしていると近くに居る雪がポツリと眩きを洩らす。

「……むう、やはり何ヶ月経っても慣れないな」

ふう、と溜息を吐いた。

（珍しいな）

雪が溜息を吐くところなんて見たことが無い。

いつもほとんど無表情な雪がこんなにもストレートに感情を洩らすことはなかった。

（まあ、いつもストレートだけどさあ）

行動や仕草に表れるのは珍しい。

ヒノキはそんなことを思っただけで雪の方を見つめた。

「……むっ？　どうかしたのかヒノキ？　私の方を見て」

「ん？　いや、何とか溜息を吐くなんて珍しいな」と思っただけ

「ふむ、確かに私は溜息などはあまり吐かないように心がけているからな」

何かに納得したようにウンと雪が一回頷く。

「特に深い意味は無い。ただこの女子寮は私の家とは正反対でな、今になっても何だか落ち着かないんだ」

「ふーん、正反対ねえ」

「うむ」

ヒノキは辺りを見まわしてみた。

確かに一般庶民がいきなりこんな豪華な場所で暮らすことになったら落ち着かないだろう、とそんな感想が浮かぶ。

（しかし、正反対、か）

もしかしたら雪の家は貧乏なのかもしれない、とそんなことを思った。

何かを思いついたように雪がポツリと呟きを洩らす。

「ふむ、そうだな……ヒノキ、休みになったら私の家に来てみないか？」

「へっ？」

「うむ、それがいい、決まりだな。友達というものは家に招いたりするものだからな」

「いや、何も言ってな」

「ストロープ！」

姉貴が大声を響かせて間に割り込んできた。

「ほら、お喋りなんかしてないでさっさとあたしの部屋に行くから付いてきなさい」

「むう、それもそうか」

「まあ、確かに。それじゃ姉貴、部屋に行こうか」

「うん、それでいいの。それじゃ、あたしの部屋に行くぞう！」

満足げに頷いて先頭を意気揚々と歩く姉貴。

（まあ、ぱぱっと終わらせてさっさと寮に帰るかな）

ヒノキはそんなことを思いながら雪と共に姉貴の後に続いた。
辺りをチラチラと見渡しながら廊下を歩く。

（ふ〜ん、こんな風になってたのかあ）

清潔感の溢れる綺麗な壁、汚れやほこりなども見当たらない。掃除が行き届いているのだろう。

何やら高級そうな壺まで置いてあった。

（売ったら金持ちになれるかな？）

少しばかり不謹慎なことを考えてしまう。が、そもそも本当に高価なもののかすら分らない。

（まあ、分らないものは放っておくにかぎるな）

『触らぬ神に祟りなし』先達は良き言葉を残したものだ、とヒノキは心の底でしみじみ思った。

下手に割って弁償させられるようなことになったら笑い話にしかない。金持ちどころか一文無しになりかねない。

ヒノキは心の中で苦笑しながら姉貴の後に続いた。

しばらく歩いて姉貴が2階の1番奥にある部屋の前で歩みを止める。

「ここがあたしの部屋。どう？中々いい位置だと思わない？」

「見事に隅っこだな」

「そこがいいんじゃないの」

姉貴があっけらかんと言いつけて扉を開けた。

あまりの広さに思わず立ち尽くしてしまう。

（すごいな……）

一般家庭のリビングくらいの広さ、1人に割り当てる部屋の広さ

としては過剰ではないかとすら思えた。

部屋の一角には大きなベッドが配置されており、机にはパソコンが常備されている。

(……女子寮とはいえブルーとレッドでここまで差があるとは)

家具はあるものの物などが置かれておらず生活の匂いがかがえない。姉貴がアカデミアに転校してきたのが最近なので当然といえば当然の話。

部屋の隅には姉貴の私物と思われるダンボールが積み上げられていた。

見渡してみる限りどこかの屋敷にある一室みたいな洋風の広い部屋なのだが、視界の端に部屋の外観に合わない強烈な違和感を放つ物品が置いてあるのが目に止まる。

「……何故に炬燵が？」

「ふむ、ああいったものを見ると何だか落ち着くな」

何故だか雪が嬉しそうな声を洩らした。

そこまで女子寮に慣れないのか、とそんなことも思ったが割とどうでもいい。

ヒノキには炬燵に見覚えがあった。

「姉貴、あれって部屋にあった炬燵だよな？」

「うん、その通り。家から持ってきたの」

「いや、引っ越しじゃないんだから……」

思わず語尾を濁してしまう。

他にも扇風機やハロゲンヒーターなどが置いてあった。エアコンが付いているというのに。

（なんてアホなんだ）

どおりで片付かないわけだ、とそんなことを思っただけでヒノキは呆れた。

「ふむ、扇風機か。落ち着くな」

何故か雪が嬉しそうな声を洩らす。

「ほう、風鈴まであるな。素晴らしい。姉上、盆栽に興味は無いかな？」

「いや、盆栽って……それに季節感が全く無いと思う」

「あれ？雪ちゃん、まだ居たの？部屋の片付けに誘ったのはヒノキだけだから帰っていいよ」

「姉貴も姉貴で雪を帰そうとするなって」

姉貴の発言に思わず呆れてしまうヒノキ。
手伝う人間が減ると面倒くさいので雪を帰すのは止めて欲しかった。

「むっ？ヒノキが手伝うのだろう？ならば当然私も手伝うぞ」

「ありがたいな、助かるよ雪」

「うむ、気にしないでいいぞ。私は君となるべく共に居ると決めたからな」

「雪……」

「はい、ストオープ！」

姉貴が間に割り込んで視界を遮ってくる。

「ふう、まったく油断も隙もない。まあ、あたしも居るから別にいいか。」

渋々ながら納得する姉貴。

何とか雪も加えた三人で部屋の片づけを始めることになった。

「ところでヒノキ、君は盆栽に興味は無いか？」

「いや、ないけどさ」

「むっ、残念だ……」

雪が心なし無念そうな表情を浮かべる。

（盆栽、か）

ちよつとやってみたいような気もしたが、吐いた唾は飲み込めない
ので適当なことは言えなかった。

（さてと、まあさっさと片づけを終わらせるか）

そう思い部屋の片づけを始めることにした。

部屋の片づけを始めて数時間。

太陽は既に沈んできており部屋を茜色に染め上げている。

部屋の一角に積み上げられていたダンボールも全て無くなり、貴族の屋敷にある一室みたいな部屋は良くわからない珍妙な部屋へと驚きの変貌を遂げていた。

「ここに、この風鈴をつけてっと」

姉貴が窓枠に風鈴を取りつける。

開かれた窓から風が吹きリインと涼しげな音を響かせた。

「よし、これで終わり〜と」

「ふむ、よい音色だ」

姉貴と雪が満足げな表情で頷く。雪はほとんど無表情に近かったが。

ヒノキは少し呆然としながら部屋を眺めた。

（……この、風鈴と炬燵が同居している状態に違和感はないんだろうか？）

風鈴は夏の風物詩、炬燵は言わずもがな冬に活躍する素晴らしき暖房器具。

季節感というものが欠如していた。

（まあ、別にどうでもいいんだけどさあ）

部屋の主が満足そうだし、と投げやりに自己完結する。

片付けを始める前は生活感がない洋風の広い部屋だったのが、今は洋風に無理やり和を加えた変な部屋になっていた。

（というか、これ兄貴の部屋にそっくりじゃないか）

炬燵と風鈴が同居し、扇風機の横にはハロゲンヒーターが鎮座している。更に元から備え付けられていた棚の方に目を向けるとファッションシーなナマケモノの人形が置いてあり、それに対峙するような形で宇宙から来た光の巨人のフィギュアが構えをとっている。

全て見覚えがあるものだった。

おそらく姉貴は部屋にあった私物を全て持ってきたのだろう。

（まったく、引っ越しじゃないんだからさあ）

はあ、とヒノキは溜息を吐いた。

「ん？ どうかしたのヒノキ？ 溜息を吐くと幸せが逃げてくぞ」

「ハハハ、姉貴の頭はいつも幸せそうだな」

「ふっふっ、褒めても何も出ないぞっ」

上機嫌な声を洩らして姉貴が誇らしげに胸を張る。

近くに居た雪は「ふむ、褒め言葉だったのか。どういう意味なんだ？」と小声で呟いて首を傾げていた。

無論、褒め言葉などではないのだが

（まあ、姉貴だしなあ）

そう思ってヒノキは再び溜息を吐いた。

姉貴がチラリと壁に立てかけられている時計を一瞥する。

「ん、そろそろ夕食の時間か」

「むっ？確かに夕食の時間だな」

「そうか、じゃあ俺はそろそろレッド寮に帰るよ。もう随分と遅くなっちまったしさ」

姉貴と雪に断りを入れて、レッド寮へと帰ることに決めた。

女子寮が夕食の時間ということは、もちろんレッド寮もそろそろ夕食の時間。

急いで帰らなければ夕食を食べそびれてしまう。

だが、姉貴は不満そうに唇を尖らせた。

「え、いいじゃないの。夕飯くらいここで食べていけば」

「いや、そういうわけにもいかないだろ」

溜息を吐きながら手を横に振る。

「んゝ、でもあんた朝に女子寮の食事を見てみたいって言ってたじゃないの。ついでだし、見ていけばいいじゃないの」

「ふむ、確かに『どんな食事なのか少し見てみたい気もするな』と言ってたな」

姉貴の言葉に相槌を打つ雪。

確かに朝、自分が言った言葉であった。

(……吐いた唾は飲み込めないってか?)

思わず苦虫をつぶしたような表情をしてしまう。

それにしてもバカみたいに高笑いだけをしていた姉貴が朝の会話を聞いているなんて思っていなかった。

はあ、と溜息を吐いてしまう。

「あのさあ、女子寮に居るのはただでさえ校則違反なんだぞ? そりゃ、どんな料理が出てくるのか少しは気になるけどさ。許可を得ているとはいえ、そこまで長居するわけにはいかないだろ」

「へ?」

姉貴がキョトンとして、意味のない言葉を洩らした。

「いや、一体何だよ？その顔は」

「許可って、何それ？」

「は？」

ヒノキは自らの耳を疑った。思わずポカンとしてしまう。

（えっ？許可とってないの？）

もし許可をとっていないのだとしたら非常にまずい気がする。

ヒノキは身体から冷汗が流れ出てくるのを感じた。

「って、いやいやいや姉貴が『事情を話しておけば許してくれるんじゃないの？』って言ったんだろうが」

「へ？あゝ、確かにそんなこと言ったねえゝ。許可ってそういうことかゝ」

「そうそう、だからさ」

「でも、あたしが事情を話しておくなんて一言も言っていないぞっ」

「ふむ、確かに言っていなかったな」

ポツリと雪が相槌を打つ。

開いた口が塞がらなかった。

渴いた笑いしか出てこない。サァー、と血の気が引いていくのを

感じる。

「……ということは今ここにこうして俺が居ることは単なる校則違反か!？」

「えっ? あんた許可取ってなかったの!？」

「つて、姉貴が言うな――!」

思わず全力で突っ込みを入れてしまうヒノキ。
魂の叫びだった。

(くっ、よくよく考えれば気付くべきだった)

姉貴がそんな気の利いたことをしてくれるわけがない。
なんという不覚だ、とヒノキは自らを恥じた。

(やべえ、校則違反2回目じゃないか)

夜に廃寮へと忍び込んだことと合わせて2回目、おそらく今回は許してくれないだろう。

しかも女子寮への潜入。

これがバレた暁にはアカデミアの生徒たちから変態のレッテルを貼られ、社会的にも抹殺されて退学することになるだろう。

これからのことを想像してヒノキは血の気が引いていくのを感じた。

コンコン、とドアがノックされる。

『すみません、ちょっといいですか?』

ドアの向こうからくぐもった声が聞こえてきた。

「ん？誰だろう？」

「むっ、今開ける」

首を傾げている姉貴をよそに何故か雪が扉へと向かう。

（っ！いかん、このまま俺の姿が見られたら……）

査問委員会へ連行、退学処分、変態のレッテルを貼られ社会的に抹殺。

破滅の未来予想図が頭の中を駆け巡る。

声を出せば外に居る人物に気付かれる可能性がある、ヒノキは焦燥感に駆られながら無言で部屋を見渡した。

（な、何でもいい、何か方法は……っ！）

一筋の閃き。

この部屋の外観にそぐわない物品が視界に入る。

（そうだ！ハロゲンヒーターと扇風機の横で何食わぬ顔をして座っておけば）

部屋の風景に溶け込むことが出来てスルーしてくれるはず、ヒノキはそんなことを思った。

早速、扇風機とハロゲンヒーターの横で正座をする。

姉貴はヒノキの行動を不思議そうな表情で眺めていた。

扉に手がかけれ徐々に扉の向こう側に居る女子生徒の姿が露わになっていく。

（いや、ちょっと待て。本当にこれでいいのか？）

扇風機の横で正座をしながら考えを改める。自分が血迷った行動をしている気がした。

風景に溶け込むことで相手からの認識を阻害する。何だそれは？

どんな高等技術だ？ やったとしても成功を収めることが出来るのは
気配を自らの意思で断つことが出来るような有り得ない達人クラス
の人間な気がする。

100%自分には不可能な気がした。

(いかん、アホなことをやった。でも、まだ間に合うっ！)

考えを改めて急いで行動を開始する。

目標は正面にある炬燵。

ヒノキは炬燵の中へとヘッドスライディングした。

それと同時に扉が完全に開け放たれる。

「……随分と変わった部屋ですね」

「ふむ、君は確か原 麗華だったかな」

「ええ、その通りです」

会話が漏れ聞こえてくる。ヒノキは炬燵の中でホッと胸を撫で下
ろした。

(ふう、間にあったみたいだな)

かなりシビアなタイミングであったがどうやら姿を目撃されずに
済んだようであった。これでひとまず退学の危機を回避することが
出来た。一時しのぎに過ぎないが。

とはいえ今は先のことよりも目先の危機をやり過ぎさなければな
らない、そう思ってヒノキは窮屈な思いをしながら炬燵の中で息を
ひそめた。

「あなたは確か、1年の美上 雪さんですね」

「うむ」

「おかしいですね？ここは確か2年生の裁 司さんが使っている部屋のはずですが」

「うむ、君は間違っていないぞ。ここは私の部屋ではなく姉上の部屋だからな。私は片付けの手伝いをしてただけだ」

「ああ、そうなんですか。ということは、あの炬燵の近くで不思議そうな顔をしているのが裁 司さんですか」

炬燵の中で会話を盗み聞きする。

声は若干聞き取りづらかったが、特に問題は無かった。

（原 麗華ってあれかな？）

確かやたらと風紀の乱れを気にする、真面目な性格をしていた気がする。

ヒノキは炬燵の中で自分が把握している範囲の人物像を思いだした。

本当に溜息しか出てこない。

（見つかったら、まずいよな？）

原 麗華、この状態を一番見られてはいけない人な気がした。

（まあ、誰に見つかってもやばいような気はするけどさあ）

益体のつかないことを考えて、身を固くする。

ヒノキは炬燵の中で耳を澄ました。

「それで、用件は何だ？」

「ああ、そうですね。夕食の時間も近いですし、手短に済ませるところにしましょう」

オホン、と1つ咳ばらいが聞こえてくる。

「今、この女子寮に不埒な男子が入りこんでいる可能性があります。お昼頃に後ろ姿を見たという目撃証言がありました」

「むっ、それは驚きだな」

言葉とは裏腹に起伏のない平坦な口調。

（……不埒な男子？俺のこと、なのか？）
認めたくないが認めるしかない状況、渴いた笑いが出てきそうになった。

原 麗華の憤慨した声が炬燵の外から聞こえてくる。

「まったく、女子寮は男子禁制だというのに……風紀を乱す不埒な輩を放っておくわけにはいきません！」

「ふむ、確かに野放しにするわけにはいかないな」

「はい！あなたは邪まな目的で女子寮の中に入ってきた不埒な男子に心当たりはありませんか？」

「むっ、邪まな目的で入ってきた男子か……あいにく私には心当たりないな」

「そうですか。この女子寮の中に入ってきた不埒な男子はまだ寮内に居る可能性があります。気を付けてください」

「うむ、わかった」

「はい、それでは」

ボタン、と扉が閉まる音がした。

（もう、大丈夫かな？）

そっと布団を少し押しどけて炬燵の中から外の様子をうかがう。扉は完全に閉まっており、原 麗華は部屋の中に居なかった。ふう、と安堵の息を洩らしながら炬燵から這いずり出る。

「危ないところだったか」

ポツリと呟いて胸を撫で下ろした。

（何だか厄介な状況になってきたなあ）

思わずげんなりとしてしまう。

姉貴が不思議そうな表情でこちらを眺めていた。

「あんた何やってんの？別にやましいことがあるわけじゃないんだから隠れる必要なんてないのに」

「やましいことが無くても隠れなきゃいけない時があるんだよ」

「ふーん、そんなもんかな」

心の底から不思議そうな姉貴の声。

ヒノキは溜息を吐いた。

確かにやましいことがあるわけではない、だが見つかるわけには
いかない。見つかったら破滅の未来へ一直線なのだから。

事情を話して穏便に事を運ぶのが一番な気がしないでもないが、
会話を聞いた限りでの憤慨した声からして見つかったら問答無用で
捕まってしまう気がする。

ヒノキは再び溜息を吐いた。

「まずいな、このままじゃ帰れないじゃないか」

「ん？別に堂々と帰ればいいじゃないの」

「いや、このまま女子寮の中を歩いたら捕まるって」

「うむ、その可能性は高いだろうな。先ほどの話を聞いた限りでは
女子寮に邪まな目的を持って入りこんだ男子というのを探している
らしいからな」

雪が扉の付近から戻ってきて会話に参加してくる。

姉貴は興味なさげな表情でふーんと鼻を鳴らした。

（どうしてもよさげだなあ、姉貴よ）

はあ、と溜息を吐いてしまう。

今日だけで何度溜息を吐いたのか分らなかった。

（溜息選手権があったら一位になれるかもしれないなあ）

ヒノキは下らないことを考えた。
軽く頭を振る。

現実逃避などしている場合ではない。とりあえず原 麗華からの質問を誤魔化してくれた雪にお礼を言っておこう、とヒノキは口を開いた。

「雪、さっきはありがとうな」

「む、何のことだ？」

雪が不思議そうな声を上げる。

「いや、さっき『女子寮に居る男子に心当たりはないか？』って聞かれて誤魔化してくれただろ。そのことさ」

「むっ？ 誤魔化してなどいないぞ、本当のことを言っただけだ」

「へっ？」

「彼女は邪まな目的で入りこんだ不埒な男子と言っていたからな。君は姉上の手伝いという真っ当な理由でここに入ってきたんじゃないか、邪まな目的で入りこんだ男子には心当たりは無い」

「……あゝ、成る程ね」

平坦な口調で淡々と言い切る雪。

思わず呆然としてしまった。

もし質問が『邪まな目的を持って女子寮に入り込んだ不埒な男子に心当たりがないか？』ではなくて『女子寮に居る男子に心当たりがないか？』だったら雪は普通に心当たりがあると答えていたのかもしれない。

（余計な言葉がついてよかった）

ヒノキは不名誉な言葉に少しだけ感謝した。

「それにしても迷惑な話だ、その邪まな目的を持った男子とやらのせいで君が寮内を歩けば間違えて捕まってしまう危険性がある。本当に迷惑な話だ」

「……」

「かくなる上はそのどこぞの馬の骨とも知れぬ性根が腐りきった奴を私が叩きのめすべきだろうか？ むう」

何やら物騒なことを呟きながら思案にふける雪。

どうやら雪の頭の中では本当に邪まな目的を持って女子寮に潜入をした男子が居ることになっているようであった。

（……それで叩きのめされるのは俺になるんだが）

自分の為にならなくてくれているのは分るのだが微妙な気分になる。叩きのめすというのはデュエルでなのか、それとも文字通りなのか気になるのであった。

姉貴がうーん、と唸る。

「まあ、ヒノキがその格好のまま寮内を歩いたら確かに面倒なこ

とになりそうだねえ」

「いや、そんな他人事みたいな」

「ん？だって別に他人事だし」

「そりゃそうだろうけどさ」

「どうする？窓から飛び降りて帰ってみる？」

ピッ、と親指で窓を指差す姉貴。

ちなみに今いる部屋は2階にある部屋。

若干、呆れながら手を横に振る。

「死んだらどうする。無茶を言うな姉貴」

「ん、確かに足の骨くらいは折れるかもしれないねえ」

能天気な呟く姉貴。

（勘弁してくれ）

多かれ少なかれ窓から飛び降りれば確実に怪我をするであろうことは想像に難くない。

（窓から飛び降りて骨を折って足を引きずりながら帰りました、か）
笑い話にしかない、そう思ってヒノキはげんなりとした。

「むう、やはりかくなる上は私がこの事態の元凶である規律違反者

を捕まえるしかないか」

「いや、そんな奴はいな」

「うむ、やはりこれしかないな。ヒノキ、少しここで待っていてくれ。私がすぐに君が安全に帰れるようにしてくるからな」

突っ込みを途中で遮り、雪が部屋を出ていこうとする。

「て、ストオオープン！」

「む、どうしたヒノキ？私の手を掴んで」

扉へと向かう雪の手を掴んで引きとめた。

居もしない男子を捕まえるという不毛なことはやるべきではない。むしろ何とか打開策を考えて欲しいところだった。

手を握ったままの状態で雪が何か納得をしたような声を洩らす。

「ふむ、君は優しいのだな。私の身を案じてくれているのか、心地よいな。だが心配はいらない、それでも私は腕に多少の自信があるからな」

「いや、何を言っているのか全く分からない」

「むっ？違うのか？」

雪がキョトンとした声を上げた。
腕とは何の腕なのか？デュエルのことか、それとも別の何かなのか。

果てしなく疑問だった。

雪が繋がれている手に視線を向ける。

「……ふむ」

「とにかく、そんな不毛なことをやりに行くのは止めにしてこの部屋に居てくれ」

「むっ、そうだ、思い出したぞ。こういうときは『きゃっ』と声を上げた後に握られた手を胸に抱え込んで若干俯き加減で頬を紅く染めるのだったな」

「……えー、もしもし聞いてますか？それと実際やられたら、俺だったら自分が何かしたかと思って戦々恐々とするな」

「むっ、そうか。異性の友人と仲良くなるにはそれが良いと聞いたのだがな」

「ふーん、俺は自然体が一番だと思うけどなあ」

「ふむ、成る程。君は嬉しいことを言ってくれるな、君のそういった部分は実に好ま」

「たぁりゃあぁーっ！」

気合一閃。

姉貴が繋がれた手と手の間に渾身の手刀を振り下ろした。

「むっ」

「まったく、あんたたちはこれで何回目だったの。あたしとヒノキの絆が女によって揺らぐことなんて認めないからっ！」

姉貴が声高に言い放つ。

雪は怪訝そうな声を上げた。

「ふむ、姉上。1つ聞きたいのだが姉上自身も女だ、その場合結ばれた絆はどうなるのだ？」

「そんな細かいことは気にしないでいいのっ！」

「むっ、成る程。細かいことだったのか、ならば私も気にせずヒノキと一緒に居られるな」

雪が胸のつかえがとれたような声を出して納得をする。

（まだ、そんな小難しいことを考えていたのか）

ヒノキは三沢の部屋で行われた雪と姉貴の会話を思いだして、少し呆れた。

はぁ、と溜息を1つ吐いてから姉貴と雪のことは放っておいて女子寮から抜け出す方法を考えることにする。

部屋の外には女子寮に入り込んだ男子を探しているという原 麗華が居る、外に出ていけば出くわす可能性がある。それでなくても廊下を歩いている別の女子に顔を見られればアウト。

顔が割れてしまえば、うまい具合にレッド寮へと戻ることが出来ても明日の朝には査問委員会へと連行されてしまうことが容易に想像できる。

（本当にどうやってここから脱出するかな）

夕食の時間で女子が食堂に集まっているときに脱出するべきか？

いや、とヒノキは即座に浮かんできた案を否定した。

（リスクが高すぎる）

食事の時間だからといって誰一人として廊下を歩いていないとは限らない。

なんせ一目でも顔を見られたらアウト、危険な賭けだった。

中々いい案が浮かんでこない。かといって自暴自棄になってこのまま出ていけばすぐに捕まってしまうのは明白。

幸い会話を聞いた限りでは目撃証言というのは後ろ姿のみ顔は見られていない、制服は着ていないのでどこの生徒か特定することも出来ないだろう。

（でも、どうしたもんかなあ）

やはり姉貴が言ったように窓から飛び降りるしかないのだろうか？そんな無謀な考えが頭に浮かんできた。

だが、実行に移したところで下手をすれば今生の別れとなりかねない。

（女子寮から抜け出すために窓から飛び降りて昇天しました、か……いかん、笑い話にしかならん）

しかも笑えない笑い話なのが駄目押しだった。

軽く頭を振る。

（やっぱり却下だな）

うん、と一度頷いてヒノキは使えない案を頭の中から消し去った。

「ふむ、大丈夫かヒノキ？今の君は随分と暗い顔をしているぞ」

「あんまり大丈夫じゃないかな、ここから抜け出す方法が何1つ思いつかない」

心配してくれる雪の声に首を横に振る。

本当にどうすればいいのか全く思いつかなかった。

「何1つ思いつかない、ねえ。要するにこの寮を怪しまれずに歩き回ればいいんでしょ？」

「いや、まあそりゃそうだけどさ」

「むっ、何か秘策があるのか姉上？」

問いかけに対して姉貴がニヤリと笑う。

「ふっふっん、いいこと思いついたの！あたしに任せときなさい！」

瞳を輝かせてビシッと大きな声で言い放った。

（何だろう、嫌な予感がする）

姉貴が上機嫌な声を上げているのは不吉な感じしかない。

自信満々な表情で部屋に備え付けられているダンスを漁り出す姉貴。

「んっ、あったあった」

「……まさか」

「ふむ、成る程。木を隠すなら森の中、か」

雪が何か納得をするような呟きを洩らす。

姉貴の手には自身が身に纏っていない標準的な女子の制服が握られていた。

「コートを買ったからこの制服余っちゃったんだよね」

「それを、着ろと？」

「んっふっふっ、男子の恰好で捕まるんだったら女子の恰好をすればいいじゃないの」

「ふむ、名案だな」

「いや、迷案だろうがどう考えても。無理があるって」

「大丈夫！とりあえずこれを着なさい！」

「うわっ、と」

姉貴に制服を投げ渡され、反射的に受け取ってしまう。

（とりあえず受け取ってしまったがどうしよう？）

女子用の制服を手を持ったまま途方に暮れた。

少なくとも着たくは無い。

姉貴が再び何かを投げ渡してきた。

「あぶなっ」

「ヒノキ！ついでに今渡したカツラを着けて胸のあたりにはリングでも入れといて」

「いや、着るなんて一言も言ってないだろ。あと、何でリングなんか持ってるんだ？」

「ん？暇つぶしに皮むきでもしようかと思ったの」

「いや、暇つぶしって……」

「どんだけ暇なんだ？」

「そんなことを言いたくなかった。」

「ヒノキ、細かいことはいいからさっさと着替えなさい」

「ふむ、私もとりあえず着てみるべきだと思うぞ」

姉貴と雪が急かしてくる。

「いや、ちょっと待て。明らかに無理があるだろ、男が女の恰好をしたら不自然だろうが」

「大丈夫大丈夫！女の恰好をしていれば多少おかしくてもスルーしてくれるって！」

「うむ、男だと一目瞭然でわかる恰好をしているよりも危険性は格段に下がると私は思うぞ」

「うーん、確かに今の恰好よりはましになるかもしれないけどさあ」

思わず語尾を濁してしまう。

もし女子の制服を着て、バレたら変態の烙印を押される気がした。

手に持っているものに視線を移す。

（これを、着る？）

女子の制服とカツラ、そしてリングが2つ。

確かに多少不自然でも女子の恰好をしていれば怪しまれないかもしれない、少なくとも今の恰好のまま外に出るよりは。

だが、もし実行に移したら男として大事な何かを失ってしまう気がした。

（背に腹は代えられない、か？しかし……）

そう簡単に割り切れるものでもない。

ヒノキが葛藤している姿を見て、姉貴がじれったそうにバリバリと頭をかく。

「あゝ、もう面倒くさいなあゝ。よし、あたしが着替えさせてあげる！」

「えっ？ ちょっ、やめ、まだ心の準備が」

「問答無用！」

姉貴が飛びかかってきた。
後ろに下がって姉貴をかわす。

「こらゝ、逃げるなヒノキ！」

「いや、着替えさせられるくらいなら自分で」

「むっ、許せヒノキ」

喋っている途中で後ろから羽交い絞めにされた。
背中に柔らかいものが押し付けられているのを感じる。だが、そんなことはどうでもいい。
問題は羽交い絞めにされて動きが制限された現状だった。

「でかしたっ！ 雪ちゃん、そのまま押さえておきなさい」

「くっ、振りほどけない。やはり、大胸筋かつ！？」

「すまないヒノキ。だが君の為だ、許してくれ。なに、天井のシミ

を数えている内に終わるさ」

「いや、そういう問題じゃない！あとパツと見だけど天井にシミなんか1つも無いぞ」

「むっ、それは誤算だったな。では素数でも唱えておいてくれ」

「いや、そういう問題でもないっ！というか何か色々間違っている気がするぞ」

「むっ？よくわからんが瑣末なことだ、気にするな」

耳元で呟かれる。

前方からは姉貴がにじり寄ってきた。手をワキワキさせながら。

「さてっと、それじゃヒノキサツさと着替えよっか」

「いや、ちょっと待て姉貴。この際、自分で着替えるから部屋から出ていってくれ」

「駄目、却下、時間が無い」

「いや、1人で着替えた方が絶対に早、ってストップ！服に手をかけるなって」

制止も聞かずに姉貴がポンポンと服を脱がしていく。
ベルトが緩められ、ズボンが宙を舞った。

宙を舞っていく自らの衣類の代わりに女子の制服が身に着せられていく。

(……くっ、屈辱だ)

色々な意味で泣きたくなってきた。

全力で抵抗をしてもいいのだが、仮にとはいえ姉貴も一応は女の子。

強硬手段に出るわけにもいかず、為すがままに着替えさせられるしかなかった。

「えーと、シャツはこのままでいいか。スカートを付けて、胸にリングを仕込んで、最後にカッラをかぶせて完成っ！」

「ふむ、姉上。露出はなるべく避けるべきだと思うのだが」

「ん？ うーん、確かに肌はあんま出さない方がいいかな」

羽交い絞めになっている体勢から雪が意見を出す。

(何だか、現在進行形で大切なものを失っている気がする……)

自らの体を見下ろすとリングが仕込まれて膨らんでいる胸部とスカートの目に入った。

何故だか悲しくなってくる。

(もうどうにでもしてくれ)

ヒノキは溜息を吐いた。

姉貴がタンスを漁って、手に長い靴下を持って戻ってくる。

「これをスカートの中まで引き上げて履かせればオッケーかなっ」

「うむ、腕はシャツの袖で隠れているからそれで問題ないと思うな」

「……どうでもいいけど自分の靴下を男に履かせるのに抵抗はないのか姉貴？」

「ん？あたしとヒノキの仲じゃない、そんな細かいこと気にするわけないでしょ」

あっけらかんと言いつ放つ姉貴。

呆れて何も言えない。

（気にしろよ……）

そんなことを思っヒノキはげんなりとした。

結局、異常に長い靴下も履かせられる。

雪が手を離し、羽交い絞めの状態から解き放たれた。

姉貴が満足げな表情で視線を向けてくる。

「うん、完璧な出来栄じゃないの！これなら外に出ても問題ないぞっ」

「うむ、これなら一見ただけでは男とは分らないな」

「……」

ヒノキは力なく両手を地面についた。

何か大切なものを失ってしまったような、そんな気がする。

（……背に腹は代えられない、か）

そんなことを思っヒノキは自らを納得させようとした。

下手をすれば退学の危険性がある現状でなりふりなど構っていない。

だが、それでも譲ってはいけない一線を越えてしまったような気がした。

（仕方ない、か）

はあ、と溜息を1つ吐いて立ち上がる。

いつまでも地面に這いつくばっている場合ではなかった。

一刻も早く女子寮から脱出をしなければならぬ。

こんなアホなことで退学になどなりたくは無かった。

「でも、この格好は本当に大丈夫なのか？」

ポツリ、とぼやきながら自らの体を見下ろす。

上半身は標準的な女子の制服に包まれており元から着ていた黒いTシャツの袖が肩から手首までを覆っている、その胸部はリングゴが仕込まれているせいで膨らんでいるように見えなくもない状態。

下半身はスカートに包まれて、異常に長い靴下がその中まで続いており僅かにも肌を露出させていなかった。腰にはデッキケースが付いたベルトが巻かれている。

カツラは自分では見ることが出来ないのでは何とも言えないが、やたらと前髪がうっとうしかった。

（……いかな、自分ではわからぬ）

鏡でも見ないと判断のしようがない。

ヒノキは微妙な表情をした。

「姉貴、この格好は本当に大丈夫なのか？」

「ん？大丈夫じゃないの、露出を極端に嫌う内気な女の子みたいに見えるぞっ」

「いや、そんな例えをされてもわからん」

意味がわからない、と手を横に振る。

「ふむ、そこまで心配しなくても良いと思うぞ。一見して男だとわかるような部分は視界に入らない」

「うーん、確かに露出は全くと言っていいほど無いけどさあ」

「うむ、カツラの前髪が顔の輪郭を隠しているから最初から知っていなければ君に結び付けることは出来ないだろう。それでいて瞳が隠れないようになっていいるから、怪しい人物のように見えることも無い」

「そうか、雪がそこまで言うなら大丈夫かな？」

首を傾げながら前髪を触ってみた。

やたらと長く頬にチクチクと刺さるが確かに視界には入ってこない。
いい。

雪が言っていることは間違っていない気がした。

姉貴が不満げな声を洩らす。

「んう、何か納得いかない。あたしの時とは随分と反応が違うじゃ

ないの」

「何言ってるんだか」

日ごろの行いの差だよ、とそんなことを思っ
てヒノキは溜息を吐いた。

「ん、何その溜息は？」

「いや、何でもない」

「んむう、まあいっか」

渋々といった様子で引き下がる姉貴。
そのまま時計の方へと視線を向けた。

「んっ、もういい時間かな。それじゃヒノキと雪ちゃん、食堂へ行くっか」

「むっ、そうだな。夕食の時間だったか、では行くっか姉上」

「いや、なに普通に俺も食堂へ連れて行くこうしてるんだ。俺は行かないからな」

「え？それじゃ女装した意味無いじゃないの」

初耳とでもいうような表情で有り得ないものを見るかのような視線を向けられる。

（何で、そんな目で見られるんだろうか？）

理不尽だ、そう思ってヒノキは少しげんなりとした。

はぁ、と溜息を吐きながら首を横に振る。

「姉貴、俺はここから抜け出すために今の恰好になったんであって女子寮の飯を食べるためじゃないからさ。あと、女装って言わないでくれ。何か大切なものを失った気分になるから」

「えー、せっかく女装したんだしご飯くらい食べていかなきゃ損だと思わない？」

「思わない。あと頼むから女装って言うのは止めてくれ」

「もうー、ヒノキはわがままねえー」

呆れたように頭を振る姉貴。

（どっちがだ）

ヒノキは頭を抱えた。

少しうんざりとする。

「とにかく、俺はこのまま寮に帰るからな」

「えー、まあしょうがない、かな。無理やり連れてってもつまんないもんねえ、でも来たくなったらすぐ来るんだぞっ！」

「いや、絶対無いから」

首を横に振って即座に否定した。

会話が終わったタイミングを見計らって雪が口を開く。

「ふむ、君は夕食を食べていけないのか」

「ああ、一刻も早く抜け出したいからな」

「むう、残念だ」

雪は本当に残念そうな声を出して少しばかり俯いた。

（……なんか悪い気がするな）

何故だか罪悪感が湧いてくる。

残念そうにされると、特に悪いことは何もしていないはずなのに悪いことをしてしまったような気分になってきた。

とりあえず自分の服を回収して袋に詰めて部屋の外へと向かう。

「それじゃ、俺はこのまま帰るから」

「むっ、そうか。気をつけて帰ってくれヒノキ」

「ああ、何とか見つからないように帰るさ」

雪の言葉に返答をしてドアノブに手をかけた。
慌てたように姉貴が口を開く。

「あつ、ヒノキ！あんたが着てる服まだ一度も使ったことのない服だから別にそのまま持ち帰っても問題ないから」

姉貴の言葉を背中中で聞いて、ヒノキは扉を開けて部屋の外に出た。
（持ちかえってもいいって言われても……）

使い道なんかない。

そう思ってヒノキは微妙な表情をした。

ふう、と一息ついてからキョロキョロと辺りを見回す。

「誰も居ない、か」

好都合なことに廊下には誰も居なかった。

（よし、これなら問題なく脱出できる、かな？）

不安が拭いきれない。

今は誰も居ないとしても、いつ何処から誰が出てくるかわからない。
変装をしているとはいえ完全に安心しきれなかった。

（もし、脱出に失敗して俺のことがバレたら……）

再び、破滅の未来予想図が頭を駆け巡る。

しかも今は仕方ないとはいえ女子の恰好をしているのでバレたら更にやばいことになるであろうことは明白だった。

（そうだ、エフェクト・ヴェーラーに人が居ないか見てきてもらおう）
（う）

先行して偵察してきてもらって危険が無いか調べてきてもらおう、

とそんな考えが頭に浮かぶ。

まるで使いパシリにするみたいで気が引けるのだが、背に腹は代えられないのでエフェクト・ヴェーラーを呼び出すことにした。

「エフェクト・ヴェーラー、ちょっと出てきてくれ」

小声で呼びかける。

（それにしてもエフェクト・ヴェーラーって長ったらしくて面倒だな）

今度、短い呼び名を考えようとそんなことを考えた。

「……あれ？」

しばらく待ってみても何も反応がない。

ヒノキは首を傾げた。

少し大きめの声で呼びかけてみる。

「おーい、エフェクト・ヴェーラー頼みたいことがあるんだ！出てきてくれ」

声だけが廊下に響いて消えていく、やはりエフェクト・ヴェーラーは出てこなかった。

（……まさか）

そういえば、と思い出す。

エフエクト・ヴェーラーは姿を消して以来まだ一度も出てきていなかった。

もしかしたらまだペンキ塗りの一件を気に病んでいるのかもしれない。

（あれは俺のせいなんだから本当に気にしないでいいのに）

ヒノキは溜息を吐いた。

（仕方ない、か）

出てきてくれないのならば仕方がない。

ヒノキは覚悟を決めて歩き出すことにした。

（出来れば、誰も出てくるなよ）

ほぼ有り得ないことを考えながら。

第16話《中編》自分のせいなのか？と誰かに問いたい（後書き）

前編から通して随分と長くなってしまいました。それでもまだ終わっていないという。

本当にすみません。後編は何とか短めに出来たらいいな、と思っています。

次回は女装ヒノキ君の脱出話です。

それでは次回にて

第17話《後編?》見失ってはいけないものがある、と主張したい（前書き）

時間がかかりましたがようやくと後編です。

本当は1つにまとめようと思っていたのですが、書けば書くほど長くなってしまい2つに分割しなければ納まらなくなってしまったのでこうなってしまうました。

おそらく読むにはかなり時間がかかるだろうと思いますので、覚悟してから読んでください。

それではどうぞ。

第17話《後編?》見失ってはいけないものがある、と主張したい

静寂に包まれた女子寮の廊下。

コツコツと足音だけが鳴り響く。

(防音加工でもされているんだろうか?)

ヒノキはそんなことを思いながら、廊下に並ぶ大量の扉を漫然と眺めた。

部屋から話し声が聞こえてこない、それどころか物音一つしない。これがレッド寮ならば何もしなくても色々と筒抜けなのだが

(すごい格差だな)

素直な感想が頭に浮かんだ。とはいえ女子寮なので壁が薄かったら色々と問題がある気がしないでもないが。

溜息しか出てこない。

何も聞こえてこないのも、いつどこの部屋から誰が出てくるのか予測する手段が無かった。

突き当りが見えてくる。

(確か、あそこを右に曲がれば……)

姉貴の案内で部屋まで歩いた時のことを思い出した。

道順など気にもとめていなかったのおぼろげだが、そこまで複雑な道でもなかったのもそれなりには覚えている。

前方の突き当りを右に曲がれば、一階へとつながる階段がある大きな吹き抜けに出られるはずであった。

意識を最大限に集中させて耳を澄ます。

何も聞こえてこない、相変わらず聞こえてくるのは自らの足音だけだった。

状況は不透明。

もしかしたら次の瞬間には誰かが扉から出てくるかもしれない。

(まあ、考えても仕方ないよな)

そんなことを思って、1つ息を洩らした。

わからないことは放っておくにかぎる。

（『臨機応変』先達は良き言葉を残したものだ）
ウンウンとしみじみ頷いてヒノキはそのまま歩いた。

「……ん？」

遠くの方から足音が聞こえてくる。

ヒノキは訝しげに思っ、神経を集中させた。
コツコツと規則的に床を叩く音。

（これは、突き当りの向こうから、かな？）

内心で首を傾げながらも、身体を固くする。

（いや、変装をしているから大丈夫なはずだ）

ヒノキはそう思っ、心の平穩を保とうとした。

自分の変装は雪が太鼓判を押していたほどだから大丈夫なはずだ、
と。（あくまでも女装ではない）

自分の体をちらりと見下ろす。

まずはじめに胸部のふくらみが視界に入った。無論、リンゴだ。

更にその下にはスカートを履いている。何だかスースーして落ち着かない。

（……傍から見たらただの変態なんじゃ？）

そんなことを思うヒノキ。

むしろ、現在の恰好を見られる方が余計にやばい気がして安心しきれなかった。

逡巡していると、突き当たりから人の姿が露わになる。

歩くのに合わせてゆらゆらと揺れている長い金髪、制服を下から押し上げている豊満な胸。（おそらく腕力は相当なものであるとヒノキは推測する）

見知った人間だった。

天上院 明日香

前方から歩いてきて段々と距離が近づいていく。

ヒノキは冷汗が流れてくるのを感じた。

事前に正体を知っていなければ知り合いでも分らないと、雪は言っていたが

（本当に大丈夫だろうか？）

流石に心配になってくる。

明日香とはお互いに面識があるので、気付かれるのではないかとヒノキは心の中で焦った。

だが、今さら方向転換したりすれば逆に怪しまれる危険性があるので危険。

（頼むから、素通りしてくれよ）

ヒノキはそんなことを思いながらそのまま歩くことにした。

コツコツと1つ増えた足音が廊下に鳴り響く。

一步一步、足を踏み出すたびに段々と距離が近づいていく。そして、こちらへと気が付き視線を向けてきた。

「っ！」

「こんばんわ」

「うえっ、こ、こんばんわ」

何とか裏声で応対をする。

（あ、挨拶かあ）

ヒノキは少しばかり顔をひきつらせた。

自分だったら知らない相手とすれ違ったとしても挨拶などしない。（何というか教育が行き届いているなあ）

素直な感想が頭に浮かぶ。

明日香は訝しげな表情を浮かべていた。

「……今、一瞬だけ野太い声が聞こえたような」

「っ、いえ、その、びっくりすると野太い声が出ちゃう性分なものでして」

危険な呟きに慌てて裏声で言い訳をする。

苦しい言い訳。加えて咄嗟のこととはいえヒノキは自分の口調に悶えそうになった。

クスリと何故か明日香が笑みを零す。

「フフ、ごめんなさい。驚かせてしまったみたいね」

「いえ、人見知りが激しいものでして」

再び裏声で応対しながら、ヒノキはホッと胸を撫で下ろした。

苦しい言い訳だったが信じてくれたようである。

（喉が結構つらいなあ）

切り抜けられはしたが、無理な声音を使ったせいで喉が少しばかり変な感じがする。

明日香はそんなヒノキの様子を見て笑みを深めた。

「フフッ、そんなに緊張するかしら？ あなた、随分と必死そうに話

すわね」

「……」

無言で目を逸らす。

少しでも気を抜くと地声が出てしまいます。なんてことは口が裂けても言えなかった。

「それにしても……」

明日香がじつと顔を見つめてくる。

（くっ、勘付いたか？）

ヒノキは戦慄した。

変装（あくまでも女装ではない）をしているとしても、じつと見つめられるとバレないとも限らない。頼みの綱は自らが身に纏っている衣服のみ。

かなり心細かった。

破滅の未来が頭にちらつく。

ヒノキは嫌な汗が出てくるのを感じた。

「あなた、あまり見ない顔ねえ。名前は？」

明日香が訝しげな声を上げる。

（気付いてない、みたいだな）

一気に身体の力が抜けた。

「私は一年の天上院 明日香。あなたは？」

明日香が自己紹介をして、名前を聞いてくる。

（そういえば『人の名前を聞く前にまず自分から名乗れ』って台詞があったなあ）

一瞬どうでもいいことが頭に浮かんだ。

明日香が返答を待っている。

（……まずいな）

自己紹介をされたのに、自分は自己紹介を返さないのは不自然。だが、まさかバカ正直に本名を名乗るわけにもいかない。

ヒノキは焦った。

とはいえ、長時間口ごもっているのも不自然。

（とりあえず、自分の名前から簡単に想像できる名前でもいいか）

どうせ今日ここから脱出したら二度と現れないんだし、とそんなことを思っヒノキは口を開いた。

「つと、一年の柊ケヤキって言います」

「そう、柊さんね。よろしく」

「はい、よろしく願いします」

明日香と握手を交わす。

とりあえず、自分の名前に使われている樹木の名前を違うものにしてそのまま口にした。

(……ん、何だ?)

何やら必要以上に手をニギニギと握られる。

「あなたの手って、何だか少しゴツゴツしているわね。鍛えてるのかしら？」

「……」

ヒノキは無言で目を逸らした。

男の手です、なんてバカ正直に答えることはできない。

明日香は何かを勘違いしたのか申し訳なさそうな顔をして手を離した。

「ごめんなさい、少し無神経だったかしら」

「いえ、気にしてませんから」

むしろ勝手に納得してくれて助かりました。
と、ヒノキはそんなことを言いたくなった。

「そう、あなたって心が広いのね」

「いえ、この上ないほど普通の広さです」

「フフッ、あなた面白い人ね」

明日香が口元に手を当てておかしそうに笑う。

（何で笑うんだ？）

意味がわからない、とヒノキは少しばかり呆然とした。

「ところで、柊さん。食堂はあなたが向かっている方向とは反対からじゃないと行けないわよ？」

「いえ、その、部屋に戻ってから夕食に行こうと思ひまして」

裏声で応対をして、手に持つ荷物を掲げて見せる。

（……嘘は言っていない）

レッド寮の部屋に戻ってから食事をするつもりだった。

明日香が荷物を見て納得をする。

「そう、急いだ方がいいわよ。早くしないと夕食の時間に遅れちゃうわ」

「あゝ、はい、そうですね」

「それじゃあ、私は行くから」

別れを切り出して、明日香は髪をたなびかせて去っていった。見えなくなるまで、その場で見送る。

段々と後ろ姿が遠ざかり、やがて角を折れて姿が見えなくなった。

（……特に、気付いた様子は無かったな）
自分の体を見下ろす。

（この格好、意外といけるのかもしれない）
ヒノキはそんなことを思った。

2階の廊下。

食堂へと向かう道を司と雪は2人で歩いていた。
ちなみにヒノキが向かっている正面玄関とはほぼ反対方向。

「そういえば雪ちゃん」

「む、何だ姉上？」

「昼間のことは感謝してる、悪かったね」

司の唐突な言葉

一瞬、何を言っているのか雪にはわからなかった。

司は既に用は済んだとばかりに前を向いて歩いている。

（はて、昼間？）

何か特別なことをしただろうか？と、雪は無表情のまま少し思案した。

「……ふむ」

中々、思い当たる事柄が浮かんでこない。
雪は司の隣を歩きながら昼間のことを思い起こした。

・
・
・
・
・

体育の授業が終わる。

女子は男子とは別の場所でバレーボール。

雪は手早くロッカーで着替えを済ませて、男子が野球をやっている場所へと向かった。

赤いジャージを着たレッドの生徒と黄色いジャージを着たイエローの生徒が入り乱れている。

「ふむ、少し遅かったか」

後片付けの最中であつた。

生徒の数もまばら。

ざっと見まわしてみるもヒノキの姿は見当たらなかった。

（むう、待っていてくれても良いものだが）

思わず慥然とした表情をしてしまう。（眉間に少し皺が寄った程度）

なるべくヒノキの傍に居る、と雪は約束をした。

このままでは約束を違えることになってしまう。

雪はそんなことを思った。

（ふむ、高望みのしすぎかもしれないな）

思いなおす。

『なるべくヒノキの傍に居る』

それは自分が勝手に決めたこと。

それにより相手の行動を縛るのは傲慢。何より自分にとって大切な存在にそんなことはしたくない。

それに

（友人というのは離れていても繋がっているものだからな）

『友』という字は『トモ』と読む、それは離れていても常に『共に居る』ということ。

フツ、と軽く笑う。

（だが、友人というのは一緒に色々なことをやるものだからな）
近くに居るのなら傍に居たい。

そんなことを思っ、雪はヒノキを探すことにした。

「ふむ」

吐息を洩らして、隅から隅まで視線を這わせる。

（やはり居ない、か）

ヒノキを探すどころか、既にグラウンドに残っている人間を数えるのには両の手で事足りるほど。

この場にはヒノキが居ないことが再確認できただけだった。

「むう、困ったな」

表情を一切変えずに呟く。

ヒノキを探そうにも、この場に居ないのであれば心当たりが無かった。

（まずは情報収集、だな）

チラリと視線だけを動かして辺りを一瞥する。

とりあえず近くに居る人間に聞いてみよう、と雪は手頃な人間に声をかけてみることにした。

赤いジャージを着用しているレッドの生徒が視界に入る。

（ふむ、あれでいいか）

そんなことを思っただけで雪は近くに居たレッドの生徒に近づいていった。

「その男、少しいいか」

「え、えっと、俺のこと？」

「うむ、お前だ」

「あつ、はい」

レッドの生徒が何故か顔を紅くする。

（熱でもあるのだろうか？）

雪は内心で首を傾げて、少しばかり感心した。

（ふむ、熱が出ていても体育に参加するとは見上げたものだな）
と、そんなことを思っただけ。

雪は思ったことを素直に口にした。

「君は中々根性のある人間だな」

「え、えっと、その、どうも」

「うむ、君のような人間は嫌いではないな。だが、あまり身体を酷

使用するのはいくなくないぞ」

「き、嫌いじゃない？……と、いうことは俺のことが好」

「むっ、聞いているのか？」

声をかけてみるが、レッドの男子生徒はブツブツと小声で何かを呟いていて反応がな

加えて更に顔が赤くなり、ダラ～と情けない笑顔を浮かべていた。

「うへ、うへへへ」

「ふむ、理解に苦しむな」

悪いものでも食べたのだろうか？

と、そんなことしか思い浮かんでこなかった。

（保健室に担ぎこむべきだろうか？）

少しばかり真剣に思い悩む。

熱にやられて頭がおかしくなったのだろうか？、それとも危険な毒キノコでも食べて笑いが止まらないのだろうか？

と、取りとめのないことが頭に浮かんでは消えていった。

そんな感じで思い悩んでいると、唐突に目の前に居る男子から笑いが消える。

「ハッ」

「む、何か見られているな」

急にダラダラと汗を流し始める男子生徒。

周りに居る赤いジャージを着用しているレッドの生徒と黄色いジャージを着用しているイエローの生徒から何やら負の念がこもって
そんな視線を向けられていた。

男子生徒は何やら居心地が悪そうにしている。

雪はチラリと男子生徒を一瞥した。

（ふむ、そういえばこの男は熱があるんだったな）
情報を思いだして納得する。

おそらく目の前に居る男子生徒は体調が悪いのを我慢して体育に参加をしたのは良かったが、体調が悪かったせいで授業では活躍するどころかチームの足枷となってしまうたのだろう。

（今、ここで掃除をしているのもその一環ということか）
哀れなものだな、と雪はそんなことを思った。

男子生徒の肩をポンポンと叩く。

「挫けるな、強く生きるんだぞ」

「えー、その、よくわからないけどありがとう」

意味が良くわからないというような怪訝な表情を浮かべながら、
礼を言ってきた。

肩が叩かれるのを見て、負の視線が更に強くなる。

男子生徒は更に居心地が悪そうな表情を浮かべた。

「それで、俺に何の用があるのかな？」

「む、そうだったな。ヒノキが何処に居るか知らないか？」

「え？ヒノキって、柳ヒノキ？」

「うむ」

首を縦に振って肯定する。

男子生徒は露骨に残念そうな表情を浮かべた。

「どうかしたのか？」

「いいえ、何でもありません……くっ、結局俺なんてこんなもんか」

ちくしょう、と涙声で悔しげな声を洩らす男子生徒。

（解せない状況だな）

雪には意味がわからなかった。

「それで、ヒノキが何処に居るのか教えてくれないか？」

「ああ、あいつなら十代達と一緒に三沢についていったよ」

露骨にトーンダウンした声で返答が返ってくる。

男子生徒はガツクリと肩を落としていた。

（体調の悪さを今の今まで我慢していたのだろうか）
大した根性だ、と少しばかり感心する。

「ふむ、すまないな。もう掃除に戻ってもいいぞ」

「ああ、うん、わかったよ。それじゃ」

「うむ、助かったぞ、感謝する。養生するんだな」

男子生徒はトボトボと掃除に戻っていった。

今まで負の視線を送っていたオシリスレッドの生徒たちから何かを言われているのが目に入る。

（悪いことをしてしまったな）

結果的に掃除を少しの間サボることになってしまったからそのことで文句を言われているのだろう。

雪はそんなことを思って、少しばかり罪悪感を感じた。

「ふむ、それにしてもヒノキは三沢と一緒に居る、か」

手に入った情報をポツリと呟く。

三沢というのは確か入試のときに実技試験の受験番号が1番だった男。

（確か、ヒノキの知り合いだったか）

おぼろげな記憶を辿って情報を整理する。

顔が良く思い出せないが、ヒノキと話をしているのを見かけたことがあった。

とはいえヒノキが三沢と一緒に何をしているのか、何処に居るのかは良くわからない。
情報が足りなかった。

「むう、困ったな」

「柳ヒノキなら三沢の部屋でペンキ塗りをしているんじゃないかな？」

唐突に声をかけられる。

顔を上げるとそこには黄色いジャージを着ている生徒が笑顔を浮かべて立っていた。

いきなり何だ？とか、そんな些細なことはどうでもいい。
とても重要な情報が手に入った。

「君が言っていることは本当か？」

「うん、さっきのやり取り一部始終を全て聞いていたよ。昨日、僕が三沢の部屋をチラッと見たら壁が数式で埋め尽くされていたからね。きっとそれを塗り潰す手伝いでもしているんだよ」

「ふむ、成る程」

男子生徒の言葉を聞いて納得する。

事前に手に入っていた情報によるとヒノキは十代達と一緒にのと。

つまりヒノキは友人と一緒に、知り合いの為にペンキ塗りをして
いるのである。

部屋が数式で埋め尽くされるような事態というのが釈然としない
が、それは些末なことだった。

（私もラーイエローの寮に行くか）

何ともみずくさい。

一声かけてくれれば手伝いに行ったのに、とそんなことを思っ
て雪はイエロー寮に行くことにした。

「うむ、助かったぞ。感謝する。では私はこれで」

「ちょっと待って」

去ろうとしたら何故か男子生徒に呼び止められる。

「む、何だ？」

「君、美上雪さんだよな？」

「いかにもその通りだが」

「三沢の部屋に行った柳ヒノキなんか放っておいて、僕とデートを
しないか？」

笑顔を浮かべてデートをしないかと誘ってくる男子生徒。
雪には意味がわからなかった。

「デート?……ふむ、成る程”date”か。意味がわからんな、そんなことよりもさっさと掃除に戻った方が良いと思うぞ」

「さ、3秒で振られた!? しかも、そんなことよりもって」

「それにヒノキは私にとって『なんか』などという言葉では済ますることが出来ないかけがえのない存在だ」

「ぐう、う、うおおお」

ガクリと男子生徒が打ちひしがれるように力なく地面へとくずおれる。

「むう、よくわからんが私はもう行くからな」

「くっ、うおおお」

「ふむ」

声をかけてみても呻きを洩らすだけで無反応。

とりあえず言うことは言ったので、雪は踵を返してイエロー寮に向かうことにした。

(“date”、確か英語でナツメヤシの実という意味だったな)

つまりあのイエローの男子生徒が言っていた言葉を訳すと

『僕と”ナツメヤシの実”をしないか?』

ということになる。

やはり意味がわからない。

ナツメヤシの実をする、とは一体どのようなことをするのだろうか？

そんなことを疑問に思いながら雪はグラウンドから歩き去った。後ろから怒声のような叫び声が響いてくる。

『キッサマー！ナンパをするとは非モテ系男子の風上にもおけん！』

『この裏切り者めッ！』

『俺たちは一生独身でバレンタインデーを共に男だけで過ごすと言ったはずだろうが！』

『し、仕方ないだろ！確かに僕はモテないさ、だけど……それでも！可愛い子とイチチャイチャしたいって夢を捨て切れなかったんだよーっ！！』

悲痛な叫び声が辺りに木霊して、それ以降は何も聞こえなくなっ

た。
もう既にグラウンドからは結構な距離があるので、もしかしたら叫ばずに普通の声量で会話をしているだけなのかもしれない。

（喧嘩をするほど仲が良い、という言葉があったな）

羨ましいものだ、と雪は軽く笑った。

喧嘩はしたくないが自分もヒノキとそれくらい仲良くなりた。

フツと軽く笑ってからいつもの無表情に戻って、雪は歩き続けた。

しばらく歩き続けると、雪は用具倉庫のあたりで妙な光景を目撃した。

オベリスクブルーのコートを身に纏っている女生徒がある一点の状況を伺いながら身を隠している。

「あれは、ヒノキの姉上だな」

特徴的な恰好なのですぐに人物を特定することが出来た。

特にゆらゆらと揺れている金色に染められた髪の穂先が特徴的で遠目からでも即座に判別できる。

（何をしているんだ？）

素朴な疑問が頭に浮かんだ。

司が見ている方向に目を向けるとサングラスをかけた教師が大きな旗を持って立っている。

その旗には大きな木が描かれていた。

「あの樹木はヒノキ、か？」

絵だと判別がしづらいので語尾が疑問形になってしまう。

ヒノキ、それはヒノキ科ヒノキ属の針葉樹。

雪は入学試験のときにヒノキ（人）のデュエルを見て、ヒノキに興味を持ったときに『確か、こんな木があったな』と調べたことがあったので良く覚えていた。

そのヒノキが描かれた旗を持った教師と、それから身を隠して状況を伺っている司。

一見しただけではどういふことなのか理解することが出来ない。

百聞は一見に如かず、という言葉があるが

(聞いた方が早いではないか)

益体も無いことを考えて、雪は司に近づいていった。

「何をしているのだ姉上？」

「んっつ！」

呻き声を上げて肩をビクツと揺らす。

集中しすぎて近づいたことに気が付いていないようであった。

司がバツと勢いよく顔を振り向かせる。

声をかけてきた人物を確認してホッと安堵するような表情を浮かべた。

「はあ、教師じゃなかったか。危ない危ない」

「むう、それで何をしているのだ姉上？」

「えっ？あ、あんた確かヒノキの近くに居た女だっけ？」

頭をパリパリと掻きながら、如何にも面倒くさそうな声を上げる。こちらには何の興味も無いというような仕草だった。見ようによっては失礼と見られる態度。

（それだけ事態が切迫している、ということか？）

雪は司の隣にしゃがみ込んで少し思案した。

自分に起こっている事態が危急のもので他のことには気を払うことすら出来ないのかもしれない。

目の前に居る人物はヒノキの姉上である。ならば力になるべきだ、なにせヒノキと親しい人間なのだから。

雪は司の力になることを決め、気を引き締めた。

「して、姉上。何か困り事でもあるのだろうか？」

「ん、まあ確かに困ってるなあ。えーと、あんた何て名前だった？」

「むっ、私の名前は」

「まあ、別にいいや。どうでもいいし。とりあえずあれを見なさい」

自己紹介を遮って司が前方に居るサングラスをかけた教師を指差す。

人の名前というものは良好な人間関係を構築するのに極めて重要なもの。

それすらどうでもいいと切って捨てる。

（よほど切迫した事態のようだな）

雪は更に気を引き締めた。

司が指差した教師は何かを待ちかまえているかのように旗を手に持ち、顔をキョロキョロと動かしている。

「あの教師が持っている旗」

「ふむ、ヒノキが描かれている、あの旗のことか」

「そう、あれはあたしが長時間休憩すら挟まずに作り上げた渾身の力作なの」

「ふむ、成る程」

雪は司の言葉に頷きながら想像をした。

食事の時間すらも惜しみ旗に絵を描き、寝る間すら惜しんで細心の注意を払い極限まで神経を研ぎ澄ませて色分けをする。

何日も何日も没頭をし続け完成させた渾身の力作。それは周りで見た人がどんな評価を下そうとも魂がこもった一品。

完成した時の達成感、感動が一体どれほどのものであったか想像することすらおこがましい。

そんな唯一無二の物なのだろう、と雪は真剣な表情で考えた。

「止むに止まらない状況であれを置き去りにしてしまっただけど、あれを何とかして取り戻したいの」

「ふむ」

「それだけだから。聞きたいことはもう聞いたでしょ？もう帰っていいから」

「むう」

司の言葉を聞きながら旗を見据える。

サングラスをかけた教師が手に持っているヒノキが描かれた大きな旗。

その旗は大変な労力で作り上げられた代物で、唯一無二にして魂のこもったかけがえのない大切なもの。

そんな物を失うのはどれほど辛いことだろうか？

そのつらさは筆舌に尽くしがたいものに違いない。

雪はスツと音を立てず静かに立ちあがった。

「話は全て理解した。私が取り返してくる」

「へ？」

意味がわからないとでも言うように司がポカンと口を開けて呆然とする。

「んゝ、と……取り返してくるって、あの旗を？」

まるで不思議なものでも見るかのような表情で疑問を口にする司。その声音は事態を説明しているときの真剣で重苦しいものとは打って変わって、柔らかいものと化していた。

質問に対して一度首肯してから言葉を紡ぐ。

「うむ、姉上にとって大切な物なのだろう？」

「うーん、確かに出来ることなら持ちかえりたいけど」

「うむ、だから私が取り返してくる。第三者であれば姉上よりは容易に事が運べるはずだからな」

「んー、おかしいな……今までだったらヒノキ以外はまともに話すらしないで居なくなったのに」

「むっ？よくわからんが行ってくるぞ」

ブツブツと小声で呟いている司に告げて、雪は司が身を隠している用具倉庫から躍り出た。

目標はただ1つ。教師の手に渡ってしまった旗の奪還。

しっかりと目標を見据えて一步一步、慎重に歩みを進めた。

距離は未だ随分と離れている。

サングラスをかけた教師は何も気が付いた様子は無かった。それどころか長時間立っているせいか集中力が切れかかっており暇そうにしていた。

（さて、どうするか）

慎重に音を立てずに接近しながら目標の状態を観察する。

奪還目標である旗は教師の右手に握られていた。だが、力いっぱい握りしめているというわけではなかった。

旗の持ち手は随分と長く末端部分は地面に接触しており、そこを支点にしてかろうじて指に引っ掛かる程度の今にも地面へと落としそうな非常に力が入っていない持ち方。

おそらくひったくりのように後ろから強引に掠め取れば容易に持ち去ることが出来るであろう。

だが、それはあくまでも強行策。

実行をすれば後々問題にもなる上に、確実性に欠けていた。
ジッと教師をよく観察する。

「……目を狙うか」

雪は小声で呟いて作戦を決めた。

瞳に映っているのは教師がかけているサングラス。

サングラスを長時間かけていれば、その状態に目が慣れる。

そこでサングラスをいきなり外して、急に太陽光の下にさらせば
目が眩んで多少の隙が出来るはず。その隙に旗を奪還すれば犯人の
姿は目が眩んでいるせいで見る事が出来ないという寸法。

（うむ、これでいこう）

おあつらえ向きにすぐ近くに白球がコロコロと転がっていた。

距離も十分、教師は未だに気付いていない。

雪は地面に転がっている白球を拾い上げ、狙いを定めた。

狙いはただ1つ、白球でサングラスを弾く。

雪は極限まで集中して大きく振りかぶった。

「フッ、っ！」

短い呼吸と共に渾身の力で腕を振り下ろす。

全身全霊を込めた全力投球。

寸分の狂いも無く飛んでいった白球は穿つようなスピードで一直
線に飛んでいき、急に頭を動かした教師の後頭部に直撃した。
バタリと呻き声すら洩らさずに教師が地面に倒れ伏す。

「……むう、しまった」

雪は想定外の出来ごとに呆然と呟いた。

倒れ伏している教師の元へと近寄っていく。

当たり所がわるかったのか、教師はピクリとも動かない。どうやら気絶しているようであった。

衝撃で外れたサングラスがうつ伏せで倒れ伏している教師の近くに転がっている。しかもサングラスはところどころ割れていたり、ひびが入ったりしていた。もはやその機能を存分に発揮することは出来ないであろう。

「むう、結果的には好都合だが。まさかこんなことになるとは」

ポツリと呟いて、雪は今しがた教師をノックアウトした白球を拾い上げた。

「……しまった、硬球だったか」

えらいことになってしまった、と直感的に感じる。

とりあえず教師の手首を持って脈拍を確認。

（よし、問題ないな）

ウン、と一度頷く。

脈はあるから大丈夫だろうと判断して、雪は地面に転がっている旗を手にとって司の所に戻ることにした。

後で倒れ伏している教師には匿名で菓子折を送っておこう、と微かに罪悪感を感じながら。

ゆったりと歩きながら司が身を隠している用具倉庫まで戻る。

大量に置かれている用具の隙間から顔を出している司の顔をどこか呆然としていた。

「無事、取り返してきたぞ姉上」

「……ほ、本当に取り返してきた」

「うむ」

奪還してきた旗を手渡す。

司はまるで信じられないものでも見たかのような表情でのろのろと旗を手にとった。

じつくりと確認するように凝視して、両手で色々なところを掴んで確認まで始める。

無言。しばらくの間、司は何も言葉を発さなかった。

何を考えているのかは分からなかったが、雪もただ黙って待ち続ける。

やがて手が止まり、しっかりと瞳を見据えてポツリと司が言葉を発した。

「……名前」

「むっ？」

「あんたの名前は何て言ったっけ？」

一度はどうでもいいと切って捨てたものを再び聞いてくる。
雪は口元に若干の笑みをたたえながら、一字一句聞き間違えることが無いようにしっかりとした声で名前を口にした。

「私の名前は美上雪、だ姉上」

「……ん、そう、よく分かった。美上雪っていうの」

小さな声でもう一度だけ確かめるように口ずさむ。
そして、一度だけ目蓋を閉じてウンと頷いてから司はスツと立ちあがる。その表情はどこか晴れ晴れとしていた。

「さてっと、それじゃああたしはヒノキの所にでも行くかな」

「むっ、姉上もか。ヒノキは三沢という男の部屋でペンキ塗りをしているらしいぞ」

「ん、そっか。行先は同じところ、か」

ハハ、とどこか苦笑するように声を洩らして手に持つ旗を肩に担ぐ。

そして、笑い飛ばすように一回だけ軽く鼻で笑ってヒマワリのような明るい声で言葉を紡いだ。

「それじゃあ、一緒にヒノキの所に行こっか雪ちゃん！」

「うむ、では参ろう姉上」

コクリと首を縦に振って頷く。

明るい声、キラキラと輝くような楽しげな何処までも純粹な空気を身に纏って名前を呼んでくれること。それが旗を取り返してきたことに対する代価であるように感じられて少し良い気分になった。
.....

「ふむ」

昼間のことを思いだして吐息を洩らす。

（そういえば、昼間のとき姉上は礼を言わなかったな）
そう思っって雪は納得した。

『昼間のことは感謝してる、悪かったね』

という言葉は旗を取り戻してきたことに対し、改めて礼を言いたかったのかもしれない。

（姉上は随分と几帳面だな）

フツと軽く笑って、チラリと隣を歩く司を見つめた。

「ん、どうかしたの雪ちゃん？」

「むっ、何でもないぞ姉上」

答えてから視線を外す。

礼ならば既に貰っていた。

今こうして2人で並んで食堂へと向かっていること、親しげに名前を呼んでくれること。それは新たに繋がった絆の証にほかならないのだから。

正面玄関に繋がっている大きな吹き抜け。

周りには誰一人として人の姿は見受けられない。

ヒノキは階段を降りながら安堵の息を吐いた。

「ふう、後は玄関から脱出するだけか」

吐息と共に肩の力を抜いてリラックスする。

階段へと至るまでの道のり、それほど長いものではなかったが精神的にはかなりつらかった。

幸い明日香とすれ違った以降は誰とも出くわさなかったのだが、急に扉から誰かが出てくるのではないか、とか曲がり角から誰かが来るのではないか、と不安要素が幾つもあり上げればキリがないほ

ど。

片時も気を緩めることが出来なかった。

(でも、それももうすぐ終わりだ)

身体が不思議な高揚感に包まれる。

遂に見えてきた希望の光、ゴールインはすぐそこだった。

正面玄関からはもはや10数メートルと離れていない。

近づいてきた終わり、歓喜に奮えるかのように全身に力が漲ってきた。

最後の段を降り、完全に一階へと降り立つ。

達成感、これで長かった苦難の道も終わりだと思おうと顔が自然と笑顔になった。

「へ、へへ、これで解放されるんだな。何とか退学にならずに済む、な」

万感の想いを込めて言葉を紡ぐ。

レッド寮へと帰って夕食を食べて、布団に入って寝る。普通すぎるほど普通の日常、だけどそれは今の状態からするとこの上なく幸福で平和な未来。

「さて、帰るか」

自分の居るべき場所へと帰るべく歩みを進める。

一步一步足を動かすたびに確実にゴールへと近づいていく。もはや門までの距離は数メートル。

その矢先、ヒノキの視界に高級そうな壺が映った。

「……」

ピタリと無言で足を止める。

何も音がしない静寂に包まれた空間。

さっきまでしっかりと見据えていたゴールは既に視界の外、ヒノキは壺だけを視界に納めて見つめていた。

何か気になる。

（……どうせもうすぐ出られるんだし、少しくらいなら別にいいか）
今の機会を逃したら壺を目の当たりにする機会は二度と訪れないかもしれない。

そう思っ、ヒノキは最後に近くで壺をじっくりと見ることにした。

誰も居ない部屋の中。

『あれ？』

エフェクト・ヴェーラーは訝しげな声をあげて、辺りをキョロキョロと見まわした。

反省会も十分にやって、意を決して出てきたのだが主の姿が見当たらない。

それどころかエフェクト・ヴェーラーが今居る部屋は全く見覚えのない部屋だった。

『いったい、どういうことなのでしょう？』

自分が姿を消している間に何が起きたのだろうか？

エフェクト・ヴェーラーは首を傾げた。

基本的に精霊というのは自身のカードがあるところから姿を現すことが出来る。

だからこそ、近くに主が居ないことはおかしいことであつた。

主は基本的に外へ出るときはデッキを肌身離さず持ち歩いている。腰のベルトにデッキケースが付いているから。

デッキケースを外す時は、体育などでジャージに着替えている時や、部屋に帰って風呂へと入る時くらい。

エフェクト・ヴェーラーは再びキョロキョロと辺りを見回した。

やはり見覚えが無い部屋。

ならば主がデッキケースを外すわけがない、姿を現わせば主が傍に居るはずなのだが……

『もしかして、わたしが知らない間にお引越しをしたのでしょうか？』

顎に右手の人差し指を当てて考え込むエフェクト・ヴェーラー。

ポツリ、と呟いては見たものの何か違うような気がした。

思いだしたのは、前に行われた月一テストのこと。

主はデュエルに勝利し昇格をすることが出来たのに、それをしな

かった。

そんな主がそう簡単に引越しをするわけがない。

ならば、どうして自分は一人ぼっちで知らない部屋に居るのだろうか？

そこまで考えて、エフェクト・ヴェーラーの視界にある物が映った。

部屋の隅にデッキケースが付いたベルトが無造作に転がっている。まさか、とそんな思いに駆られてエフェクト・ヴェーラーは慌ててその場所へと飛んでいった。

デッキケースの表面は白に染まっている。

『これ、はマスターの、デッキケース』

エフェクト・ヴェーラーには一目で分かった。

おそらく表面が白く染まっているのは、自分の注意が足りなくて白ペンキの上に転んでしまったのが原因。

(マスターがこんな風にデッキを転がしておくわけがない)

主はよくデッキを眺めたり、一言だけ語りかけていたり、とそういったことをよくやっていったのを姿が見えていない時から傍でジッと見ていた。

だからこそ主は自分のデッキを、カードを大切に思っていることがよく分かる。

ならば、今の絶対的におかしい状況はどういうことなのか？

少し考えて最悪の想像が頭をよぎった。

昼の出来事で気を悪くし、見知らぬ部屋にデッキを捨てていく。そんな想像が。

『はわ、はわわわわっ。わ、わたし捨てられちゃったん、ですか？』

全身に絶望感が駆け巡る。

エフェクト・ヴェーラーはペタンと力なく床に座り込んだ。

目の端に涙が溜まっていき、声が震える。

『やっと、話せるようになったのに……やっと、気付いてもらえたのにっ！』

捨てられてしまった。

楽しくお話をしたい、他愛のない冗談を言い合えるほどに仲良くなりしたい、笑顔を向けて欲しい。そんな願いはもう叶わない。

失ってしまった。

たった一度の失敗。

それにより、これから訪れるはずのキラキラと輝く宝石みたいな、長い間待ち望んでいたかけがえのない時間を無いものにしてしまった。

主の笑顔が浮かんでくる。

『あううつ、お話したかったですマスター』

色々なことを話したいと思っていた。

幾らでも相手になってやるさ、と笑顔で紡がれた言葉。

その言葉に思いを馳せた。

どこでお話ししようか？どんなお話をしようか？どんな顔で聞い

てくれるだろうか？笑顔は見せてくれるだろうか？

主の笑顔に、輝く一時を夢想した。

でも、そんな時間は来ない。

注意力の無さ、自らの怠慢によりかけがえのない大切なものを失ってしまった。

『……マスター』

もはや、いじいじと床にのの字を書く気すら起きない。

押し寄せてくる絶望感に、エフェクト・ヴェーラーの瞳から溢れる涙が零れ落ちそうになった。

その瞬間、ガチャリと扉が開く。

「いやー、いっぱい食べたなあ。何か眠くなってきちゃったなあ」

『っ！』

エフェクト・ヴェーラーは慌ててゴシゴシと細い腕で涙を拭いた。

部屋へと入ってきた人物が「ふぁーあ」とあくびをする。

聞き覚えのある声。

エフェクト・ヴェーラーは振り向いて部屋に入ってきた人物を確認した。

「んー、ねむ。何か一気に暇になっちゃったなあ」

眠たげに目をゴシゴシと擦っている。

その身体はオベリスクブルーのコートに包まれており、長い髪の毛の先端は金色に染まっておりユラユラと揺れていた。

『あれは、司さん？』

思わぬ人物の姿に目を白黒させてしまう。

エフェクト・ヴェーラーはもう一度だけ辺りを見回した。

『ということは、ここは司さんの部屋……ですか』

確認するように呟いて、少しホッとする。

見知らぬ人の部屋ではなく、知っている人の部屋だった。

それだけのことで少しばかり心が軽くなる。

もしかしたら何か事情があったのかもしれない。

そう思って、エフェクト・ヴェーラーは司の元へと飛んでいった。

『司さん！えーと、マスターがどこに居るか知りませんか？』

「んー、ご飯のあとはお風呂の時間だったっけ？」

司は眠たそうにしながら時計の方へと目を向けている。

そして頭をパリパリと掻きながら、面倒そうに1つ息を吐いた。

「ふう、何かかたっ苦しいなあ。こういうのはちよつと面倒だなあ」

『……』

まるで部屋の中には誰も居ないかのような仕草。

エフェクト・ヴェーラーは主に自分の姿が見えていない時のことを思いだして、床にのの字を書きそうになった。

司が眠気を振り払うように頭を振る。

「んゝむ、そういえばヒノキはうまく脱出できたかな？」

『脱出？ ということですか？』

「簡単に帰すんじゃないかな、何かつまんないし。せめてヒノキの女装姿を写真に撮っておくんだったな」

司は自らの行動を悔いるかのように肩を落とした。

相変わらず声をかけても反応が無い。

けれど分かったこともあった。

どうやら主は女装をしてこの場所から脱出しようとしているらしい。

とはいえ分かったことがあっても、一番の疑問は分からないままであった。

何故、主は自らのデッキを持たずに脱出をしようとしているのか？

情報が足りない。

エフエクト・ヴェーラーは首を傾げた。

「ん？何か落ちてる」

隣で首を傾げているのを尻目に司が何かに気付いたような声を上げる。

そして、司は部屋の隅に落ちているデッキケースを拾い上げた。

「表面が白い柄になってる」

『えっと、それマスターのデッキケースです』

「こんなのあたし持ってたっけ？」

司が首を傾げる。

やはり姿が見えていないようであった。

少し前のことを思い出していいじいじしそうになる。

だが、エフエクト・ヴェーラーはこらえた。

伊達に主から無視されていた過去を持っているわけではない。

その時のことと比べたら、これくらい何ともなかった。少しばかり涙目にはなっていたが。

表面が白く染まっているデッキケース、それを持ちながら司が思案をする。が、すぐに諦めて司は単純かつ明快な手段を取った。

「中を見るのが一番手っ取り早いよね」

そう呟いて、デッキケースを開けて中に入っているカードを確認し始める。

まず一枚目。

「ん？白いカード？」

怪訝な声を上げる司。

エフェクト・ヴェーラーはその声に反応して、司が手に持っているカードを覗き込んだ。

『あつ、ジャンク・ウォリアーさんですね』

無論、声など聞こえていない司はテキスト欄をじつくりと見つめた。

「戦士族・シンクロ／効果……ん、シンクロ？」

何かを思いだすようにポツリと呟く。

今までに見たことが無いカード・シンクロモンスター。それを使う人物。

すぐに思い至った司は晴れやかな表情を浮かべた。

「そっか、これヒノキのデッキか」

謎が解けたと言わんばかりに手をポンと叩く。デッキとカードを手を持ったまま。

『はわわっ、マスターのデッキをあまり手荒に扱わないでくださいっ！』

「ん？でも、何でヒノキのデッキがこんなところに」

『……ううっ』

エフェクト・ヴェーラーは慌てて注意をしたが、そんなものはどこ吹く風。

司は怪訝な表情で唸りながら再び思索にふけりはじめる。

無視をされると昔のことが思い出されて落ち込みそうになる。しかし、エフェクト・ヴェーラーはこらえた。

確かに主が気付いてくれなかった時間はつらく寂しいものだったが、その時間が、その記憶が、同時に強さを与えてくれているのである。

それに落ち込んでいる時間はなかった。

何故、主のデッキが転がっていたのか？

一番知りたかったことが分かるかもしれないのだから。

エフェクト・ヴェーラーは一言一句も聞き洩らさぬように耳に神経を集中させて、司の方をじっと見つめた。

「ん」

『……』

「んっ」

『……………』

「まっ、いっか」

『って、よくないですっ！ちゃんと考えてください！』

思わず突っ込みを入れてしまう。

無論、聞こえてなどいない司は晴れやかな表情で手に持っているデッキのカードを見始めた。

「どうせ、明日ヒノキに渡せばいいだけだもんねえ」

軽い口調で呟いて、司はジャンク・ウォリアーをしまつて2枚目のカードを見る。

どうやら今は自分が見たことのないカードの方が気になるようであつた。

結局、どうして主のデッキが転がっていたのかは分からずじまい。エフェクト・ヴェーラーは少しばかり慚然とした表情を浮かべたが、司の軽い口調に安心もした。

明日になれば主に会える。

どうやら捨てられたわけではないらしい。

事情は明日、主に聞こう。

そんなことを思っ

て。司の声が部屋の中に響く。

「ん」と、ターボ・ウォリアーね。レベル6以上のシンクロモンスターに攻撃をするときそのモンスターの攻撃力を半分にするねえ、発動する機会あるのコレ？」

怪訝な表情を浮かべて首を傾げた。

それは返答を必要としないただの独り言。

エフェクト・ヴェーラーは寂しいと思った。

近くに主が居ない状況。それどころか自分のことが分かる人が1人も居ない。

たまらなく寂しかった。

『マスター……今、どこに居るんですか？』

「それにしても、このカードまるで昔の不良みたいじゃないの。あつはつはつはつは」

呟いた言葉は笑い声にかき消される。

その笑い声は本当に楽しそうで、愉快そうで、聞いているとエフェクト・ヴェーラーは更に寂しくなってきた。

（早くマスターに会いたい）

二人っきりの一人ぼちな部屋で、強く想った。

正面玄関の近く。

ヒノキは高級そうな壺を前にして満足げに息を吐いた。

「おおく埃も取れて見栄えもいい感じになったな」

タオルを片手に持って、ウンと一度頷く。

ヒノキは今の今までずっと高級そうな壺をせっせと磨いていた。

割れ物にはあまり手を触れたくないのか、掃除が行き届いている女子寮の備品としては意外にも汚れが溜まっていたのである。

タオルは自分の制服を詰め込んだ袋の底にあったのを引っ張り出して使用していた。

少しだけ壺から距離を取ってじっくりと鑑賞する。

（うーん、こうやって見ると綺麗になる前に比べてますます高級そうに見えるな）

中々の逸品だな、とそう思ってニヤリと笑った。

磨くのに多少時間がかかってしまったのだが、それだけの手間をかける見返りがあったというもので頑張ってよかったとすら思える。十分に鑑賞もし終えて、もう一度近くに寄って埃は無いか確かめることにした。

細かな装飾や窪んでいる部分に埃が残っていないかじっくりと見て確かめる。

（うゝむ、少し埃が残っている、かな？）

最後の仕上げとばかりにタオルでゴシゴシと見えない部分や既に磨いた部分も拭いていく。どうせなので最後まで徹底的に磨き上げたかった。

細部の埃や窪んでいるところまでしっかりと磨き、最後にじっくりと見て最終点検をする。

（……よし、完璧な仕上がりのだな）

スーと指を動かして見ても全く埃が見当たらない、完璧な仕上がりのだった。

やり終えた達成感を感じ、満足げに壺から離れる。

（これで心おきなくレッド寮に帰ることが出来るな）

ウンと頷いてヒノキは1つ息を洩らした。

「ふう」

「随分と熱心に磨いておりましたわね」

「っ！」

いきなり後ろから声をかけられ、ビクッと肩を揺らしてしまう。

ヒノキは勢いよく振り向いて声をかけてきた人物を確認した。

「ごきげんよう、でございますわ。あなたにはこの壺の価値がお分かりになるのですわね」

「確か……海野幸子、さん」

「あら、わたくしの名前をご存じでして」

「はい、まあ存じております」

喉がひきつるような裏声で応対する。

ふわりと広がるようなボリュームのある青色の髪、大きな白いリボンが側面に二つついているカチューシャ。

ヒノキは目の前に居る人物に見覚えがあった。

（確か、典型的なお嬢様だったよなあ）

それなりに広い部屋でさえクローゼットと言い切ってしまうようなお金持ち。

まだ夕食の時間であるはずなのに何故こんなところに居るのだろうか？

素直な疑問が頭に浮かぶ。

（面倒なことになったなあ）

そう思って、ヒノキは心の中で焦った。

「あなたの名前をお聞きしてもよろしくて？」

「え、あゝ、柊ケヤキです」

「そう、柊ケヤキとおっしゃいますの。まるで樹木のような名前ですわね」

疑いもせずに偽名を受け入れる海野幸子。

ありがたいのだがヒノキは思わず微妙な表情をした。

昔に自分の名前について言われたことと全く同じ台詞。

明日香のときに咄嗟に名乗った名前だったが、もう少し違う名前にしておけば良かったと後悔した。

海野幸子は満足げな表情で壺を眺めている。

「それにしても、綺麗に磨き上げたものですわね」

「はい、まあ少し気になったものでして」

「そうですよ、良い心がけですわね」

「はあ、どうも」

当たり障りのない無難な返事。

正直なところ、早く立ち去ってほしいのだが面倒事にはしたくないのでそんな本音を言うことは出来ようはずもなかった。

（早く脱出したいんだけどなあ）

はあ、と溜息の1つも吐きたくなる。ほぼ自業自得ではあるが。下降していく気分とは対照的に海野幸子は満足げな表情で一度頷いて得意げな笑みを浮かべた。

「ふふん、柊ケヤキ。あなたは良い目をお持ちになっておられますわね」

「へ?」

思わず怪訝な声を上げてしまう。

（視力は至って普通のはずだが）

両目ともに1, 0くらいはあったよね？

と、あまり覚えていない視力検査の結果を思いだして憮然とした。

「標準的な至って普通の目だと思いますけど」

「あら、謙遜ですの？随分と奥ゆかしい方ですわね」

おーほっほっほっほ、と口の横に手を当てて上品に笑う。

それは思わず惚れ惚れとするほど典型的なお嬢様の笑い方だった。
ひとしきり笑って、壺をビシッと指差す。

「いいこと、あの壺はわたくしの見たてによりますと我が家の家宝でもある壺と同系統の物」

「……ということはあの壺は」

「そうでございますわ。軽く見積もっても数億は下らない価値がつくはずですわ」

「っ！」

言葉を聞いてヒノキは思わず目を見開いた。

（数億？）

諭吉さんが1万人ですか？、とあまりの価値に思わず壺を見いつてしまう。

(……壺を売ったら本当に遊んで暮らせるかもしれないな)

最初に壺を見た時に思ったことはあながち間違っていないようであった。

「あら、何を驚いていらっしゃるの？」

「へ、あつ、いえ、本当に高価なものだと分かってビックリしていたといいますか」

「そうです。今の今まで半信半疑だった、ということですよ」

少しズレたことを言ってウンウンと満足げに頷く。

「はっきりとは分かっていなくても、無意識の内ではこの壺が高価なものであると気付いていたということですよ」

「はあ」

「あなたの目利きは本物ですよ、わたくしが保証いたします。あなたは良い目を持っていますわ」

「えっと、どうも」

「それにしてもあなた随分と力を入れて喋りますけれど、高貴なわたくしを前に話をしているからといってそこまで緊張なさらなくてもよろしいですよ？」

「いえ、人見知りなものでして」

さらりと言い訳を言ってヒノキは視線を逸らした。
思わず苦笑の1つもしたくなる。

海野幸子は何やら不満げであったが、少しでも力を抜いて喋った
ら裏声では無くなってしまうので無理な注文だった。

「ところで、えーと海野さん」

「何ですの、改まって？それと何だかよそよそしい感じがして落ち
着かないので名前と呼んでくださるかしら」

「あっ、はい。じゃあ幸子さん、今は夕食の時間なのにどうしてこ
んなところに居るんですか？」

裏声で一番最初に感じた疑問を口にする。

海野幸子はあからさまに不思議そうな表情をした。

「あなた、何を言ってますの？夕食の時間はとっくに終わっていま
すわよ」

「え？」

意味のない呻きが口から洩れる。
ヒノキは自分の耳を疑った。

海野幸子が不思議そうな表情のまま左腕につけている腕時計を見せてくる。

「ほら、これを見なさい」

「……あ、は、嘘？」

渴いた笑いが出そうになるのを何とかこらえて、呆然と呟いた。
目の前が真っ白になりそうなくらいの衝撃が走る。

時計の長針は、この女子寮を脱出するために姉貴の部屋から出た時刻から一時間が経過していることを示していた。

ぐうううううううう

大きな腹の音が人気のないホールに鳴り響く。

「あら、随分と大きなお腹の音ですわね」

「……そっかあ、どうりでお腹が空いたなあ」と

「あなた、もしかして食事もとらずにずっと壺を磨いていたんですの!？」

「はい、そういうことになります」

「幾らなんでも壺を磨くのに集中しすぎですわ」

はあ、と呆れるように溜息を吐く海野幸子。

何も言い返せない。

ヒノキとしても予想外のことだった。

元々は本当に少しの時間だけ壺を近くで見ただけのつもりだったのが、壺が汚れているのに気がつき、それから一時間近く壺を磨くのに熱中してしまったらしい。

こんなことならさっさと脱出しておくんだった、と心の中で後悔した。

(……あれ？夕食の時間が終わっている、ということは)

気が付いてハッとする。

『夕食の時間が終わっている』ということは、つまり生徒は自由に動き回っても良い時間。

(まずい)

たらり、と汗が一筋流れる。

モタモタしていたら誰かがこの場所にやってくるかもしれない。

海野幸子が立ち去ってからゆっくりと扉から出ていこうと思っていたが、そこまで悠長にしている場合ではなかった。

辺りをキョロキョロと見渡す。

「あなた、何をしておりますの？」

「え、いや、夕食が終わっているにしては誰も通りかからないなあ
と思ひまして」

誤魔化すための言い訳をしつつも作業は続行。

幸い辺りに人の姿は見当たらなかった。

海野幸子はチラリと左手の腕時計に視線を移す。

「そうですわね、そろそろお風呂の時間ですわね」

確認するようにポツリと呟いて、こちらに向き直った。

「早く行かないと入れなくなってしまうわ、浴場に向かうことにしましょう」

「あ、そうですか。じゃあ、行ってらっしゃい」

「何を言っておりますの？あなたも一緒に行くんですのよ」

「へ？お……私も一緒に？」

「当然ですわ」

何を今さら、というような表情をされる。

あまりの事態に口調が元に戻りかけたが何とかこらえることには成功した。

だが、ここは女子寮である。お風呂になど一緒に行けようはずがない。

「あの、幸子さん。私ちょっと気分的にかなりつらい状況なのでお風呂は遠慮しておきます」

「あら、風邪でも引いたんですの？体調管理はしっかりとしなければいけませんわよ」

「はぁ、どうも」

ヒノキは曖昧な返事をして視線を逸らした。

（一応、嘘ではないぞ）

心の中で自分自身に言い訳をする。

自分がアホな行動を取ったせいで脱出のタイミグを逃してしまった今の状態は気分的にはかなりつらい状況だった。

一度は納得した海野幸子が怪訝な表情を浮かべる。

「それにしては、あまり体調が悪いようには見受けられませんわね」

「いえ、これはただのやせ我慢です」

「そうかしら、少し失礼しますわよ」

一言断ってから海野幸子は右手を額にあてがってきた。

ひんやりと冷たい手の感触が伝わってくる。

白くてすべすべとした綺麗な手だったが、そんなことはどうでもよかった。

額に手があてがわれているせいで、顔の輪郭を隠している前髪が少しばかり浮き上がっている。

（いかん）

男だと気付かれるかもしれない、とヒノキは心の中で焦った。

んゝ、と何かを測るように海野幸子は目を瞑って唸り声をあげる。

下手に動くとカツラが外れる危険性があったので動くことは出来なかった。

「うーん、どうやら熱は無いようですわね」

手が離れていく。

（どうやらバレてはいないようだな）

かなり心臓に負担をかける時間であった。

ホッと胸を撫で下ろす。

「熱は無いみたいですし、あなたも一緒にお風呂へと行きませんか？」

「え？」

ホッとしたのも束の間、論点が最初の地点に戻ってきた。

「あの、ちょっと遠慮したいんですけど」

「駄目ですわ。熱が無いのであれば多少の無茶をしてもお風呂に入ってしっかりと身体を清めるべきですわ。それが乙女のたしなみというものですわ」

俺、男なんですけど。

と生まれた時から変わらない事実を言うことは出来なかった。
苦笑いを浮かべることしか出来ない。

「えーと、その、本当に今日は遠慮したいんですけど」

「あなたもしつこいですわね。本当に具合が悪いのだとしても、我慢出来るのならばシャワーくらいは浴びるべきですわ。あなたも女性ならば毎日身体を清めなければ気分が悪いでしょう？」

「いえ、そんなこと言われなくても」

「さあ、急がなければ時間が無くなってしまいますわよ」

有無を言わさぬ口調。

風呂へと行くことは海野幸子の中では確定事項のようであった。

（どうするか？）

心の中で今の状況から抜け出す方法を模索する。

このまま風呂への誘いを断り続けても押し問答になりかねない、ただ時間を消費するだけ。

（少し強引だけど、仕方がないな）

溜息の1つも吐きたくなる。

とりあえず古典的な作戦を取ることにしてヒノキは口を開いた。

「幸子さん」

「何ですか？ 諦めてお風呂へと行く気になりました？」

「いえ、ちょっとあそこを見てください」

やんわりと否定してから、海野幸子が見ている方向と正反対の方向を指差す。

作戦は単純明快、指差した方向に目を向けている隙に扉から出て女子寮から離脱する。たったそれだけ。

だが、たったそれだけのことではあるが難易度はそれなりに高い。音を立てずに迅速に行動をしなければならぬ。

ヒノキは気を引き締めた。

「いきなり何ですか？」

海野幸子が怪訝な表情で訝しげな声を上げる。

当然といえば当然の反応。

「いいから、とりあえずあそこを見てください。少し気になることがあります」

「……まあ、釈然とはしませんが分かりましたわ」

渋々といった感じで指を差している方向へと顔を向けていく海野幸子。

（よし、今だ！）

意気込んで女子寮から離脱するためにヒノキは扉へと駆け出そうとした。

その瞬間、ちょうど指を差していた方向から雪が出てきた。しかも白く染まっているオシリスレッドの制服を手にとって。

「っ！」

ヒノキは慌てて海野幸子の両目を手で覆った。

「……一体、何ですか？この状況は」

「えー、目隠しですかね」

「そういうことはもっと親しい間柄の人達がやることではなくて？」

837

呆れかえったような声が返ってくる。

確かに今日初めて会った人間にやることではなかった。

（俺だったら親しい人間にもやらないけどなー、こんなこと）

益体のつかないことを考える。

雪が視界から完全に居なくなるまでは手を離すわけにはいかなかった。
った。

そのまま目隠しを続けていると海野幸子が何かに気付いたような声を上げる。

「あら？何か、背中 of 辺りに固いものが」

「っ！」

まさか、とそう思ってヒノキは胸の辺りに視線を向けた。
(くっ、しまった)

胸部に仕込んでいるリングが海野幸子の背中に接触しているのが目に入る。

咄嗟のことだったため、そこまで気が回らなかった。

「この感じからすると……この固い感触は胸の辺りですね」

「えーと、その」

大正解な分、何も言い返すことが出来ない。

「一体、何ですの？この固い感触は？」

「……実は私の胸には筋肉が詰まっているんです」

「嘘おっしゃい！そんなことがあるわけありませんわ！」

一刀両断。

苦しい言い分であったのは十分に承知していたが、即座に一蹴されるのはそれなりに心苦しかった。

(嘘では、無いんだけどなあ)

そりゃ男だから胸には筋肉しか詰まっていないさ、と下らないことを考える。服の中にリングが詰まっていたのはいるが。

幸い海野幸子が大声を出しても、雪はこちらへ一瞥もくれることなく女子寮の奥へと姿を消していった。

ふう、と1つ息を吐いてから手を離す。

とりあえず一難去ったのだが、海野幸子は訝しげな表情でこちらを見つめていた。

「色々と言いたいことがありますけど……」

「えーと、あえて黙って見過ごすという選択を取ってみませんか？」

「そういうわけには参りませんわ！」

ガツと勢いよく胸を掴まれる。

「この固い胸は何ですか？」

「うっ、これは、そのー」

非常にまずい状況。

言葉を濁すことしか出来ない。

（まずい、どうする？ どうやって切り抜ける？）

ダラダラと流れる冷汗、身体中を焦燥感が支配した。
脳裏には破滅の未来がちらつく。

（くう、出口はあんなに近いのに）

正面玄関を見つめながら心の中でグチる。物理的な距離は近いのだが、今は何よりも遠くにある気がした。

「……とりあえず手を離してもらえませんか、幸子さん。そうしたら、お話しますから」

「そうですよ、わかりましたわ」

パツと手が離れていく。

胸から手が離れていくまで、それがまるでコマ送りのように感じられた。

チラリと正面玄関へと目を向ける。

遠い、手が届かないほどに遠い所のように感じられた。

だが、それはまやかし。精神的な辛さや苦しみが実際の距離よりも遠くに見せているに過ぎない。

（出口は……いや、楽園への入り口は、近いはずなんだっ！）

心を熱く奮い立たせる。

ヒノキは全てのしがらみを捨て駆け出した。

「それで、一体どういう」

「さらばっ！」

「って、ちょっとお待ちなさい！話は終わっていませんわ！」

制止の声も振り切り、足に力を込める。

目指すは正面玄関、この心を休めることが出来ない女の園から脱け出す扉、万感の想いで待ち望んでいた苦難の果てにあるゴール。

（どうして俺は、大切なものを見失っていたんだろう）

一歩ずつ一歩ずつ着実に距離が縮まっていくな。

ヒノキは今とても穏やかで安らかな心地に包まれていた。

知らず知らずのうちに1時間も熱中してしまっていた壺磨き。

それにより脱出する機会を逸してしまった。そんな自分をアホだ
と思ってひどく後悔した。

だが同時に磨き上げることで壺を綺麗にすることが出来た、その
結果に満足している。

だけど忘れてはいけない何よりも優先すべき大切なものを見失っ
ていた、それは当初の目的。

（俺は、ここから出ていくんだ。そして、安らぎの扉を開けてピリ
オドを打つんだ！）

瞳に映っているのはゴール、それは全てに疑心暗鬼でいなければ
ならなかった苦難の迷宮の出口、そして何も警戒することが無く何
も疑わなくて良い安心感に包まれている楽園への入り口。

（ああ、もうすぐ聖域に……）
サンクチュアリ

安らかな気分に包まれながら、ヒノキは楽園への入り口に手を伸
ばした。

「だから、お待ちなさい、と言っているでしょう！！」

「っぐ！」

ガツと制服を掴まれる。

勢いのついた身体は掴まれた程度で止まることはなく腕を振り払
うことに成功したが、動きが急激に阻害されたため大きくバランス
を崩してしまった。

「うばあつ、かはっ」

正面玄関を目前にして身体を強かに打ち付ける。

リンゴが胸を押し潰し、肺の中にある空気を一気に外へと放出させた。

「ごはっ、オホッオホッ」

「だ、大丈夫ですか？今、乙女にあるまじき低音が聞こえてまいりましたが」

「も、問題ありません。気にしないでください」

バツの悪そうな顔をしている海野幸子に手を振りながら裏声で返答をする。

海野幸子は一瞬ホッとした表情を浮かべ、すぐさま取り繕うように頬を紅潮させてそっぽを向いた。

「あ、あなたが急に逃げ出すからいけないんですよ？わたくしは悪くありませんわ」

「……そうですね、すみません」

最もな言い分のため、何も言い返すことが出来ずに頷くことしか

出来ない。

「う、素直に賛同されると何だか申し訳ない気分」

「ん？何を言っているんですか？」

「いえ、何でもありませんわ！……でも、やっぱり」

手を振って大げさに否定をしてから、ブツブツと呟く海野幸子。
何を言っているのかよく聞き取れなかった。

「あ、あの柊さん」

「はい、何でしょうか？」

「あなたが転んでしまったのは、わたくしにも本当に少しだけは原因があると思わないでもないですわ」

「はあ」

「ですから、その、ご、ごめ、ごめ、なさ……」

紅潮した真っ赤な顔で口をパクパクさせる。

空回りするように口だけが動いて声は出てこなかった。

「……オホン、何でもありませんわ」

「はぁ、そうですか」

「ええ、そうですの」

この話は終わりだとばかりに海野幸子が一度頷く。

「それで、何故いきなり逃げ出したんですの？その固い胸は何ですか？」

「……」

遂にきた答えにくい質問。

ヒノキは無言のまま聞いた。

（やはり、避けては通れない道か）

一度転んだおかげで頭は冷えている。

逃亡することにも失敗した今となっては、何とかして誤魔化す以外に方法は無かった。

（こうなったら仕方ないな）

『臨機応変』こういう時の言葉だよなあ、としみじみ思いながらスツと無言で立ち上がる。

そして重々しく聞こえる感じを装って口を開いた。

「ごめんなさい、まずは先ほど逃亡しようとしたことを謝ります」

「うつ、随分とあっさり言いますのね。わたくしは気にしておりませんわ、それにそこまで真剣に謝られたら怒ることも出来ませんもの」

バツが悪そうに唇を尖らせる海野幸子。

どうやら真剣にやっているように見えているらしい。

俺の演技力も大したものだな、と思わず自画自賛したくなった。

「それで何故わたくしから逃げ出そうとしたのか、お聞きしてもよろしくて？」

「はい、出来ることなら誰にも知られなくなかったんです」

あたかも落ち込んでいるかのように俯き加減で言葉を喋る。

「本当のことを知られるのが恥ずかしくて、怖くて、つらくて、それで気がついたら身体が勝手に動いていたんです」

「そうですね、よほどその胸のことを知られなくなかったんですのね」

納得するように呟く海野幸子。

同情するように悲しげな表情を浮かべていた。

ちなみにここまで嘘だけは言っていない。意図的に重要な言葉を抜いたりはしていたが。

そりゃ変装をしている今の状態で本当のことを知られたら恥ずかしいし、退学へと一直線になりそうで怖い、そんな状態は精神的にかなりつらかった。それで気が付いたら逃げ出すために走りだしていた。

言葉に込められた意味がハッキリと伝わるとは思わない。むしろ正確に伝わってもらっては困る。

勘違いを誘発するような曖昧でばやかした言い方。相手がどのように認識するかは分からない。だが、言葉に込められた思いは本物だった。

（ここからが正念場だな）

仰々しく一呼吸置いてから海野幸子の瞳を正面から見据える。

「幸子さん、こうなってしまった以上は知られたくなかった私の秘密をお話します。この胸が一体どういうことなのか」

「よろしいんですの？逃げ出したくなるほど隠しておきたいことなのでしょう？」

「いえ、いいんです。ごく個人的なことですから」

少しばかり自虐的な笑みを浮かべて、あたかも落ち込んでいるかのように顔を俯かせて瞳を細めた。

（あと口封じもしなきゃいけないいな）

頭を十分に冷やして冷静になった今ならハッキリと分かる。

どんな些細な疑問でも残しておくわけにはいかない、どんな情報だろうと『柊ヶヤキ』が男であるという答えに辿りつく可能性があるものは排除すべきだった。例えばどんな低い可能性であろうと。

「幸子さん、話をする前に一緒に女子寮の外へと出てくれませんか？出来れば誰にも聞かれないんです」

まずは後顧の憂いを断つため真剣な表情で頼み込む。

海野幸子は深刻な表情で左手の腕時計に視線を向けた。

「……もうお風呂の時間ですわね」

独り言のようにポツリと呟く。

それきり海野幸子は時計に視線を向けたまま押し黙った。

数瞬の静寂。

海野幸子は何かを天秤にかけるように真剣な表情で無言のままだった。

（まさか、断ったりしないよね？）

焦燥感が頭の中に募っていく。

断られたら他に方法が無いので、それだけは勘弁してほしい。やがて、1つ溜息を吐いてから海野幸子が顔を上げる。

「仕方がありませんわね。元々質問したのはわたくしの方ですもの」

「それじゃあ」

「ええ、一緒に外まで付いていきますわ」

そう言って何故か不敵な笑みを浮かべた。
ヒノキはホッと胸を撫で下ろす。

あとは何とかして男だと勘付かれないような信憑性のある言い分を言えればいいだけ。

「では幸子さん。お風呂の時間が終わるまでには間に合いますので、急いで外へと行きましょう」

「そうですわね、出来ることなら手短に頼みますわ」

「えーと、それは、前向きに善処します」

「何ですの、その政治家的な発言は？」

「……細かいことは気にしないでください」

裏声で返答をしてサッと目を逸らす。

誤魔化すための作戦はほとんど固まっているが、考えているだけでも『手短に』は済みそうになかった。

海野幸子は不満げに目の端を吊りあがらせる。

「細かいことって、そういうわけには参りませんわ。わたくしはお風呂にはゆっくりと時間をかける主義なんですの」

「そうですか」

「ええ。ですから、わたくしにとっては切実な問題ですわ！」

「そうなんですか」

「あなた、わたくしの話を真面目に……って、ちょっとお待ちなさい！ わたくしを置いていっては本末転倒というものですわ！」

「いえ、早く行かないとお風呂の時間が終わるまでに帰れなくなると思いますして」

「ああ、もう！ わかりましたわ！ 黙って付いていけばよろしいんですのね！？」

半ばヤケになって叫ぶ海野幸子。

ヒノキは少しばかり苦笑を浮かべてから、思案をした。
決闘至上主義デュエルのこの世界において最も確実な口封じ。

（やっぱりデュエルしかないよなあ）

どう考えても手短には済ませられそうにない。

少しばかり申し訳なく思いながら、ヒノキは正面玄関に手をかけた。

（お風呂の時間が終わるまでには間に合わせる、って言ったけど）
もしかしたら間にあわないかもしれない、とそんなことを思いながら。

第17話《後編?》見失ってはいけないものがある、と主張したい（後書き）

デュエルを書いている途中で入りきらなくなり、デュエルの目前で分割することになりました。

この次からデュエルということになります。

それでは続けて、次回にて。

第18話《後編?》《心がこもっていれば問題ない、と高らかに言いたい》(前書き

17話に引き続き18話です。

この話でようやく前編から通した一連の話は終わりとなります。
それではどうぞ

第18話《後編?》心がこもっていれば問題ない、と高らかに言いたい

月明かりが照らす暗い夜道を海野幸子と2人で歩いていく。

周囲には木々が生い茂り、意識しなければ気が付かないほどの微弱な風によりザワザワと音を立てて葉を揺らしていた。

(こちら辺でいいかな)

女子寮から十分に離れたのを確認してから足を止める。

当然のことながら周囲に人の姿は無く、何かの拍子で話を盗み聞きされるような心配は皆無だった。

「足を止めた、ということはそろそろ誰にも聞かれたくなかった秘密について話をしてくれるのですわね？」

「はい、この場所なら何の心配も要りませんから」

「随分と用心なさりますのね。そこまで気にすることでした？」

「はい、そこまで気にすることです」

何せ少しでも下手を打ったら破滅の未来へ一直線ですから。
そんなことを考えながら、やたらと重々しく首肯をした。

「そ、即答ですね。しかも随分と深刻そうに」

「ええ、深刻な問題ですから」

再び重々しく首を縦に振る。
ちなみに具体的に言うとは様々な意味で日常生活が脅かされるほどの深刻な問題だった。

「わかりましたわ、あなたにとってはその固い胸はそこまで知られたくなかったことなんですわね」

海野幸子が真剣な表情で言葉を紡ぐ。

「わたくしも心して聞くことにいたしますわ」

「はい、よろしくお願いします」

「ええ、わかっておりますわ」

コクリと海野幸子もヒノキがやったように真剣な表情で重々しく頷いた。

（真実を隠すための方法……）

頭の中で作戦を確認する。

失敗するかもしれない、という不安を拭い去ることが出来ない。
しかし、自分自身を鼓舞してヒノキは気を引き締めた。

「それでは、わたくしはあなたに問いかけますわ」

天高く右手を空へと向ける。

「あなたの、その固い感触の胸は一体何のですの!？」

ビシッと勢いよく振り下ろして、リングが詰まっている胸部を指差した。

木々のざわめきしかない空間に海野幸子の問いかけが木霊する。
ヒノキは声の余韻が無くなるまでしっかりと聞きいつてから、無言で上着のボタンを外していった。

真実を隠す方法。それは

(あえて真実をさらけ出すこと!)

大きな真実を隠すために小さな真実をさらけ出す、そして提示した真実に新たな真実を相手に与えること。成功すれば与えられた新たな真実の方を相手は信じて、大きな真実には目を向けなくなる。

この世界で目覚める前に兄貴が言っていた。

それは見つかる困る男子にとっては健全過ぎるほど健全な『純な物品』を隠すための方法。

『いいか、ヒノキ。見つかりたくないものがある時はあえて部屋を探させて、隠し通せれば安全になるんだ。例えばエ○本とかって話だったな』

と、頭をパリパリと掻きながら何かを思い出すような表情で語っていた。

ちなみにその時はいかがわしい物品など1つも持っていなかったため普通に聞き流していたが、今やっていることは兄貴が言っていたことの応用に過ぎない。

プチプチと1つずつ外していき、全てのボタンを外して上着をはだけた。

コロコロとリンゴが地面に落ちて転がっていく。

「見ての通り私の胸にはリンゴが入っていたんです、固い感触はそれが原因です」

「なっ、え？何でそのようなものを胸に？」

呆然とした表情で呟く海野幸子。

暗くてあまりよく見えない。

コクリと頷いてから、ヒノキはゆっくりと海野幸子に近づいていた。

「私の胸を見てください。ふくらみが全く見当たらないでしょう？」

「……そうですわね、まるで大平原のように真っ平らですわね」

実際にその手の人と言ったら怒りだすであろう一言。
神妙な面持ちで頷いた。

「はい、こんなペツタンコな胸をしていることを誰にも知られたくなくて」

「それで、胸にリンゴを入れて膨らんでいるように見せかけたんで

すの？」

「はい、この小さな胸は私のコンプレックスなんです」

あたかも落ち込んでいるかのように顔を俯かせる。

海野幸子は呆れたように1つ息を洩らした。

「あの、誰にも知られたくない秘密というのは、そんな下らないことだったんですの？」

「いえ、私にとっては死活問題なんです！」

力強く裏声のまま断言する。

偽らざる本音だった。

無理な声音のせいで喉が痛い。

（明日、ちゃんと声出るかな？）

ヒノキは場違いな心配をした。

海野幸子はまだ納得せず無然とした表情を浮かべている。

「でも、どうしてリングなどを胸に入れていたんですの？ブラにパットを仕込めば済むことではなくて？」

繰り出される男には馴染みのない言葉の数々。

ヒノキは心の中でうろたえた。

だが、勢いを殺せば説得力が失われてしまうため動揺は抑え込む。

「……私、ブラジャーをつけるような胸してませんから」

「あつ、そうですわね。それは、悪いことを言いましたわ」

「……」

「その胸ではパットを仕込むためだけにブラを買うことになってしまいますものね」

沈黙。

胸の辺りに視線を向けて納得した海野幸子は暗い表情で黙り込んだ。

少しばかり無然とした表情をしてしまう。

助かったと言えば助かったのだが、簡単に納得されたらそれはそれで何だか釈然としなかった。

木々をざわめかせる風だけが吹き抜ける。

ヒュ、と実際には聞こえない擬音が聞こえるように感じた。

「あの、ケヤキさん？」

「はい、何ですか」

「えーと、胸なんか無くても気にすることはありませんわ。その、何と言いますか……女性の魅力は胸の大きさに決まるわけではありませんもの！だから、例えば大平原でも気にすることはありませんわ！」

何故か明るい声で励まされる。

（一体、何だろうか？この状況は）

俯いたまま眉間に皺を寄せて思案してみる。が、何も答えは出てこなかった。

（まあ、いっか。別に）

どうでもいいし、と投げやりに自己完結をする。

とりあえず不可解なことは放っておいて、口封じのためにデュエルを申し込むことにした。

「あの、わたくし何か気に障るようなことを」

「幸子さん」

「は、はい！何ですか？」

「私とデュエルしてください」

「……あの、もしかして怒っていますの？」

バツの悪そうな顔で少しうろたえながら疑問を投げかけてくる。

（怒る？何に対して？）

ヒノキには意味がわからなかった。

思わず慥然とした表情を浮かべてしまう。

「とりあえず私とデュエルしてください」

「やっぱり、怒ってますのね？」

「何を言っているのかよく分かりませんが、とりあえずデュエルしてください。そして私が勝ったら胸のことは誰にも、例え誰かに聞かれたとしても絶対に何も言わないと誓ってください！」

「って、そんなことを言われなくても人の秘密を勝手に喋るようなことはいたしませんわ！」

海野幸子は拳を強く握って力強く反論をしてきた。

本当のことならば大いに結構、歓迎すべき言葉。

だが、簡単に信用するわけにはいかない。

口約束では駄目なのである。確固たる結果が残る方法で然る後に契約を結ばなければ。

『実は口止めされているんだけど』

という前置きでサラッと出てしまうようでは困るのだ。

特に女子寮に入り込んだ男子を探しているという大義名分のもとでは、おかしい出来事ということで簡単に報告されかねなかった。

「とにかくデュエルしましょう。話はそれからです」

「あなたもしつこいですわね。それにわたくしデュエルディスクを持ってきていないのですけれど」

「何1つ問題ありません、『備えあれば憂いなし』と先達の残した

良き言葉もありますから」

「ごそごそ、と自分の制服が入っている袋を漁ってデュエルディスクを投げ渡す。

ちなみに偉そうなことを言ってはみたが、このような事態など想定してはいない。壺磨きのときに袋の底に入っているのを見つけただけであった。

「ず、随分と準備がよろしいですわね」

「というわけでデュエルを始めましょう」

「あの、わたくしの言葉が気に障ったのなら謝るのもやぶさかではありませんわ。ですから、一緒に寮まで戻りませんか？」

「いえ、デュエルをしてください」

「……デュエルなどしていたらお風呂に入れなくなってしまうのですけれど」

「だから、早くデュエルを始めましょう」

「ですから」

「デュエル、しましょう」

「っくく！もう、わかりましたわ！やりますわよ、デュエルをすればよろしいんですね！」

半ばヤケ気味な怒鳴り声が辺りに木霊する。

執拗なまでにデュエルと連呼したのが功を奏し、押し切ることに成功した。

やった、と心の中でガッツポーズを決める。

あとはデュエルに勝つことさえ出来れば作戦は成功。

（絶対に勝たなきゃな）

負ければ破滅へと直結することになりかねない、と気を引き締める。

（頼むぞ、俺のデッキ！）

心の中で語りかけて、ヒノキは腰に付いているケースからデッキを取り出した。

「それじゃあ、幸子さん。私が勝ったら胸のことは何があっても誰にも言わないと誓ってもらいますので」

「あゝ、もう分かっていますわ！本当にあなたも随分としつこいですわね、こんなことをしなくても誰にも喋らないと言っておりますのに」

不満げにブツブツと呟きながら海野幸子もデッキを取り出す。

それを確認してからデッキをシャッフル、同時にデュエルディスプレイへとデッキを納めた。

「それじゃ、デュエルを始めましょう」

「ええ。その代わり、わたくしが勝ちましたら怒りを鎮めて一緒に寮へ帰ってお風呂へと行ってもらいますわよ！」

「っ！まあ、いいですよ。そっちらから何か無ければ不平等ですし」

「あら、随分とうろたえておりますのね。そんなにお風呂に入りたくありませんの？」

「いえ、その、何と言いますか……気分的にお風呂には入りたくないものでして」

サッと目を逸らす。

女子寮の風呂になど絶対に入るわけにはいかなかった。

仮に女子寮の風呂になど入ってしまった場合、破滅の未来へと一直線。

退学は免れず、変態のレッテルを張られ社会的に抹殺されてしまう。

退学になっても入ってみたいという命知らずな猛者も居るかもしれないが

(あいにく俺は退学になどなりたくない)

度胸が無いだって？そんな問題じゃないんだよ、と心の片隅で考えてヒノキは曖昧な笑みを浮かべた。

そんなヒノキの様子を見て、海野幸子はニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「フッフ、あなた本当にお風呂には入りたくないみたいですわね」

「ええ、まあ、その、誰にも知られるわけにはいきませんので」

「あら、それはその胸のことですか？」

「っ、う、まあ、そういうことです」

「フ、フフフ、オッホッホッホッホ！わかりましたわ！こうなったら意地でもわたくしが勝ってお風呂へと連れて行って差し上げますわ！」

「っ、ちよっ」

何でそうなる！

と地声のまま叫ぼうとしてギリギリでこらえた。

（だ、大丈夫だ。勝てば万事解決なんだ）

自分自身に言い聞かせて、心の平穏を保つ。

だが、逆を言うとなければ全てが終わり。隙を見て逃げ出すくらいしか方法が無い、危険な架け橋。

負けられない理由が増えてしまった。

「さて、それでは準備も整ったことですしデュエルを始めましょうか？ねえ、ケヤキさん」

「っ、まあ、それもそうですね」

「ええ、早くしないとお風呂の時間が終わってしまいますもの」

「くっ」

そこまで風呂に入らせたいか？

と心の中で毒づく。

（別に風呂に入りたくないわけじゃないけどさあ）

女子寮の風呂というのが一番の問題だった。

（まあ、こうなった以上は仕方がないか）

何としてでもデュエルに勝つ、と心の中で割り切ってデュエルディスクを構える。

『自分のデッキを信じれば活路は見出せる』

と、そんなようなことを誰かが言っていた。
ならば自分のデッキを信じればいいだけ。

「では、幸子さん。始めましょう」

「ええ」

離れた場所で相対してデュエルディスクを展開。

「デュエル！」

同時にデッキからカードを5枚引く。

自らの命運を賭けたデュエルが始まった。

「先攻は私が貰います」

「ええ、別に構いませんわ。どちらであろうとわたくしが勝つことに変わりありませんもの」

「フッフ、それはどうでしょうか？では、私のターン！ドロー！」

最初に引いた5枚を確認すらず、勢いよくドローする。

（大丈夫だ、自分のデッキを信じれば活路は見出せるんだ。自分のデッキを信じれば……？自分の、デッキ？）

心の中で何かが引っ掛かった。

引いたカードを見もせずに手札へと加えて、少し思案する。

（……って、そうだ！デュエルなんかしちやダメじゃないか！）

ヒノキはすぐに致命的な欠陥に気が付いた。

デッキにはチューナーモンスターが入っており、主力はシンクロモンスター。

確認はしていないが、おそらく他に持っている人間はこの世界に存在しない。

つまりデュエルをすれば、柊ヶやキル柳ヒノキであると計算式みたいに等式が成り立ってしまうのであった。

（まずい、非常にまずいぞ）

このままでは破滅の未来へと一直線、焦燥感が募っていく。

ヒノキは冷汗を流した。

とはいえ既にデュエルは始まっているため、どうすることも出来ない。

「何をしていらっしゃるの？先攻を取ったなら取ったで早くしてくれませんか？」

「っ！はい、すみません」

「別に謝らなくてもいいのですけれど……」

小声で呟いてバツの悪そうな顔をする海野幸子。

あまりもたついていても不自然に思われる。

（こうなったら仕方ないな）

シンクロモンスターを使わなければギリギリ誤魔化せるだろう、と最低限の妥協をしてヒノキは自分の手札を見た。

「あれ？」

「どうかなさいましたの？」

「あつ、いえ、何でもありません」

慌てて手を横に振って否定する。

海野幸子は怪訝な表情を浮かべながら渋々といった感じで黙り込んでんだ。

もう一度、手札を見る。

（何だ、これは？）

手札

和睦の使者×2

威嚇する咆哮

海竜神の加護

ゴギガガガギゴ

正統なる血統

手札のカードは全て、デッキに入れた覚えのないカードだった。しかも手札事故が起きている。

一体、どういうことだろうか？

色々と疑問は尽きないが、この一言に集約される。

1つだけ分かっていることは『自分のデッキではない』ということにとだけだった。

（あれ？　そういえば、どこかで見たような）

手札をジッと見つめる。

手に持っているカードの種類、その構成。

やたらと防御系の罠が多くて、ゴギガガガギゴが入っている。

（あつ、そうだ。これ、兄貴のデッキだ）

ヒノキは全て思いだした。

それは過去に兄貴が衝動に駆られてやたらとガガギゴ関係のカードを詰め込んだデッキ。

相手をしたことがあるのでよく覚えていた。

（兄貴のデッキ、ということは姉貴のデッキ）

強制的に着替えさせられた時のどさくさに紛れてデッキが入れ替わってしまったのかもしれない。

ハア、と溜息を吐きそうになった。

結果的には助かったのだが、感謝をする気にはなれない。

（まあ、仕方ない。このデッキでなんとかやってみるか）

そう思ってヒノキはカードを手を取った。

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

月明かりが照らす暗闇の中、3枚のリバースカードがフィールドに現れる。

大嵐など使われたら目も当てられないので、全てのカードを伏せるのは止めておいた。

「あら、長考をしていた割にはモンスターは召喚しないんですね」

「……いえ、これも作戦の一環です」

「何ですの、今の間は？」

「細かいことは気にしないでください」

「ふーん、まあ別にいいですわ」

渋々といった感じで納得してデッキの一番上に手をかける。
ちなみに作戦の一環というのは真っ赤な嘘。手札事故を起こしているので仕方がない。

正直な所、泣きごとの1つでも言いたい状況であった。

「それでは、わたくしのターン。ドローですわ」

海野幸子がデッキからカードを引く。

（確か、この人のデッキは、シーラカンスが入っているデッキだったかな？）

おぼろげな記憶を呼び起こして内心で首を傾げた。

どうにも印象が薄いせいか、よく覚えていない。むしろTFでは水属性とタッグだとやりにくい印象があったため意図的に避けていた記憶がある。

（まあ、いつか）

どうせすぐに分かるんだし、とヒノキは自己完結して疑問を放棄した。

海野幸子が不敵な笑みを浮かべながらカードを手取る。

「さて、まずは少しでもリスクを減らすことにいたしますわ。速攻魔法サイクロンを発動！対象は右端のリバースカードですわ！」

「右端？」

ヒノキはすぐさま対象に選択されたカードを確認した。

（これなら問題ない）

暴風がリバースカードに迫る。

「チェーンしてリバースカードオープン！威嚇する咆哮！」

暴風が直撃する寸前にリバースカードが露わになり、衝撃波がフィールドを駆け抜けた。

「うっ、そのカードの効果は」

「発動ターン、相手は攻撃宣言をすることは出来ません」

「ふん、小賢しいカードを伏せていますわね」

不敵な笑みで気丈に言い放って、再びカードを手取る。

「ならば、オイスターマイスターを攻撃表示で召喚してリバーサイドをセットしてターンエンドですわ」

オイスターマイスター ATK1600

月明かりが照らすフィールドへと降り立ち、その後ろにリバーサイドが1枚現れた。

「よし、お……もとい、私のターン！ドロー！」

デッキに手をかけて、カードを引く。

デュエルに集中してテンションが上がってきたせいか一人称を危うく間違えそうになった。

引いたカードを確認する。

（くっ、召喚出来るモンスターが来ない）

今しがた手札に加わったカードはウォーターハザード。完璧に手札事故を起こしていた。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

裏声でエンド宣言をする。

リバースカードを伏せる以外に出来ることが無かった。

「では、わたくしのターン！ドロー、ですわ！」

海野幸子がカードを引く。

そして、すぐさま手札からカードを手に取り発動させた。

「わたくしは手札からテラ・フォーミングを発動いたしますわ。デッキからフィールド魔法を1枚、伝説の都アトランティスを手札に加えますわ」

デッキから伝説の都アトランティスを抜き取ってシャッフル、デッキを再びディスクへと収める。

そして、フィールド魔法のスペースを開いた。

「手札から伝説の都アトランティスを発動、ですわ！」

月明かりが照らす夜の暗がりには海の都が現れ、周囲が水に包まれていく。

（人の想像力はすごいなあ）

アトランティス、誰も見たことが無いはずなのに今確かに存在している。と場違いなことを考えて少し感心した。

「アトランティスの効果で水属性モンスターの攻撃力は200ポイント上昇、そして手札とフィールドの水属性モンスターのレベルは1つ下がりますわ」

オイスター・マイスターLV4↓3 ATK1800

チラリと手札を見る。

（最初にゴが付いてなかったらなあ）

ヒノキはそんなことを思っ、て、手札を眺めた。

ゴギガガゴのレベルは8、効果で1つレベルが下がっても生け贄の数は減らない。

やはり召喚出来るカードはなかった。

「さて、まだ序盤ですけどわたくしの切り札を見せて差し上げますわ！」

「つて、え？切り札？」

「そうですわ！オイスター・マイスターを生け贄に捧げて」

オイスター・マイスターが光の粒子と化してフィールドから姿を消していく。

「手札のレベル6となっている超古深海王シーラカンスを召喚しますわ！」

超古深海王シーラカンスATK3000

「っ、お早い登場ですね」

「オーホッホッホ、更にオイスター・マイスターの効果！戦闘以外でフィールドから墓地へ送られたときオイスタートークンを一体特殊召喚いたしますわ。オイスタートークンを守備表示で特殊召喚！」

オイスタートークンDEF200

「そして、手札を1枚墓地へ送り超古深海王シーラカンスの効果を発動ですわ！手札とデッキから可能な限り魚族モンスターを特殊召喚いたしますわ」

手札を1枚墓地へと送る海野幸子。

「デッキからオイスター・マイスター2体と深海王デビルシャークを特殊召喚いたしますわ！」

オイスター・マイスターATK1800

オイスター・マイスターATK1800

深海王デビルシャークATK1900

瞬く間に魚族モンスターが次々とフィールドに姿を現す。
たったの1ターンでフィールドが全て埋め尽くされた。
あまりの光景に思わず引いてしまう。

「うわぁ」

「どうかしら？これこそ『多勢に無勢』という奴ですわねえ。オッ
ホッホッホッホ！」

自らの圧倒的優勢を前にして高笑いをする海野幸子。

多勢に無勢とはまさしくその通り。今の状況にこれほど相応しい
言葉は無かった。

『戦いは数だよ兄貴』

とどこかの中将殿も言っている。

とはいえ危機感あまり抱かなかった。

「幸子さん、1つ忘れてますよ。シーラカンスにより召喚されたモ
ンスターに付与されるデメリット」

高笑いがピタリと止まり、海野幸子が眉をひそめる。

「あなた、物知りですわね。わたくしはまだ効果を教えていないというのに」

「ええ、まあ有名なカードですから」

「成る程。確かに高貴なわたくしが使うカードを知らない道理はありませんわね」

少しズレたことを言って、ウンウンと頷いて満足げな表情を浮かべた。

「まあ、知っているのですしたら説明は不要かもしれませんが超古深海王シーラカンスによって特殊召喚されたモンスターの効果は無効になり攻撃宣言をすることも出来ませんの」

説明を聞きながら、心の中でホッと胸を撫で下ろす。

（シンクロが無くて本当によかった）

シンクロがある場合、豊富な展開力により複数のシンクロモンスターが並んでいたところ。

しかも新たに召喚されたモンスターの為、もちろん攻撃制限は消滅する。

ヒノキは少しばかり苦笑いを浮かべた。

「ハハ、ハ」

「あら、どうかいたしましたの？急に笑い出したりして。あまりの物量差を目の当たりにして絶望にでも駆られましたの？」

「いえ、それこそまさかですよ。私はどんな状況だろうと最後まで諦めたりはしませんから」

「ふうん、それは良き心がけですわねえ。でも、アナタが最後まで諦めなかったとしても勝利するのはわたくしの方ですわ！」

右手をゆっくりと前に突き出して、高らかに言葉を紡ぐ。

「いきなさい、超古深海王シーラカンス！プレイヤーにダイレクトアタックですわ！」

「っ！」

言葉を受けて、シーラカンスの巨体が猛然と迫ってきた。
(くっ、攻撃力3000か)

当然のことながら攻撃を許すわけにはいかない。
ヒノキは流れるような動作でリバースカードを発動させた。

「トラップ発動！和睦の使者！エンドフェイズまで相手から受ける

戦闘ダメージを0にする！」

不可視の壁がシーラカンスの進行を遮り、攻撃を阻む。

為す術なく何もせずに戻ってくるシーラカンスを見つめて、海野幸子は苦々しげに顔を歪めた。

「っ、和睦の使者ですって？威嚇する咆哮といい、小賢しいカードを使いますのね。何てしぶとい」

「それは、しぶともなりますよ。自らの命が懸かっていると云っても過言ではありませんから」

「命って、そこまで胸のことを知られたくありませんの？もはや呆れて何も言えませんわ」

ハア、と諦めるように首を横に振る。

どうやら異常なまでに胸のことを気にしている少女であると認識されているようであった。

ニヤリと心の中でほくそ笑む。

この分なら男であると気付かれる心配は今のところ皆無であった。少ししてから海野幸子が今度は何かに妥協をするかのようにハアと息を吐く。

「まあ、あなたがどのようなコンプレックスを抱いていたとしても、わたくしには関係の無いことですわね」

「そうですか。気にしないというのなら、ありがたいことこの上ないですね」

コンプレックスがどうかという問題ではないですけど。
と心の中で付け加えてヒノキは曖昧な笑みを浮かべた。

「……あなた、少し変わっていますわね。何だか調子が狂いますわ」
「失礼な、私は至って普通の人間です」

「あら、普通の感性を持った人間が自分の胸が小さいからといって
リングを仕込んだりするのかしらねえ？」

あくどい笑みを浮かべて皮肉を言ってくる。
弁解をしたいのだが、何も言うことが出来なかった。
何故、胸にリングなどを入れていたのか？本当のことを言っ
てしまったら破滅の未来へと一直線に堕ちてしまうのだから。

「フッフ、凶星といったところですよ」

「くっ」

「あら、歯を喰いしぼるなんて乙女にはあるまじき行為ですよ？
顎を痛めても知りませんわ」

心底楽しそうな表情で言葉を投げかけてくる。

だから、俺は男だ。

と、生まれた時から変わらない事実を言うことはやはり出来なかった。

「さて、無駄話はこれくらいにして、と」

オホン、と海野幸子が一度咳払いをする。

「このターンわたくしは既に攻撃をすることも出来ませんのでターンエンドですわ」

ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべてエンド宣言をした。

少しばかり晴れやかな表情になっている気がする。

どうやら憂さ晴らしの道具にされたようであった。

「ふう、私のターン！ドロー！」

気を取り直してデッキからカードを引く。

今はデュエルに集中すべき状況であった。

チラリとドローしたカードを確認する。

（よし、これなら何とかなるな）

ウンと1度頷いてから、ヒノキは引いたカードを手札に加えた。状況を確認する。

相手のフィールドは埋め尽くされており、リバースカードが1枚。リバースカードは少しばかり気になるのだが、まずは攻め込まなければ始まらなかった。

「よし、まずは永続魔法ウォーターハザードを発動！」

「!? ウォーターハザードですって? ということは、アナタはわたくしと同じ水属性のカードを」

「ええ、まあ、そんなところです」

曖昧な返事をして視線を逸らす。

実際は自分のデッキではないのでヒノキは何とも言えない気分になった。

「さて、それではウォーターハザードの効果! 1ターンに1度、自分フィールドにモンスターが存在しないとき手札のレベル4以下の水属性モンスターを特殊召喚出来る! 私はヒゲアンコウを特殊召喚!」

ヒゲアンコウ ATK 1700

自分のフィールドに初めてモンスターが現れる。

フィールドを泳ぐヒゲアンコウを見て、海野幸子が目を見開いた。

「ヒゲアンコウ、ということは最上級モンスターを召喚するつもり

ですの!？」

「その通りです。ヒゲアンコウは水属性モンスターを召喚する時2体分の生け贄とすることが出来る。私はヒゲアンコウを生け贄に捧げ」

ヒゲアンコウが光の粒子となりフィールドから消滅する。

そして拡散した光の粒子が結実し屈強な肉体を持つ大きな黒い影が咆哮を轟かせた。

「ゴギガガギゴを攻撃表示で召喚！」

ゴギガガガギゴ ATK 3150

悠然と立ち、5体のモンスターと対峙する。

「っ、ゴギガガガギゴですって？かの有名な青眼の白龍に次ぐ攻撃力を誇る通常モンスターじゃありませんの！」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

驚愕を露わにしている海野幸子の言葉を聞いて、ヒノキは思わず苦笑した。

言葉だけを聞いていると凄いモンスターであるように聞こえるのだから不思議なことこの上ない。

(結構ありふれたカードなんだけどなあ)

そんなことを思いながら、あからさまにうろたえている海野幸子を漫然と眺めた。

（さて、どうしたもんなあ）

気を取り直して状況確認を始める。

今のところ攻撃力が一番高いモンスターを召喚することに成功した。

海野幸子のフィールドにはリバースカードが1枚と、フィールドを埋め尽くす魚族の群れ。

物量差は歴然としていた。だが、シーラカンスによって召喚されたカードは攻撃を行うことが出来ない。

（ならば、まずシーラカンスを倒すか）

攻撃目標を見定め、ヒノキは超古深海王シーラカンスをにらみつけた。

「では、行きます幸子さん！」

「っ、望むところですね。受けて立ちましてよ！」

「はい、バトル！ゴギガガギゴで超古深海王シーラカンスを攻撃！」

ゴギガガギゴが拳を握りしめ猛然と襲い掛かっていく。

「させませんわ！リバースカードオープン、フィッシュチャーージを発動いたしますわ！フィールドの魚族モンスター、オイスタートーンを生け贄に捧げゴギガガギゴを破壊！」

「なっ！？」

「おいきなさい！オイスタートークン！」

シーラカンスに拳が届く寸前で、弾丸のごとき早さで射出されたオイスタートークンがゴギガガギゴの肉体を貫いた。

「うっ、ゴギガガガギゴが」

「そして、わたくしはフッシャーチャージの効果により1枚ドロ―ですわ」

悠然と不敵な笑みを浮かべてデッキからカードを1枚引く。

手札事故を起こしている状況で、やっと召喚したモンスターをあつさりと破壊されてしまった。

883

「オ―ホッホッホ！どうかしら？あなたのモンスターは一瞬にして木端微塵でしてよ」

「いえ、そう簡単にやらせるわけにはいきません！リバーズカード、正統なる血統を発動！これにより墓地に存在する通常モンスター、ゴギガガギゴを特殊召喚します！」

ゴギガガギゴ ATK 3150

1度は姿を消したゴギガガギゴが再び地面へと降り立ち、咆哮を轟かせる。

海野幸子は一転して苦々しげに顔を曇らせた。

「っ、またゴギガガギグッ、っ！」

「……えーと、噛みまし」

「お黙りなさいっ！わたくしは噛んでなどおりませんわ！」

頬を紅潮させて怒鳴り声を響かせる。

（何だかなあ）

調子が狂うと言っていたが、こちらの方が調子狂う。とヒノキはそんなことを思っ少し呆然とした。

オホン、と取り繕うように真っ赤な顔で咳払いをする海野幸子。

「また、ゴギガガギゴを召喚するなんて随分としぶといですわね」

「……さっきの会話を無かったことにするつもりですか」

「あら、何かおっしゃいました？」

いっそ惚れ惚れとするほどの清々しい笑顔を向けてくる。

何か有無を言わせない雰囲気が存在していた。

オホン、と1度咳払いをする。

「コノデュエルニハワタシノメイウンガカカッテイマスカラシブトクモナリマスヨ」

「何ですの、その棒読みは？わたくしを馬鹿にしておりますの？それとも何かの呪文ですの？」

「ごめんなさい。流石に心のこもっていないことだけは言えません」

素直に頭を下げて謝った。

「っく！……ま、まあ別にいいですわ」

「そうですか。それじゃ、ゴギガガギゴで超古深海王シーラカンスを攻撃！」

「って、ちょ、お待ちなさい！」

「えーと、テストメント・オブ・ファイアー！」

即興で作った攻撃名を叫ぶ。

攻撃宣言を受けてゴギガガギゴが一足飛びでシーラカンスへと迫り、口を掴んで力任せに引き裂いた。

真っ二つにされたシーラカンスが爆散、衝撃波がライフポイントを削る。

LP3850

「きゃああっ！わ、わたくしのシーラカンスが！」

「よし、それでは私はこれでターンエンド！」

微弱ながらライフを削ることに成功した。

「っ、わたくしのエースを倒すとは中々やりますわね」

「まあ、自分の人生がかかってますから」

「人生って、たかだか胸のことで幾らなんでも大げさですわ」

「たかだか何てものじゃないっ！、です。私にとっては重要なことなんです」

「ず、随分と力強く言い切りますのね」

海野幸子が引き攣った笑みを浮かべる。

（い、いかな。危ないところだった）

何とか裏声だけは変わらなかったが、一瞬だけ元の口調に戻ってしまった。

「ま、まあ、人によって譲れないものはありますわよね」

ウンウンと引き攣った笑みを浮かべたまま海野幸子は強引に納得

する。

ヒノキも一緒に頷いて追従した。

「そうです。譲れないことがあるんです。だから、細かいことは気にしないでください」

「そうですわね、気にしないことにいたしますわ」

「はい、それがいいかと」

「ええ、ではデュエルを続けることにしましょう。わたくしのターン！ドロー！」

海野幸子がデッキの上からカードを引く。

この瞬間、手札が3枚となった。

（さて、どう来る？）

気を取り直して海野幸子をじっと見つめる。

ゴギガガゴゴが自分のフィールドに居るとはいえ、ボードアドバンテージでもハンドアドバンテージでも相手が上、ライフポイントの差など微々たるもの。

油断出来る状況ではない、そう思ってヒノキは気を引き締めた。引いたカードを確認して、海野幸子がニヤリと口の端を歪める。

「フフフフ、オーホッホッホッホ！これは良いカードを引きましたわ！光鱗のトビウオを攻撃表示で召喚ですわ！」

光鱗のトビウオ ATK1700

月明かりが反射しながら優雅にフィールドへと姿を現した。

「なっ、そのカードは確か」

「あら、その様子ですと効果を知っているようですわね。フッフ、このカードであなたのフィールドを一掃して差し上げますわ」

不敵な笑みを浮かべながら強気に言い放つ。

（まずいな、あのカードの効果は確か）

ヒノキはカードの効果进行い出して、心の中で戦慄した。

「それではいきますわ。光鱗のトビウオ、効果を発動！このカード以外の魚族モンスターを一体生け贄に捧げることでフィールドのカードを1枚破壊いたしますわ」

「くっ、まずい、ですね」

「オーホッホッホ、まずはオイスターマイスターを生け贄に捧げてゴギガガギゴを破壊いたしますわ！」

オイスターマイスターが光の粒子と化し、その輝きを纏った光鱗のトビウオがゴギガガギゴへと突撃する。

ゴギガガギゴは為す術なく光鱗のトビウオに貫かれて爆散した。

「うつ、ゴギガガガゴが!？」

「更にオイスターマイスターの効果でオイスタートークンがフィールドに現れますわ」

オイスタートークン ATK300

「くっ、これは」

「更にオイスタートークンを生け贄に捧げ、今度はウォーターハザードを破壊いたしますわ!」

「っ、やはり」

「さあ行きなさい! 光鱗のトビウオ!」

輝きを纏った光鱗のトビウオが立て続けにウォーターハザードを破壊する。

光鱗のトビウオが持つ効果は魚族モンスターがいる限り無制限。もはや蹂躪されていると言っても過言ではない状況であった。

「さて、それではもう1体オイスターマイスターを生け贄に捧げて最後に残ったリバーカードも破壊させていただきますわ!」

オイスターマイスターが光の粒子と化し、光鱗のトビウオへと力

を与える。

そして昇華させた力を身に纏い最後のリバースカードへと突撃をしてきた。

「くっ、そうはさせません！チェーンして和睦の使者を発動！」

「なっ、また、和睦の使者！？」

光鱗のトビウオに破壊される前に効力を発動、戦闘ダメージから身を守る不可視の壁を発生させる。

トビウオが通過する頃には破壊対象となったリバースカードは影も形も無かった。

「っ、フリーチェーンのカードばかり。あなた本当にしぶといですわね」

「ええ、負けるわけにはいきませんから」

「くう、とりあえずオイスターマイスターの効果でオイスタートークンを守備表示で特殊召喚ですわ！」

オイスタートークンDEF200

「このターン、攻撃をしてもダメージは通りませんのでこのままターンエンドですわ！」

海野幸子がエンド宣言をする。

少しばかり不満そうな表情で瞳を吊りあげていた。

ふう、と1つ息を洩らす。

（危なかったな）

何とかダメージを受けることは防いだが、フィールドはがら空きにされてしまった。

手札は1枚しかない。

ハンドアドバンテージでもボードアドバンテージでも相手の方が完全に上。

（何とかしなきゃ、まずいな）

負けた場合は女子寮の風呂に連れて行かれることになる、それだけは避けなければならない。人によっては自ら進んで入りたいと言う猛者もいるかもしれないが。

女子寮の風呂に入れば男だということが露見して、破滅の未来へと一直線。

絶対に負けるわけにはいかない、そう意気込んでヒノキはデッキの一番上に手をかけた。

「私のターン！ドロー！」

カードを1枚引く。

そしてすぐさま確認。

（よし、何とかかなりそうなカードだな）

ドローしたカードをそのままデュエルディスクへとセットした。

「魔法カード天使の施しを発動します！デッキから3枚ドロして2枚捨てる」

まずデッキから3枚ドロー。

（ギ、ギゴバイトって、まあガガギゴ関係のカードだからか）
少し微妙な気分になりながら、2枚を墓地へと捨てる。

墓地へと送ったカードはDNA移植手術とギゴバイト。

「どうかしら？この状況を打開出来るようなカードを手にすることは出来まして？」

「はい、バツチリと。手札からアトランティスの効果でレベル4となっているギガガガギゴを特殊召喚します！」

ギガガガギゴ ATK 2650

大地へと降り立ち、その瞳を赤く光らせた。

「うっ、わたくしのフィールド魔法が裏目にでたようですね」

「ええ、その通りです。アトランティスが無ければ召喚することは不可能でした」

コクリと頷く。

海野幸子は苦々しげに唇を噛みしめた。

「さて、いきます幸子さん！バトル！ギガガガギゴで光鱗のトビウオを攻撃！」

「くう、攻撃力では歯がたちませんわ」

「えーと、テラー・オブ・バイオレンス！」

再び即興で作った攻撃名を叫ぶ。

ギガガガギゴは光鱗のトビウオへと近づいていき、胴体を両手で掴み乱暴に引きちぎった。

真っ二つになったトビウオが爆散し、衝撃波が海野幸子を襲う。

LP2900

「くうーっ、っ！」

光鱗のトビウオを完全に葬り去ったのを見届けて、ギガガガギゴが跳躍。

ドズン、と地鳴りを響かせてフィールドに戻ってきた。

「よし、私はこのままターンエンド！」

裏声でエンド宣言をする。

ライフを削ることも出来て、光鱗のトビウオを排除することにも成功。首尾は上々だった。

はあはあ、と海野幸子が荒い息を吐く。

「くう、あなたお強いですわね。わたくしが圧倒的に勝っていた状況だったというのに」

「それは……私にはどんなに不利な状況でも諦めるわけにはいいかな理由がありましたから。それに最後の最後までどんなことでも諦めたくありませんから」

「フフ、そうです。わたくしも同感ですわ」

ポツリ、と小声で呟いて海野幸子は穏やかな笑みを浮かべた。

「そうですわね。わたくしもあなたと同じように最後まで諦めませんわ。このデュエル、勝つのはこのわたくしですわ！」

「幸子さん……」

出来れば諦めてくれたら嬉しいんですけど。

と、身も蓋もない言葉が頭に浮かぶ。

（……いや、流石に無粋だな）

首を軽く振って、ヒノキは下らない考えを頭から消し去った。気を引き締めて前を見据える。

海野幸子はどこか吹っ切れたような晴れ晴れとした表情をしてい

た。

「いきますわよ、ケヤキさん！」

「はい、受けて立ちましょう」

「わたくしのターン」

ゆっくりとデッキに手をかけて瞳を閉じる。

静寂。

全身全霊をかけたドローの邪魔を許さないかのように、木々のざわめきすらも止まっていた。

やがて、1つ息を吐いてから瞳を開眼する。

「ドロー!!」

気合一閃。

大きな声と共にデッキの一番上からカードを抜き去った。

ゆっくりと、期待と怯えの入り混じった緩慢な動作でカードを確認する。

「き、きた、きましたわ! 逆転の一手!」

「なっ!？」

マジですか!?

と、半ば予想をしていた結果とはいえ思わず地声が出そうになった。

「わたくしはドローしたカード、死者蘇生を発動いたしますわ!」

声高らかに叫んでこちらのデュエルディスクをビシッと指差してくる。

その手はディスクの墓地を差していた。

「ケヤキさん。わたくしのフィールドに、あなたの墓地に存在するゴギガガギゴを特殊召喚しますわ!」

「っ、ゴギガガガギゴを!?!」

「そうですわ、我が軍門に下りなさい!ゴギガガガギゴ!」

死者蘇生のカードが光輝く。

ディスクの墓地も輝きを発し、月明かりが照らす水の都に黒い影が降り立った。

ゴギガガガギゴ ATK 3150

「くう」

思わずヒノキの口から呻きが漏れる。

自分のフィールドに存在するギガガガギゴとは比べ物にならないほどの威圧感を発していた。

「さて、それではいきますわよケヤキさん。ゴギガガガギゴでギガガガギゴを攻撃ですわ！」

「っ、ギガガガギゴ！」

咆哮を轟かせてゴギガガガギゴが猛然と襲い掛かってくる。

ギガガガギゴと真正面から衝突し、両手で組み合って力比べを始めた。

だが、攻撃力に歴然の差があるため勝負になどならない。段々とギガガガギゴが劣勢に陥る。

「くう」

「フッフ、さあやってしまいなさいゴギガガガギゴ」

言葉を受けて瞳を紅く狂気の色に染めるゴギガガガギゴ。

咆哮を轟かせてギガガガギゴを力任せに地面へと叩きつけ、渾身の拳を炸裂させた。

「くううっ！」

「フフフフ、オーホッホッホッホ！ようやく一太刀浴びせることが出来ましたわね」

嬉しそうなお嬢様笑いが耳に響く。

ライフポイントへのダメージは微々たるものだが、先ほどの一撃はたった一太刀どころでは済まされないほどに重たい一撃だった。

「フフフフ、わたくしはターンエンドですわ」

上機嫌な顔で海野幸子がエンド宣言をする。

（まずいな、このドローで何か引かないと危険だ）

状況はかなり不利だった。

フィールドと手札にモンスターは無い、加えて相手のフィールドにはゴギガガガゴが存在する。

何かを引けなければ、ゴギガガガゴの強大な攻撃力が牙を剥く。絶壁の上に立たされているような、かなり危険な状況だった。

（だが、負けるわけにはいかない）

負ければ女子寮の風呂へと連れて行かれる。

そうなれば女に扮して女子寮へと入りこんだ変態男の烙印を押され社会的に抹殺、査問委員会へと連れていかれて退学処分。という破滅の未来へと一直線。

絶対に負けるわけにはいかなかった。

「私の、ターン！ドロー！！」

気合を入れてデッキからカードをドローする。

（……この、カードは）

一手で逆転出来るようなカードではなかった。が、それは今ある手札とコンボになるカード。

（やってみるか！）

一縷の望みを託してカードを手取る。

「モンスターをセット、カードを1枚セットしてターンエンド！」

「あら、それだけですの？ そんな逃げの一手ではわたくしに勝つことは不可能ですわよ」

「フフ、それはどうですかね？」

「怪しい反応ですわね。まあ別にいいですわ」

軽く鼻で笑って、海野幸子はデッキに手をかけた。

「わたくしのターン、ドロー！」

カードを1枚引く。

チラリとカードを見て不満げな息を洩らしてから手札に加えた。

「バトル！ゴギガガギゴで守備モンスターを攻撃ですわ！」

攻撃宣言を受け、ゴギガガギゴが大きな地響きを鳴らしながら迫ってくる。

（何もしてこない？）

どういう事情かは知らないが好都合だった。

「リバースカードオープン！海竜神の加護！このターンのエンドフェイズまでレベル3以下の水属性モンスターは戦闘及びカード効果によって破壊することは出来ません！」

「っ、やはり、またフリーチェーンですよ！？」

「その通りです！頼みます、水霊使いエリア！」

呼びかけに応じるように水霊使いエリアが姿を現しゴギガガギゴの拳を杖で受け止める。

そしてエリアの身体を蒼いオーラが包み込み、ゴギガガギゴを退けた。

「なっ、水霊使いエリア？水属性にとって天敵となるカードではありませんの！？」

「天敵、確かにその通りですね。エリアの効果を発動！相手フィールドに存在する水属性モンスター1体のコントロールを得る。ゴギガガゴゴは返してもらいます！」

水霊使いエリアが杖を基点にして術式を展開、魔法陣がゴギガガゴゴを包み込む。

そして、魔法陣が消滅すると同時にゴギガガゴゴの瞳から狂気の色が鳴りを潜めて、ゆっくりと歩いてエリアの元へと歩き出した。

「さて、確かにゴギガガゴゴは返してもらいました」

「くう、成る程。フリーチェーンのカードが大量に投入されていたのはそういうことでしたの」

苦々しげな表情で納得するように呟く。

そして、手札を1度チラリと見た。

「くっ、わたくしはこれでターンエンドですわ」

苦々しげな顔で何もせずにエンド宣言をする。

（よし、何とかなったな）

そう思ってヒノキはホッと胸を撫で下ろす。何とか危機を脱することには成功した。

海野幸子の様子が少し気になるが、今はデュエルが最優先。

ヒノキは気を引き締めてデッキの一番上に手をかけた。

「私のターン、ドロー！」

カードを引く。

手首を返してカードを確認。

（モンスターカード！これなら）

今度はフィールドを確認する。

海野幸子のフィールドにリバースカードは無く、オイスタートークンと深海王デビルシャークが居るだけ。

「よし、私はガガギゴを攻撃表示で召喚！」

ガガギゴ ATK2050

「うっ、3体目のモンスター」

海野幸子が弱々しい口調で呆然と呟く。

その言葉には諦観が込められていた、が瞳は未だに輝きを失っていないかった。

「っ、よろしいですわ！来なさい、受けて立ちましてよ！」

「はい、ではいきます！バトル！」

デュエルを終わりへと導く最後のバトルフェイズを宣言する。

「まずはガガギゴで深海王デビルシャークを攻撃！」

ガガギゴが地面を蹴り深海王デビルシャークの懷へと潜り込み、胴体に拳を叩きこんだ。

LP2750

「あううつ、くう、まだ、この程度では終わりませんわ！」

衝撃に耐え、毅然とした口調で言い放つ。

その言葉に応えるように、ヒノキは続けて攻撃宣言をした。

「水霊使いエリアでオイスタートークンを攻撃！」

エリアがオイスタートークンを杖で指し示し、その方向へと守護霊であるギゴバイトが飛んでいく。

そして、ギゴバイトが両手で掴みオイスタートークンを飲み込んだ。

「これで最後です」

悠然とゴギガガギゴが海野幸子の元へと歩いていく。

「くう、わたくしは諦めませんわ。例え今日負けたとしても、いつか、いずれはあなたに勝ってみせますわ!」

「フツ、ゴギガガギゴでプレイヤーにダイレクトアタック!」

海野幸子の目の前で立ち止まり、ギラリと瞳を輝かせるゴギガガギゴ。

「っ、わたくしは臆したりなどしませんわ! 来なさい!」

「テストメント・オブ・ファイアー!」

咆哮を轟かせてゴギガガギゴが拳を振り下ろした。

「くうっ、きゃああー!」

L
P
O

デュエルが終了し、ソリッドビジョンが消滅する。

今まで薄暗い空間を包み込んでいた水と、そびえたっていた伝説の都も消え去り、元の月明かりが照らす暗い夜道に戻った。

（何とか破滅の未来は回避出来そうだな）

ふう、と1つ息を吐いてからデッキをケースへと閉まって海野幸子の元へと近寄っていった。

「幸子さん、これで私の勝ちです。約束通り、胸のことは誰にも話さないと誓ってくださいね？」

「はあ、分かっていますわよ。結局そこなんですわね」

ブツブツと呟いて、呆れるように溜息を吐いた。

心の中でニヤリとほくそ笑む。

（何はともあれミッシェンコンプリート、だな）

口封じは完全に成功した。

決闘至上主義のこの世界においてはデュエルによって取りつけた約束が最も信頼できるのだ。

あとはこの場から何事も無く立ち去るだけ、肩の荷が少し軽くなつた気がした。

「ところで幸子さん、時間の方は大丈夫ですか？」

「時間？何のことですか？あと、あなた何だかやけにスッキリとした顔をしておりますわね」

「ハハハ、細かいことは気にしないでください。時間というのはお風呂の時間のことですよ」

「細かいことって、あなたそればかりですわね。今日だけで何回聞いたことかしら」

呆れるように首を横に振ってから、左手の手首に付いている腕時計へと視線を向ける。

「……急げば間に合わないことも無いですわね」

「そうですか、それじゃ早く戻った方がいいですよ」

「まるで他人事のような言い草ですわね。あなたはどうしますの？」

「私は、これから行かなければいけないところがありました」

「こんな遅い時間にですか？」

「遅くなったからこそ急がなければならないんです」

「急いでいるのに、壺を磨いていたんですの？」

「それは一目見たら気になってしまって、他のことが頭から抜け落ちてしまっただけです」

若干、目を逸らしながら返答。

壺磨きは半ば衝動に駆られて突発的にやってしまったことなので、何とも言えない微妙な気分に陥る。

海野幸子はそんなヒノキの様子を見て、クスクスと笑った。

「フッフ、あなたやっぱり可笑しな人ですわね」

「そうですか？それでもごく普通の一般人を自負しているんですけど」

「その返し方が既に可笑しな人の証ですわ」

口元に手を当てて、楽しそうにクスクスと笑う。

（おかしい人？俺が？）

絶対にあり得ない、とヒノキは頭の中にある兄貴と過ごした記憶を思い起こして少し慚然とした。

海野幸子は穏やかな笑顔を浮かべている。

「フッフ、何だかあなたと一緒になら学園生活が楽しくなりそうな気がしますわ」

「……それは、光栄です」

少し罪悪感を感じながら目を逸らした。

（ごめんなさい）

柊ヶヤキは明日以降現れません、とそんなことを思いながら心の

中で謝罪をする。

(そういえば……)

若干、苦笑いを浮かべながら思い出す。海野幸子がデュエルの最中に言っていた言葉。

『例え今日負けたとしても、いつか、いずれはあなたに勝ってみせますわ!』

だが、デュエルする機会は永遠に訪れることはない。むしろ、そんな機会が訪れてもらっては困る。

(罪悪感が、半端ないな)

ヒノキは考えれば考えるほどに申し訳ない気分になってきた。

「……えーと、それじゃ私は急いでいるのでそろそろ行きます」

「そうですわね。もう遅い時間ですし、お互いに急いだ方がいいですわね」

少し思案顔で同意しながら、海野幸子がデュエルディスクを外す。

「さて、このデュエルディスクはお返しいたしますわ。今度デュエルをするときは負けませんわよ」

「そうですね、機会があったらまたデュエルをしましょう」

そんな機会はもう2度と来ないけどね。

と、心の中で付け加えて、ヒノキはデュエルディスクを受け取った。

（やはり罪悪感が半端ない）

そんなことを思いながら、デュエルディスクを制服が入っている袋の中に詰め込む。

「これでよし、と。それでは幸子さん、私はもう行きますから」

「ええ、もう夜も遅いですから気を付けた方が良いでしょうよ？」

「はい、では幸子さんもお気をつけて」

最後に後ろを振り返って右手を振ってから、ヒノキは夜道を走り出した。

女子寮脱出作戦はこれにて完遂。あとはレッド寮へと帰ればいいだけ。

無理な声音を使い続けたせいで喉がかなり痛い、破滅の未来を回避出来たのであれば安いものだった。

（ああ、女子寮の外は最高だな）

もう何も警戒しなくても良い、もう何も疑わなくても良い。

ヒノキは暗くて誰も居ない夜道をとても穏やかな気分であけ抜けた。

（……あれ？）

不意に何かが頭の中で引っ掛かる。

「何か忘れているような気が……」

何だっけ？

と、ブツブツと呟きながら首を傾げる。

(ま、いっか)

すぐさま自己完結して疑問を放置、晴れやかな表情で夜の道を走り抜けた。

木々がざわめく暗い夜道。

幸子は淡い月光をその身に受けながら、柊ケヤキが走り去った方向をじっと見つめた。

暗い夜の道だけが広がっており既に人の姿は認識できない。

「柊ケヤキ、か」

静寂。1人居なくなっただけだというのに異様なまでの静けさ、呟いた言葉も静寂に呑みこまれていった。

「わたくしの、良きライバルになりそうですわね」

ポツリと呟いて軽く笑う。

自分と同じ水属性の使い手だというのに水属性の天敵を内包した

デッキの使い手。

こちらが圧倒的有利な状況だったというのに、それをひっくり返しての勝利。

それを可能にしたのは最後まで諦めないどこまでもひたむきな姿勢、それに倣って自分も一度は逆転したが、それすらもひっくり返されてしまった。

最後に引いたカードは大嵐、リバースカードはフリーチェーンのカードだと思って使わなかったが案の定その通り。

最後に引いたのが大嵐でなければあるいは、という想いが無いではない。だが、『あるいは』などという可能性がデュエルに介在する余地は無い。

フッフ、と幸子は軽く笑った。

「それにしても可笑しな人でしたわね」

心の中を鮮やかに彩っている晴れやかな感情を隠しもせずに言葉へと込める。

ケヤキのことを思い出すと自然と笑顔になった。

最初に遭遇したのは一心不乱に壺磨きをしているところ。話をしてみたところ夕食も食わずに磨いていたらしい、つまり1時間近く熱中していたことになる。

そして、気になることがあると言って指差した方向に顔を向ければ突然の目隠し。

意味不明と言わざるを得ない。

自らの小さな胸を気にしてリングを仕込んでいるのだから、何処を取っても意味不明と言わざるを得なかった。

しかも死活問題だとか、命が懸かっているだとか、大げさにも程がある。

（ホントに可笑しな方でしたわ）

不謹慎かもしれないが、笑いが止まらなかった。

柊ケヤキと過ごした僅かな時間は、意味不明でまともに考えると頭が変になりそうなほどに可笑しな時間。

だけど、何故か心が暖かい。

今まで、アカデミアに入学をしてからあまり親しく話せる人が居なかった。

よくは分からないが、人には高圧的な喋り方に聞こえるらしい。

だけど、柊ケヤキは何も気にした素振りは無かった。

「フッフ、ケヤキさん、わたくしとあなたはもうお友達ですわよね？」

誰も居ない空間へと語りかける。

返事をするものは無く、聞こえてくるのは木々のざわめきだけ。

だが、答えは必要なかった。

（出来れば、もっと仲良くなりたいものですわ）

とりあえず明日の朝に2人で一緒に朝食を取ろう、とそう思って幸子は踵を返す。

その顔は穏やかな微笑をたたえていた。

朝。

ヒノキは自分が忘れていることに気が付いた。

目の前には海に捨てられている何十枚ものカードが広がっている。
(そういえばそうだった……)

万丈目が三沢のカードを海に投げ捨ててしまうことをすっかり忘れていた。

「破壊輪に、ブラッド・ヴォルス。ってことは、ここに捨てられているのは三沢のカード！」

捨てられているカードを見て、十代が声を上げる。

「迂闊だったぜ、このデッキは昨日廊下に出しておいた机に入れてあったんだ」

「一体、誰がこんなことを？」

「……」

それをやったのはサンダーだよ。

と、翔の言葉に心の中で返答をした。

「せっかくオベリスクブルーに昇格のチャンスだったのによ、これじゃあカードを揃えている時間も無いぜ！」

「……」

大丈夫だ三沢は他にもデッキをたくさん持っているから。
十代の方を見て、心の中で返答をする。

「どうする？ デッキもなしにどうやって闘うんだよ？ もう試験は始
まっちゃうんだぜ、三沢！」

「むう」

三沢が声にならない呻きを洩らした。
海に捨てられて、水浸しになっているカード達を見ていると何と
もいえない罪悪感がこみ上げてくる。

もちろん何かをしたら後々になって予測のつかない事態が発生す
る可能性があるのは分かっている、実際にどうしようか思いあぐね
ていた。

だけど、それでもカードが水浸しになっているのを見るのはつら
いものがある。

（あのとき、何枚かだけでも抜き取っておくべきだったかなあ）
と、考えても仕方のないことを考えてヒノキは心の中でカード達
に謝罪した。

横から服の裾を引っ張られる。

「ん？」

「ところでヒノキ君、何でさっきから一言も喋らないんスか？」

「実は、ゴホゴホ、喉が痛く、て声が、ゲホゴホ、うまく、出ない」

「大丈夫ッスか？声ガラガラっすよ。というか、昨日は何やってたんスか？」

「細かい、ことは、コフ、ケホ、気に、するな」

裏声を駆使して女子寮から脱出しようとしていたなんて口が裂けても言えなかった。

デュエル場。

三沢のデュエルが終盤に差し掛かっている。

巨大な津波が万丈目のフィールドに居る炎獄魔人ヘル・バーナーを呑みこんだ。

「うわぁーっ、ぁーっ！」

炎獄魔人ヘル・バーナーATK0

「くう、これは！？」

「ウォーター・ドラゴンの特殊効果を発動。このモンスターが場に

居る限り炎属性、炎族モンスターの攻撃力は0になる」

ウォーター・ドラゴンが咆哮を轟かせる。

「ウォーター・ドラゴン！アクア・パニッシャー！」

声を受けたウォーター・ドラゴンが水撃を放出。
炎獄魔人ヘル・バーナーを呑みこんだ。

「うわぁーっ！っ！」

LP0

デュエルは三沢の勝利で幕を閉じ、ソリッドビジョンが消滅する。
しかし、ヒノキはデュエルの方はあまり見ていなかった。

『うーっ、寂しかったですマスター』

エフェクト・ヴェーラーが涙目で頬を膨らませている。

ヒノキは洗濯が終わったオシリスレッドの制服を身に纏って、パ
リパリと頭を掻いた。

今はデュエル場の隅っこでエフェクト・ヴェーラーを宥めている。

声は出せないの、メモ帳に言葉を書いた。

くすまないな、俺もまさか自分のデッキが腰に付いていないとは思ってなかった＞

『うう、事情はしっかりとわかってます。でも、一晩中マスターの居ないところで過ごして、誰もわたしのことがわかる人の居ないところで過ごして、すごく寂しかったんです!』

涙目のまま両手をブンブン振って力説する。
ちなみにメモ帳に書いて会話をしているため話が遅々として進んでいなかった。

くすまない、俺が気付かなかったばかりに＞

『うう、さっきからそればかりですマスター。その紙を見たのは5回目です!どうして、ちゃんと声を出してお話してくれないんですか?声を、聞かせて欲しいです』

意気消沈とした様子で、瞳の端に涙を溜めるエフェクト・ヴェーラー。

確かに、紙に書いて会話をするというのは失礼な話。
自らの誠意を見せるために、ヒノキはメモ帳をしまった。

「オ、オホン、ごめんな、本、当に、ゴホ!ゴホッ、悪、ゲホ」

『は、はわわわ、大丈夫ですか！？マスター！しっかりしてください！』

「大丈夫、コホッ、喉が、ちょっと、痛い、だけだ」

『あわわ、お水！誰か、マスターに飲み物を！』

「大丈夫、夫だから、そんな、慌て、ゴホッゲホ」

『ぜんぜん大丈夫じゃないです！えーと、あっそうだ！三沢さんが出したおっきな竜に頼んで』

「いや、それ、は」

意味が無い。

と叫ぼうとしたが喉が痛くて声が出てこない。

ゴホゴホッと咳きこんでいたら、横からスッと飲み物を差し込まれた。

「ふむ、私の飲みかけで良ければ君に上げるぞ」

「そう、か。じゃあ、遠慮な、く」

「うむ、気にしないでいいぞ。君の為だからな」

雪の手から飲み物を受け取る。

そのまま口をつけて飲もうとしたが、
(ん？　そういえば、間接キスになるのか？)

飲み口をまじまじと見つめて飲むのを思いとどまった。
だが、間接キスがどうのという細かいことを気にしている暇は無い。
い。

(どうでもいいか)

疑問を切り捨てて、口をつけずに飲み物を上から流し込んだ。

「あー、あー、よし、ありがたいな雪」

「うむ、それにしてもひどい声だな。喉は大丈夫なのか？　ヒノキ」

「問題ない、2、3日すれば治るさ、ケホッ」

「そうか、養生した方がいいぞ」

平坦な口調で言って、飲み物を受け取る雪。

そして、自分の元に返ってきた飲み物に口をつけた。

「むっ、空になってしまったな。では、私はこれを捨ててくる」

雪が踵を返して立ち去っていく。

やってきてから十数秒と経っていない。まるで便利屋のような働きに、少しばかり気が咎めた。

『マスター！喉の調子は大丈夫ですか？』

「ああ、問題ない。多少はマシになったよ」

問いかげに答えて、エフェクト・ヴェーラーに向き直る。

中央の方では万丈目と三沢が会話をしていたが、気にする暇は無かった。

ホッと安堵するような息を吐いて、エフェクト・ヴェーラーが肩を落とす。

『あうう、ごめんなさいマスター』

「いや、謝るのは俺の方だから。元気出してくれ」

『……マスターの声、ガラガラです』

「まあ、昨日ちょっと喉を酷使したからな」

『あう、ごめんなさい。喉が痛いから紙に書いてお話をしていたんですね』

申し訳なさそうに顔を曇らせて、謝罪をしてきた。

だが、謝られるような覚えは無い。

むしろ謝るべきなのは自分の方なので、ヒノキは微妙な気分になった。

『ごめんなさいマスター。わたし、捨てられたんじゃないかって思
つて。それで、マスターが声を聞かせてくれないから、わたしの
ことが嫌いになったんじゃないかって不安に、なって』

声が震えだす。

（何を言ってるんだか）

随分と心配性だな、とそう思ってヒノキは1つ息を吐いた。

「あのさ、俺がお前を、いやお前たちを捨てるわけがないだろ？俺
にとって唯一無二のかけがえのないものなんだからさ」

『ふえ？かけがえのないもの、ですか？』

「ああ。俺のデッキ、俺の大切なカード、それは俺にとって全部か
けがえのない存在で捨てるなんて有り得ないさ！」

不安を吹き飛ばすような明るい声で言い放つ。

ガラガラ声だったので爽やかからは天と地ほどの差があったが。

喉の痛みを押し殺して、言葉を続ける。

「俺は、お前の姿が見えるようになるまで、こんな可愛い精霊が自
分の近くに居るわけがないって思ってたんだ。自分が居て欲しいと
思うから、居るわけがないってさ。だから、俺が嫌いになることも
絶対に有り得ない」

『……今言ったこと、ホント、ですか？今言ったことぜんぶ信じち

やっていいんですか?』

エフエクト・ヴェーラーは期待と不安の入り混じった瞳でこちらを見つめていた。

(本当に、心配性だな)

確認を取らなければ安心が出来ないと見える。それは後で拒絶されるのが怖いから、自分が耳にした言葉が幻の類ではないと確かな答えが欲しいからなのかもしれない。

そんなエフエクト・ヴェーラーの様子が可笑しく感じられて、ヒノキは軽く笑いながら首を縦に振った。

「大丈夫、全部俺の偽らざる本心だからさ」

『マ、マスター!』

顔をパアツと明るくして胸に飛び込んでくる。

そして、そのまま反対側にすり抜けた。

エフエクト・ヴェーラーが恥ずかしそうに顔を朱に染める。

『あうっ、またやってしまいました。えへへ』

「ハハ、これで2回目だぞ?」

『あう、嬉しくなって、つい』

恥ずかしそうな顔でどこか嬉しげに笑うエフェクト・ヴェーラー。本音を言くと、意外と心臓に悪いので控えて欲しいのだが、嬉しそうな顔を前にしてそんなことは言えなかった。

「まあ、何て言うのかな。そこまで慌てる必要は無いんじゃないかな？」

『そんなことはありません！今まで、その、マスターから話しかけてくれたことが無いのも嫌われてるからなのかなって、そう思ってた、その』

顔を少し俯かせて両手の指をツンツンとさせる。

確かにエフェクト・ヴェーラーとの会話で、自分から話しかけたことは一度も無かった。

（本当は2回ほど、呼びかけたことがあるんだけどなあ）

しょうもないことを考えて、少しばかり苦笑いする。

呼びかけたのは夜の女子寮。

エフェクト・ヴェーラーが居ない時のことだったので、言っても仕方が無かった。

「えーと、さ……なあ、エフェクト・ヴェーラー」

『ふえ？あっ！はい！何ですかマスター？』

「昨日の夜にさ、ちょっと考えたんだ。エフェクト・ヴェーラーって長いからさ、短い呼び名を考えようって。愛称、とも言うかな」

『愛称、ですか？』

「ああ」

コクリと瞳を見つめながら頷く。

エフェクト・ヴェーラーはキョトンとしていた。

（呼び名、か。真剣に考えるべきものだよねあ）

短い呼び名を考えよう、と確かに昨日の夜に心に決めていた。でも、色々とあったせいか、実はあまり考えてはいない。

本当ならじっくりと時間をかけて名前を考えようと思っていた。

だけど、どこまでも心配性で考え過ぎてしまう精霊へ今すぐに確かな証を与えたい。

そう思ってヒノキは心に浮かんだ言葉をそのまま口にした。

「エフェクト・ヴェーラーって名前から1つ取って『クー』っていうのはどうだ？ちなみに漢字を当てると『空』っていう字だ」

明るい声で言い放って、綺麗な空の色をした髪の毛を指差す。

エフェクト・ヴェーラーはどこか呆けたような表情で自分の髪を手で掬った。

『クー、ですか？』

「ああ、どうかな？」

『クー、空……』

自分の髪の毛を見ながら確かめるように何度も口ずさむ。
その顔はやはり、どこか呆けたような表情だった。

(もしかして……)

クーという名前は中々に素晴らしい名前だと自負しているが、即興で作ったことに変わりはない。

「もしかして『クー』って名前、気に入らない、のか？」

『……いいえ、そんなことはありません』

エフェクト・ヴェーラーは首をフルフルと横に振った。
間違いを訂正するように優しく、ゆっくりと。
そして、パアッと顔をほころばせて満面の笑顔で言葉を紡いだ。

『すごく、気に入りました！マスター、大好きですっ！』

「そっか、それは良かった」

言葉を聞いてホッと胸を撫で下ろす。
嬉しく思ってくれたのなら、即興だろうと何だろうと言った甲斐があったというものだった。

「それじゃクー！昨日は一緒に居れなかった分、今日はずっと一緒

に話でもするか!」

『ホ、ホントですか!? わたし、ずっとマスターとお話するのを楽しみにしてたんです! 約束ですよ? 破ったら、えくと、ハリセンボンですよ?』

「ははは、問題ない問題ない。幾らでも相手になってやるさ」

明るい声で笑いながらサムズ・アップする。
クーは嬉しそうに顔を赤らめた。

『えへへ、それじゃあ、約束、ですよ?』

ニツコリと微笑んで小指を差しだしてくる。

(ハハハ、無理言うなって)

小指を絡めることなんか出来ない、そんなことを思いながらヒノキは首肯した。

中央の方から三沢の声が響いてくる。

「十代、お前のE・HEROを封じる7番目のデッキはじきに完成する。そして、柳ヒノキ! お前のシンクロを封じる八番目のデッキも考案中だ! って、おい聞いているのか! おうい!」

「三沢、ヒノキに今話しかけるのは止めた方がいいぜ。流石に今邪魔をするのは可哀そうだからな」

十代がポンポンと三沢の肩を叩いた。

叩かれた当の本人は怪訝な表情を浮かべる他ない。

「邪魔をする？可哀そう、だって？意味がわからないんだが」

「えーと、あー、あれだ、細かいことは気にするな！」

「……アニキも随分とヒノキ君に毒されてきたッスね」

呆然と呟く翔。

デュエル場には何やら微妙な雰囲気の流れていた。

第18話《後編?》心がこもっていれば問題ない、と高らかに言いたい（後書き）

今回は場面変更が少し多くなってしまいました。

どうにもキャラクターが増えると文章が長くなって時間がかかってしまうのがつらいところ。

さて、今回ヒノキ君は胸のリングをうまい具合に誤魔化して脱出をすることに成功しましたが、実際のところは多分バレるのではないかと僕としては思います。多分、人にも依るんでしょうけれど。

それでは、次回にて。

第18話 e x 報われぬ心（前書き）

今回の e x はヒノキ君が無事に女子寮を脱出した次の日の話です。会話が非常に少なく、読みづらいかもしれませんが、そこら辺はご容赦ください。

それではどうぞ。

第18話 ex 報われぬ心

（海野幸子の優雅な1日）

朝、カーテンから光が差し込み部屋を明るく照らす。

いつもと変わらない朝、いつもと変わらない日常の始まり。

世界は何も変わっていない、それは厳然たる事実である。しかし、それでも日常の始まりに幸子は心を高揚させていた。

ウキウキとした気持ちでパジャマを脱いで制服へと着替え、身だしなみを整えていく。

本来なら寝起きではつきりとしめない目蓋は既にパツチリと開かれており完全覚醒していた。

起床した後は朝食の時間となる、必然的に女子寮に居る生徒の全てが食堂に集まることになる。購買部もやっていない時間帯なので寮の食堂で食べるのが一番効率的なのだ。

つまり食堂へと行けば昨日の夜に会った女生徒、柊ヶヤキに会うことが出来る。お友達となった柊ヶヤキに。

「さて、これで身だしなみは完璧ですわね」

姿見で自分の姿をしっかりと確認してニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

いつもと同じ朝、何も変わらない、そのはずなのに何かが違う気がした。たった1人の存在がいつもと変わらない日常を変えてくれるような、そんな気がして高揚する気持ちを抑えることが出来なかった。

（ヶヤキさんは今どこに居るのかしら？）

もう一度、今度は楽しげに幸子は笑う。

今まではどこか不満だった、何かつまらなかった、どうも変わりが映えのしない毎日を惰性で過ごしているような、そんな気さえしていた。

今は色鮮やかに感じる。世界はこんなにも綺麗だったのか、と新鮮な心地に包まれていた。

昨日までは手狭に感じられて不満だった部屋も全く気にならない。

「ふふふ、準備はバッチリですわね」

笑う。心から洩れ出てくる暖かなものが声となって次々と変換されてゆく。次から次へと尽きることなく。

準備を完全に整えた幸子はドアノブを回して外へと出た。

柊ケヤキと朝食を取るために。

約束なんかしていない、ただの願望。けれど約束していないからこそ余計に会いたい気持ちが強さを増していく。

やりたい事や聞きたいことがたくさんあった。

昨日の夜に一度会った、それだけの相手。だけど、たった一度だけで十分。

決闘者は決闘によって互いを知ることが出来る。どこまでも諦めることが無い高潔な魂を、どんな理由であつたにせよデュエルをしているときの真剣な想いを、彼女・柊ケヤキの本物を確かに感じる事が出来たのだ。

楽しかった時間、忘れられない一時。それが夢幻となって蜃気楼のように露と消えて欲しくなかった。

たったそれだけ。

柊ケヤキともっと仲良くなりたい。

食堂へと辿り着いた幸子はキョロキョロと辺りを見まわしていた。朝食の時間ということもあって食堂は混雑としており、たった1人を探し出すのは困難な状況。

「……おかしいですわね。ここまで探しても見付からないなんて」

幸子は誰にも聞こえないほどの小さな声で自らの疑問を口にした。幸子は決められている朝食の時間よりも早く、いつもより10分は早く食堂へと来てしまっていた。

そこから今に至るまで既に食堂へと居た人間、新たに食堂へとやってきた人間、その全てをチェックしている。

それなのに何処を探しても柊ケヤキが見当たらない。

（やっぱり、おかしいですわ）

食堂を再び見渡して幸子は焦燥感を募らせた。

やはり、食堂のどこにも柊ケヤキは居ない。

おかしい、絶対的に何かがおかしい。そう思って幸子は奥歯を噛みしめた。

見つからないわけがないのだ。

柊ケヤキはとても特徴的な恰好をしている。

制服の下に長袖のTシャツを着用し、異様なまでの長さをした靴下で肌の露出を徹底的に許さない、腕も脚も真っ黒な姿。

髪も真っ黒で目と鼻と口以外は覆い隠してしまうほど膨大な量の前髪によって顔の輪郭すら掴むことが出来ない。

そんな目立つ格好をした人を見つけられないわけがない。

例えば人が多く居るからといっても、特異な恰好をしている人間は

違う恰好をしているが故に同じ格好をしている周囲から強調され簡単に認識することが出来るはずなのである。例えば1人だけコートを着ている黒髪の先端部分だけを金色に染めている人のように。

故に柊ケヤキは食堂に居るのであれば見つからなければおかしいのだが

（本当に、何処にも居ませんわ）

やはり食堂の中にケヤキの姿は無かった。

本当にどこにも見当たらない。むしろ幸子としては食堂内にケヤキは居ないと判断してしまうのが妥当であるように思えてきた。

（まさか、またあの壺を磨いているのでは？）

思い出すのは昨日の光景。

ケヤキは一心不乱に壺を磨くことに熱中していた。食事を取るにとすら頭から抜け落ちるほどに。

気持ちとは分からなくもない。あの壺は本当に高価な芸術品なのである、その魅力は綺麗な方が輝きを増す。

だが、2日連続というのは有り得るのだろうか？

前の晩に磨いて綺麗になっているのに、翌日の朝も続けて壺を磨くことは普通しない。

（わたくしの家に勤めている本職のメイドたちならば分かるのですけれど……）

本職でもない一介の学生であるケヤキがそこまでやるだろうか？

そこまで考えて幸子は奇妙な納得をした。

（そうですわね、やるかもしれませんわ。ケヤキさんなら）

少しばかり頭を抱える。

何せ柊ケヤキは真っ平らな起伏の皆無な大平原を隠すためにリングを胸に仕込んでいたくらいなのである。『普通』などという言葉が通じるわけが無かった。

「本当に、不思議な方ですわ」

ハア、と溜息混じりに小声で呟く。

『終ケヤキだから』

という説明にもなっていないような言葉だけでケヤキに関してはどんな不思議なことでも納得できてしまうような気がした。

（仕方のない方ですわね）

ふう、と1つ息を洩らして身体力を抜く。

居ないのであれば仕方が無い、心の中で割り切って朝食へと手をつけた。

（せっかく、このわたくしが朝食をご一緒して差し上げようと思ったのに……）

パサリ、と作られたばかりのはずである朝食は何日も乾燥させたかのような渴いた味がした。

朝食が終わり、正面玄関前。

何故かいつも以上に味気のない朝食を食べきった幸子はここでもキヨロキヨロと辺りを見まわしていた。

「ここにもいませんわね」

昨晚、ケヤキが立っていた場所には綺麗になって魅力を増した壺だけが鎮座している。

擦れ違いになったか、あるいは元から居なかったかの二択。

「わたくしとしたことが、少し浅はかでしたわね」

ハア、と自らを悔いるように溜息を吐く。

よくよく考えたら二択の内どちらでも結局はケヤキに会うことの出来る可能性はほぼ皆無だった。

ケヤキは昨日の夜に壺を熱心に磨いていた、ならば昨日よりも壺が汚くなっているわけは無く例え壺を磨いていたとしても昨日より時間がかかるわけがない。

昨日と同じ時間をかけて、昨日と同じタイミングで、昨日と同じ場所に行っても居るわけがなかった。もう一方の可能性については言わずもがな。

（本当に困りましたわね）

この場所、昨日ケヤキと初めて出会った場所に居ないのであれば幸子にはケヤキが何処に居るのか見当もつかなかった。

唯一思いつくのは自分の部屋に戻っているのかもしれない、という誰でも考えつくようなことだけ。

（そうですね……）

そういえば、と昨日の会話を思い出す。

ケヤキは頑ななまでに風呂に入りたがらなかった。

顔色が悪いようには見受けられなかったし熱も無かった。自らの小さな胸を知られたくなかったから早い時間には入ろうとしないのだろうと思っていたのだが。

もしかしたら本当にどこか具合が悪かったのかもしれない。

昨日の状況を鑑みるに可能性としてはかなり低いと思われる。だが、

（どちらにしろケヤキさんの部屋を訪ねてみるべきですわね）

どんな可能性だとしてもケヤキの部屋に行くのが今の状況において会える確率が一番高かった。

「そうと決まれば善は急げ、ですわね」

早くしなければ授業開始時刻など瞬く間にやってくる。

ケヤキの部屋がどこにあるのか幸子は知らない。そのため、まず最初に女子寮の寮長である鮎川恵美先生に部屋番号を聞きに行くことにした。

授業開始まで残り50分弱。

目の前に居る鮎川先生が手に持つ書類とにらめっこしている。

急いだ甲斐もあり十分な時間を残して鮎川先生の元へと辿り着くことが出来たのだが一向に情報が手に入らなかった。

一通り書類に書かれていることに目を通してから、鮎川先生が幸子に視線を向ける。

「海野さん、探している生徒の名前は『柊ケヤキ』で本当に合ってるかしら？」

「？変なことをお聞きになりますわね、鮎川先生。柊ケヤキで確かに合っておりますわ」

意図の掴めない質問に眉根を寄せながら幸子は返答をした。

返事を聞いた鮎川先生は「そう、だったらなおさら可笑しいですね」と小さな声で呟いて訝しげな表情で再び書類に視線を落とした。
(さっきから一体何なのかしら?)

意味がわからない。

心の中で呟いて幸子も同じように訝しげな表情を浮かべて瞳を細めた。

柊ヶヤキの部屋がどこにあるのか教えて欲しい、とその言葉に鮎川先生は快諾してくれたのだが未だに部屋の場所を教えてくれない。生徒に割り当てられた部屋など書類を見れば数秒とかからずに分かりそうなものなのだが、鮎川先生はずっと書類とにらめっこしているだけだった。

(ホントに何度書類を見返すんですの?)

何でもいいから早くしてほしい。

気を抜いたら足が勝手にリズムを刻みだしそうなほど幸子の心はざわめいていた。

早くしなければ部屋にケヤキが居たとしても擦れ違いになる可能性があるため、本当に早くしてほしかった。

「……おかしいわね、やっぱり」

鮎川先生がポツリと呟く。真剣な眼差しで手に持つ書類に視線を落としながら。

おかしいおかしい、と同じことばかりを繰り返し言葉にしている。だが、おかしいという言葉だけでは一体どういうことなのか欠片も理解することが出来ない。

何だか雲行きが怪しくなってきた、とそれだけを感じて幸子は眉をひそめた。

「鮎川先生、一体何がおかしいとおっしゃいますの？」

「ええ、それが部屋割のプリントを見てみたのだけれど柊ヶヤキの名前がどこにもないのよ」

書類に視線を落としながら鮎川先生が返答をしてくる。

（部屋割に名前が、ない？）

予想だにしていなかった言葉に幸子は呆然とした。

「それどころか……」

じつくりと亀のような慎重さを期して書類に這わせている視線を上から下へと動かす。

「柊ヶヤキという名前は名簿のどこにも載っていないのよ」

「はっ？」

瞬間、幸子の頭は真っ白になった。

名簿に載っていない、それは柊ヶヤキという生徒がアカデミアには存在しないことを示している。

（……どういふことですか？）

幸子には意味がわからなかった。

昨日、確かに会話をした、デュエルをした、その存在を感じた。そんな柊ケヤキが存在しないと鮎川先生は言っている。

ならば昨日お友達になった柊ケヤキは幽霊や幻の類だとも言うのだろうか？

「……そんなはずありませんわ」

「海野さん？」

ポツリと呟かれた否定の言葉に鮎川先生が怪訝な表情を浮かべる。熱を測った時に柊ケヤキの身体を確かに触ったのだ。手に感じた温もりは偽りなどではなかった。

「先生の見間違いではありませんの？どこか見落としている部分があるのではなくて？」

「いいえ、それはあり得ないわ。何回も書類の隅から隅まで目を通したけれど見つからなかったもの」

あっけらかんと残酷なまでにあっさり事実を突き付けてくる。間違いは無いと確固たる口調で。

確かに何度も繰り返し書類に目を通していた。

そのことで幸子も若干イライラとしていたので、疑う余地も無い。見落としがある可能性は皆無だろう。

「では書類に不備があるんです。もしくはケヤキさんがアカデミアに転入したばかりで名簿には載っていない、とか」

自分にも理解できない感情。心の中でざわめいている熱いものに動かされて次々と可能性を示唆していく。

間違っているのは鮎川先生で、柊ケヤキは確かに存在するという可能性を。

認められない、認めることなど出来るはずが無かった。

楽しかった一時が夢幻、これから訪れるであろう楽しい時間は永遠に訪れることは無い、などということは絶対に認めたくは無かった。

「……そうね。転入生という話は裁 司さん以外に聞いていないけれど、書類に不備がある可能性は捨てきれないのよね」

先ほどの台詞とはうってかわって、訝しげな声で口調を揺るがせて思案顔をする。

聞きなれない名前が出たが、そんなことはどうでもよかった。

揺らぎに付け入り、言葉に追従する。

「きっとそうに違いありませんわ。書類に不備があるに決まっていますわ」

あくまでも強気に、ざわめいている心の内を悟らせないように言葉を紡ぐ。どうして自分が今の状態を隠したいのか自分でも分から

ないまま。

「そうね、もう少し書類に関して調べる必要があるわね」

「ええ、その通りですわ鮎川先生」

コクリ、と相槌を打って幸子は同意をした。

当初、鮎川先生の元を訪ねた時とは目的がいつの間にか変わっていることに気が付く。

質問をするために来たのに、今は質問自体を守るために口を動かしていた。

チラリ、と鮎川先生が時計へと目を向ける。

「そうね……海野さん、あなたは授業に向かいなさい。書類に不備がないかどうかは私の方で調べておきます」

言われて幸子も時計へと目を向けた。

もはや授業開始まで残り30分ほど、移動時間を考慮するつとギリギリの時間である。

「わかりましたわ、鮎川先生。それでは授業が終わったらもう一度寄らせていただきます」

「ええ、急いだ方がいいわよ」

「はい、それでは失礼いたしますわ」

一礼をして、寮長室を後にする。

ざわめく心は不快な熱を帯びていた。

（一体どういふことなんですの？意味がわかりませんわ）

頭の中は疑問でいっぱいだった。起床したときの晴れやかな気持ちには消えうせている。

『柊ケヤキの名前は名簿には存在しない』

その事実は何ヤキと一緒に過ごした時間を、思い出を否定しているようで何か嫌だった。

授業が終わり放課後。

結局、幸子は柊ケヤキを1日中見つけることが出来なかった。

今は夕食も終わりお風呂の時間。ゆったりと一糸纏わぬ姿で湯船に浸かっている。

いつもながらリラックスしながら数少ない癒しを堪能するのだが、幸子は眉根を寄せて苛立たしげな表情を浮かべていた。

（ホントに、ケヤキさんはどこで何をしているのかしら？）

ギリギリと奥歯を噛みしめて、ブクブクと湯船に顔を半分ほど沈める。

もはやケヤキの名前を大声で叫んで呼びかけるのが最善の手ではないか、とそんな極端で無謀なことを考えてしまうほど事態は困窮していた。

本当にどこを探しても、どんなに探しても柊ケヤキが見つからない。

授業中、休み時間、昼休み、どこにも姿が見当たらない。夕食の時間にも姿は見えず、その後には壺がある場所に再び行ってみたがそこにも居なかった。

鮎川先生の所に行っても何の手がかりも得られず、

『書類に不備は無かったわ、新しい名簿があったわけでもないし、名前を聞き間違えているとかそういうことは無いかしら？ 良く思い出してみて』

と、そんなことを言われただけだった。

（間違えるわけがありませんわ！）

思い出して幸子は少しばかり憤慨する。

とても特徴的な名前。

間違えるわけがない、一字一句聞き逃さなかったし、名前を呼んだ時彼女は、柊ケヤキは確かに応えてくれたのだ。

名前を間違って覚えていることなどあるわけがない。

（ホントに、困りましたわね）

ハア、と溜息を吐いて湯を手の平で掬う。

チャプリ、と音を立てて手の平にのった湯は掬った端から零れ落ちて、ただ濡れた手だけが残った。

今の状況はまさしくそんな感じだった。

楽しい時間、いつもがいつもでなくなるような気がしていたのに、またすぐに柊ケヤキと会うことが出来ると思っていたのに……肝心の柊ケヤキに会うことが出来ないなんて想定外もいいところ。

「本当、どうすればいいのかしらね」

ハア、と再び溜息を吐いて浴場の光景を漫然と眺めた。

あまりにもケヤキを見つけることが出来ないので身体の力すら抜けていく。

黒髪の手端を金色に染めている女性が、機嫌よさげな鼻歌交じりに目の前を横切っていた。

自分がこんなにも悩んでいるというのに、何故あんなにも幸せそうなのか？と理不尽で行き場のない怒りすら感じてしまう。

（さっきの人、随分と胸が大きかったですね……）

タウンタウンと音がしそうなほどたわわに実っていた豊かな双丘を思い起こす、件の人物は既に見えない場所へと行っていた。

（ケヤキさんが見たらどう思うのかしら？）

近くには居ない人の反応を想像してクスリと笑う。

リングを服の中に仕込むほど胸のことを気にしていた人間なのだ、きっと自分には想像できないほどの反応をしてくれることだろう。

「女性の価値は胸の大きさなどでは決まらない、と荒々しく詰め寄ってくるだろうか？」

「うろたえながら見なかったことにして視線を逸らすだろうか？」

「それとも何1つ気にした素振りを見せずに平静を装って湯船に浸かっているだろうか？」

そこまで考えて、幸子は急に虚しくなった。

どんなに考えても、どんなに思っても、結局のところ隣にケヤキは居ない。

自分の身に訪れていない幸福を想像するのは惨めなだけだった。

隣にケヤキさえ居れば、今のお風呂も、味気なかった朝食も、つまらなかった授業や休み時間もきつと楽しくなるに違いないという

のに。

（本当に、ケヤキさんはどこに居るのかしらね……）

湯船に身体を沈めながら、浴場を漫然と眺める。

皆が皆、一糸纏わぬ姿で身体を洗い、湯船に身体を沈めている。

身体を清めながら談笑に花を咲かせているものや、ふざけて胸を揉みしだいている者まで居た。

それでも、やっぱり柊ケヤキの姿はどこにもない。

昨日もケヤキはお風呂に入るのを嫌がっていた、おそらく大平原を人に知られるのが嫌で見せたら誤魔化すことが出来ない自分の裸を見られるのが嫌なのだろう。

そこまで知られたくないというのは、平均的な大きさの胸を持つ幸子には分からないことであつたが。

胸のことを知られそうになつたときなりふり構わず逃げ出そうとまでしたので、相当なものであることは想像に難くない。

だが、流石にお風呂には入らないということは無いだろう。その場合、毎日お風呂には入らないということになる。普通の神経を持ち合わせているのであればまず不可能。

幸子としては1日でもお風呂に入らないということは考えることすら出来なかつた。

1日中どんなに動かなかろうと汗はかくし、髪はべたついてくる、どうしても身体は汚れるのだ。一見どんなに視覚上は綺麗に見えていたとしても。

それは生きている以上は避けて通ることが出来ない道。

ならば、このまま湯船に浸かって待っていればケヤキを見つけることが出来るかもしれない。もしかしたら胸のことを知られたくないからと言って人が少ない時間を見計らって入ってくる可能性がある。

（そうですわね……でしたら、いつもよりも少し長湯をすることにしましょう）

これからの方針を決めて、瞳に力を込めて浴場全体を見据える。

いつケヤキが浴場に入ってきたとしても即座に分かるようにと、幸子は意識を集中した。

少し湯あたりをしそうな気がしないでもないが、ケヤキを見つけれないのであれば全く苦にならなかった。

「……でも、改めて見てみるとかなり人が多いですわね」

浴場の様子をじっくりと見つめて、呆然と眩く。

人が少なくなってから来るのであれば、まだまだケヤキは浴場に来そうにはなかった。

（長期戦になりそうですわね）

もしかしたら入り口で待ち伏せをしていた方が簡単かもしれない、と幸子はそんなことを思った。

ふう、と1つ息を吐く。

「本当にのぼせてしまうかもしれませんわね」

ポツリと懸念を口にして、力なく身体を湯船に沈めた。

ブクブクブク、と意味も無く顔を湯船に浸ける。

どんどんと時間が経つにつれて気力が削がれていってしまいそうだった。

（おかしいですわ）

こんなはずじゃなかったのに、と幸子はそんなことを思う。

何だかつまらない毎日が変わるような、そんな予感がしていたのに、きっと楽しいことになるかと柄にもなくワクワクしていたというのに……

これは責任を取ってもらわなければ気が済まない。

（ケヤキさん、見つけたら覚悟していただきますわよ）

半ば怒りにも似た感情に突き動かされて、ガバツと湯船から顔を上げた。

「むっ、どうやら溺れていたわけではなかったようだな」

「はっ？」

顔を上げた瞬間、あまりにもあんな言葉がすぐ近くから投げかけられる。

声を掛けられた方向へと目を向けてみると、すぐ隣に栗色の長い髪を背中の中ほどまで下している切れ長の瞳をした女子が居た。

（また、随分と胸の大きい方ですわね）

先ほど近くを通った黒髪の先端を金色に染めた女子と比べてみても遜色がない。

ケヤキが居たらどんな反応をするだろうか、と幸子は頭の片隅でそんなことを思った。

「あなた、変なことをおっしゃいますわね。いきなり何ですの？」

「むっ？何、と言われても、湯船に顔を沈めて動かなかったのだから必要ならば蘇生処置をと思ったただけだが」

「あなた、随分と変わった方ですわね」

「？そうだろうか？私は至って普通の人間だと思うぞ？」

淡々と表情も変えずに平坦な口調で言い放つ。
(ケヤキさんと同じくらい不思議な方ですわね)
目の前に居る人物は柊ケヤキと同じくらい変な人だと、幸子は思った。

「ホントに変な方ですわね」

「むう、何だか釈然としないな。私は変な人なのか？」

「ええ、わたくしが知っている方に勝るとも劣らないくらい変な人ですわ。というか、あなたの返し方が既に変な人の証になってますもの」

「ふむ、成る程。よくわからないが、これからは言動にも気を付けることにしよう」

ウンウン、と頷く。

奇妙な会話をしている、と頭の片隅で実感した。

その会話は、どこか昨日の柊ケヤキとの出会いを彷彿とさせて、幸子は少し淋しく思った。

「それで誰だか知りませんが、わたくしは溺れてなどいませんから別に気にしなくてもよろしくてよ」

心の内を知られないように、ざわめいている心を振り払うように
明るい声で言葉を口にする。

「うむ、蘇生処置が必要ないことは十分に承知している」

コクリと頷くが目の前に居る人物は動こうとはしなかった。

「まだ何か？ わたくしに用でもありますの？」

「うむ、1つ聞きたいことがあるんだ」

もう一度、コクリと首肯をする。

（成る程、そういうことですね）

そう思って、幸子は得心した

おそらく元々質問をするために近づいてきたのであろう。

「ふう、わかりましたわ。それで、聞きたいことというのは一体何
ですか？」

「ふむ、実は姉上を探しているのだが」

「姉上？」

「うむ、髪質を向上させようと思ってな。ヒノキと近しい姉上なら
ばあの髪質を保持するのに何をしているのか知っているのではない

か、と3分前に思いついたのだ」

「随分と突発的な行動ですわね」

言葉に相槌を打って幸子は少し微妙な表情をした。

あまり聞きなれない名前が出た。

ヒノキとケヤキ、何だかよく似た名前である。どちらも樹木の名前だ。

面白い偶然だな、と幸子はそんなことを思う。しかし、名前が似ているなんてことは世間にはありふれたことで別段珍しいことではない。

髪質がどのと言っているが、目の前に居る人物の髪はそれほど悪いようには見受けられない。女子としてはごく標準的な髪の毛。

これ以上髪質を向上させる必要はあまり無いように感じられる。

(まあ、わたくしが気にしても仕方のないことですわね)

髪は女の命という言葉もある、色々と第3者が気にしても仕方が無い。そう考えて幸子はあまり深入りはしないことにした。

「それで姉上というのは誰のことですか？名前や身体的特徴をおっしゃってくださいさなければ誰のことだか分かりませんわよ」

「ふむ、失念していたな。名前は裁司、1つ上の2年生で髪の毛の先端を金色に染めている黒髪の人だ。どこに居るのか心当たりはないだろうか？」

「先端だけを金色に染めた人？心当たりは、ありますわね」

眩いて即座に思い出す。

黒髪先端部分だけを金色に染めている人。

今さっき上機嫌で目の前を横切っていった胸の大きな人である。行き先などは知らないが、どの方向へ行ったかくらいは把握している。今すぐ教えるのは簡単だが、少し心の中で引っ掛かることがあった。

（確か裁 司っておっしゃいましたわね……）

頭の中で名前を反芻する。

朝に寮長室を訪ねたとき鮎川先生が言っていた。

『転入生という話は裁 司さん以外に聞いていない』

と、そんなことを。だが、もしもケヤキが転入生でまだ名簿に名前が載っていないのだとしたら同じ転入生である裁 司なら何かを知っている可能性がある。

（聞いてみる価値はありますわね）

可能性は低いかもしれないが今の状況を打破できる一手となるかもしれない、と一縷の望みを託してまずは裁 司と近い関係にあることが推察できる目の前に居る女子から情報を聞き出すことにした。

「あなたが言っている裁 司さんと思しき人はあちらの方に行きましたわ」

「むっ、成る程。10時の方向だな、感謝する」

「お待ちなさい、わたくしも1つあなたに聞きたいことがありますの」

去っていかうとする身体を、手を掴んで止める。

「むっ、成る程。確かに私だけが質問をするのは不公平だな。うむ、何なりと質問をしてくれ」

「話が早くて助かりますわ」

「うむ、回りくどいのは趣味ではないからな」

やっぱり変な人だ、とそう思って幸子は少し笑みを零した。

「それで質問なんですけれど、あなた裁　司さんとは仲がよろしいのでしょうか？ 柊ケヤキという名前をその方から聞いたことは無いかしら？」

「むっ？ 柊ケヤキ？」

無表情のまま怪訝な声を上げる。

それだけでやはり無理があつたかと幸子は半ば諦めた。元からこちらの方にはあまり期待はしていなかったが。

こうなったら一緒に付いて行って裁　司の所へ行った方がいいかもしれない。

「……むう、似たような名前の友なら居るのだが柊ケヤキという名

前は私の知り合いには居ないな。身体的特徴を覚えてくれないか？」

「わたくしが質問されたときと同じことを聞いてきますのね……まあ、いいですわ。ケヤキさんは胸にリン、ってそうだった言っではいけないでしたわ」

「む？　どうかしたのか？」

「何でもありませんわ、忘れてください」

「ふむ、そうか。ならば忘れよう」

「ええ、聞かなかったことにしてください」

言葉に追従して、幸子はホッと胸を撫で下ろした。

あやうくケヤキとの約束を違えてしまうところであった。

気をつけなければいけない、そう思って仕切り直しをする。

「オッホン、えーと、ケヤキさんは、そのー、えーと……」

胸にリンゴを仕込んでいるという最大の特徴を言うことが出来なくて、幸子は少しばかり言い淀んだ。

頭の中にケヤキの姿を思い浮かべる、特徴など言おうと思えば無数にあった。

「えーと、前髪が異常に長くて、制服の下にシャツを着ていて、異

常に長い靴下で肌を全く露出させない恰好をした……少し不思議な方ですわ」

「ふむ、前髪が長くて、肌を露出させていない……」

目の前に居る女子が少し思案をする。

「むう、ところでその柊ケヤキが着用している服の色は黒ではなかったか？」

「あら、よくわかりましたわね。制服以外は真っ黒でしたわ」

「ふむ、成る程。では間違いないな」

ウンウンと頷いて目の前に居る女子は1人で納得をし始めた。
反応から見るに、柊ケヤキのことを知っているようである。

（意外とついておりますわね）

今まで何1つケヤキの情報が手に入らなかったが、こんなにあっさりと情報が手に入るのであれば早く人に聞きこみをすれば良かった。とそんなことを思っただけで幸子は少しばかり気分を高揚させた。

何はともあれ、ようやく柊ケヤキがどこに居るのか分かるかもしれないのである。気分が高揚しないわけが無かった。

やがて1人ウンウンと頷いていた目の前に居る女子が重い口を開く。

「君が探している人はヒノキだ、間違いない」

「は？何を言っておりますの、名前は柊ケヤキでしてよ？ケヤキさん自身が名乗ってましたわ」

「ふむ、何故そんなことをしたのかは釈然としないが……君の言っている柊ケヤキは柳ヒノキで間違いないぞ」

「??.?」

幸子には意味がわからなかった。

柊ケヤキが柳ヒノキで、自分の言っていることに間違いは無いと言っている。

(偽名、かしら?)

本当に意味がわからない。

ケヤキが自分に偽名を名乗った。

本当の名前は柳ヒノキだと言う。

衝撃的すぎて頭が少しパンクしそうになった。

だが、本当に偽名だと言うのであればますますケヤキに会わなければならぬ。会って、どういうことなのか問い詰めなければならぬ。

「まあ、いいですわ。ケヤキさん、ではなくてヒノキさんでしたわね。彼女の部屋がどこにあるのかご存じないでしょうか？」

「彼女？何を言ってるんだ、ヒノキは男だぞ」

「……………は？」

「あと部屋は、オシリスレッドの2階で遊城十代や丸藤翔、前田隼人と同じ部屋だな」

「……………は？」

幸子はあるぐりと口を開いて、放心した。

「意味がわからない。」

「意味がわからない。」

「意味がわからない。」

頭の中が1つの言葉で埋め尽くされていく。

（意味が、分かりませんわ）

柊ケヤキはお友達で、もっと仲良くなりたいと、一緒に居たら退屈な日常が変わるはずだと、そう思っていた。

きっと一緒に居ることが出来たら楽しい、どんな時間でも楽しくなるはずだと、心を高揚させていた。

それが、柊ケヤキという名前は嘘で本名は柳ヒノキだというらしい。

柊ケヤキという人間はデュエルアカデミアには存在せず、あまつさえ男だと言っている。

これから訪れると思っていた楽しい時間、そんなものは元から存在しなかった。

（…………じゃあ、朝起きたときバカみたいにはしゃいでいたわたくしは、一体何だったんですの？）

目の前が段々と真っ白になっていく。

「意味がわからない。」

「意味がわからない。」

「意味が、わからない。」

やはり頭の中は1つの言葉だけで埋め尽くされた。

「……意味が、わかりませんわ」

「むっ？ 大丈夫か？」

「……」

目の前で何かを言っているが、どこか遠くで何かを言っているような現実味のない感じがして何だか応える気力すら湧かない。

「むう、返事がないな。やはり蘇生処置が必要だろうか？」

ポツリと呟かれる、どこか遠くの言葉。

結果として、幸子は当初の懸念通り見事に湯あたりをした。

第18話 e x 報われぬ心（後書き）

というわけで、幸子さんのその後の話でした。

ちなみに雪ちゃんがあっさりと事実を話していましたが、本人としては聞かれたから答えただけ、ヒノキ君が女子寮に居たことは全くまずいことだと思っていけないので脱出が出来た翌日にあっさりと言ってしまいました。

ヒノキ君は自分に降りかかる危険よりも、まずは近くに居る人たちをどうにかした方がきつとトラブルも少なくなることでしよう。それでは次回にて。

第19話《前編》分かってはいても、言葉に出来ないものがある（前書き）

やはり例のごとく文が長くなってしまいそうなのでやはり前編です。

かなり時間がかかってしまいました。後編はなるべく早く出せたらいいなあ、と思っています。中編にはならない、ように頑張りたいです。本当に申し訳ありません。

今回は原作ではSALのところにあたります。
それではどうぞ

第19話《前編》分かってはいても、言葉に出来ないものがある

デュエルアカデミア郊外にある森の中。

木々の合間から射しこむ日光がざわめく葉の緑と絶妙なコントラストを生み出している。

それは現実から切り離されているかのように感じるほど、ある種幻想的な光景であった。

現代においては市街の殆どはコンクリートジャングルなのが当たり前。

そんな昨今の状況において自然が溢れる場所の素晴らしさは筆舌に尽くしがたいものがある。

（ああ、何か、癒されるなあ）

しみじみと安らいだ心地に包まれながら、ヒノキは空を飛んでいる感覚に身を委ねた。

チラリと自らの身体を小脇に抱えている存在へと目を向ける。

「なあ、疲れないのか？」

「ウキッ、ウキキッ！」

額に若干の汗を浮かべて必死な形相で返答。

何を言っているのか欠片も理解することが出来ない。

分かったのは自分の身体を小脇に抱えて枝から枝へと跳び回っている猿が疲れてきているという事実だけ。

どうしてこうなったのか、と溜息しか出てこない。

「なあ、クー」

『あっ、はい！何ですか？マスター！』

近くを飛んでいるクーが顔を綻ばせる。

まだ呼びかけたただけだというのに本当に嬉しそうな顔で笑っていた。

幸せそうなクーの表情に少しばかり苦笑しながら、ヒノキは自らの身体を小脇に抱えている。今の状況では命綱とも呼べる存在を視線で差す。

「クーにはこのお猿さまが何て言っているのか分からないか？」

『ふえっ？おサルさんが何て言っていたか、ですか？』

「ああ、クーなら分かるんじゃないかと思ってさ」

動物は人間よりも精霊を身近に感じることが出来る、とおぼろげな記憶を思い出しての質問。

動物と精霊が近いのであればその逆もまた然り、精霊には動物の言葉がわかるかもしれない。

そう思ったのだが

『えーと、そうですねー……』

うーん、とクーは顎の下に人差し指を乗せて考え込んでいた。

(やっぱり、無理があったかな)

ハハ、とヒノキは思わず曖昧な笑みを浮かべる。

(流石にちょっと短絡的だったか)

個人的に大嫌いな数学の世界でも証明と逆証明が必ずしも同時に成り立つとは限らない、と下らないことを考えてヒノキは嘆息しかけた。

『えーと、ですね。おサルさんの言葉を人間の言葉に当てはめるのは難しいので間違っているかもしれないですけど……』

「へっ？言葉の意味は分かってたのか？」

『はいっ！それはバッチリと分かってました！』

褒めてくださいと言わんばかりにエッヘンと得意げに胸を張る。
正直なところ、無い胸を強調されても微笑ましい気分になるだけである。

(あながち間違いじゃなかったのか)

そういえば数学は大嫌いなんだからそれを基準にして考えなくても良かったじゃないか、とヒノキは下らないことを考えて自嘲した。

『それで、ですねえ。おサルさんの言葉を正確に当てはめると』

「ああ、何て言ってたんだ？」

『はい、えっと「おいどん疲れたんでごわす、でも止まるわけには

「いかないんでありんす」って言ってました』

「はっ？」

一瞬、思考が停止した。

クーは少し得意げな顔をしている。

色々なものが混ざり合っていて方言とすら呼べない喋り方。

そんな珍妙な喋り方を命綱とも呼べる猿がしていたのだろうか？
疑問は尽きない。

「あゝ、本当にこのお猿さまはそんな喋り方だったのか？」

『はい！正確に当てはめたらそんな感じでしたよ？』

少し首を傾げながら綺麗な瞳を向けてくる。

1秒も間が開かないほどの即答であった。

『正確に』と言っていたが、それが本当ならばこの猿は一体どこ
の出身なのか？

率直な疑問が頭の中で渦巻いて消えていく。

（……まあ、そういうこともあるんだろうな）

ヒノキは心の中で無理やり納得して自己完結した。

目が覚めたら決闘至上主義デュエルの世界に居たなんてことがあるのだから、猿が理解不能な珍妙な喋り方をしていようと何らおかしくはない。

ウンウンとヒノキは首を縦に振って自分自身を納得させた。

世の中は広いのだ、少しばかりおかしいからといってイチイチ目くじらを立てるのは間違っている。それこそ細かいことは気にしな

いべきである。

自分がよく口にする言葉を自分自身が実行しないのであれば信憑性は皆無。

（問題ない、問題ない）

『事実は小説より奇なり』という言葉が存在するくらいなのだから何ら問題はないのだ。

「世の中、広いなあ」

『?えーと、お外は広いですよねっ!』

「あはは、そうだね。広いよねえ、世界は」

ウンウンと頷きながらヒノキは遠い目をした。
あれ?とクーが首を傾げる。

『……えーと、あの、マスター?』

「ん? ああ、何?」

『えーと、その、「本当に?」ってもう一度聞かないんですか?』

申し訳なさそうな控えめの声。

声の調子は下がり、瞳からは楽しげな輝きが消えていた。
全体的にこういうことなのか意味がわからない。

「一回確認を取ったっていうのに一体何を聞くっていうんだ？」

『ふえ？えくと、あれ？』

何かがおかしいとでもいう風にクーが再び首を傾げた。

意味が良く分からない。

どういう状況なんだ？、とヒノキは少しばかり溜息を吐きたい衝動に駆られた。

首を傾げているが、むしろこちらが首を傾げたい。

『あう、えつと、あの、マスター？』

「ああ、何だ？」

『えくと、その』

「？」

ゴニョゴニョと言いつらそうに口ごもっている。その姿は何かのタイミングを逸してしまい、取っ掛かりを無くしてしまったかのようだった。

『あの、マスター？』

「ああ、何だ？クー」

『あの、えと』

再び、言いづらそうに顔を俯かせる。

ヒノキとしてはどうにも理解に苦しむ状況だった。

一体、何をそこまで言いづらそうにしているのか？

本当によく分らない。だが、こういった状況において下手に先を促すのは得策ではない。むしろ相手の混乱を助長する可能性すらある。

（ここは根気よく待ってあげるのが吉だな）

そんなことを思って、ヒノキはもじもじと顔を俯かせているクーを漫然と眺めた。

視界が上下に揺れる。枝から次の枝へと猿が跳躍するのに合わせて激しく揺さぶられる。

視界が揺さぶられるのはあまり良い気分ではない、とはいえそんな気分を表に出して暴れるようなことはしない。そんなことをして猿にかかる負担を増やして落下することにでもなってしまったらシヤレにもならない、それこそ笑えない笑い話。

（まあ、俺って乗り物酔いはしない体質だしなあ）

だから問題ない、と心の中で下らないことを考えながら気を紛らわせる。

クーは中々口を開かなかった。『あう』とか『え』とか繰り返しながら、次第に頬を紅潮させていく。

まるで愛の告白でもする直前みたいだな、と下らないことだけが頭に浮かんだ。即座に自分にはそういったことは永遠に関係が無いだろうけど、と心の中で補足を加えたが。

『その、マスター？』

おずおずと頬を赤らめながら顔を上げる。
ヒノキは一度ウンと首肯をしてから、クーに安心感を抱かせるべく似非爽やかスマイルを浮かべた。

「うん、どうしたんだい？クー」

自らが出来うる限りの柔らかい声音で言いきる。

『あうっ、えっとお、その、ですね〜』

再三、口ごもって顔を俯かせる。しかし、次の瞬間に意を決したように明るい表情を浮かべて顔を上げた。

『えっと……な〜んちゃって！冗談です、マスター！なんて、えへ〜』

「はっ？」

意味がわからない。

そう思ってヒノキは口をポカンと開いた。

クーは少しばかり照れくさそうに顔を赤らめている。

『その、一回冗談というものを言ってみたくて……えっと、どうでしたか?』

「……あゝ、その、つまりお猿さまは変な喋り方をしていなかった、とそういうことだな?」

『あつ、はい! そうなります!』

えへへ、と気恥かしそうに笑いながらクーは視線を逸らした。

一瞬、思考が停止しかけた。

つまり猿は地方の方言が入り混じった珍妙な喋り方などしておらず、普通の喋り方をしていたということである。

冗談のつもりだったようだが、危うくヒノキの中では完全な嘘になりかかっていた。

「……うゝん、63点だな」

『あうっ、中途半端に低い点数です』

「まだまだ、精進が必要だな。冗談としては真実かどうか確かめる術がない中々のものだったけど、タイミングを逸脱してしまったから減点だな」

『あうゝ、冗談も意外とむずかしいですねえ』

楽しげに笑うクーを見て、ヒノキも苦笑する。

「ハハ、まあ冗談っていうのはバラすタイミングが重要だからな。タイミングを逸して機会を逃したら、冗談じゃなくて嘘になっちゃうからな」

『へえ、そうなんですか。えっと、バラすタイミング、ですか』

「ああ、出来るなら冗談を口にしたあと即座に真実を言うのがベストだな」

『はい、わかりました。すぐにバラすんですね！』

「ウンウン、言われた本人が真実だと思い込んで本当の真実を隠し通してしまったら嘘になっちゃうからさ」

『あう、色々とむずかしいです……えっと、次からは頑張ります！』

クーはキラキラと瞳を輝かせた。

楽しそうで、嬉しそうで、幸せそうな、そんな綺麗な笑顔を浮かべている。

会話をすること、それ自体は当たり前すぎるほど当たり前で日常的な小さな出来事。

だけどクーは心の底から、最上の喜びと言わんばかりに幸せそうな表情を浮かべていた。

ヒノキとしてもクーと会話するのは確かに楽しい。

でも、自分にとっては当たり前すぎるほど当たり前のことなのにクーは最高に幸せな表情をしている。クーがどんなことを思っているか分からないが、自分の気持ちとの大きな落差に何だか微妙な気

分になる。

そんな、最高の喜びだと言わんばかりの表情をしないようにさせてあげたい。

当たり前すぎるほど当たり前な小さいことで幸せを感じないほどに、こんな当たり前な幸せに慣れさせてあげたい。

そこまで考えて、ヒノキはふと気付いた。

（そうか、当たり前じゃなかったから、か）

しばらくの間はクーの存在に気付いてすらいなかった、会話という些細な当たり前のことはクーにとって当たり前ではなかったのである。

会話すら出来ないということ、それが辛かったのか辛くなかったのか、苦しかったのか苦しくなかったのか、辛くて苦しかったのであればそれがどれほどのものであったのか、経験したことが無い身としては安易に想像することすら出来ない。

どのようなことでも身を持って経験しなければ共感することなど出来やしないのだから。

ただ、今まで当たり前のことじゃなかったのなら今から当たり前のことにしていけばいい。当たり前じゃなかった時期を覆い隠すほどに多くの思い出を共に作り上げていきたい。

そう思って、ヒノキはクーの幸せそうな顔を見つめた。

『ふえ？どうかしたんですか？マスター。……そんなに見つめられると何だか照れちゃいます、えへへ』

ほんの少し気恥ずかしそうに顔を赤らめる。

そんな様子にヒノキも軽く笑みを零した。

「ハハ、別にどうもしないけどさ。ただ……」

『？ただ、何ですか？』

スッと顔を動かして空を見上げる。蒼く晴れ渡った大きな空を。

「何でこんなことになってるんだろう、と思ってさ」

『……そうですね、わたしも最初から最後までずくと見てましたけど、ちよつと言葉には出来ないです』

「ああ、そうなんだよなあ」

ハア、と思わず溜息を吐く。

思い出してみると、それは一瞬の出来事であった。

瞬きすら許さないほどの一瞬。

実際は説明しようと思えば簡単に出来ることなのだ。だけど頭のどこかが麻痺しているような、現実感の伴わない感じがして、どうにも事態を受け入れることが出来ない。

（本当に……）

何で自分が人質になっているんだろう？

そんな考えても仕方のないことを考えて、ヒノキは今に至る経緯を思い起こした。

……

朝、最初の授業が終わりチャイムも既に鳴り終えた頃。

チャイムが鳴るのと同時に数十秒とかからずに大半の生徒が出ていったため人の数もまばら。というより、あまり生徒受けの良くない佐藤先生の授業であったため最初から人の数はまばらだった。

(いい授業なんだけどなあ……)

本当に残念だ、とそう思ってヒノキは肩を竦める。

授業中に生徒には何も聞いてこない、あまり多くは無い板書をこなしたり、先生の話を聞いたりしているだけで一時間しつかりと出席したことになる授業。佐藤先生の授業はそんな一方通行な授業であった。

色々と教師から質問をしてくる授業に比べたら、一方通行な分ほとんど何もなくても勝手に授業が終わってくれるのだから怠惰な学生にとっては楽なことこの上ない最高の授業なのである。

(フッ、皆かなりの損をしているよなあ)

これほどA評価を貰うのが楽な授業は無いというのに、とヒノキはそんなことを思っであくびを噛み殺した。

ただ1つ、唯一にして最大の欠点は眠くなるほど退屈な授業である。という遊びたい盛りの学生ならば誰もが忌避したくなるだろうし、ようもないことであった。

Aを成り立たせようとしたらBが成り立たない、広い世の中よくあることである。

『二兎を追う者、一兎をも得ず』

そんな先達の残した古き良き言葉も存在しているのである、だから多少のデメリットくらいは甘んじて受け入れようではないか。

（まあ、俺だったら、あえて選択肢に存在しない3匹目を追いかけるけどなあ）

割とどうでもいいことを考え連ねてヒノキは溜息を吐いた。

「ハア……」

『マスター、何だか蒼い髪の人がすごい目でこちらを見てますよ？』

近くに居るクーが状況を逐一報告してくる。

（流石にこれ以上現実逃避は無理か……）

チラリとヒノキは少しげんなりしながら後ろを見た。
見られている。

それも、薄汚れたゴミくずでも見るかのような絶対零度の瞳で。
視線に込められている感情は憤怒や憎悪に嫌悪、それは激しいま
でに強力な負の感情であった。

殺意とは方向性の違う気迫を感じる、それは生きたまま極限まで
痛めつけたいというような凶気の衝動。

（うーん、考え過ぎ、だろうか？）

そこまで負の感情を胸の内に抱え込むなんてこと普通は無い、と
自分自身に言い訳をして嫌な予感を振り払う。しかし、どんなに言
い聞かせても嫌な考えを完全に振り払うことは出来なかった。

どんなに繕ったところで絶対零度の視線に揺らぎは無いのだから。

「……」

『あうっ、何だかちよっとこわいです』

怯えたように身体を縮みこませてクーが身体の陰に身を隠した。
気持ちとは分からもない。

たらりと冷汗が流れ出るのをヒノキは感じた。

（まさか、女子寮脱出の件がバレたのか？）

おかしい、完璧だったはずなのに何故？と頭の中が疑問で埋め尽くされていく。

ヒノキには少し離れた場所から絶対零度の視線を送ってきている人物に見覚えがあった。

ふんわりとボリウムのある蒼色の髪に白いサイドリボンが2つ付いたカチューシャをしているお嬢様。

女子寮脱出のときに柊ケヤキとして会った人物、海野幸子がまるで胸を強調するような形で腕を組み仁王立ちをしていた。

「……」

「……」

『あうっ、やっぱりちよっとこわいです』

無言。

身体 of 陰に身を潜ませていたクーは更に身体を縮みこませた。

絶対零度の視線だけが身体を貫く。

『蛇に睨まれた蛙』

今の状況にはそんな言葉がぴったりだった。

（あえて見なかったことにして黙ってこの場を後にすることは出来

ないかなあ……)

自分でも不可能だと分かり切っていることを考えてヒノキは少し
呆然とする。

蛇に睨まれた蛙の末路、そんなものはただ己が身を食われるのを
待つのみであった。

『あの、マスター？』

「？」

身体の陰に身を隠しているクーがひょこりと顔だけを覗かせる。
ヒノキは視線だけを動かして応答をした。

「？」

『あの、とりあえずあの方に話しかけてみましょう！マスター！』

「！？」

なんて無茶な！？アグレッシブすぎるだろ、と視線に込めて返答
をする。

『きっと大丈夫です。お話をすれば分かり合うことが出来るはずな
んです……ファイトっ、です！』

「……」

何の疑いも無く無邪気に応援をしてくるクーの姿を見て、ヒノキは納得した。

（成る程……）

確かに一言も話さずに確証もないことで頭を埋め尽くしたのは愚かだったかもしれない。

それは遙か昔、紀元前にまで遡ることが出来る。身振りや手ぶりのみで意志の疎通を行っていた人類はより円滑に分かりやすくコミュニケーションを取るために言語を習得したのである。

言わば大昔から選択されたコミュニケーションを取るために鍛え抜かれた至上の情報ツール、至上の手段として会話が存在するのだ。一瞬にして下らないことを延々と考えてヒノキは決起した。

「海野さ」

「お黙りなさい、庶民の分際で。発言を許した覚えはありませんわ」

「……」

沈黙せざるを得ない。

膠着状態を打破するための一手、その行動に返ってきたのは瞳と同じ絶対零度の返答であった。

全くと言っていいほど取りつくしまも無い。

（どうしろって言うんだか）

会話というものが如何に平和的解決へと導く至上の手段だとしても、相手から一方的に拒絶されてしまっただけは何の意味も為さなかつ

た。

とはいえ、これだけで引き下がるわけにもいかない。すぐ近くでクーがキラキラとした瞳でこちらを見つめていた。

瞳が語っている。

曰く

『頑張ってください！マスターならきつとやれます！』

と、そんなことを言わんばかりに瞳がキラキラと輝いていた。

期待をされている以上は出来る限りそれに応えなければならぬ。特にクーに関しては出来得る限り望みを叶えてあげたい。クーには寂しい想いをたくさんさせてしまったから、それを覆い隠すほどの笑顔を与えたいのである。

それに

（このまま引き下がったら何か負けたみたいだからな）
ヒノキは心の内で下らない勝負魂を燃やしていた。

「それで」

「発言を許した覚えは無い、と言いましたわ。2度も言わせないでくれるかしら？」

「オホン、何のよ」

「お黙りなさい」

ピシヤリと冷水を浴びせるように遮られる。
本当に取りつくしまも無かった。

まともに喋ることすら出来ない。
こんなことで分かり合うのは果てしなく遠い道のりのように感じられた。

『マスター！ファイトっ、です！あきらめなければ誰とだってお話が出来るはずです！』

後方から激励の言葉が届く。

やはり、どんなに拒絶されても負けるわけにはいかなかった。ク
ーの為にも、自分の為にも。

「海野さん、何の」

「馴れ馴れしいですわね、庶民の分際で高貴なわたくしに軽々しく話しかけるのは遠慮してくださいませんか？」

不機嫌な表情と絶対零度の瞳が言葉を切断する。

海野幸子は徹底的にヒノキが喋るのを許さないつもりのような
うった。

（だけど、負けるわけにはいかないな）

どんなに下らないことでも『意地』というものは張り通してこそ
の『意地』なのである。

だから、退くことは出来ない。ここで退いてしまったら自分でも
十分に理解している下らない『意地』

は本当に下らないもので終わってしまうのだから。

「で、何の用……」

「だから、発言を許した覚えは無いと言っていますの」

やはり言葉は途中で遮られる。

一念発起して告げようとした二の句も簡単に断ち切られてしまった。

「わたくしはあなたの言葉など何1つ必要としておりませんの」

「うくっ……」

どうしようもない。

本当にどうしようもないほどにヒノキは拒絶されていた。

（これは、かなり厳しいな）

予想以上の厳しい反応に思わずたじろいでしまう。

言葉を何1つ必要としていない、要するに海野幸子は最初から会話をする気など皆無なのである。

本当にどうしようもなかった。

「フンッ、それとあなた今『何の用』とおっしゃいましたわね？」

不機嫌そうに、不愉快だと言わんばかりに鼻を鳴らす。

語尾に疑問符が付いているが、その言葉は返答を必要としていな

いように感じられた。

言葉のキャッチボールなどではない、相手からの返球を必要としない単なる投球。

それほどまでに一方的で、高圧的な態度であった。

「フンッ、何の用？何の用、ですって？よくもそんなことが言えましたわねえ」

つまらなそうに鼻を鳴らして海野幸子はズイツと身体を詰め寄せてきた。

絶対零度の瞳が、烈火の炎へと変わる。

「ホント随分なお言葉ですわねえ、ヒ・イ・ラ・ギ・ケ・ヤ・キサん！」

「ぐっ、っ！」

よく聞こえるように、一文字ずつ強調して紡がれた名前にヒノキは咽をつまらせた。

（っ、やっぱりバレてたのか！？）

半ば予想をしていたこととはいえ衝撃は大きい。

原因は不明だが女子寮の件は見事にバレているようであった。

『ひいらぎけやき？誰のことですか？』

事情をよく知らないクーはキョトンと首を傾げた。ちなみに女子寮脱出の件は話しているのだが『柊ケヤキ』と咄嗟に名乗ったことは言っていないので至極当然の反応。

しかし、今はクーの言葉に反応している暇は無かった。

(どうする?)

思考が空転する。

幸い現行犯では無く証拠もないため、退学になる危険性は皆無なのだが

(とりあえずシラを切ってみるか?)

もしかしたら『柊ケヤキ』という名前を出したのはブラフでシラを切れば帰ってくれるかもしれない、とヒノキはそんな有り得ない可能性に縋りつくことにしてみた。

「あゝ、柊ケヤキっていうのは」

「あなたのことですわ、庶民。下らない手間を増やすのはやめていただきますんこと?」

「……はあ」

ですよねゝ、とそんなことを思ってヒノキは渴いた笑いを零しながら溜息を吐いた。

口を開けば、その発言に被せるような形で言葉をぶつけてくる。最初からほぼ有り得ない可能性であると分かっていたのだが、やはり無駄な抵抗は何の意味も為さなかった。

ジロリと烈火の炎を灯した瞳に睨まれる。

「あなたの名前は柳ヒノキというらしいですわねえ、ケヤキさん？」

「うっ」

何という皮肉だ、とヒノキは若干たじろいだ。

誤魔化すために名乗った『柊ケヤキ』という名前が今自分に牙を剥いている。

面倒な事態を避けるために名乗ったというのに

（何故、バレた？）

原因がわからない。

柊ケヤキという虚構の名前から如何ようにして柳ヒノキにまで辿りつくことが出来たのかヒノキには想像することすら出来なかった。

「柳ヒノキのことは少し調べただけですぐに分かりましたわ、ケヤキさん」

「うっ」

ことさら強調するように『ケヤキ』と呼びかけてくる。
それはとても嫌みな口調でとんでもない皮肉であった。

「柳ヒノキなどという庶民には欠片も興味を抱いてはいなかったの
で名前を聞くまで全く知りませんでしたわ」

「……」

黙ったまま、相槌を打つようなこともしない。

言葉など要らない、これは会話などではないと不機嫌そうでつまらなそうな表情が如実に語っていた。

それは一方的な通達。言葉のキャッチボールではなく、一方的な投球。

ヒノキの立ち位置はひたすらに球を受け続けるキャッチャーであり相手は返球すら必要としていない。キャッチャーどころか下手をすれば殴られるだけのサンドバッグに近いものがあった。

相手の言葉が途切れるのを待つよりほかに方法は無い。

（名前を聞くまで全く知らなかった、か）

ということは逆を言えば誰かから名前を聞いた、ということになる。

それも終ケヤキⅡ柳ヒノキであるとこれ以上ないほど明確に。

（一体、誰だ？こんなこと言った奴は？）

本当に溜息しか出てこない、そう思ってヒノキは少しげんなりとした。

「柳ヒノキ、チューナーという未知のモンスターを使いシンクロ召喚という未知の召喚方法を行う。所属はオシリスレッド、入学試験のとき実技担当最高責任者に勝利し華々しく合格をするも筆記テストに空欄が多く簡単すぎる序盤の問題しか解けていなかったため合格はギリギリの範囲であった」

つらつらとつまらなそうに言葉を連ねていく。

自分ですら知らないことも海野幸子は感情のこもらない声で語っていた。

(すごいな)

一体どのようにして調べ上げたのだろうか？と今の状況では割とどうでもいいことにヒノキは感心した。

「ふゝむ、金の力って奴かな？」

「お黙りなさい、突拍子もなく意味の分からないことを言うのは止めていただきたいものですわね。発言を許した覚えはありませんわ」

「……はあ」

どうやら小声で独り言をすることすら許されないようであった。

(うゝむ、これは……)

どうしようもないなあ、とヒノキは思う。

本当にどうしようもない、本当にどうしようもないほどにヒノキは海野幸子に嫌われていた。

半ば自業自得であると分かつてはいるものの、それでもやるせない。

「まったく、変なことをするところだけは何1つ変わりありませんわね」

海野幸子は呆れたように憎々しげに言葉を吐きだした。

(失礼な……)

俺がいつ変な行動を取った、とヒノキは少し微妙な気分になった。とはいえ少しばかり後ろめたいのも事実なので何も言うことが出

来ない。

ハア、と胸の内に溜まっている感情を吐き出すように海野幸子の口から吐息が吐きだされた。

不機嫌そうでつまらなそうな表情から一転して、悲哀のこもった表情で俯く。

「……誰も知らないカードを使うとか、誰も知らない召喚方法を行うとか1人のデュエリストとしては気になりますけれど、わたくしにとっては……本当にどうでもいい些末なことですよ」

淡々と感情を押し殺した重たい声で言葉が紡がれていく。

ヒノキは何も言うことが出来なかった。

何1つ言葉を求められていないことが雰囲気や今に至る過程で理解することが出来る。

（自分にとっては、か）

デュエリストとしては気になるけれど自分にとってはどうでもいい、と海野幸子は言っていた。

確かにチューナーやシンクロ召喚といった今まで聞いたことが無い未知のものを聞き逃すことは出来ないだろう。あくまでデュエリストとしては。

だが一個人として、海野幸子という1人の人間にとっては、気になるけれどそこまで執着するほどでもない程度の小さなことで、その未知のカードや未知の召喚方法を使う柳ヒノキなどどうでもいいという事なのだろう。

「……わたくしはケヤキさんと、柊ケヤキさんとならお友達になれると思って、変わらない日常が変わるような気がしてバカみたいに

ウキウキしていましたの。本当に、バカみたいに」

悲しさを滲ませるでもなく、後悔する風でもなく、海野幸子はただ淡々と事実を述べるように感情を押し殺した声で語りだした。

「きつとケヤキさんと一緒ならどんなことでも楽しくなる、とそんな確信を抱いて一緒に朝食を取ろうとしてもあなたは居なくて」

「……」

あなた、と少し親しげな声で呼びかけられる。

あなた、と呼ばれて対象になる人物は今の状況では1人しかない。海野幸子には近くで首を傾げているクーの姿が見えてはいないはずだから。

だけど、ヒノキには向けられた言葉の先が自分ではないように思えた。

向けられた言葉は存在しない虚構の存在へ、その場を凌ぐためだけに作られた一夜かぎりの存在である柊ケヤキへと向けられているように感じられる。

(……仕方ないこととはいえ)

罪悪感が半端ない、とヒノキは少し渴いた笑いを浮かべそうになった。

「探しまわっても見付からなくて、部屋の場所を寮長へと聞きに行ったらあなたは名簿にも載っていなかった」

「……ハ、ハ」

こらえきれずに乾いた笑いを零しながら、淡々と呟かれる言葉を聞く。

（そりゃあ、名簿に載っているわけがないよなあ）

柊ケヤキという名前は即興で作り上げた虚構の名前、むしろ名簿に載っていた方が逆に驚く。

そんな割とどうでもいいことを考えてヒノキは少し目を逸らした。

「仕方が無いから教室へと1人で向かい、授業中、休み時間とそれとなく探してみても結局どこにも居なくて、お昼になってもやっぱりあなたは居なかった……」

「……あゝ」

紡がれていく言葉にヒノキは気まずそうに頬を掻いた。

何も言うことが出来ない。

淡々とした感情を押し殺した声で語られる言葉の端々から労力をうかがい知ることが出来る。海野幸子は存在しない人物を探しまわって一日を棒に振ったようであった。

（何て、意味のないことを）

ご苦労様です、とヒノキは他人事のように目の前に居るお嬢様に合掌をしたくなった。

「何というか、ご愁」

「お黙りなさい」

「……はい」

素直に黙り込んですごすごと引き下がる。

未だに自分の発言は許されていないようであった。

『自業自得』

そんな言葉が頭に浮かぶ。

悪いのは全て自分自身、何とも理不尽な状況ではあるが自分に非があるためヒノキは何も言うことが出来なかった。

「まったく、放課後や夕食のときも見付からなくて、それでも諦めることが出来なくて、最後はお風呂で人に聞いてみたら……」

苛立たしげに、不機嫌そうに早口で紡がれる言葉が震えていく。
そして、胸の内に渦巻いている感情を解放するようにガバツと勢いよく顔をあげた。

「男ってというのは一体どういうことなの!？」

ガツと襟元を掴まれる。

どういふことと言われてもそういうこととしか言いようがないのだが、そんなことは言えなかった。

「ふざけるのも大概にして欲しいですわ！何ですか？一体どういうことかしら？本当の名前は柳ヒノキで所属はレッド寮、挙句の果てに男？確かにケヤキさんは不思議なことが不思議じゃないほどに不思議な方でしたけど……こんなことまで不思議な人だからという言葉で済ますことが出来るわけありませんわ！！」

「うぐっ、ちょっ、落ちっ、けっ」

烈火の瞳に射抜かれ、首をガクガクと揺さぶられる。

乱暴に揺さぶられるせいで、まともに喋ることも出来なかった。

とはいえ、まともに喋れる状態でも喋ることは出来なかったのだが。

1つ気になることがあった。

『お風呂で人に聞いてみたら』

と海野幸子は言っていた。

（一体、誰に聞いたんだ？）

誰がバラしたのか、それだけが気になる。

視界の端で状況が上手く認識できていないクーがあわあわ言っていた。

『はうっ、あわわわ、えっと、マスター頑張ってください！ファ、ファイトっ、です！』

目をぐるぐると回しながら応援の言葉をかけてくる。

何を頑張ればいいのか、と少しばかり微妙な気分にはなるが状況を飲み込むことすら出来ないのに自分に声をかけてくれることは少し暖かく感じた。

しかし、

「お友達になれると、一緒なら毎日が楽しくなるとそう思っていたのに、それが男ですって！？そんなふざけたことが、あったたまりますか！！」

「うぐっ、ちょ、待、て」

「お黙りなさい！庶民の分際で！わたくしに命令するなんて分をわきまえないにも程がありますわ！待て、ですって？寝言は寝てから言いなさい！！」

「ぐう」

過剰なまでに拒絶をされる。

頑張ってはみたいのだが、本当に取りつくしまもなかった。

叩きつけられる感情は激しさを増し、言葉はどんどんと口汚くなっていく。

襟元にかかる力もどんどんと暴力的になっていった。

「本当に、あなたは、あなたは！あなたっていう人は！！」

「ぐう、だから、ちょっと、待て、と」

「だから黙れと言っているのが分からないのかしら！？おとなしく、おとなしく、え〜と……っ〜！とにかく黙って聞いてなさい！」

「うぐっ」

ほとぼしる感情に頭が追いついてこないのか、言葉が無茶苦茶なものになっていく。

何が言いたいのか、どうしたいのか良く分からない。しかし、言葉に込められた強い感情はより顕著になっていた。

最初は親しみを込めて柊ヶヤキへと向けられていた『あなた』という言葉も、今度は怒りや憎しみといった負の感情を込めて自分へと向けられている事がわかる。

「わたくしが、わたくしがケヤキさんを探しているとき、あなたはいったい何をしていらしたの？わたくしがケヤキさんのことを考えているとき、あなたはいったい何を考えていたのかしら？」

「ぐうつ、だから、待て、って、お風呂で聞いた、って、誰、につ」

「黙りなさい！余計な言葉は聞いておりませんわ。それに、何ですの？わたくしが問いかけたからと言って返事をかえしたつもりかしら？答えを求めているというのに回答をするのは単なるラクガキと変わりありませんわ、0点以下ですわねえ……この凡百な一般庶民がっ！」

強引で理不尽な、こじつけとも取れる言葉を叩きつけられる。意味が分からない言動だが、その分だけ激しい怒りを感じ取るこ

とが出来た。

「しかも誰に聞いたか、ですって？随分とどうでもいい下らないことを聞きますわね、切れ長の瞳をした髪の毛が栗色の方ですわ」

心底どうでもいいという感じで吐き捨てて鼻を鳴らす。

一応、疑問には答えてくれる辺りまだ優しい。

ヒノキはガクガクと揺さぶられながら、頭の中で情報を整理した。
(切れ長の瞳で、栗色の髪？)

そして聞いた場所はお風呂であるから当然女子である。加えて、問題の日に柳ヒノキが女に変装（あくまでも女装ではない）をして女子寮に居たことを知っている人物。

思い当たる人物は1人だけだった。

(バラしたのは雪、か？)

思わぬところに居た伏兵に愕然とする。

何故、とそんな思いが頭を駆け巡るが

(……成る程、雪なら言ってもおかしくは無いかもしれない)

雪は女子寮脱出を試みた夜も『いかがわしい目的を持って女子寮に潜入した不埒な男子に心当たりありませんか？』という質問を言葉通りに受け取って『(不埒な男子に)心当たりは無い』と普通に答えていた。

そんな素直すぎる雪ならあっさり答えてしまったとしてもおかしくは無い。

脱出した時は口封じも完璧だしバレル危険性は皆無だと思っていたが、かなり穴だらけだったことにヒノキは少し泣きたくなった。
ガクガクと揺さぶられながら、怒りを灯した烈火の瞳に射抜かれる。

「まったく、本当にあなたという人は憎らしいほどに一緒ですわね。的外れで場違いな、奇妙な行動ばかり取る。何でこんなにも一緒なのかしら？ どうしてこんなにも変わらないのかしら？ 何て憎らしい……わたくしはそんなケヤキさんと一緒に居るのが楽しいと、そう思ったのに……」

「……」

襟元にかけられた力は変わらず、ガクガクと乱暴なまでに揺さぶっていた腕の動きが止まった。

どこか悲しげに海野幸子は顔を俯かせている。

かける言葉が見つからず、声をかけることも求められていない。

自分に非がある分、ヒノキには何も言えなかった。

「フ、フツ、滑稽ね。何て無様なのかしら、何てみっともない、このわたくしとしたことが。こんなもの、こんな、ものは、笑い話にしかありませんわ」

「……うつ」

そうかもしれない、とヒノキはそんなことを心の中で呟いた。

『笑い話にしかない』

それは自分が良く使う言葉。

確かに海野幸子の話を考えたら、それこそ笑い話にしかない。

友達になれると思っていた女生徒が、実は男子生徒だった。
本当に笑い話にしかない、しかも『笑えない』笑い話だ。

「あなたは、わたくしのことを騙っていたあなたは、この下らない笑い話をどう思うのかしら？ わたくしとケヤキさんの話をどう思いますの？ 柳ヒノキ」

「……」

「フフ、何も答えないんですのねえ。レディーに対して気の利いた言葉の1つも言えないようでは紳士として失格ですわよ？ ……でも、それで正解ですわ。わたくしはあなたの言葉など何1つ必要としていないのだから」

フフツ、と海野幸子は自虐的に笑う。

言わなかったわけじゃない、答えなかったわけじゃない。ただヒノキは目の前に存在している笑えない笑い話に何も言えなかった。

海野幸子

「フ、フフ、フ、本当に、本当に無様ですわ。やっぱり笑い話にしかありませんわ、こんなこと。1回会っただけの相手だというのに、ここまで打ちひしがれるなんて……やっぱり、こんなものは笑い話ですわ」

「うつ、くう」

「フフ、何なのかしら？ その呻き声は。少しは笑って見たらどうですの？ 『なんて馬鹿なんだ』って言って指差して、嘲笑って見たら

いいじゃないのっ!!」

怒鳴り声が室内に木霊する、激しい言葉と感情とが一直線に叩きつけられる。

言葉には激しい怒りが込められていた、瞳には激しい怒りが宿っていた。

何も言えない。かける言葉が見つからない、安易な言葉をかけることも出来ない。

一度会っただけの柊ヶヤキに好意を抱いてくれたのは嬉しい、だがその分だけ今は海野幸子に激しい怒りを向けられていた。

「……わたくしは」

ポツリと言葉が呟かれる。

「わたくしは、認めませんわ」

「……へっ？」

「わたくしは、絶対に認めませんわっ！」

グイッと身体を引き寄せられ、吐息が感じられるほどの至近距離にまで顔が近づいてきた。

つばが飛んできそうなほどの大声でがなりたてられる。

「ケヤキさんが男で本名は柳ヒノキ？ そんなことどうでもいいこと
ですわ、わたくしには関係ありません！ 絶対に認めませんわ！！」

「いや、そんなこ」

「お黙りなさい！ 認めないったら認めませんわっ！ 誰が何と言おう
と知ったことではありませんわ、わたくし自身にも良く分からない。
けれども、認めない、認めない！ 認めないっ！ とにかく、あなたの
ような庶民の存在は、柳ヒノキという存在は絶対に認めませんわっ
！！」

「あ、あゝ……」

ヒノキは意味のない呻きを洩らしながら顔を引き攣らせた。

（認めないって、そんなこと言われてもなあ）

何というか困る、と襟元を掴まれながら微妙な気分を陥る。

自分の名前が柳ヒノキで性別は男。

それは厳然たる事実であり、変えようがない。

認めないと言われても

（どうすれば、いいのだろうか？）

そんな言葉が頭を駆け巡るが、どうしようもなかった。

未だに襟元を掴まれたまま、燃えるような瞳で睨まれている。

「えーと、とりあえず手を離して穏便に」

「お断りいたしますわ、主導権はわたくしにありますの」

「……ああ、そうですか」

バツサリと簡単に一刀両断されてしまった。

溜息の1つも吐きたくなる。

だが、悪いのは自分では当然の報いでもある。あれこれ意見を言う権利などあるわけが無かった。

「大体、何ですか？オシリスレッド所属って？デュエルは、まあ、それなりに強い、みたいですけど。何でイエローやブルーではありませんか？」

「いや、そんなこと言われても」

「そういえばラーイエローへと昇格する機会があったというのに断ったらしいですわね。どうしてレッドにそこまで執着いたしますの？ブルーとかだったらまだ考え方も変わったというのに、と言っても何1つ変わりませんけど」

「……はあ」

自然と溜息が出てくる。

海野幸子の言葉は最後の1文で1つ前にある言葉が何の意味もないものと化していた。

当たり前である、どこの寮に所属をしているかなんて何の意味もない問題だから。

（仕方がない、か）

ジッと海野幸子の瞳を見つめる。

次から次へと叩きつけられる口撃は止む気配が無かった。

(こうなったら……)

海野幸子の気が済むまで言葉を受け続け胸の内に溜まっている感情を全て吐きださせよう、と心の中で覚悟を決め

その瞬間、人影が視界の端をよぎった。

「ストロープ！は・な・れ・ろーっ！！」

乱暴に身体と身体の間に入れ、力強く引き離される。

「なっ、一体何ですの！？」

海野幸子が驚愕の声を上げた。

『あっ、司さんですね』

のんびりとしたクーの声が聞こえてくる。

(あゝ、そうだよなあ)

そういうことになるよなあ、とヒノキは少しばかり懐かしい気分になった。

ギュッと大事なものだと言わんばかりに抱き締められる。

そして

「ふふん、誰だか知らないけれど、あたしとヒノキの絆が女によって揺らぐことなんて認めないっ！」

ビシッとどこからともなく湧いて出てきた姉貴は得意げに言い放った。

後頭部が何だか柔らかい感触に包まれているが、そんなことはどうでもいい。やはり大胸筋か、とそんな感想しか浮かんでこない。

(……何か面倒なことになったなあ)

はあ、とヒノキは溜息を吐きたくなった。

すっかり失念していた、異性と話をしているとどこからともなく裁 司は湧いて出てくるのである。記憶の中では修学旅行などで兄貴が居ない場合や、何か他に用事があった場合以外は。

何はともあれ、これで海野幸子からの口撃を全て受けて胸の内に溜まっている感情を吐き出させるという作戦は早くも不可能になった。

海野幸子の瞳が剣呑な輝きを灯して、姉貴を見つめる。

「あなた、いきなり何ですの？今はわたくしがその庶民と話をしている途中でしたのよ？」

「ふっふっふん、さてヒノキ。というわけで、あたしにちょっと付き合ってもらおうぞっ！面白そうなことを小耳に挟んだの」

「……」

『あれ？幸子さんは司さんとお話をしているんじゃないんですか？』

クーがキョトンと首を傾げた。

流石は姉貴だ、とそんなことを言いたくなる。

清々しいほどに人の話を全く聞いていない。ヒノキは火に油が注ぎ込まれている状況を幻視できる気がした。

黙ったまま微妙な表情で姉貴を見つめていると、視線を受けてウンウンと頷きだす。

「大丈夫、あたしとヒノキの仲だからね。言わなくても言いたいことの1つや2つや3つや4つはお見通しだぞ！善は急げっ、レッツ&ゴー！」

「いや、果てしなく間違っているぞ姉貴。あと漫画の名前を叫ぶなって」

「あっはっはっは、細かいことは気にしないでいいのっ！そんな小さいことにこだわってるようじゃ愛想を尽かされる、ぞっ！まあ、あたしとヒノキに限ってそんなことはあり得ないんだけどね」

能天気な姉貴の声が室内に響き渡る。

最初から姉貴の誘いを断る気は無かったのだが、まだ何も言っていない。だというのにヒノキはズルズルと力強く姉貴に首を持って引き摺られていた。

この際、答えはあまり重要ではないらしい。海野幸子もあまりのことにとこか呆然としている。

（俺の意志は、どこにあるんだろうか……）

ヒノキは少しばかり微妙な気分になった。

ズルズルと引き摺られながら着実に出口へと近付いていく。

「って、ちょっとお待ちなさい！だから、わたくしが話をしている最中だと言ったはずですよ！あなたは一体何ですか？」

当然のごとく海野幸子に呼び止められた。

言い分は最もである。

だが、姉貴は面倒そうに頭をパリパリとかきはじめた。

「んうっ、さっきからうるさいなあ。あたしは大事な用事があるの」

「嘘をつけ」

姉貴のやることが用事なんて言えるほど大層なものなわけがない。そう思って、ヒノキは即座にツツコミを入れた。

姉貴が心外だともいうように顔を歪める。

「んむっ、嘘だなんて失礼な。あたしにとってはヒノキが一緒というだけでどんなものでも大事な用事なの」

「……はあ」

人が誤解をしそうな台詞を言うなよ、とヒノキは微妙な気分になりながら溜息を吐いた。

姉貴の言葉は普通の人ならば涙を流しそうなほどに感動的な台詞であるが、何てことはない。

引っ張り回す人間Ⅱ柳ヒノキが居なければつまらない、とそれだけの理由であることがヒノキには分かっていた。

ツツコミだとか、そんなものは結局何の意味も為さずズルズルと引き摺られていく。

「んじゃっ、そういうわけで急ぐぞー！ヒノキー！」

「いや、何がそういうわけで、だ。意味が分からないっての、姉貴」

「大丈夫、だいじょーぶっ！意味なんてものは後で分かるんだからさっ！それと、あたしのことは敬意と親愛の念を込めてお・ね・え・ちゃ・んと呼びなさいっ！」

「いや、今さらそんな呼び方するわけないだろ姉貴」

まったく、とヒノキは少し嬉しげに溜息を吐いた。

（そうだよなあ、いっつもこんな感じだったよなあ）

どんなツツコミを入れようとも全て能天気な吹き飛ばして、自分のことを強引に引き摺っていく。

そんな風に理不尽な連れて行き方をされて、意味の分からないことに付き合わされて、それでも結局は溜息を吐きながらも一緒に付いていく。それが裁 司と柳ヒノキの日常。

何か懐かしいなあ、とそんなことを思いながらヒノキは少しばかり遠い目で天井を見つめた。

「って、だからお待ちなさいと言っているでしょう！」

海野幸子に呼び止められる。

それは当然の反応だった。

姉貴がピタリと足を止め、面倒そうにあからさまに不機嫌な表情を浮かべて振り返る。

「まったく、さっきから何で呼びとめるのかなあ。あたしは大事な用事があるからあんたに構ってる暇はないの」

「なっ！？わたくしもあなたに用事は有りませんわ！わたくしはあなたが抱えているレッドの庶民に用事がありますの！」

「駄目、却下、あたし優先。あたしとヒノキの絆が女によって揺らぐことなんて認めないっ！ってさっき言ったじゃないの」

「っく！さっきから意味の分からないことばかり何度も何度も！そんなことわたくしの知ったことではありませんわっ！」

悔しげでどこかヒステリックな叫び声が室内に木霊した。

どこから聞いても海野幸子の方が真っ当で正しい言い分である。

会話をしていた人物を横からいきなりかつさらわれたのだ。

それに対して姉貴の言っていることは理不尽で理解不能、意味が分からない。

だが、姉貴とはそういうものなのだ。理不尽で理解不能で意味が分からない、という言葉で理解をすることが出来る。何故ならバカだから。

『まあ、姉貴だからなあ』

とそんな言葉で全てを納得することが出来る。

ヒノキはボケくと天井を見つめた。

（何だかなあ）

少しばかり微妙な気分になる。

さっきまで当事者だったというのに今は何故か傍観者になっていた。

「本当にあなたは一体何なんですの！？いきなり出てきて随分と失礼ですわね。確か、あなたは……そう、思い出しましたわ。確か、2年の裁 司さんですわね？」

「んっ、あたしの名前を知ってる？何て言うか、一方的？って言うのかな？」

怪訝な表情で首を傾げて、チラリと視線を向けてくる。

「いや、そこで何で俺に振る？」

「えっ？あたしとヒノキの仲じゃないの？」

「いや、そんな不思議な表情をされても……」

「って、わたくしの話を聞きなさいっ！」

再度、海野幸子のヒステリックな叫び声が木霊した。

「んむっ、うるっさいなあ。今あたしはヒノキと話をしているの」

「っ！何をふざけたことをっ、わたくしは今あなたと話をしていきますの！」

「……はあ」

思わず溜息が出てくる。

（何て不毛な三角形なんだ）

そう思ってヒノキはげんりとした。

海野幸子↓姉貴↓自分、とそんな風に繋がっている。

何てギスギスした嫌な空気なんだ、とそんなことを思っヒノキはクーの方を見つめた。

『はわわわ、なんだか良くない雰囲気です』

あわあわ言いながら、おろおろとしている。

（ああ、平和だなあ）

しみじみと姉貴に抱えられながらヒノキは遠い目をした。

剣呑で精神的によりしくない会話がすぐ近くで続いている。

「大体、あんた何なの？さっきからめんどくさくてたまらないんだけど、人に名前を尋ねるのならまず自分から名乗ったらどうなの？」

「っ！まあ、確かにその通りですわね。わたくしの名前は」

「まあ別にいいや、どうでもいいし」

「なっ！？」

あまりにもあんまりな物言いに海野幸子が言葉を詰まらせた。

「というわけでいっくぞう！ヒノキ！」

「……」

言葉が出てこない。

ヒノキは何だか申し訳ない気分になってきた。

（何というか、ごめんなさい）

心の中で海野幸子に謝罪をする。

姉貴に普通というものを求めることが間違いだ、とそんな少しばかり失礼なことを言いたくなった。

ズルズルと引き摺られながら教室の扉をくぐっていく。

「って！っ、もうっ！わたくしの話を真面目に聞きなさいっ！」

ヒステリックな叫び声が木霊する。

ふわふわと扉から出ていくときにクーが近くまで飛んできた。

『あの、えーと、大丈夫ですか？マスター』

瞳を潤ませながら言葉をかけてくる。

大丈夫と何に対して言っているのかは果てしなく疑問であったが、分かっていることは1つだけあった。

「うん、全然大丈夫じゃないよ」

あはは、とヒノキは渴いた笑いを零しながら首を横に振った。普通に解答をしてしまったが、聞かれる心配はない。

姉貴はバカみたいに高笑いをしていた。

「ふう、やっと脱け出せた。これで自由はあたしのものってね、あつはつはつはつはつは〜！」

「はあ〜」

意味が分からないことを言っている、きっと意味なんて無いのだろう。

溜息しか出てこなかった。

「あつはつはつはつは、はつ、うつ、ごほっこほっ」

「ふう、これだから」

引き摺られながら姉貴の背中をさする。

（毎回むせるんだから高笑いしなけりゃいいのに）
と少し微妙な気分になりながら。

近くを飛んでいるクーが控えめに声をかけてきた。

『えっと、マスター。ファイトっ、です』

うん、そうだね。

と心の中で相槌を打って、ヒノキは力なく頷いた。

第19話《前編》分かってはいても、言葉に出来ないものがある（後書き）

さて少し微妙なところではありますが、ここで一区切りです。

ヒノキ君が海野幸子に文句を言われているだけという……少し見苦しい場面で本当に申し訳ありません。

最近、新しく始まったシリーズを見たり、リチュアがウハウハだゝ！と浮かれたりしていたせいか文章があまり進まなかったという。ごめんなさい、単なる言い訳です。次回はなるべく早く出来たら、いいなあと思っています。

読んでくれている方はすいません。それでは次回にて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3044o/>

遊戯王GX シンクロ使うな？無理言うな！

2011年5月12日15時13分発行